

---

# MAX HEART!

XL エクセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MAX HEART！

### 【Nコード】

N0113M

### 【作者名】

XL エクセル

### 【あらすじ】

MAX HEARTは全力の心。全力の心あればできぬものなど何もないっ！

夏の高校ちゃんばら「リトルウォーズ」優勝を目指し、青春を謳歌する。

全力で戦い抜いた、その先には一体何が待っているのか？

コメント、感想などくれると喜びます。皆様のおかげでようやくPV10000突破！

下部にあるランキングクリックしてもらえると嬉しいです。勿論面

白いと感じていただけたらで結構です！  
夏の時期に、執筆再開予定！

## 赤いハチマキの男！

> i 8 9 8 8 — 1 1 9 8 <

マックスハート  
MAX HEART

それは全力の心。 全ての物事は全力でやればできぬ事など何も無い。

この物語の主人公「響<sup>ひびき</sup>ワタル」の絶対に揺らぐ事のない一つの正義である。

現代から少し、近未来のお話。

世の中では「ちゃんばら」に注目が集まり、本格的なスポーツ格闘技として人々がプレイヤーとしての活動をするようになった。

しかし世界に認知されるスポーツになったとはいえ、知名度は野球やサッカーに比べても、いまだに低いのが現状である。特に大人の目はまだ「ちゃんばら」というものを認めていない人が多く、いわゆるプロスポーツとしての活躍は皆無に等しい。

そんな中、現在最もこのスポーツ格闘技に力を入れている年齢層がある。

それは高校生であり、ちゃんばらスポーツは「高校ちゃんばら」として太陽の熱を発しているかの如くの熱さを出している。

高校ちゃんばらは、野球の甲子園のような形で、「リトルウォーズ」という名の大会が設けられる。

リトルウォーズ（子供達の戦争）と銘打たれた戦いは毎年夏の時期に、名プレイヤーを生み、幾多の名勝負を送り出してきた。いわばプレイヤー達にとっては真夏の登竜門。

響ワタルは毎年のように、この大会を見てきた。

子供の頃から戦いを見て、いつしか自分もこの舞台上で戦いたいと

願うようになる。

いつしかワタルも高校生になり、リトルウォーズの参加資格を得られる。しかしワタルには参加したくても参加できない理由があった。

それはリトルウォーズの登録における決まり事 参加はチームとし、最低三名と最大五名のメンバー構成でなければならない。

この最低条件がクリアできずに高校生活三年目の夏を向かえてしまふ。

七月九日。

気合いの入った赤いハチマキをした少年、響ワタルが二人の少年と戦っていた。

「良いかマサ、それにケン、オレサマに一本でも太刀を浴びせられたらマックスハートのメンバーにしてやるぜ！」

「よーし、いくぞー！」

ワタル、それにマサとケンは木刀を持っている。まずはマサという少年がワタルに立ち向かっていく。

「いやあああああ！」

「おっせえぞ、マサ！」

勿論、マサという少年は剣術など習った事もない。我流といえば聞こえは良いが……つまりはめっちゃくちゃである。

マサの一太刀を、ワタルは軽くないし、鋭い一撃をあたえる。

当たっても良いようにマサの尻におもいつきり木刀をたたき込む。やや鈍い音がその攻撃の痛さを物語っている。

「ぐふっ、……いてえ……」

情けなく倒れ込んでしまふマサ。もう既に半べそをかいている。

「次はテメーだケン、容赦なくかかってきやがれえ！」

「ひいいいっ！」

情けないマサに呆れた為か、ワタルはケンに声をかけた。

だが既にケンはマサの姿を見て脅えて腰がひけてしまっていた。  
ワタルは深い溜息をついた。

「はあ……、おめーら、そんなんでリトルウォーズに優勝でき  
て思ってたのかっ!」

「い、いやー、実は参加できれば良いかなーって……」

「そ、そうそう……」

マサとケンに対し鋭い眼光を放つワタル。マサとケンはその眼光  
に畏縮してしまう。

「ブワツツカヤローオオオオオオ!!」

「ひひひひ……!!」

ワタルは感情のままに言葉をはき出した。

そのあまりの声の大きさに辺り一帯にワタルの言葉がやまびこと  
なり響いた。

「そんな根性だから何もできねえんだ、良いかテメーらマックスハ  
ートは全力の心だ!」

「ぜ、全力の心?」

二人で脅え、二人で聞き返すマサとケン。

「そうだ、何事も全力の心を持って物事を成し遂げるっ、オレサマ  
のたった一つにして揺らぐことのない正義だ!」

「……」

燃え上がるワタルに対してマサとケンは呆然としている。

「つまりっ、全力の心を持って戦えばリトルウォーズ優勝も目じゃ  
ねえぜ!」

「いや……そんな事言っただけさあ、なあ?」

「だよな」

マサとケンはお互いに目配せしあう。それに対してワタルは二人  
の態度に顔をムツとさせる。

「なんだよ、言いたい事があるなら言えっただコノヤロー!」

「ひひひひひひ、言うから怒るなよおお!」

「そ、そうだよ、ワタルはただでさえその気合いがおっかないんだ

からさ」

「良いからさつさと喋れつての！」

「怒るなよ？」

いつ手が出てきてもいいようにマサとケン二人揃って、自分の手で壁を作っている。

マサはワタルに注意を促し喋り始める。

「だってリトルウォーズって言えば高校格闘技スポーツの中じゃ今の時代の激戦区になってるんだぜ？」

「それがどうした！」

「ワタルだって知ってるだろ、三年連続優勝をしている強豪チーム「絶対王者の松原<sup>まつはら</sup>」率いるT・O・テイカー、それに去年の「MVPプレイヤー二之宮<sup>ふのみや</sup>小次郎」のいるライジングス、そしてあの「天才<sup>みさき</sup>・三崎」の率いるFエンゼル……優勝するにはこいつらと戦わなくちゃいけないんだぜ……」

「そうそう……それが一般人同然の俺らがあいつらと戦うなんて夢物語さ」

マサが解説をし、その内容にケンが頷く。

「だったらそいつらを倒してオレサマ率いるマックスハートが今年の王者になってやるさ！」

『ははは……』

二人の他人事ともとれる笑いに、ついにワタルも頭に血がのぼってしまった。

「……もういい、おめえら帰れ！」

「はっ……え、でもチームは？」

「ここはマックスハート、全力の心で戦う奴の集まりなんだよつ、おめえらみてえな奴等はずっとと帰れつ、コノヤロー……！」

『ひいひい……じゃ、じゃあ俺達は帰りまーす……！』

ワタルに一喝されたマサとケンは逃げるように走っていった。ワタルは一人その場に残された。

大声を出したおかげか少しだけ落ち着きを取り戻す。

「……ふー……、わかつちやいるよ……でもガキの頃から夢見た舞台なんだぜ」

ワタルは幼い時からリトルウォーズの戦いを見ていた。それこそ何回も何回も。

見るたびにワタルは次は優勝の舞台に自分が立つてやると常に夢を見続けたのである。

リトルウォーズの大会参加資格は高校在籍である事。ワタルは今年は高校三年で最後のチャンスなのだ。

「……」

ワタルは一人手に持った木刀を見る。今まで自分が見てきた戦いの光景がよみがえる。

有名な試合どころか前座的な内容の試合でさえ奔放し、戦いを見てきた。

過去の高校一年、二年の時にも参加をしようとしたが人数不足の為に断念させられた。リトルウォーズは最低三人の人数で構成されたチームが必要なのだ。

「マサとケンが駄目となると……どうすっかなー……もうアテがねえや」

すっかり意気消沈したワタルはその場をあとにした。

七月十日。

マサとケンをチームに入れ損ねてから翌日。

一応は真面目に高校生をやっているワタルは、普通に登校し普通に授業を受け、普通に昼飯を食べた。

そんな昼休みの学校の屋上での出来事である。

「兄貴、マサさんとケンさんをチームに入れられなかったんだね……」

「うーむ、残念といえば残念だがなっ、でもあいつら参加できればそれで良いなんてぬかしやがったんだぞ！」



「……気持ちわかる気がするよ」

ワタルの事を「兄貴」と呼ぶ、やや小柄な少年。

彼は同じ学校の高校一年生の十六歳、ワタルの舎弟で名を「川崎ヒロキ」という。そしてマックスハートのメンバーである。

「ヒロキっ!!」

「なっ、なんだよ兄貴?」

「じゃあ何かっ、お前も参加できれば良いなんて口か!？」

「いや……そうは言わないけど……さ……」

煮え切らない態度のヒロキに対して頭にきているワタル。

「僕は兄貴の弟分だ、戦いが怖いなんて言わないさ」

「じゃあ……なんだってんだよ?」

「つまりこういう事さ、僕は恐くないけど、やっぱり他の人にとっては怖いよ」

「戦いがか?」

「うん、それもあるけど痛い目をみるのが嫌なんだと思うよ、リトルウォーズって大怪我する人が大多数だし、過去の歴史で死人も何人か出たって……兄貴だって知ってる事だろ?」

最もな話だった。

誰だって大怪我や下手すると死んでしまう事に首をつっこみたくはない。

自分でやるのは嫌だがそれを見るのは良い。エンターテインメントはこういうものなのだと思う。

「知ってはいるが……でももう期限が無いんだぜ、リトルウォーズ参加登録まであと一週間しかないんだ、一週間後の七月十七日までに最低三人集めて登録を済ませないと今年も出場できなくなっちゃう……そうになったらオレサマは……」

「兄貴……」

期限が迫り、焦りそして落ち込む兄貴分のワタルを見てヒロキはどうにかしたいと頭を働かせた。

この二人のコンビは基本的にはこんな感じなのだ。

気性の荒さと持ち前の運動神経で喧嘩などの揉め事はワタルが解決する。逆に頭を使ったり作戦を立てたりするのは弟分のヒロキが担当するのだ。

「そうだ、兄貴！」

「どうしたー、弟よー」

相当、落ち込んでいるのか返事には気持ちが入っていないかった。

「そんな悠長な返事してる場合じゃないよっ、思い出したんだよ参加してくれそうな人！」

「……本当か！？」

落ち込んでいたワタルの顔が一瞬で喜びの顔になる。

「まあ入ってくれるかはわからないけどね」

「それでどんな奴なんだ？」

「僕の覚えが確かならその人は蹴り技格闘技の天才と呼ばれている人だよ」

「蹴り技の天才だと？」

「そうさ、そんな人が仲間になってくれれば間違いなく大きな戦力になるはずさ！」

「それにメンバーも三人で出場資格も得られる……か、よっくやつたなヒロキ！」

ワタルに誉められ照れ笑いを浮かべるヒロキ。

「それで、そいつはどこにいるんだ？」

「えっ！？」

「えっ……じゃないよ、どこにいるんだっての！」

「いや……ごめん、噂を知ってるぐらいでどこにいるかは知らないんだ」

「はああああ！？」

「ごめんっ、一日だけ待つてよ、絶対に調べてみせるから！」

やっと掴みかけたチャンスを手放したくないのはヒロキも同じだった。なによりワタルの為になる事、今の彼はそれが喜びだったのだ。

「よしつ、任せるぜヒロキ！」

「任せてくれよ兄貴！」

二人はハイタッチを交わす。

そのまま昼休みが終わり、午後の気だるい授業も終わる。そして放課後。

「じゃあ兄貴、明日には情報を掴んでみせるからね！」

「ああ、お前のやる事になんの不安もねえ、全力で探してこい！」  
ワタルとヒロキはそのまま別れる。

ヒロキは一晚かけて「蹴り技格闘技の天才」の事を調べたのだった。

## 天才蹴撃少女！

七月十一日。

朝を向かえた。リトルウォーズ参加登録締め切りまであと六日。大勢の生徒が歩く道をワタルもまた歩いていた。

ふと見ると生徒達の朝の挨拶が行き交う。学校が近くにある道の特有の光景なのかもしれない。

（蹴り技格闘技の天才……か、そんな奴が簡単にいるもんかな？）  
ワタルは歩きながら普段は気にしない生徒を見ていた。

（おっ、あいつなんてガタイも良くていかにも格闘技って感じだな）  
見ると確かにガタイの良い男が道を歩いている。

（いや、しかし最近の「天才」というからには案外と優男が……するとあいつか）

さらに見ると髪の毛サラサラな見るからに整った顔立ちの男が歩いている。

結局は天才という題目の想像は限りなく広がりどんな人間なのか、という想像の人間が数人出来上がったしまった。

天才、というヒントしか得ていないワタルが詮索は無意味な事という結論に至るまで数分かった。程なくするとヒロキが合流した。

「兄貴ー！」

「おう、ヒロキか、どうだった？」

「バッチリさ、蹴り技格闘技の天才、調べられる範囲の事を全部調べたさ！」

ヒロキは自信満々な顔をする。自信の表れかガッツポーズまで披露している。

「そうか、それで……？」

「いや兄貴、もう学校着いたし昼休みで良いでしょ？」

気がつくと目の前には学校があった。考え事と人間観察に夢中で全く周りが見えていなかったらしい。

校門前で話すのも気が引けるといふ事でワタルとヒロキは昼休みに「いつもの屋上」で会おう、という約束をする。屋上はいつしか二人の秘密基地となっていた。

そしていつものように朝の睡魔と戦う午前の授業が始まった。体育以外の科目の全てが苦手科目のワタルにとって授業とは退屈そのものである。睡魔と戦いながら四時間が経過し、やっと昼休みを向かえる。

適当に机の上を片づけて、急いで屋上へ走ると既にヒロキが昼飯の準備を整えていた。

早速、朝の話の続きを話し始めた。

「それで天才さんって結局のところなんだったんだ？」

「うん、話す前に本当に兄貴知らないの？」

「知らないから聞いてるんだって、勿体ぶるなよ、早くしてくれよ！」

「わかったよ」

ワタルは勿体ぶられるのが嫌いなのだ。それをわかっての事が、ヒロキは話し始める。

「うーん、兄貴きつと謎かけされるの嫌いだろっから単刀直入に言うけどさ……」

「おう！」

「この学校の三年B組の人らしいんだよ」

「……はっ!？」

素っ頓狂な声をあげてしまった。もっと違う学校とか違う学年とかにいるものかと想像していたワタルには意外な答えだった。

同じ学校の同じ学年、ワタルには全く記憶にない事だった。それにワタルは三年A組、隣の教室に天才はいるというのだ。

「兄貴、本当に知らなかったの？」

「いや全く全然知らなかった！」

「まあ……兄貴らしいけどね」

「それでどんな奴なんだ？」

いよいよ天才の核心に迫るとあってワタルも興味津々で聞き返す。

「うん、またの名を「天才蹴撃少女<sup>てんさいしゅつげきしよじょ</sup>っていうんだってね」

「ふーん、天才蹴撃少女ねえ……」

ワタルは何か違和感を覚えてもう一度ヒロキに聞き返す。

「んー……、またの名をなんだって？」

「だから天才蹴撃少女だって！」

「……お、女あ！？」

再び、素っ頓狂な声をあげるワタル。

ガタイの良い男や、意外性について優男を想像していたワタルは再び驚かされた。蹴り技格闘技の天才がまさか女だと。

「相沢かな、って名前の人みたいだよ」

「ふーむ、三年B組の相沢<sup>あいざわ</sup>かな、ねえ」

「心当たりあるの？」

「いや、全くないっ!!」

ワタルは気持ちの良いぐらいはつきりと否定する。

他人に全く興味を示さずにオレサマ主義なワタルを常に見ているヒロキにとってワタルの反応は、もはや日常のそれと全く変わらなかった。

「まあ良い、ゴリラ男だろうが、優男だろうが、女だろうが関係ねえ、放課後にでも会いに行つてくらあ！」

「僕も行こうか？」

「あつたりめえだろ、ヒロキがいなけりゃオレサマは困る！」

「あつははは、そうだね」

天才の正体は「天才蹴撃少女、相沢かな」だとわかった。ワタルとヒロキは放課後に「相沢かな」に会いに行く。

七月十一日。放課後。

ワタルは自分のクラスでヒロキを待つ。しばらく待っているとヒロキが走ってきた。

「お待たせつ、兄貴！」

「遅えぞ、ヒロキ」

実際はそんなに時間がかかったわけではないのだが、気が短いワタルにとつては長く待たされたような感覚に陥っていたようだ。

そんなワタルの反応も、いつも通りとヒロキは受け取っていた。

「さつてと、いざB組！ 相沢かなに会いに行こうではないかつ！」  
「おっけー！」

相変わらず偉そうな態度のワタル。それを見て嬉しそうについてくるヒロキ。

隣のクラスというだけあって、ものの数歩でたどり着く。

「相沢かなは、いるかあ！？」

B組の扉を勢いよく開けて、大声で名前を呼んだ。突然の事で残っていた生徒は驚いて目を丸くしている。

「兄貴、落ちついて！」

ワタルを落ちつかせながら、残った生徒を見回すヒロキ。近くにいた女生徒に声をかける。

男に聞くよりも、女の人に聞いた方が情報が得られると判断した為だ。

「あの……このクラスに相沢かなさんって、いますよね？」

「さあ、出てきやがれつ、相沢かなー！」

「ちよつと……兄貴、落ちついて」

声をかけられた女生徒はワタルを見て怖がっていたが、ヒロキを見ると距離をおきながらも話しかけてくれた。

それを悟ってか満面の笑みを浮かべる。

「あの……相沢さんに何か？」

「あ、いえ、ちよつとお話したい事がありました……」

ヒロキの穏やかな態度に女生徒も少しは落ちついたようだ。

「うーん、ちよつと待ってね」

女生徒はクラス内を見回りつつ他の生徒にも聞いてくれているようだった。

内心、緊張していたヒロキも優しい人に話しかけて良かったと、密かに安堵の溜息をついた。

「ごめんね、相沢さん……もう帰ってしまったみたいなの」

「そうですか」

「ふんっ、逃げたかつ！ 相沢かなめ！」

ヒロキは一人暴走をしているワタルを放っておいて女生徒と話を進めた。

「では宜しければ、伝言を頼まれていただけますか？」

「ええ良いわよ」

ヒロキは女生徒に「明日の放課後にまた来るから、待っていてほしい」という旨の内容を伝える。

これで何とか相沢かなに、会えるとヒロキは再び安堵の溜息をついた。その後、丁寧に礼をして校門前へと向かった。

「兄貴、少しは落ちつこうよ」

「へんっ、すぐそこに仲間がいるかもしれないのに、落ちついてなんかいられるかってんだ！」

校門で言い合い……もとい、いつものトークをする二人。しかしワタルの興奮も最もな話だった。

もう少して自分の夢の一步目が達成できる。普通なら嬉しさのあまり興奮するものだろう。

ヒロキもそれを知ってか、あまり強くは言わない。

「やれやれだね……兄貴は」

「ヒロキ！」

「うん？」

真面目な口調でワタルはヒロキの名を呼ぶ。今まで興奮していた為に、あまり相手にしていなかったヒロキも、それを聞いて耳を傾ける。

「絶対優勝しような、オレサマとお前でさ」

「当たり前さ、兄貴」



いつの間にか、二人の背中に真つ赤な夕日が照らされていた。

「ははは、ベタだなあ」

「バーカ、王道ってんだよ！」

「……そうだね！」

二人は夕日に向かって誓ったのだった。リトルウォーズに「優勝」するという事を。

いつも持ち歩いているハチマキを、ポケットから取り出した。ワタルは赤いハチマキを、ヒロキは青いハチマキを。二人で優勝の気をハチマキにこめた。

七月十二日。放課後。

そして二人は再び、B組の前にいた。今度はヒロキがB組の扉を開ける。

昨日の女生徒が気づいてくれれば良いな、と密かに思いながら声をける。

「あのー……」

「あつ、きたきた」

昨日の女生徒がヒロキを見てかけよってきてくれた。3度目の安堵の溜息をもらす。

「あ、どうも」

「待っててね、……おい相沢さん、この人達だよ」

その女生徒はクラスの教壇前にいたショートヘアの女の子を呼ぶ格闘技をやっているだけあって、動きやすそうな髪型に、スラッとした体型。身長も女の人としては高い方だ。160cm前半はあるだろうか。

相沢かなは、ワタルとヒロキの前について姿を現したのである。

「で、用事は何かな？」

「え、えつと……」

ヒロキは初対面の人にはどうしても緊張してしまう。人見知りなのだ。

ここは「オレサマの定番!」とばかりに、ワタルがヒロキの前に立つ。

「相沢かな! お前をリトルウォーズに参加する為に、オレサマのチーム『マックスハート』にスカウトしに来た!」

「っ……!! ちよつと!」

「な、なんだよ!?!」

突然、相沢かなに引つ張り出される二人。されるがままに二人は、学校の外まで連れてこられた。

辺りを見回し、誰もいない事を確認すると相沢かなは、喋り出す。  
「ちよつと、みんなの前でそういう事を言うのは、やめてくれるかなっ!」

「そういう事って、どういう事だ?」

「リトルウォーズの事よ」

なんでかわからないという顔をするワタルとヒロキ。それに対し、怒りと困惑が入り交じる相沢かな。

「なんで?」

「ふー、かなを誘いにきたって事は、かなの噂を知ったからなんですよ?」

「まあ、ねえ?」

「うん」

相沢かなの、問いに対して返答するワタル。その返答に同意を求めるかのようにヒロキを目で会話をする。

「別に、誘ってくれても構わないの」

「じゃあ、お前はオレサマの仲間だな!」

「話を聞け!」

相沢かなは、ワタルに対して空手チョップを打ち込む。

「誘ってくれても構わないんだけど……、みんながいるところで、格闘技の話はしないでほしいの。勿論、リトルウォーズ関連の事も」  
「どうしてですか?」

今度はヒロキが質問する。相沢かなもそれに答える。

「ここでは……普通の女の子でいたいから、それだけっ！」

ヒロキは何となく納得する。ワタルはいまいち、わかっていなかった。

「あとね……、リトルウォーズには実は前から参加したい……と、  
いうか参加しようと思ったの」

「それならお互いの目的の為に、一緒に戦えますね！」

そんなヒロキの言葉を前に、相沢かなはクスリと笑った。

「それもそうなんだけどね、かなには絶対に譲れない目的があるの」  
「目的？」

「うん、絶対に負けられないの……だからね、仲間に入る前にあなた達をテストしてみよっかなーって思うの！」

スカウトしに行ったら、逆にテストを出されたヒロキは驚きの顔を浮かべる。

逆にその言葉について「あの男」が立ち上がった。

「面白え、なんだよそのテストってのは？」

「あ、兄貴！？」

「簡単だよ、かなと戦えば良いの、あなた達が強いかどうかをかなが見極める！」

相沢かなの出してきたテスト。それは蹴り技格闘技の天才と言われた女の子「相沢かな」と戦い認められる事だった。

## かなの星蹴拳！

ワタルとヒロキは、相沢かなと一旦別れていた。

相沢かなの言う「戦いによるテスト」これを行う為には、お互いに準備が必要だからだ。

「兄貴……勝てる？」

「バーカ、そんなのやってみなけりゃわからないだろう」

相沢かなの、要望もあつて人気のない広場での戦いになる。公園らしき広場だが、文字通り何もなく公園としては廃れていた。

しかし戦うにはこういう場所の方が絶好の場なのも確かである。

「イツチニイ、サンシツ！」

ワタルは一人、黙々と準備運動をしている。ヒロキは、そんなワタルを心配そうに見ている。

三十分程して、相沢かながやってきた。

「おつ待たせー！！」

相沢かなは、制服姿のまま現れる。鞆などの持ち物を置いてきただけのようにも見える。

「つておい、三十分も待たせておいて明るく登場するな！ しかも準備ってお前何してきたんだよ？」

「乙女に時間は必要な事じゃないかな？」

「ふんっ、とつとと始めようぜ、暗くなってきたしな」

「そうだね！」

相沢かなは、蹴り技主体の為に武器は無し。ワタルは赤いハチマキを額に巻き付け自前の木刀を持つ。

軽くステップを踏む、相沢かな。その身のこなしは素人の目で見ても流麗である。

対するワタルはステップなどなく、気合を張る。この気合の入れ具合も素人目で見ても凄まじい。

「じゃあ、早速だけど時間も無いし、行かせてもらおうよー！」

「おう！　どんどん来やがれ、ヒロキ合図してくれ！」

「わかった！」

ヒロキはポケットに入っていた十円玉を取り出す。

「この十円玉が地面に落ちたら開始だよ……行くよ！」

十円玉を空高く、指で弾く。この宙に舞うわずか一瞬の事。ワタルと、相沢かなの視線が交差する。

十円玉が地面に落ちた。試合開始だ。

開始と同時に相沢かなが動く。テストする、とは言っていたが実際のところは先手必勝である。

ワタルは我流の構え、ワタルいわく構えのない構え。つまりはこれ、無茶苦茶。

「すうううう……ッハ！」

静かに息を吸い、そして吐くと同時に蹴りを繰り出す。まずは小手調べの左ローキックである。

その蹴りが見えていたのか、ワタルは軽くバックステップし、キックをかわす。

「やるう！」

「へっ、見え見えだつての！」

小手調べとはいえ手抜きのない一撃だった。当たれば並の相手なら足の骨を折っていたかもしれない。それ程の一撃。

「なら……、これはどうかな！」

「むっ！？」

バックステップし、着地の硬直がある。その隙を相沢かなは見逃さない。

後退したワタルに対して槍の突きのような、鋭い蹴りを繰り出す。（着地の硬直……普通は動けない、動けてもこのタイミングなら致命傷は避けられない！）

「ちいっ……！」

相沢かなの思惑とは裏腹に、ワタルは持ち前の強靱な運動能力で

左横に回転し、受け身をとる事でこの蹴りをかわす。

右足で蹴りを繰り出した相沢かなに対し、左横に受け身をとったワタルは相沢かなの背後をとる。

「もらったぜ！」

ワタルは女といえども容赦はしない。渾身の一撃を相沢かなの背中に当てようとする。

「……！」

が、ワタルの一撃を、後ろ回し蹴りのような形で防ぐ。

ワタルは木刀越しに、相沢かなの蹴りの一撃を受ける。この一撃のあまりの重さに「ここは危険だ」と直感がよぎる。

ガードしながら吹き飛ばされるような形で、相沢かなとの間を離す。

「攻めも守りも、足技かよ……さすが天才っての？」

「君こそ、運動神経が常人のそれを越えてないかな？」

まだお互いに息もあがっていない。そんな戦いにヒロキは目を奪われていた。

いつも一緒にいるワタルがこんなに動けるなんて、という感情が強い。一度も勝てた事がないとはいえヒロキはワタルとよく練習試合をする。

いつもワタルを見ていたからこそ、ワタルの強さを知っていたはずだった。

しかしそこにいるワタルは自分の知るワタルの強さのそれとは比べものにならないくらい強い。

自分が兄貴と慕う人間の、新たな面を見て改めて凄いと思う気持ちと同時に、少しのショックがあった。

「さつてと、先に攻められちゃったわけだし今度はこっちから行かせてもらおうか！」

「どうぞ、ご自由に」

「余裕かましてられるのも今のうちだぞー」

ワタルはそれだけ言って、軽く前傾姿勢になる。前傾姿勢は攻撃

姿勢だ。

相沢かなも、余裕をみせて「ご自由に」とは言ったが、ワタルの構えを見て顔を真剣にさせる。

「ほっ……!!」

ワタルも一息を吐くと同時に、相沢かなに向かっていく。

スピードだけなら相沢かなよりも早いと、ヒロキは感じた。

木刀を下から上にぶんまわす。力任せに振るう一撃は、そのままの通りぶんまわしている。

相沢かなは、小さくステップを踏んでかわす。これぐらい朝飯前だというような動きである。

「すう……ふっ！」

ワタルの攻撃のモーションが終わるよりも早く、反撃の左ミドルキックを繰り出す。

そのキックをさらに前傾姿勢になり避ける。前傾姿勢と言うよりも地面に張りついている。

そのまま、相沢かなの軸足の右足に向かい木刀を振るう。しかし片足でこの地面スレスレの一撃をさらに避ける。

（お前の運動神経もどういう神経だったのっ！）

（本当にやる……一撃一撃がきわどい！）

飛び上がりざま、ワタルを踏みつけようと着地をする。

その踏みつけも体が反応し、後ろに回転しかわした。

「やるね、君」

「お前もやるな、相沢かな！」

「君と戦つてると楽しいけど、心臓に悪いかな」

「それはオレサマも一緒だったの！」

ワタルも相沢かなも、うつすらと汗をかいてきた。最もワタルは夏の暑さから戦う前から、既に汗をかいていた。

しかし汗をかいているとはいえ、相沢かなにはどこか余裕がある。「もう君が強いのはわかったよ、だからそろそろ終わりにしようかな」

「ああ、そうしてほしい。俺もお前が強いのはわかったから早く仲間になりたい」

お互いに構えをとる。我流のワタルに対して、手はフリーにして右足を軸に左足でステップを踏む。

恐らくはどの蹴り技格闘技にも属さない格闘技なのか。

「じゃあ最後だから見せてあげよっかな！」

「何をだ？」

「かなの星蹴拳！」  
せいしゅうけん

「はっ……！？」

宣言と同時に突進する。そのスピードは今までのスピードの比ではない。

「これが星蹴拳！　そしてこれが星蹴拳！」  
せいしゅうげき

走り慣性をつけながらの左足での踏み込み。普通ならただの簡単なショートジャンプといたいところだが、その速さの慣性がついたショートジャンプは鋭利なジャンプへと早変わりした。

そして着地と同時に、例えるなら足の正拳づきのような一撃を繰り出した。

先ほどの槍の突きのような一撃が、まだ様子見だったのがわかるぐらいの威力だ。

「う、うおおおおおー！」

自分の体にひたすら動けと命じたワタル。命中直前になってやっと反応するぐらいの早さで襲ってくる蹴り。

完全に避けきる事はできずに、木刀を盾にしながら受け流すような形になる。

なんとか相沢かなの星蹴拳をさばいた。その瞬間、ワタルの後方の地面が蹴りの衝撃波で吹き飛ぶ。

「なっ……！??」

「ええ……！？」

現実的に考えればありえない現象がそこにあった。それを目撃してしまつたワタルとヒロキは驚きに言葉を失う。



女の子の蹴りで地面が吹き飛ぶ、なんて漫画の中の話だと思っていた。二人は同じ事を考えていた。

「うっわ、よく避けたね！」

「いや、ちよつと待てい！！」

考えるよりも先に体が動いていた。相沢かなの元へ足早にかけよっていく。

「お前、あんなので殺す気か！？」

「大丈夫でしょ、君、結構頑丈そうだしね」

相沢かなは、明るく言い放つ。あまりの開きっぷりにさすがのワタルも、言葉を失う。

「まあ……良いか。生きてたし」

「うむ！」

「しかし……白か」

ワタルは聞こえないように、ボソツと喋る。その言葉を相沢かなは、聞き逃さなかった。

「ちよつと、まさか見たの？」

相沢かなは、恥ずかしそうにスカートをおさえる。

「バツカ、短いスカートはいてあれだけ足をぶん回せば、目の前にいたオレサマに丸見えなのは当たり前だろ！」

「ムツキー！！見たな、このH、変態、スケベ！！」

恥ずかしさと怒りで、相沢かなは顔を真っ赤にしてワタルに襲いかかった。

「大体、スカートはいて蹴り技やるんだったら『スパッツ』とか『見えてもいいやつ』とかはいとけてんだ、家に帰ったんだから準備できただろ、コノヤロー！！」

「うるさいうるさいうるさい！ 覚悟しなさいよ！」

ワタルと相沢かなの、第二ラウンドが始まる。その様子を傍観するヒロキ。

心強い味方が増えたな、そう思っていた。

しばらくすると第二ラウンドが終了し、二人ともようやく落ちつ

いたようだ。

「まあ良いわ、その神経の図太さに強さ、あなた達となら参加しても良いかもね！」

「当たり前だ！ オレサマは優勝を目指す男だぞ！」

こうして「相沢かな」が仲間に加わる。

メンバーが響ワタル、川崎ヒロキ、相沢かな、3人が揃い参加資格を得る。

「そういえば、まだ名前を聞いてないんだけど？」

「そうでしたね、僕は川崎ヒロキです、よろしく！」

「オレサマは響ワタルだ！ その、おっぱいによつく刻んでおきやがれ！」

その直後、かなの鋭い蹴りが飛んでくる。それを紙一重で避けるワタル。

「下ネタ言っくな！」

「はっはっは、エロい事は男のロマンだろうが！」

追いかけられるワタル。追いかける、かな。そしてその二人を追うヒロキ。

マックスハートはようやく全力で夢を追いかけられる状態になる。

### 三人の気持ち！

> i10405—1198<

七月十一日。夜の事。

ワタルは日課の筋肉トレーニングをしていた。

「ふんっ……ふんっ……！！」

腕立て100回、腹筋100回、背筋100回、スクワット200回、ランニング10KM、そして木刀の素振りが1000回がワタルの日課である。

勿論、これはあくまでノルマとして設定した内容であり、もっと回数をこなす時もある。

やっと念願のリトルウォーズに参加できるとあって気合が入りすぎ、結局はノルマ+100回、ランニング5KM、素振り1000回をやってしまった。

それでも気が済まないのか、最後のストレッチも念入りにやる。

「よっしゃっ！！」

ワタルは自分の頬を思い切り叩く。弾けるような良い音がする。気合一閃、ワタルは汗を流すべく風呂に向かう。あっという間に素っ裸になり適当に体を洗う。

湯船にダイブすると一人、意気揚々と鼻歌を歌い出す。

「オレサマたちやーマックスハートおーゆっしょうゆっしょうゆっしょうだー！」

あまりの下手さだった。

ヒロキの家。

ヒロキもまたワタルに言われ、筋肉トレーニングをしていた。しかしヒロキの場合はワタルの半分の回数である。

「よんじゅっ……きゅっ……ごっ……っじゅっー！」

腕立てを50回達成する。腕がふるえて自分の体を支えきれなくなる。

床にすいこまれるようにヒロキは倒れた。

「はぁ……」

軽い溜息をはき出すと同時にヒロキは数時間前の事を思い出す。ワタルと、かなの戦い。二人ともさすがといふべきで動きが超人的だった。

「僕に……あんな戦いができるのかな……？」

誰に問いかけたわけでもない。そんな言葉を言うヒロキ。

もしも自分が相沢かなと戦っていたら。

勝てただろうか。答えはノーだ。自分で心強い味方になると言っていたのに、今となっては強すぎるメンバーの存在と弱い自分にコンプレックスを抱くようになっていた。

ヒロキは誰よりも強くなりたい。だからその強さを持つワタルに惹かれ兄貴と慕うようになった。

強い人の側にいれば自分も強くなれる。しかし結果は甘くなく、成長しない自分に対しさらに強くなるワタルに焦りと苛立ちを感じるのだった。

根が真面目で素直だから、余計にあるがままを感じてしまう。

「くそっ……！」

その苛立ちを床を思い切り殴る事で発散させる。

拳に伝わる痛みに、発散させて良かったという気持ちと、やっぱりやめておけば良かったと思う気持ちが入り乱れていた。

相沢かなの家。

「あら……かな、また自分でお弁当作ったの？ お母さんが作ってあげるって言ってるのに」

「良いのっ、かなは料理好きだもん！」

エプロンをして、台所に立つ姿は「蹴り技の天才」という言葉が

似合わない姿である。

知らずに見れば立派に女の子の姿そのままだ。

「よし、下味はこんなもんで良いかな……お母さん、かなはもう寝るね！」

「はいはい、おやすみなさい」

「おやすみー！」

母親に挨拶を済ませて、かなは自分の部屋に向かう。

部屋にたどり着くと写真立ての前に、かなは立っていた。

その写真には今よりも少し幼い、かな。その写真のかなは、今のようにシヨートではなく長い髪をポニーテールで束ねていて、とてもおしとやかそうである。

そしてその写真には、かなともう一人の少女が写っている。

逆にこの少女はシヨートヘアであり活発そうな女の子である。

「みな、今日はね、面白そうな人達に会ったんだよ！」

かなは写真に向かって話しかける。

「……かなね、その人達とリトルウォーズに出ようって決めたんだ！ だから……みな、応援よろしくね」

いつもの元気な少女の顔がそこにはない。

みな、というのは、相沢かなの実の妹である。みなは、かなの一下下である。

だが3年前に突然の事故により、この世を他界している。普通に生きていれば高校二年生だった少女。

「みな……がんばるからね」

かなは写真を力一杯抱きしめる。

七月十二日。

「兄貴、おはよー！」

「おうヒロキ、ちゃんとノルマこなしたか？」

「もちろんさ！」

「そうかそうか、オレサマはノルマ以上の事をやっちまって久々に筋肉痛だ……」

体中が痛いのか、動きがぎこちないワタル。同じくヒロキも動きがぎこちない。

ワタル程ではないにしても、筋肉の張るような痛さが少しあるのだ。

「おっ、かなっぺだ」

「本当だ」

少し前を、かなは友達と歩いている。こうして見ると本当に普通の女の子である。

「あれ兄貴、かなさん呼ばないの？」

「んー……、いやいい。人には人の空間ってのがあるもんだ」

ワタルはかつこつけた言葉を言い放ち、歩いていく。

そんな意外なワタルの言葉にヒロキは呆然としている。

「こらあ！ ヒロキ置いてくぞ、コノヤロー！」

「あ、待ってよ兄貴！」

いつもの日常である。そんな日常が変わるまであと五日。

あと五日でリトルウォーズの開幕である。

この日は土曜日であり、学校も午前の中の半日授業である。

授業も四時間で終了するとあって、生徒達もがんばって授業を受けている。

ワタルもがんばってみようと決意するのだが、十分程して睡魔に負けて結局、四時間の授業は、八割寝ていた。

そして、いつもの屋上に行こうと歩いていると、かなに声をかけられる。

「あ、響君」

「ワタルで良いよ」

「じゃあワタル君、今日のお昼ってどうするのかな？」

「どうするって、屋上行ってヒロキと雑談しながら適当に」

その言葉を聞いて、かなは嬉しそうに鞆から弁当箱を取り出す。

「じゃーんじゃじゃーん!!」

「うお!?　なんだそれ?」

「かな特製のスタミナ弁当なのだ!」

「お前が作ったのか?」

「あつたばうよ、兄ちゃん!」

昨日、蹴りで殺人未遂な事をされた為に、かな「料理という式を  
思いつかない。」

しかも弁当箱を包んでいる袋がまた可愛らしい柄なもので余計に  
思いつかない。

「すつげえな、料理もできて蹴り技も……っ!?!」

言いかけた時に、かなはワタルの口を塞ぐ。

「それは言わない約束だったんじゃないかな?」

「そうだったな、悪い悪い」

ワタルは本当に軽い平謝りをする。とりあえず反省はしているみ  
たいなので、かなも手を放す。

「で、早く行こうよ!」

「どこに?」

「屋上に」

「誰と?」

「かなと」

「なんで?」

「仲間でしょ」

「……それもそうだな」

変なやりとりの後、ワタルは納得する。

ヒロキが来ないって事は、きっと昼飯の準備をしてくれているは  
ずだ。相変わらずワタルの都合の良い解釈である。

いなかったとしても屋上で待っていればヒロキは来るだろう、と  
判断してワタルとかなは、屋上へと歩いていく。

歩いている最中、ちらほらと生徒からヒソヒソ話をされる。

「どうやらワタルとかなのツーショットがめずらしいという事。当然だ。」

「お前、結構人気なんだな」

「え、そうなのかな？」

「そうだろ」

「そうかな」

本人は人気があるとは思っていないようである。

だが事実、相沢かなは可愛い。美人タイプか可愛いタイプかといわれれば、後者だろう。

そんな可愛い女の子が殺人キックしてくるのだから、と思ったところでワタルは考えをやめる。

「何か想像してないかな？」

「いや、なんもしてない」

変な殺気を感じた為に、ワタルは考えるのをやめた。どうやら直感も鋭いようだ。

「でも屋上って解放されてないでしょ、良いの入って？」

「オレサマは顔パスなんだよ」

「ってそんなの、あるわけないと思うけど！」

「屋上はオレサマの場所なの！」

なんとなく納得してしまう。ワタルのオレサマ主義により本来は解放されていない屋上を開放した。

「納得はしたけど、ワタル君……不良の人とかに狙われない？」

「向かってくるなら返り討ちにすれば良い話だ」

「どうやら狙われているようである。だが、自分と互角にわたりあった人間という事であまり心配はしない。」

「オレサマは暴力反対なんて言わねえ、むしろ喧嘩上等だからな！」

「喧嘩バカそうだもんね」

「一度殴り合った方が人間って奴は良いんだよ、痛さを知れば怖さも知るだろ」



「ほー……」

まともな言葉に少しだけ見直すかな。

階段を上りながら喋り、程なくすると屋上へとたどり着いた。

## 突然の来訪者！

屋上へたどり着くと、相変わらずヒロキが昼飯の準備をしている。ヒロキもワタルと同じく、適当なコンビニ弁当などが主な食事だ。ヒロキのオススメはデカストップというコンビニのデザート各種である。デカストップは有名な大手メーカーコンビニである。

「お前も甘いもん好きだよな」

「うん、唯一好きだと言えるものだね！」

ヒロキは満足そうにデザートを食べている。バニラのアイスにマシゴが入っているパフェらしい。

「ちよつと、ヒロキ君！」

「は、はい？」

突然の、かなの登場に目を丸くするヒロキ。ワタルの方を見るとワタルは「なるようになれ」と目で合図をする。

今までの付き合い上から、その合図を一瞬で読み取り実行する。

「まだ、かなの料理も食べないでデザートとは早いんじゃないかな？」

「え、料理？」

「どうやら、かなっぺがオレサマ達の為に料理を作ってくれたらしい。しかも特製のスタミナ弁当らしいぞ」

かなは意気揚々とシートを敷き、弁当を並べ始める。

良い匂いがするとワタルとヒロキも中身を覗きはじめる。中身もなかなかの出来映えだ。

「へー、凄いな……人は見かけによらないってやつだ」

「兄貴、それは失礼だよ」

「そうか？ 事実を言ったまでだぞ？」

「ごちやごちや言っていないで、早く食べてみてほしいかな！」

かなに急かされるので、弁当の中身を口に運ぶ。スタミナ弁当というだけあって、料理のほとんどが「にんにく」を使用したもので

ある。非常に食欲をそそる。

「……うまい」

「うん」

「おっ、おっ、おおお!？」

「うん、うんうん!！」

非常に好評である。あまりの美味しさに二人で取り合いをするほどだった。

「うわっ、こんなに好評とは思わなかったかな……」

「いや、めっちゃうまいぞ!！」

「凄いいね、かなさん!」

「えへへ、かなにまつかせなっさーい!」

かなは一人で自慢げに胸を張る。ワタルとヒロキは、そんな事にも目もくれずに弁当を全滅させる。

わずか5分で全ての弁当を完食する。きれいさっぱり、とはこの事だ。

「いやあ、マジでうまかったぞ!」

「まあ……ちょっと気合入れて作ったからね」

かなは照れ笑いを浮かべる。

料理が少し多かった為か、ワタルとヒロキはしばらく休憩をする。

「しばらく動かないの?」

「ああ、休憩する」

「じゃあ、ちよつと教室に行ってくるね」

「がんばれよーい」

ワタルはやる気なく手を振る。ヒロキを見るといつの間にか熟睡していた。

そんな二人と一旦別れて、かなは自分の教室がある1Fへと移動した。

かなが、1Fへと降りてくると、校舎内は騒がしかった。廊下の向こう側を見ると、なぜか人が集まっている。

「何かあったの？」

「あ、相沢さん」

かなは、近くににいる友達に事情を聞く。

どうやら同じクラスに在籍している不良生徒が顔を出してきたらしい。

「不良……二之宮さんね……」

三年B組在籍の不良、二之宮小次郎。年齢自体は十九歳で、かな達の一つ上にあたる。

つまりはダブリである。七月現在までの出席日数の関係で今年も留年だろうと言われている。

かなは、人が集まる場所へと走る。

「てめえ、何を見てやがんだ！」

「い、いや、僕はなにも……」

「ああ！」

「うわっ……!？」

不良、二之宮は近場にいた気に入らない生徒を一方的に殴りつける。

その光景に近くにいた生徒は道をあけていく。その場にいた全員、恐怖の目で二之宮を見ている。

髪の毛は長く後ろで結んでいる。背も高く体つきも良い、それにギラギラした目つきが、生徒にとってはさらに恐怖心を煽った。

「へっ……、それで良いんだよ！」

「ちよつと、二之宮さん！」

わがもの顔で廊下を歩く二之宮の前に、かなが立つ。

自分を邪魔する奴がいるとは思わず、二之宮は少し呆氣にとられる。

「んだあ、てめえ！」

「突然やってきて、他の生徒を怖がらせないでほしいんだけど！」

「ああ？ 何をざけた事を言ってるの？」

「迷惑かけるなら帰って言うてるの！」

悪態をつく二之宮に、かなは一步も引かない。

大変な事が起きないかと、見守る生徒達。その場に緊張が走る。張りつめた空気に見ている生徒は誰も動けないでいる。

「俺は女だろうが、容赦はしねえぞ！」

拳を振り下ろす二之宮。言葉通り、その拳の勢いに容赦はない。

が、容易に拳をかわす。かなにとっては喧嘩の拳ぐらい避けるのは簡単な事である。

「……！？」

「暴力はいけないんじゃないかな？」

「てめえ……」

身長差は10cmはあるか、それ以上か。二之宮はかなを悠然と見下ろす。

かなも臆する事もなく、二之宮を見上げる。

「……ふんつ、かつこつけると痛い目を見るぜ」

「それは二之宮さんも、一緒じゃないかな？」

「けっ……！」

根負けしたのか、二之宮は来た道を帰っていく。置き土産のように、帰りながら唾をはいていく。

ようやくいなくなった二之宮に、生徒達は安心した表情を浮かべた。

「ふー、恐かったあ……」

かなも、安堵する。二之宮はただの不良ではない。対峙した瞬間に感じた。

周りの生徒もそんな、かなの姿を見てざわつきだしている。

（やばっ、少し目立ちすぎたかな……？）

あまり目立っても困るので、かなは屋上へと戻っていく。

かなが戻ると、ワタルも休憩が終わったのか軽く体を動かしている。

「おう、かなっぺ！」

「その『かなっぺ』ってなに？」

「知らないのか？ あだ名っていうんだぜ」

「そんな事知ってるって！」

ワタルはいつの間にかに、かなに「かなっぺ」というあだ名をつけていた。

「まあ……良いけどさ」

「ところで下の方が騒がしかったけど、何かあったのか？」

「ちよつとね、野暮な事かな」

「ふーん、まあ良いさ」

あまり乗り気じゃないように見えた為か、ワタルは深くは聞き入らなかった。

そんなワタルの態度に、内心良かったと思う、かな。ワタルはその辺に関してさっぱりしてる。

「さつて、今日は早く学校も終わってるわけだし……」

「だし？」

「マックスハートの練習試合といきますかー！！」

「練習試合？」

一人で熱が入るワタル。何をするのかと、かなは興味津々である。まだ寝ているヒロキを起こす。ワタルの起こし方はいきなり顔面ビンタだ。

「ヒロキ、起きろ！」

「んあ、兄貴？ 痛いよ……」

「シャキっとしろ！ 練習試合やるぞ！」

練習試合とはなんなのか。かなはそれだけが楽しみだった。逆に寝起きが悪いのか、ヒロキはあまり乗り気ではない表情をしている。

「昨日の公園で良いな、今日はヒロキと、かなっぺで戦ってみるか！」

「……つて、ええええええ！？」

「なんだ、練習試合ってそのまま戦うのね」  
全く余裕のないヒロキに対して、涼しい顔のかな。  
昨夜の考え事は一瞬で現実のものになってしまった。

## 対決 ヒロキvsかな！

ワタルとヒロキ、かなの三人は学校から公園へと移動する。相変わらず何もない、殺風景な公園。公園というよりも広場の方が近い。

但し、手入れはその代わりにいき届いているようで綺麗な公園だ。よく見ると、かなの吹っ飛ばした地面はまだ、えぐれている。

「んじゃ、さっき言った通りだ！ ヒロキとかなっぺで練習試合してみつか！」

「兄貴……本当にやるの？」

ヒロキはかなり逃げ腰になっている。乗り気じゃないのが目に見えてわかる。

相手が天才蹴撃少女でなければ、少しはがんばれただろう。しかし目の前にいるのは嘘でも幻でもない天才蹴撃少女と呼ばれる「相沢かな」その人。

かなは、学校と同じく涼しい顔をしている。

「ヒロキ君、覚悟を決めよう！」

「かなさん……やる気だ……」

前にヒロキは「戦うのは恐くない」と言った。その言葉は今のヒロキに届かない。

目の前で衝撃波で地面が吹き飛ぶ、常識外れの攻撃を見れば当然の話である。

普通の神経ならば恐いのが当然。逃げても構わない戦い。しかしヒロキは覚悟を決めてしまう。

「よしっ……僕はやれる！」

自分で自分に暗示をかける。手に人という字を書いて飲み込むというのと同じ原理なのかもしれない。ヒロキはひたすら言葉に出して「僕は強い」と何回も言ってみせる。

「よし、いくぞ！ はじめー！！」



ワタルの馬鹿でかい声が空に響く。戦わない本人が一番気合が入っている。

ヒロキの構えはワタルの見よう見まねで我流。だが構えのある構え。両手で木刀を握りしめて、相手に向ける、剣道の中段のような構え。我流中段である。

かなは星蹴拳ではなく、手はやや上に構え自由にし、軽いステップを踏む。

「行きますよっ！」

「おっけー！」

ヒロキは律儀に攻めるという合図をする。この辺がヒロキらしいといえる。

全力で、かなに走るヒロキ。全力で走っているものの、ワタルや、かなに比べ速度が遅い。

それでも一般的に見れば早い方の部類である。事実ヒロキは50Mを七秒台で走れるぐらいだ。

「やあああああー!!」

力任せに木刀を振り下ろす。

が、その攻撃は呆気なく、かなに避けられてしまふ。当然というような顔をする、かな。

「ううっ……!？」

するとヒロキの左足に突然の激痛が走る。いや激痛が走ると同時に、左足が浮いている。

かなは、右足によるローキックを繰り出した。その威力と衝撃により、ヒロキの蹴られた左足が浮いたのだ。

「大振りは禁物。すぐに防御姿勢に入らないと狙われるよ」

左足が宙に浮いた事により、バランスを崩す。態勢を立て直す事ができずにそのまま倒れ込む。

「……!？」

倒れたヒロキの顔を、かなは容赦なく踏みつけようとする。間一髪でその踏みつけを回避するヒロキ。あの踏みつけを喰らっ

たら危険だという、危険信号がいち早く察知し、なんとか避ける。

「ほらほらほら！」

なんとか立ち上がったヒロキに、更なる追撃をする。

ロー、ミドル、ハイといった蹴りの基本アクションを小さく鋭く当てていく。

「ぐっ……！」

「ガードばかりじゃ、敵には勝てないよ！」

冷静にアドバイスする、かな。しかしヒロキにはそんな暇がない。小さく鋭いモーションの割に、蹴りの重さは凄まじい。まるでバットで殴られたような重さ。

「くそうっ……！」

なんとか打開しようと、大振りの一撃をたたき込む。

しかし、そんな一撃も軽くかわされてしまふ。直後、ヒロキの胸部に鈍痛が走る。

「うえっ……！！！」

ヒロキの胸板に強烈なミドルキックが炸裂している。やや遠目にいるワタルにも聞こえるぐらい鈍い音。

その蹴りの勢いを受け止める事ができずに、転がるように飛ばされる。

「うつへえ……、ありや痛いぞ……」

あまりのその音に、ワタルも自分が技をくらったような錯覚をしてしまい、気持ちが悪くなる。

蹴られたわけでもないのに、自分の胸板をさする。他人事として

見ても、あまりの衝撃。

「うつげえええ……！！！」

「だから、大振りは厳禁！」

嘔吐はしなかったものの、その場でのたうち回るヒロキ。

さすがに、やりすぎたと思ったのか、かなも少し心配な顔をする。

「ワタル君……もう、このへんで」

「いや、まだだろ」

「でも……っ？」

ヒロキは立ち上がっていた。しかし蹴りのダメージが激しいのが目に見えてわかる。

我慢をして顔が赤いどころか、青白くなっている。どうみても酸欠の状態である。

「かなさん、僕はまだ……やれるよっ！」

息も絶え絶えに言葉をはき出す。声を出したら呼吸ができなく、さらに苦しそうにする。

「でも……」

「僕だって……、マックスハートだ！！ マックスハートは全力の心、全力でやればできぬものなど何もない！ ……だろ、兄貴？」

「その通りだ、ヒロキ！ かなっぺなんてぶつつぶせ！」

ヒロキの口から出た言葉に、嬉しそうな表情のワタル。めずらしくヒロキに乗せられてしまっている。

「ふう……、じゃあ、かなも全力でいくよ！」

かなは、手を完全にフリーにして、右足を軸に左足で独特のステップを踏む。星蹴拳だ。

一方、ヒロキも今までは両手で木刀を握っていたのに対し、今度は右手のみで木刀を持ち、がむしゃらに振り回す。

「行くぞー！ 必殺・みだれうち！」

その言葉と同時にヒロキは技を繰り出す。技と呼べる代物かはわからないが、「みだれうち」と言われたその技は、先ほどの大振りな剣線とは対照的に、小さく小さく細かい剣線が乱れる。

かなには大振りな一撃が避けられてしまうと判断しての策である。そして、これがヒロキの得意技であり必殺技である。

先ほどまでやっていた大振りなスタイルは、憧れのワタルを模した戦い、それに対し小回りと手数で戦うこのスタイルは本来のヒロキの戦い方といってもいいかもしれない。

（小回りと手数で、逃げ道を塞ぐ技。これだけの剣線を避けるのは至難の業、全部迎撃するしかないっ、攻撃は最大の防御ってね！）

かなは、一瞬で必殺・みだれうち！の対処法を考えつく。

ステップを踏んでいた左足を、胸元近くまで持ち上げる構えにシフトした。

「星蹴拳　れんせいげき 連星撃！」

ヒロキのみだれうち！と同じく、目にも見えない高速の連続蹴りが剣線を潰していく。

星蹴撃が一撃で勝負する技ならば、連星撃は手数で勝負する技である。

まさにヒロキのようなタイプと戦うにはうってつけな技。

「そ、そんな！？」

これで仕留めきれれるとは思っていなかったにしろ、何かしらの勝利への糸口になると思った技は、連星撃により潰されていく。

手数も小回りも互角となると、この打ち合いを制するのは技の破壊力。

しかし、プレイヤーとしての力は、かなに傾いている。ヒロキはこの乱打戦が、少しずつ押されているのがわかってしまう。

連星撃の重さに耐えられずに、ヒロキは再び吹き飛ばされる。

「ぐうつ……！」

重さにより飛ばされ、受け身もとれないままに地面に落ちる。

「そこまで！」

さすがにワタルも勝負を止める。負けたにしても、ワタルは健闘を称える。

事実、かなも言い方は悪いが、ヒロキ相手に星蹴拳の技の一つ、連星撃を出すとは思ってもしなかったであろう。

しばらくそのまま倒れていたヒロキだが、自分で起きあがる。

「やっぱり無理だったか……」

「うつん、ヒロキ君。結構強い！」

右手を貸しながら、左手でピースする。それにヒロキも照れながらもピースで返した。

「全くだぜ、ヒロキ！　かなっぺ相手にあそこまでやるたあ、正直

思ってなかった」

ワタルも弟分の強さに嬉しさがこみあげていた。そんな感情が既にオーラとなって出ていた。

やぶれはしたものの、ヒロキも立派なマックスハートメンバーである事を見せつける。

「ま、痛かったかもしれないけど、明日は幸い日曜日で休みだぜ」

「ああそうだったっけ、今日は土曜日だったかな？」

「そうだろ？ 明日はオレサマ自らリトルウオーズの会場に行って参加登録してくるぜ！」

いよいよマックスハートの大会参加登録である。

それぞれの思いを胸に、感情の高ぶりを感じる三人。マックスハートの戦いはこれから始まるのだ。

しばらくの間、三人で雑談していると日も暮れていた。

「じゃあ、かなは帰るね！」

「痴漢に襲われないようにね」

「バーカ、かなっぺに襲う奴がいるなら、痴漢のがかわいそうだっての！」

「さりげに酷い事を言っている気がするけど……、まあ良いや、ばいばい！」

相変わらず明るく去っていく。今日の戦いに疲れを感じさせない軽やかなステップだ。

「じゃ、オレサマも帰るかな……」

「兄貴、明日は一緒に行こうか？」

「いや、いい。オレサマ一人で行く」

「良いの？」

ワタルは謎の高ぶりを感じる。さっきのような期待の高ぶりではないのは確かである。

ただ、その感情を抑えられずに自分の拳を、思い切り握りしめていた。

「良いカードを手に入れてくるぜ！」

感情をヒロキに悟られないようにする為か、表情を見せずに言う。  
握りしめたその拳は、血が滲んでいた。

そして、七月十三日。

リトルウオーズに参加登録しに行くのであった。

## リトルウォーズ登録！

七月十三日。

ワタルは一人、マックスハートのリトルウォーズ大会参加登録をしに行動している。

場所は、関東と関西の中間に位置している「リョウコクギョウ両国技場」である。この両国技場は、代々リトルウォーズのベスト4から決勝戦での戦いの場となっている。

リトルウォーズ優勝を目指す者ならば、憧れの舞台である。

一体、何チームが参加登録に来ているのだろうか。

登録締め切り最後の、日曜日だけあってかなりの人数が集まっている。参加者、見物人と、色々な人がいるだろう。この人の多さを見るだけでも現代のリトルウォーズの人気の伺える。

「あの、参加登録をしたいんですけど……」

全身黒ずくめの、まるで黒子みたいな人が受け付けらしき場所にいる。

いくら「ちゃんばら」だからといっても、こだわりが凄い。雰囲気作りからして熱が入っている。

「はいはい、登録ですね……えーと、チーム名はなんですか？」

「マックスハート！」

「マックス……ハート、と。メンバーは何人の参加で？」

「3人だ」

受付人……せつかく格好も真似てくれているのだから黒子という。

その黒子は、登録用紙らしきものに書き込んでいく。しっかりした紙に書いてもらう事で、俄然としてリトルウォーズ参加が現実味を帯びてきた。

ワタルは一人、例えようのない余韻にひたっている。

そして、その余韻と共に昨日のヒロキとの会話を思い出していた。

練習試合後の事である。

かなが、帰った後も少しの間だけワタルとヒロキは話をしていた。いつも通りの他愛もない話である。

「お前もよくやったよ、かなつぺを相手にあそこまでやれりやあな！」

「まだまだだよ……、僕、正直なところ不安だよ。こんな強さでリトルウォーズに通用するかって」

「ふむ……」

不安は最もな話である。善戦したとはいえ、結果は惨敗。

ワタルは類似希なる戦闘能力。かなは天才蹴撃少女。そしてヒロキには何もない。

戦いは肩書きでやるものではないのは、ヒロキもわかっている。

それでも強さの証明が一つでも良いからほしかったのも事実である。そういう不安もわかっていたからこそ、ワタルも安易に大丈夫とは言えない。ワタルはその場の雰囲気と和ませようと、一つだけ思い出した事がある。

「ヒロキよ！」

真面目な声をしたワタル。ヒロキは知っている。こういう時のワタルは必ず「重要」な事を言ってくれる。

どんな言葉が飛び出すのか、わらにもすがりたい思いのヒロキは、真剣に聞き耳を立てる。

「兄貴！」

「今日の、かなつぺのパンツは何色だった？」

「……………っは？」

空気が、時間が止まった。大げさに言うと、周りの景色の色も灰色になったかもしれない。

そんな、変な時間<sup>ま</sup>が一瞬<sup>だけ</sup>だったが訪れる。ヒロキの真剣な思考は音を立てて崩れ去った。

「で、何色だったんだ？ 見たんだろ？」



「……青」

「青かぁ！ 良い趣味してるぜ！」

ヒロキは、ほんのり頬を染める。別に恥ずかしがるのはヒロキではないはずだが、彼はまだウブだった。

横で勝手に「パンツの色」で盛り上がるワタルに、シリアスな空気は一瞬で壊れる。

「良くないよつ、兄貴！」

つい、言葉が出てしまう。この空気にヒロキ自身も譲れないものがあつたからである。

声をあげるヒロキに、真面目に見据えるワタル。さすがにふざけすぎたかとも思ったのか、今度はワタルがヒロキの言葉に聞き耳を立てた。

「僕は……僕はっ……！」

「ヒロキ……」

「僕はピンクのが好きなんだ！」

再び空気が、凍り付く。

こうして変な余韻と、思い出し笑いを耐える。体が震え出すワタル。

しばらくそうしていると、聞き覚えのない声が後ろから聞こえてくる。

「あれ、どうしたの？ 緊張してるのかな？」

振り向くと、そこにいたのは会場には似つかわしい、髪型もキメて清楚な顔立ちの男が立っていた。

身長も、ワタルよりもやや高めだろうか。175cm前後はあるだろう。

ガタイが良いわけではないが、引き締まったその筋肉。相当な鍛錬を積んでいるのがわかる。

「緊張じゃねえ、武者震いってやつだ！」

「ははは、なら良いけど」

改めて、その男の顔を見る。ワタルにとって見に覚えのある顔である。

いや、覚えどころではない。鮮明にその顔は焼き付いている。

「Fエンゼルのリーダー。天才、三崎清純きよすみ！」

「光栄だなあ、僕の事を知っていてくれるなんて」

心中穏やかではないワタルに対して、どこか余裕な表情にオーラを纏う三崎。

天才という人間はこういうものだろうか。口調もどこかマイペースである。

だが、同じ天才でも、相沢かなとは似ても似つかない雰囲気を持っている。かなが努力型と例えると、この三崎は生まれながらにして天才と思わせる雰囲気がある。

「ところで、君は？ 僕と……どこかで会ったっけ？」

「いや、アンタはオレサマの事を知らない。だがっ、オレサマはアンタの事を知っている！」

「……ふーん」

鋭い眼光を放つ。対して、三崎は柔らかな視線を送る。

視線と視線がぶつかり合う。そんな光景はこの二人だけではない。よく周りを見ると、既に威圧戦、情報戦は始まっている。

「ま、僕にそれだけの敵意を向けるって事は……だ。君も僕の『敵』と見ても良いわけだよね？」

「ああ、その通りだぜ」

「そうかそうか。それがわかれば安心だよ」

「ん……？」

三崎は再び、ワタルを見る。その三崎の眼にワタルは一瞬ながら凍り付く。

先ほどまでとは、うってかわって冷徹な目である。まるで獲物を狙う強者。邪魔をするならば、弱者ですら狩る。そんな事を考えさせられてしまう眼。

こんな冷たい眼をする人間は今までに見た事がない。今の自分の

立場と、三崎の立場。それをわからせるには十分な威圧戦だった。

「一つだけ、忠告がある」

「忠告？」

「T・O・テイカーの、『絶対王者の松原』の事は知っているね？」

「それがどうした？」

「彼を狩るのは、僕たちFエンゼルだ。君がその障害になるのなら……容赦はしない」

それだけを伝えると、三崎は人混みの中へと消えていく。

あの冷たい眼から感じ取れた事は錯覚ではなかった。幸運の天使とは全く違う。三崎は狩る者、ハンターである。

見てるだけでは感じなかった。目の前に対峙して初めてわかる威圧感である。

「へっ、それがどうした！ 優勝するのはオレサマ率いるマックスハートだ、コノヤロー！！」

そんな残る威圧感を振り払うように、大見栄をきるワタル。会場でこんな事を言ってしまったては、公開宣戦布告である。しかしワタルには、そんな事すらも小さくとれるぐらいの大きな大きな高ぶりがあった。

その高ぶりを抑え切れなく、発散させる為にワタルは走り出す。いよいよトリルウォーズ開幕まであと四日である。

## 天才の視点！

Fエンゼル 天才、三崎清純が率いるチームである。  
今までの戦績は、過去三年間の連続出場。そして三年間ともベスト4に入るといって、真の強豪チーム。

事実、現在までに三連覇を果たし、今年で四連覇を成し遂げようとする王者、「T・O・テイカー」の最有力対抗団体である。プレイヤーとしての能力も、王者松原と天才三崎と言われる程の知名度である。

一昨年は、準優勝の二位。去年は惜しくも三位。そして今年こそはと炎を燃やすチームだ。

七月十四日。放課後。

学校の事を片づけて、一人部室に向かう三崎。

三崎の学校は、リトルウォーズの為の「ちゃんばら部」なるものが、正式に部として活動している。

剣道部との違いは、と取れるところは「ちゃんばら」の名前にごまかされてしまうが、武器がいわゆる剣だけではないところである。真剣や銃といった、いわゆる本物の使用は禁止。それ以外ならなんでも了承されている。それこそ喧嘩だろうと格闘技だろうと、だ。

「三崎！」

「やつ、勇！」

三崎を出迎えた男。池勇<sup>いけいさみ</sup>という男であり、三崎と同じく今年で三年生。つまりは今年で最後のリトルウォーズの為、三崎と共に優勝の二文字を目指している。

身長自体は165cmと小柄な方の部類だが、恵まれた筋肉隆々の体格が、小柄と感じさせないほどの迫力を持っている。頭も丸坊主にし、気合の入る具合を伺わせる。

「どうだった？」

「うん、まあまあ」

ハキハキと喋る池に対し、相変わらずマイペースを崩さない三崎。この二人はうまい具合にバランスがとれている。Fエンゼルの代名詞である「天才三崎」の他にも「攻めの三崎と守りの池」と称される程の二人である。

「だけど……何人か良いのがいたね、この戦いを盛り上げてくれるだろうって奴が、さ」

「お前にそれ程の事を言わせるとは……いつしか俺達の足下を揺るがすかもしれない」

「……それはない。良い素材だがまだ弱い。才能という点だけ見てしまえば、うちの『仁』に匹敵するぐらいの才を見出せたんだけどね」

「ほお……！」

池は内心、今までの考えが改まる程に驚いていた。

ここが守りの池、と称されるところ。楽観的に物事を見てしまう三崎に対して、常に計算しつくされた考えを持つ用心深さ。

才能に秀でる奴が、いかに恐ろしいものかという事。池は不安に駆られる。

「ところで仁は？」

「いや、俺にもわからん」

「ふーん。ま、仁ってマイペースな奴だからな」

「お前が言っな、お前が」

不安に駆られていた池だが、このマイペースさが三崎である。

三崎にはそういうオーラがある。どんなに不安に駆られていても、この男ならなんとかしてしまう。なんとかできてしまう。

そんな気持ちにさせるオーラ。天才のオーラとでもいうのか。

「じゃあ、僕はちよつと先生に会ってくるよ！」

「了解した。練習は適当に切り上げさせるぞ」

「任せたよ」

部活として活動をしている為、Fエンゼルには顧問となる先生が

いる。

一応、本人に自覚はないのだが、三崎は部長である。前日の参加登録の事を、顧問の先生に報告するために職員室を目指す。

「失礼します！」

職員室に入る時の「お決まりの台詞」を言つて、三崎は目で顧問の先生を探す。

放課後という事もあり、職員室に残っている先生は少ない。目当ての先生はすぐに発見できた。

「先生！」

「やあ、三崎君ではありませんか」

三崎とは違った意味でマイペースな先生。

名を「石田孝三<sup>いしだこうぞう</sup>」という。外見だけ見れば、年齢は五十代にさしかかつてそうである。白髪交じりの髪の毛に、やや、やせ気味の体型。一言で表すなら紳士<sup>ジェントルマン</sup>だろう。

「昨日、参加登録を済ませてきたんで、報告にきました」

「ご苦勞様です。本来なら私が行くべきなのですが……」

「いえ、気にしないでください。良い人間観察もできましたよ！」

「はっはっは、そうですか」

石田先生は、過去何年間もリトルウォーズの大会を見ている。しかし優勝の席だけはいまだに着いた事がない。Fエンゼルの部員とレギュラーメンバーは今年こそ、石田先生を優勝の台座へと座らせてあげたいという一心だ。

三崎も、そう考えている。

それに石田先生は、最近になって体の具合がすぐれなくなっていて、顧問として活動できるのも今年が最後と噂されている。

参加登録日も、突然の不調により、三崎が登録に行っている。

「じゃあ、先生。僕はもう帰ります」

「はい。気をつけて」

三崎は一瞬だが、今でも辛そうにする先生を見ている。

辛い体を押しして、王者チームにどうしたら勝てるか。的確な練習方法は。 などといった、対策を熱心に研究していた。

そんな先生の熱心な姿を見て、さらに優勝の意欲をかき立てた。

校舎から出ると、池が待っている。

「なんだ、帰ってなかったのか？」

「構わんだろ？ ちょっと色々と話もしたくてな」

「ふーん」

めずらしくもない。池はいつも真面目だからだ。

そんな池が、真面目に話たがっているように見えた為、三崎も案に乗る。

「正直、どうだ？ 今年は優勝できそうか」

「おいおい、メンバーのお前がそんな事……」

「勿論、俺は優勝する気がある。しかし嫌な予感もある」

「勇は心配しすぎなんだ。もっと前向きにポジティブにいかないと、やれるもんもやれなくなっちゃうぞ？」

「そうなんだがな……」

池の心配性は今に始まったわけではない。

だが、三崎にも覚えがある。前に池の悪い予感が的中したのは、去年の事。

二年連続で優勝決定戦は「T・O・ティカー vs Fエンゼル」だと誰もが予想していた。その絶対に覆るはずのない予想を、覆される。

去年の最優秀選手である「二之宮小次郎」 この男の存在によ

り、Fエンゼルは、二之宮のいるライジングズに敗北。結果は三位終了という苦汁を飲まされた。

「……わかった。僕も少し樂觀視は控えよう」

去年の嫌な思い出が、三崎の頭の中に広がっていく。

三年連続の優勝候補チーム。「候補」という二文字がついてるか、ついてないか、という差が今の王者チームと、Fエンゼルとの差な

のかもしれない。

今年の戦いは、三崎にとってジंकスとの戦い。

三崎と池のFエンゼルもまた、優勝の二文字へ歩き出していた。



## ショッピングk a n a !

七月十六日。

相沢かなは、一人で街を歩いていた。

都会という程でもないが、それなりに栄えた街。暮らしに不自由する事もないぐらゐに物品があり、人も多いとはいえないぐらゐの人口であり、暮らしやすいといえる街並みではないだろうか。

七月に入り、本格的な夏の暑さが照りつける。白い清純なワンピースを身につけて歩く姿は、涼しさを連想させる。

かな自身もそれ程、暑いとは感じていないのか涼しい表情をうかべる。

ただこうやって歩いていると、年相応の女の子である。実際、かなの目的もショッピングであり、あてもなく「良い物」を探して歩く。

参加登録に向かったワタルは何故か、気合が入っていた。

十四日に会ってから、ヒロキを連れてトレーニングや練習試合をしている。かなも、それなりの付き合いをしてから今に至る。

かなにとっては、基本的なトレーニングというものも「今更感」が拭えないのだろう。何故ならそんな事は日課のようにやっているからだ。引き締まった美しいボディラインは日々の修練の賜物といえよう。

それにワタル達とは会ってまだ数日しか経っていない。いくら同じチームにいるとはいえ、あまりベタベタした付き合いは好ましくはなかった。

何よりも、相沢かなという人間は束縛を嫌う思考がある。根本的には自由人なのだ。

だが自由人とはいえども、人付き合いの作法は承知している。だからこそ「それなりの付き合い」をこなしてからのショッピングな

のだ。

「あいたつ!？」

鼻先に衝撃がある。恐らくは誰かにぶつかったのだろう。

「てめえ、どこ見て歩いてやがんだ、コラー!」

やけにチンピラ風味な口調。明らかに格下な感じがする。

実際、顔を見ると今時リーゼントな感じの髪型。ちょっと昔の暴走族漫画に出てきそうな髪型。強面こわもてとは言い難い、面白い顔がそこにいた。

人数を見ても三人。ただのチンピラならば三人という数は、かなにとつて雑魚と変わらない。

だが三人の内の一人。雑魚二匹に囲まれた大物はいた。

「あ、二之宮さん」

「ああ？」

二之宮小次郎 以前、学校に現れて騒ぎを起こした人。

街中に不良三人の構図。非常に「あり」な構図だと、かなは思う。

「雑魚二匹つれて……何してんのかな？」

この問いに対して、周りの二人がやたらと騒ぐ。この反応がいかに雑魚。

二之宮はギラつかせた目で、かなを見ている。よく「殺す」という言葉で殺意を表明する事があるが、二之宮の目は殺意というといきすぎるが、それに近い何かを秘めている。

まるで「復讐や妬み」といった負の感情からくるそれと、なんら変わりがない。

「おい女。あまり調子に乗るな、女なら我が身もかわいいだろ？」

「どつという意味かな？」

その質問に質問で返す。うすうすだが意味はわかっている。

善ではない人間に近づいて、その結果で女相手に何をするのかわかっていいのか、と問う。

勿論、かなはそうさせる気は無い。だがそれは、かなの過剰な自信からくるものだ。その証拠に、二之宮を相手にする際は、かなも

警戒だけはしている。

「ふん。とにかく、あまり調子にはのるんじゃねえ」

捨て台詞だけを吐いて、二之宮は歩いていく。それにつられて歩く、雑魚二匹。

街中で喧嘩沙汰にしないところが、二之宮の器の測りとなる。

だが、かなには一つ疑問として思う所がある。何故、二之宮が不良なのか。二之宮は不良という枠に収まるべき人間ではない……かなの直感が告げている。

二之宮に会うというアクシデントはあったものの、かなは気にせずにシヨッピングを続ける。

明日からはリトルウォーズ開幕である。戦いの毎日になる為、今だけが唯一普通の女の子として活動できる瞬間。

ふと思う。ワタルとヒロキはどうしているのか。

恐らくはヒロキがこつてりと絞られているのだろう。それを想像するだけでも面白い。

結局は変なアクシデントと、適当な考え事していると日も暮れていた。

立派に夕方といえる時刻なのだが、それでも暑さを感じる。根本的に風もぬるく、涼しい要素が一個もない。それでも夏の太陽が照りつけなくなってきたいるだけでも良いのかもしれないが。

「そうだっ！」

恐らくはまだ練習をしているだろう、二人の為に飲み物を買っていこうとする。

練習に付き合わなかったのだから、せめてもの付き合い。

水分補給に適している、清涼飲料水を人数分だけ購入して恐らくは「いつもの公園」へと向かう。

街から公園までは、およそ十五分の距離。

何もない殺風景な公園に、二人の姿はすぐに発見できる。相当な

練習をしたのだろうか。二人とも汗まみれで倒れている。

「お、やってるねー」

かなは二人に声をかける。

ワタルは完全燃焼しているのか、やる気のない声で返事をする。  
対してヒロキは、しっかりとかなを見る。

「ほらっ！」

かなは、ワタルとヒロキに買ってきた飲み物を渡す。

「お、サンキュー！」

今まで死に体だったワタルが、飛び起きる。

ヒロキは疲労困憊なのに対して、ワタルはなんだかんだと余裕がある。このあたりがワタルとヒロキの「差」なのだろう。

それにワタルは疲れた、というよりも暑さにやられたという方が近い。

二人とも、渡された飲み物を一気に飲み干した。

「で、どうだったのかな？」

「何が？」

「練習はうまくいったかって事」

「見ての通りだ！」

つまりは上々だという事だろう。汗もさる事ながら、砂地にある跡が物語っている。

「明日からいよいよ、念願のリトルウォーズだからな」

そう言ったワタルの目には、自信に満ちている。

汗に染まったトレードマークの赤いハチマキは、さらに赤く見える。ワタルにとっても、かなにとっても、最初で最後になるリトルウォーズ。

それぞれの想いをのせて、時間が動き出していた。

そして、七月十七日。

いよいよリトルウォーズ開幕を向かえる。

## リトルウォーズ開幕！

>19729—1198<

七月十七日。午前八時。

開会式を行う会場 「両国国技場」へ向かう為、響ワタル、川崎ヒロキ、そして相沢かなの三人は、新幹線にて移動を開始していた。

残念ながら学校の方は欠席扱い。大々的に高校ちゃんばらとして活動をしている学校ならば、それなりの処置もしてくれるらしいが、ワタル達の学校は待遇が悪い。

いずれにしても学校の夏休みが始まるのは七月十八日。つまり明日からである。

一日あるいは二日の欠席になるので、出席日数の被害自体は小さなもので済む。ある意味では不幸中の幸いともいえよう。

それに三人共、出席日数に関しては花丸がつけられるぐらいなので、この程度の事はまさに「この程度」で済んだ。

「……………」

ワタルはただ、窓の外の景色を見ていた。ただ流れていく景色を見ていると、意識を集中させる事ができたからだ。

無理もない。念願叶ってのリトルウォーズへの参加。一人夢を見続けた舞台に、今となつてはヒロキにかなという、仲間もいる。

そして、リトルウォーズ優勝の最大の弊害となるであろう、「王者松原」と「天才三崎」の存在。さらには「前大会MVP・二之宮」も侮れない相手となる。

いや、それだけではない。ワタルは長き歴史を見ていて知っていたのだ。リトルウォーズは肩書きだけが全てじゃない事を。名もないダークホースが首をかき切る可能性だってある。

現に前大会MVPの二之宮小次郎は、無名のプレイヤーだったの

に対し、わずか一年ぽつきりで最優秀賞選手に成り上がっている。  
それが夏の大会　リトルウオーズの「魔力」といえるところなの  
だ。

「ちょっとワタル君！」

「なんだ、かなっぺか」

いまいちやる気のない返事に、ふくれっ面をする。

最も、今日という日を待ち望んできていた張本人のワタルが、ず  
っと押し黙っている。

かなにしてみれば、心配して声をかけただけの事。リーダーが黙  
つていてはチームの士気に関わると判断しての事でもある。

かなは、車両内で買ってきた蜜柑を手渡す。とても甘そうな蜜柑  
で香りも良い。

「なんだよ、これ？」

「見てわからないかな？　蜜柑」

無言でその蜜柑を受け取り、無言で口に運ぶ。

「お、こりゃ甘くてうまいな」

「でしょ！　おいしかったから全員分買ってきたの」

見ると確かに全員分の蜜柑が買ってあった。持参してきた鞆いっ  
ぱいを買われた蜜柑。

どう見ても全員分＋おかわり分も含まれている。それどころか、  
お土産分も含まれているか。

先ほどの蜜柑の香りは、どうやらこれだけの数があった為らしい。  
しかし蜜柑がおいしかったのも確かである。

「元気でした？」

「オレサマは元々元気だぜ？」

「嘘。明らかに『意識』してたでしょ」

ワタルは凶星をつかれる。確かにかなに話しかけられる直前まで  
「まだ見ぬ強豪」の存在を意識していた。

「大丈夫……もう元気になった」

「しっかりしてよね。ワタル君が元気なかったらヒロキ君だって不

安がるでしょ」

言うだけ言って、かなはどこかへと歩いていってしまふ。きつと、あんな感じで新しい食べ物や掘り出し物を見つけてくるのだらう。かなの性質がそうなのか。女の子がそうなのか。ワタルにはわからない事である。

ふと、かなの言葉が気になり、後ろに座っているはずのヒロキを見る。快適な椅子に寝転がり、気持ちよさそうな表情で眠っている。よく見ると口から涎も垂れそうである。

「何が、『不安がる』だってんだ！」

ヒロキのめずらしく見せる馬鹿っぽい表情と、かなの行動にすっかりシリアスな感じを台無しにされる。

だが、結局はこれが良かったのかもしれない。ワタルの心の中の緊張はいつしかとけていた。

数十分ほど経つと、両国国技場へと着く。

天気は晴れ。絶好の開会式日和である。暑い事に変わりはないが、カラッと晴れている為に心地よさを感じる。

新幹線から降り、駅の外へ出ると数百人、いや数千はいるだろうが、もの凄い人だかりができている。

恐らくはもつと増えてくるだらう。事実、ワタル達が着いた後も、駅からは見るからに参加者といえる人達が大勢出てくる。

まるで何かのイベント会場に向かう人だかりのようにも見える。イベントな事には変わりがないが、中には明らかにただ「楽しむ」事を目的とした人間もいるようだ。

こういう人間ほど大怪我を招きやすい。それに「参加する事がステータス」のように考えているような奴には、一度怪我をして思い知った方が良く、ワタルは考える。

「兄貴、会場はあっちみたいだよ！」

こういう場で活躍するのはヒロキだ。実際のところワタルとかなは、人の多さにのまれてしまっている。かなに至っては放っておく

と迷子になりかねない。

ワタルとかなは、ヒロキを頼りに会場へと向かう。

会場の中心部、恐らくはここで開会式が行われるだろうと思われる場所には、先ほどのいわゆるミィハーな人間らしき人はいなくなる。

三人は明らかな空気の違いを感じる。浮いた雰囲気は一転、重苦しい空気がその場を支配している。

「凄いいんじゃないかな……」

「ああ、良い感じだぜ」

「こんな人達と戦うのか……」

三人共、思った事を口にする。根本となる感覚は同じ事を思う。恐らくはその場にいる人間が、ほとんど同じような事を感じているだろう。

「みなさん、本日はリトルウォーズ開催地の両国国技場へとお集まりいただき、ありがとうございます！」

突然の大音量の声が響く。会場全体に届くぐらいの音量に設定してあるのか、スピーカー近くににいるワタル達にとっては耳が痛くなる。

そしてその言葉を発した人物をワタルは知っている。登録に行った際に担当してくれた黒子。

周りを見るといつの間にか、黒子がたくさんいる。すると今、話している黒子はワタルの登録担当をしてくれた黒子ではないのかもしれない。

「まずは簡単なルール説明をさせていただきます。ここにいるみなさんは、もう知っての通りですが本大会の参加条件はチームとし、最低三名から最大五名までとします」

その黒子がその後と言ったルール説明の内容はこのような内容である。

一、メンバーの追加登録は大会期間中に最大六名までの登録と



する。

二、 真剣や拳銃といった明確な殺傷能力のある武器の使用は禁ずる。

三、 目つぶし、金的などに該当する反則行為を意図的にやった者は大会資格を剥奪する。

四、 試合決着判定は、KO、TKO、判定、引き分けとし、時間切れ決着の際は、予選を引き分け。ベスト8以降は黒子による判定決着とする。

五、 試合時間は予選を十五分、ベスト8以降を三十分、そして決勝戦を時間無制限とする。

六、 試合ルールは黒子あるいはプレイヤー達の意志により決定する。

「なお、大会期間中の試合による怪我の負担は大会本部により責任を持たせていただきます、が……期間中および試合による死亡に関しては一切の責任は負いませんので、ご注意ください。それでは、この内容にて本大会開催を宣言いたします！」

開催宣言に熱狂的なプレイヤーもしくはファンによる大歓声が響く。

まさしく一年に一回。真夏の祭典であるリトルウオーズによる光景である。良い意味でも、悪い意味でもお祭り騒ぎ。

そんな歓声に、ワタルの鼓動は大きく激しく、胸打っている。興奮している。

「す、凄いな。これがリトルウオーズの熱気か……」

「これには、さすがのかなも吞まれちゃうかな」

ヒロキとかなが、その場で思いつく言葉を口にする。しかし思わず言葉が出てしまう迫力。

「へっ！ 面白え、オレサマが待ち望んだ舞台だぜ！」

ワタルはとにかく興奮している。自分自身でも興奮が抑えられないぐらいに。

その大歓声は開会宣言後もなお続いていた。

そんな大歓声の場から少し離れた位置に、その男はいた。

日焼けした褐色の肌に、鍛え抜かれた肉体。髪はオールバックにまとめ、何よりその男を存在させているのは、まごう事なき王者の風格。

三年連続優勝チーム「T・O・テイカー」の主将<sup>ドン</sup>、絶対王者といわれる松原<sup>まっはらかなめ</sup>要である。

「やあ、松原」

「……三崎か？」

王者に話しかけたのは、天才三崎。熱狂的なファンならば、この二人のツーショットというだけで金が取れる組み合わせである。

王者の風格と天才のオーラ。素人でもこの二人には何かが見える程の威圧感があるのは確かである。

「驚いたね、王者である君がこんな隅っこにいるなんてね」

「ふん……なに、俺はうるさいのが嫌いだな」

言葉通り、松原の顔には鬱陶しさからくる苛立ちがある。

対して、三崎はこういう場には慣れているというべきか、居心地良さそうな表情を浮かべる。

「今年はどうやら……ライジングズの二之宮は参加しないらしい。

最も彼は去年の段階で高校三年生、普通ならば卒業しているはずの人間だけだね」

「そうか、二之宮は出ないのか……それはそれで残念ではあるな」

「……今年は、僕達が優勝の座をいただく。君に二度と優勝の二文字は飾らせはしない！」

伝えるべき事と、自分の感情を松原にぶつけ、三崎は人混みの中へと消えていく。

そんな天才の背中を冷静に見つめる。

「……ふっ。お前には無理だ」

その背中に王者はただ一つの言葉を投げかける。

七月十七日の午前十一時　いよいよ役者の揃った今年度のリトルウォーズの火ぶたが切って落とされた。

## 予選トーナメント開催！

遂に今年度の、リトルウォーズ開幕の言葉が発せられた。

リトルウォーズは今年で二十三回目の大会となる。第二十回の大会から王者の歴史に名を連ねるのは、T、O、テイカーの名。どこ

のチームも王者チームの優勝阻止を目論んでいるのは当然である。ワタル達のチーム「マックスハート」も今年の歴史に名を刻もうとするチームの一つ。

「ヒロキ、ちよっと」

ワタルはヒロキに声をかける。どうやら予選第一回戦の組み合わせを決めるとの事で、チームリーダーが集まるらしい。

人の多さも凄いものがある。待ち合わせ場所を決める為に、ワタル達は話し合う。

結果的に少し大きめの木が、近場にあるという事で、そこで待ち合わせる事にしてワタルは大会本部へと足を運ぶ。

大会本部にいるのはチームリーダーだけであり、ついさっきまでいた場所よりは落ちついている。

しかし、リーダーだけの割に目測で数百はいる。と、いう事は最低でも数百のチームが参加しているわけである。

まずは大会本部の役員黒子から、用紙を一枚受け取る。AブロックとBブロックと書かれた紙だ。

「まず、今大会の出場者数は例年に比べ、非常に多い。なので、今大会はブロック分けを行い予選トーナメントを開催します」

確かに今年の参加者数は多いとワタルは感じる。子供の頃に見ていた大会に比べ、人数は倍以上に増えている。ある意味では、それだけこのジャンルを注目する人が増えたという事にもなる。

「渡された紙に「A」と「B」の文字があると思います。赤丸で印が付けられているのが参加するブロックのグループになります」

ワタルの用紙にはBに赤丸がついている。つまりワタル率いるマックスハートは、予選トーナメントにおいてBブロックでの出場となるらしい。

用紙で自分のブロックを確認していると、大きな歓声がわき起る。

なんの騒ぎかと確認する為に、近場にいる人に声をかけてみる。

「なんだ、どうしたんだ？」

「あ、ああ。どうやら王者チームと三崎のチームのブロックは分かれたらしいよ」

「どっちがどっちなんだ？」

「王者チームがAで、三崎のチームがBらしい」

三崎 あん天才がいるFエンゼル。

と、いう事は、大会ルール次第によってはFエンゼルとの戦いは避けて通れない。

トーナメントの組み合わせにおいては、予選トーナメント中にも当たる可能性がある。

「お静かに！ 係の者に従い、速やかにブロックごとに移動を開始してください！」

黒子の指示に従い、移動を開始する。Bブロックは大会本部から出て、すぐのところにある体育館らしき場所へと誘導される。

体育館の中は、空調がない。ほとんどサウナ状態であり、一瞬で汗がしたたり落ちる。周りを見るとほとんどの人間が汗まみれである。

「やあ、君も同じブロックかい？」

声のする方を見ると、三崎が立っている。周りが汗まみれだというのに、一人だけやけに涼しい顔をしている。

そんな涼しい顔が、暑さで頭に血が上っているワタルにとっては、少しの苛立ちを感じさせる。

「残念だったな。王者チームと、さっさと対戦できなくてよ」

「なあに、このブロックトーナメントを勝てば良いだけの話さ」

さすがは、優勝候補チームというところか。やはりどこか余裕がある。

決して自惚れではない、絶対の自信があるのだろう。

「恐らくけど、ブロック分けしてさらに分けられると思うよ」

「どういう意味だ？」

「Bの1とか2とかで分けられるかもしれない、って事さ。実際に前大会にもその手法が使われたしね」

三崎の予想は正しかった。ブロック分けしてさらに分ける。そして更に分ける。

つまりはBの1と分けられたでしょう。そのBの1の1ブロック。そこが予選トーナメントらしい。

そこからAとBを合わせたベスト8戦、さらに選別されたベスト4による総当たりリーグ戦。最後にリーグ戦にて上位二チームによる決勝戦へと進むのである。

「ふむ……どうやら僕はB2の2ブロックらしい。君は？」

「オレサマはB1の1だな」

「ふーん。どうやら君との戦いはしばらく無さそうだな」

相変わらず、自分の言う事だけ言って、三崎は人混みの中へと消えていく。

とりあえず優勝候補チームと、いきなり当たらないという事は良い事である。早い段階に叩けるのなら叩いた方が良いが、それは向こうとて同じ事だ。

「それでは、B1ブロックの方は、一回戦目の相手を決めますので集まってください」

このブロックを担当する黒子が呼びかける。恐らくは先ほどの黒子とは違う人物であろう。顔はひらひらした布で隠されている為に見えず、どの黒子も根本的に声が似ている為に判別が難しい。

声から察するに今のところ見た黒子は、全て男であろうと推測できる。もしかしたら全員同一人物かとも思えるが、複数人が一堂に介しているところを見ると、その説はない。

あるいは全員、兄弟なのか。もしくはクローン人間なのか。いずれにしても黒子の正体は謎に包まれている。

何の変哲もない、木箱の中身を順番に取っていくように指示される。

その木箱の中には紙が入っていて、この紙にも番号が書いてある。ワタルの引いた紙の番号は「B1・1・4」と書かれている。

トーナメントの法則からいくと「B1・1・3」のチームが恐らく初戦の相手になるのだろう。

次々にチーム名が書かれていく掲示板を見ると、対戦相手の名前は既に書いてあった。

リバティーズ　それが、マックスハート初戦の相手になる。

ワタルは衝動にかられて、リバティーズのリーダーを探す。が、顔もわからない相手を探す事に意味はない事に気づく。対戦時になれば嫌でも顔を合わせるのだ。

十分程すると、全てのチームの配置が終わったようである。ワタルのいるブロックにはパッと見て、強いチームはいない。「いない」というのは、いわゆる前大会などで注目すべきチームがいらないという事である。

「B1およびB2の1ブロックにいるチームのみなさんに連絡をします。日程の関係により、該当するチームの方は明日よりトーナメントを開始します。場所の詳細につきましては速達でご自宅の方へ送らせていただきます」

どうやらワタル達は、明日から試合の開始みたいだ。これで学校の方は二日の欠席が決まる。

いずれにしても、ルール説明もトーナメント表も決まった。ここにいる理由はないと判断して、ワタルはヒロキ達との待ち合わせ場所へと向かう。

外に出ると、風がある分涼しさを感じる。密閉された体育館より

はマシとも思える。

この数分の間に、大分人が減ったらしく、ヒロキ達を見つけるのは容易だった。

「あ、兄貴。どうだった？」

「いや、なんとも……明日から試合開始らしい」

「明日から!？」

驚くのも無理はない。実際の予想も、もうちょっと間をおいてから、やるものだと思っていたからだ。

「それで、どこでやるのかな？」

「オレサマの予想だが、戦いの場は関東方面のどこかだろうな」

「どうして？」

「AブロックとかBブロックとかで分けられたんだが、関西方面のチームはAブロックで、関東方面のチームはBブロックに意図的に集められてる」

これは長年見てきた、ワタルの予想である。

事実、王者チームは関西のチームである。ワタルや三崎のチームは関東にある。勿論、これはただの予想であり、本当にそうとも限らない。

だがそうしなければ、例えば関西方面のチームが関東の会場で戦う場合など、移動の方法が非常に大変という事を考えると、当然の処置なのかもしれない。

「それで会場とかって細かい事は、多分オレサマの家に送られてくるみたいだ。だから、連絡の為に電話番号とか教えておいてくれよ」  
ヒロキの番号は既に知っているので、かなの番号だけを教えてもらう。

そして三人は、長い帰宅の路へと向かうのだった。ここからの移動料金は全て大会本部が負担してくれるのが、良いところなのかもしれない。



その夜　速達は届く。

時間は、午後十三時。場所は東京後楽館（とうきょうごらくかん）の近場にある、大会専用の広場である。

ワタル達の住んでいる場所からは、そう遠くはない。速達の内容を伝える為に、ヒロキとかなに連絡をする。

ついに、第二十三回リトルウォーズ　予選トーナメントの開催である。

太陽の下に星は落ちる！

> i10406 — 1198 <

七月十八日。東京後楽館、近くの指定会場。

その会場は、ワタル達の練習に使っている公園に近い雰囲気を持っている。

つまり、何もない。障害物がない為に戦いやすいという事にもなる。この見通しならば、見物人にも見やすいだろう。

今日も夏の太陽が照らす。何もない会場には日陰すらも無い為に、太陽の光は直射で受ける。

男には良いが、女の子には配慮が足りない。だがワタルの記憶だと過去、女の子のリトルウォーズ参戦は無いとは言えないが少ないのも確かである。事実、男の出場者が大半を占める割合だろう。

「はあ……これじゃ日焼け止め塗っても、意味ないかな」

直射日光の降り注ぐ会場に、一人愚痴を言う、かな。

もう既に予選試合は始まっているのだが、ワタル達の試合はこの日の第二試合のようである。

ワタル達は、第一試合の様子を見ている。恐らくはワタル達だけではなく、この後に試合を控えているチームは会場でみんな見ている、と思われる。

この会場には見物人が少ない。実際、ワタル達の他に見物人はちらほらといるぐらいである。その気になれば数えられるぐらいの人数しかいない。

理由は簡単である。同時刻に、この会場とは違う第二会場にて優勝候補チーム「Fエンゼル」の試合があるからである。名もないチームの試合を見るよりも、優勝候補チームの試合を見た方が勉強にもなる。

「ちっ、なんだってんだよ！」

「いきなりどうしたのさ、兄貴？」

ヒロキの心配も最もである。いきなり機嫌が悪かったら一緒にいる方は、気持ちの良いものではない。

「どいつもこいつも、エンゼルエンゼルってよ！」

「ああ、その事が」

ワタルの気持ちもわかる。いくら無名のチームだからといって、扱いがこうも違えば多少なりとも、良い気持ちはしない。

それは普段から穏和なヒロキでも、思えた事である。だが、ヒロキはどこか仕方がないと納得する。

「勝負あり！」

十五分程して、第一試合が終了する。

戦いは「ブルース」と「夏の男たち！」のチームが戦い、ブルースが勝ったようだ。相当な接戦だったのか、両チーム共ボロボロである。

「って事は、オレサマ達の相手はブルースだな！」

「兄貴、もう勝った気での？」

「当たり前だ！ オレサマは今年の優勝者だぜ！」

ワタルにとって予選トーナメントは眼中にない。あくまで優勝のみである。

「とりあえず、早く黒子さんとこ行こうよ」

かなに急かされ、二人は見物席からバトルリングへと向かう。

バトルリングといっても、慣らされた砂地である。足が砂によって滑らない程度に、整備されている。

「あれが、リバイースか……」

ワタル達が向かう場所には既にリバイースのメンバーが集う。ワタル達と同じく三人。

黒子を中心に、ワタル達とリバイースは向かい合う形となる。

「どうも、リバイースリーダーの江藤一えとうはじめです」

「マックスハートの響ワタル。優勝する男だ」

「ふふふ、面白い人ですね」

挨拶を済まし、お互いに握手をする。これといった威圧感らしきものはない。

ワタルにとつては、メンバー全員がなよなよした優男に感じられる。近いといえばヒロキに近い印象を受ける。

「試合方法は、一試合目と同じく1on1ので良いかな？」

「え、1on1だったのか？」

「あれ、見てなかったの？」

「いや見てた。まあ、それで良い」

試合内容は1on1である。リトルウォーズの試合形式の中で、最もポピュラーな形式である。

1on1の名の通り、先鋒や中堅それに大将戦といった、個別の戦いが行われる。総当たり戦なども形式によってはありえるが、主に行われるのは一戦終了の形式である。

つまりは三対三の戦いなら、先に二勝した方の勝ちになる。もしも一勝一敗一分けなどになった際は、リーダー同士によるサドンデス戦となる。

試合形式を審判の黒子に伝える。あとは先鋒、中堅、大将の順番を決めるだけである。

「まあ、大将はオレサマだな！」

「意義はないかな」

「うん、大将は兄貴だ」

大将はあつという間に決まる。あとは先鋒と中堅である。

特にワタル達にとつてこの試合の先鋒というのは、まさに先鋒であり一番手である。この一戦、いやこれからの戦いを占う大事な一戦目といっても過言ではない。

「……。よしっ、先鋒はかなっぺ！ 行ってくれないか？」

「ふっふーん。かなに、まっかせなっさーい！」

めずらしくワタルは頭を使った。かなの強さはワタル自身が体験したものだ。この第一戦の時点でかなが負けるはずがない、とワタルは判断する。

ヒロキの先鋒も考えてはいた。ヒロキの先鋒としての緊張感というものを考えると、かなに先鋒で勝ってもらって勢いをつけて中堅戦で終わらせてほしいとふんでいた。

こうして先鋒はかな、中堅ヒロキ、大将ワタルとして順番が決まる。

そして、その決めた順番を両チーム共、審判黒子に伝える。

「それではこれよりBブロック第二試合。リバティーズ対マックスハートの試合を開始します。それでは、先鋒戦　西岡住吉と相沢にしおかすみよしかなの試合を行います！」

黒子の合図で、かなはリング中心へと移動する。戦いのないメンバーは、少し離れた位置に移動するように指示される。

相手の構えを見る限りでは、武器は使わないようだ。恐らくはボクシングか　ステップを踏む機敏さからの予測である。動きを見た感じでは、なかなか強そうな相手である。

「それでは、先鋒戦　始め！」

黒子による試合開始の合図が切られる。

相手の西岡はボクシングのスタンダード。試合開始でそれは確信へと変わる。

対するかなは、初っぱなからの星蹴拳。相変わらず手はフリーにして、右足を軸に左足で細かなステップを踏む構え。

「なんだ、お前。素人か？　そんな構えなんて見た事ないぜ」

西岡の言葉に返す言葉はない。かなは、それほどに集中している。ワタルからすれば、意外な事である。かな程の実力があれば、間違はなく目の前の敵を倒すのは造作もない事のはずだ。

「返事なしだよ、じゃあ良いき。こっちから行かせてもらうぜ！」

西岡は、無言のかなに対して素早いステップで間を詰める。電光石火とはいかないまでも、素人にこの速度を見せたら電光石火と感じられるぐらいの早さ。

早いのはステップだけではない。ボクサーらしくパンチの一発が早い。むしろステップよりもパンチの方が早い。

「シツシツシツ！」

ボクサーらしいかけ声と共に放たれる無数の拳。手がフリーの星蹴拳では当たれば致命傷。

それどころか屈強な男だったとしても、ボクサーの拳などをまともに受けたら危ない。かなは拳の一発一発を丁寧に避けていく。

相手がボクサーでも、かなにはこれぐらい避けられるはずである。相手が格闘家であっても、かなも格闘家である。打つ西岡と、避けるかなの構図は開始一分ほど続く。

「どうしたあ、避けてばっかじゃ試合には勝てないぜ！」

一分間も高速の拳を、出し続けても息が上がらないところは、さすがボクサーというべきところか。

ペース的には西岡が優勢。攻めも守りも足技の星蹴拳では間合いが足りない。西岡はそれを知ってか知らずか、かなに反撃の隙を与えないように攻めていく。

「かなっぺ！ 星蹴拳にこだわるな、お前なら他の足技もできるはずだろ！？」

かなの勝利を信じている。しかし押され続けている展開に我慢が耐えずに、ワタルは叫ぶ。

事実、かなが蹴り技の天才と言われるように、星蹴拳の他の戦法もできる。だが、かなはそれをしない。

高速の拳の弾幕。これの前では、一瞬の溜めを必要とする星蹴拳も、その場で軸足を固定してしまう連星撃もできないのは明確である。

大きく後方へ飛んで間合いを離そうにも、西岡の前進速度は恐らくかなを捉える。

「君、強いけどそれだけだね」

かなは拳を避けながら、試合開始初の言葉が出る。その口調は押されながらも冷静そのもの。

「攻められてるくせに偉そうな事を！」

かなの安い挑発に血がのぼったのか、高速の拳がわずかだが大振

りになる。

その一瞬の大振りの隙をかな程のプレイヤーが見逃すはずは  
かなは間を離すでもなく、反撃に移るわけでもなく、ただ空高く  
飛び上がる。

蹴り技を使うだけあって、脚力が常人よりもあるのだろう。かな  
は空を飛んだかのように跳躍する。

「バカが、どんなに高く飛ばうと、それじゃパンチの餌食だぜ！」  
これは事実だ。どんな人間でも着地の際に硬直が起きる。それは  
例えば、身体能力に優れるワタルでさえも例外ではない。

まして、空高く飛び上がったかなの硬直は予想もつかない。そん  
なおいしいチャンスを、西岡が見逃すわけがない。

「ふうう……星蹴拳　落星撃！」  
らくせいげき

静かな呼吸と共に繰り出される無数の蹴り。連星撃のようにも見  
えるが違う。

落星とあるように、星が落ちていくかのような無数の蹴り。空中  
で真下に落とす連星撃　それが落星撃。

着地際を狙おうとしていた西岡は、避ける事もできない。空から  
落ちる無数の星を避ける事が、できるわけないのだ。

無論、西岡の拳が一撃必殺の一撃ならば、かなの蹴りも一撃必殺。  
直撃を受けた西岡は、そのまま倒れ黒子からのTKO宣言が出され  
る。

その常識はずれの技を見せられ、その戦いを見ていた人達は絶句  
する。

真夏の太陽の下　星が落ちた。

## ヒロキ奮戦！

会場に一時の静寂。そして大歓声が巻き起こる。冷めた観客の態度は、一気に熱く上昇する。

先鋒戦　　かなが、西岡を倒しマックスハートに白星が飾られる。  
「つたく、危ねえ戦い方しやがって！」

「大事な先鋒戦でしょ？　インパクトは大事と思ってね」  
かなは、ワタルの考え方を見抜いている。初戦の先鋒戦だからこそ、インパクトが必要。

マックスハートというチームの存在を、観客に示すには効果抜群の魅せ方。

その効果は観客だけではなく、相手チームにも及ぼす。先鋒戦開始まで、自信に満ちていたリバイテーズの面々も、かなの落星撃の前に啞然とする。

精神的な奇襲攻撃は、まさしく大成功といったところであろう。そして、これがワタルの狙い。中堅のヒロキは間違いなく緊張でいつもの動きができないはず。それは長い付き合いのワタルからすれば、手にとるようにわかる心理。

この奇襲攻撃で相手も、気負っている。単純計算すればこれで五分五分であり、ヒロキに勝機ができる。

勿論、ワタルはヒロキが負けるなんて事は思っていない。むしろ気負っているのは、ワタルの方なのかもしれない。

「さて、次の中堅戦はヒロキだ！　気張っていこうぜ！」

「うん、兄貴！」

ヒロキは気持ちの良い返事をする。思いの外、緊張は見られない。

「それでは、中堅戦　リバイテーズかねだてつお金田徹雄と、マックスハート  
川崎ヒロキの試合を行います！」

木刀を握りしめ、ワタルに似せた青い気合ハチマキを、額に巻き付ける。呼吸を整えて、神経を集中させていく。



いざ試合が始まるとなると、やはり緊張する。鼓動が徐々に高鳴っていくのがわかる。

バトルリング中央に行くと、既にリバティーズの金田はいる。かなの技を見た後の為か、それなりに動きが堅い。お互いに緊張しているのだ。

「中堅戦　始め！」

黒子の合図で、中堅戦が開始される。先鋒戦が開始された時に、適当に見ていた見物客も、かなの効果で今回は最初から視線が釘付けである。

良い傾向だが、ワタルはそこに「嫌な予感」を感じる。

ヒロキは、木刀一本の我流中段。

金田はいわゆる喧嘩スタイルなのか、こちらも我流。やはり予選始めの方では、そこまでの手練れはいないようにも見える。いわゆる素人に当たる確率が高い。

当然の話だが、構えがめちゃくちゃ　いわゆる我流だからと「弱い」「下手」という事は当てはまらない。予選第一回戦だからと思いいこみで、戦ってはいけない。現に、かなの相手の西岡は一撃で負けはしたものの、相当な手練れだった。

「行くぞ、オラ！」

金田が先手必勝とばかりに、ヒロキに向かい走る。先ほどの西岡と違い、格闘家ならではのステップはない。

大振りの拳を、木刀を盾にするようにして捌く。捌きながら間を離すヒロキ。

（相手の武器は、拳だ。<sup>エモ</sup>間合い（リーチ）は僕が有利だ！）

ヒロキは自分の武器と、相手の武器による適正距離を把握する。リーチを活かして戦うのも戦術では、必要不可欠な事である。

木刀で距離を計りながら、一定の間合いをキープする。金田の拳は西岡の拳と違い、大振りで遅い。遅いというには少し違うが、喧嘩の拳とボクサーの拳を比較しての事。

金田の大振りを見計らい、そこに一撃を与えていく。切っ先を当

てている為に、致命的なダメージにはならないが、確実に体力を奪っていく。

「ヒロキ君、良い攻め方だね」

「だろうな。ああいった戦い方はヒロキの性分だ」

ワタルと、かなから見ててもヒロキの戦い方は安定して見える。派手さは無いが、堅実でセオリー的である。

「ちい……この野郎がつ！」

ちまちまと攻める戦い方に苛立ちを感じたのか、金田は攻撃を受ける事も気にせず、拳を振る。

「……ぐっ！」

その大振りの拳が、ヒロキの顔面を捉える。

衝撃で大きく後方へとよろける。拳自体はなかなか重いらしい。

「ふん。ちまちまとウザってえんだよ！」

「くそう……！」

今の一撃で足にきている。決してヒロキが打たれ弱いわけでもない。意外にも金田の拳の威力が高い。

ワタルからすれば優男に見えたが、ヒロキにとっては金田も屈強な男に他ならない。

「この中堅戦で、負けたら俺達は終わりなんだ。さつさと終わらせてやるぜ！」

金田の拳が、ヒロキに襲いかかる。先程のただの大振りとは違い、気合も乗り早さを増したようにも見える。

盾にする木刀越しに、拳の重さが伝わる。この拳が直撃すれば、間違いなくKOされるだろう。

「おらあ！」

攻撃の重さに耐えられずに、吹き飛ばされるヒロキ。

見ると、審判黒子は試合を止めようとも見える。予選第一回戦クラスで大怪我でもされては困るからだ。無理をして大怪我をさせない為の配慮ともみえる。

間違いなく、このまま金田の拳に押され続ければTKOは必至だ

ろっ。

「よしっ……」

ヒロキは攻めに転ずる決意をする。手数には手数で相殺する構え。  
「必殺……みだれうち！」

金田に走り込みながら、無数の剣線を繰り出す。かなとの練習試合にも見せた、必殺のみだれうちである。

「な、なんだと！？」

あまりの剣線の多さに身を固め、防御態勢になる金田。いや、防御態勢でなければ金田は防げない。

木刀が体を打つ音が、まるで機関銃のよう<sup>マシンガン</sup>に聞こえる程の手数。一瞬でもガードを外せば、下手したら致命打をもらいかねない。

本来のみだれうちの、効力はこうなるはずだった。かなのように、迎撃できる程の能力は希である。

「ってんだよ……コラ！」

みだれうちを耐える事に、業を煮やした金田はやぶれかぶれの一撃をヒロキに向ける。その拳は運良くも無数の剣線に妨げられる事もなく、ヒロキの顔面へと直撃する。

拳をもらった瞬間に、ヒロキの視界は真っ黒になる。一発で意識を断ち切られてしまった。

「そこまで！ 中堅戦はリバイースの金田の勝利とする！」

黒子による勝利宣言。それはマックスハートのもではなく、リバイースのものだった。

奮戦の割の呆気なさ。ある意味では、実力が拮抗していたからこそその結果であろう。似たようなパワーバランスの相手との戦いは、極端に長引くか、極端に呆気なく終わるかの、どちらかになるパターンが多い。

「おい、ヒロキ！」

「ヒロキくん！」

結局、ヒロキが目覚めたのは三十分後の事だった。

黒子の判断により試合は一時中断。大将戦は予定よりも遅い開始時間となる。

ワタルとかなに、たたき起こされてヒロキの意識が戻る。余程のパンチをもらったのか、わずか三十分でヒロキの顔面左側は大きく腫れ上がっている。

「そこまで腫れちまうと、左側の視界は見えないだろ？」

「うん……見えないね」

負けた事への悔しさか、あるいはパンチをもらったショックか。ヒロキの声には元気がない。

「まあ、負けちまったもんはしょうがねえさ！」

「でも、兄貴。僕が緊張しないようにした作戦……だったんだろ？」

「……バーカ。良いからあとはオレサマに任せとけてんだよ」  
落ち込むヒロキに、ワタルなりの励ましを送る。

赤い気合ハチマキを頭に巻き付け、木刀一本を握りしめる。バトルリングへ向かうワタルの背中を、ヒロキはただ見送る。

「ヒロキ！ オレサマは負けねえさ、安心してそこで待ってる！」

それだけを言い残し、黒子とリバイーズリーダーの江藤が待つ中央へと歩む。

西岡と金田が、拳主体の戦い方の為に江藤も同じタイプかとワタルは思っていたが、木刀を持っているところを見ると剣術主体。

「待たせたな！」

「いや。仲間の様子は大丈夫かい？」

「あいつは、あんなもんでヘコたれるような奴じゃねえさ」

敵のチームメンバーの事を気遣うあたりに、この江藤という男の優しさを感じる。

リトルウォーズの参加者の多くは、いわゆる「不良」連中が参加する事も多い。いわゆる「ボコして終了」という人種が多く、大体の人間は相手チームの心配などしない。

最も、この江藤がそういった意味で希な人種というわけでもない。近年の参加者はマナーやモラルを重んじる人も増えてきている。

「それではこれより、リバティーズ対マックスハートの大將戦。江藤一と響ワタルの試合を行います！」

黒子により、最終戦という旨を高らかに宣言される。

「悔いの無い一戦にしよう、響君」

「当たり前だ！ オサレマ達はこんな一回戦でやられるわけにはいかねえからな！」

お互いの木刀を高く掲げ、それを十字に合わせる。木と木が当たる乾いた音が、辺りに響く。

「それでは……大將戦。始め！」

リバティーズ対マックスハート。大將戦がついに始まる。

響ワタル 念願のリトルウォーズ初試合である。

## 江藤の罠！

黒子の合図により、リバティーズ対マックスハートの大將戦が始まる。

相手は大将であり、リーダーの江藤一。木刀一刀にして構えは手本のような中段の構え。中段は構えの中でも最もポピュラーな構えである。

一回戦の相手だからと侮ってはいけない。現に目の前の江藤からは凄まじいぐらいの気迫を感じる。

「君たちもそうだけど……僕たちも負けられない。お互いに大將戦を落としたらお終いだからね」

「そうだな」

「全力でいかせてもらうよ。悪いけど君たちを、踏み台にさせていただく！」

一氣に間合いを詰める江藤。その突進力は凄まじいものがあり、一瞬でワタルの懷に飛び込む。

逆にいうなら、ワタルが簡単に懷を許す程の速度。見た目や口調に騙されたが、江藤は強い。

「はあっ！」

気合と共に、剣線を横に走らせる。その剣線は鋭く、ナイフのような切れ味を連想させる。木刀のはずなのに、真剣で切られたような錯覚を起こさせる。

しかしワタルも、その剣線を上手くさばいてみせる。並の相手なら初撃<sup>これ</sup>でやられている。

「ふう……とんだ伏兵だぜ。一回戦からアンタみたいなのと当たるとはさ」

「それは僕も同じ事さ。最初の横薙ぎで完全に仕留めるつもりだったからね」

柔らかい物腰とは裏腹に、その気質は非常に攻撃的。剣線もそう

だが、動き、気質、どれをとってもナイフである。

ワタルも木刀を構え直し、江藤の攻撃に備える。若干だが速度は江藤が上。下手に先手を取ろうとすると、逆に手痛いしっぺ返しをもらう事になりかねない。

「行くよ！」

言葉と同時に再び一足飛びで、一気に間合いを詰めてくる。

しかし、ワタルもその一足飛びに反応する。速度は負けているが、反応速度ならワタルに分がある。江藤の剣線を再び捌き、反撃する。江藤の肩口を狙うように、右袈裟けさを狙う。読んでいたかのように、その一撃を江藤はいなす。その動きは、まるで木の葉のよう。実戦と経験に裏打ちされた動き。

避けた江藤に反撃をさせず、ワタルは手数で押していく。その攻撃のほとんどを木刀を盾にして、華麗に捌いていく。

「コノヤロー……」

ほとんど空振りに近い事をやった為か、ワタルの呼吸が少し乱れつつある。いつも素振りもして鍛えているワタルが、この程度の戦いで呼吸の乱れが生じるなどあり得ない事である。

「あそこまで動かしたのに　その程度の乱れか。なかなか鍛えているね」

「……何!？」

「普段の君ならば、この程度の攻防で息が乱れるなんて事は無いのだろうね。しかし君の呼吸が著しく乱れたのには理由わけがある」

汗を流し息があがっているワタルに対して、一人だけ余裕の表情を浮かべる江藤。

ワタルはその態度を「とある男」に連想してしまい腹が立つ。

「まず一つ目。君の運動能力には正直な所、感服する。僕が今まで試合をしてきた中でもピカイチの能力だ。だが君には絶対的な『経験』が足りない」

「経……験……だと」

「そつだ。君はこの舞台上で緊張しているんだ。緊張は何よりも体力

を消耗させるからね」

これは事実である。確かにワタルはリトルウォーズに参加できた事により、嬉しさもあったがそれ以上に緊張感が支配している。

いつもの練習試合でみせるような、柔軟な動きが緊張によって固い動きになってしまっている。

この事がワタルの体力を消耗させた一つの要員。

「へん！ 緊張なんてしてるかってんだ！」

ワタルは更に加速する。その速度は第一撃の動きを大きく超えている。

そして、強烈な攻撃を江藤に向ける。その攻撃は一撃目同様にいなされる。

「……！？」

「気づいたかい。この感覚に？」

ワタルの攻撃は江藤から大きくそれている。ただの空振りではなかった。

「僕の得意技の一つでね 相手の攻撃を必要以上に大きく空振りさせる」

これが江藤の技。初舞台による緊張と、江藤のいなすテクニクにより、ワタルはいつも以上の体力の消耗をさせられている。

「そして弱った相手は僕の攻撃を避ける事はできない！」

再び、ナイフのような斬撃がワタルを襲う。

ワタルはこれを紙一重で回避する。しかしその斬撃を完璧に避けるに至らず、頬をかすめ赤い血が滲む。

「……まいっ たな」

体の重さを感じている。思っている以上に体力の消耗が激しく、ワタル自身も焦りが生まれてくる。

「悪いね。君たちには一回戦で消えてもらっよ」

獲物を射程内に捕らえた江藤の攻撃が始まる。練習により、何発も打ってきた斬撃は消耗したワタルには、避けるのも酷なものである。



ワタルは避ける足が動かずに、木刀を盾にして江藤の攻撃を耐える。

木刀を盾にしているとはいえ、鋭く重いその斬撃はさらにワタルの体力を奪っていく。

「くっそ……!!」

かろうじて反撃の一撃を振るっても、わかつていたかのように攻撃をいなされる。

ただでさえ大振りなワタルの攻撃が、さらに大振りの空振りにされる。おまけに夏の太陽により精神までも消耗させられていく。

「タフな人だ。よくもここまで耐えられる……」

今まで涼しい顔をしていた江藤にも、若干の疲労が見て取れる。

ワタルは反撃の糸口も見つけられずに、ただ江藤の攻撃に耐えている。

「どうした……そんな程度の攻撃じゃ、オレサマは倒れないぜ」

ワタルの顔、体にはまるでミミズ腫れのように赤い線が浮き出ている。それだけ江藤の攻撃はスナップの効いた攻撃である。

「はぁ……はぁ……。なんなんだ、そのタフさは。ただ打たれ強いだけでは説明がつかない……」

「当たり前だろうが！」

「……何？」

「オレサマ達は優勝するんだ。こんな所で負けられるわけねえだろうが！」

ワタルという人間を支えているのは、類い希なる身体能力ではない。その絶対不動の精神力である。

「そして優勝する為には……マックスハートだ!!」全力の心

愛用の木刀を、まるで大剣でも担ぐかのように構える。下半身も大股に開き、重心を完全に地面に伝える。

体中はボロボロだが、防御に回ってただ耐えていた分の体力を回復させる。対して江藤は今までの攻め疲れから、息を荒くさせ大量の汗をかいている。形勢は逆転する。

「兄貴……『あれ』をやる気だ」

「え……。あれって？」

ヒロキはわかつていいる。ヒロキにも必殺の「みだれうち」があるように、ワタルにも必殺技がある。

かなとの、戦いにも見せる事のなかった大技。

「一回戦突破はオレサマ達だ！ 行くぞ、必殺ぶったぎり！」  
持てる全能力をその攻撃に乘せて、ワタルは江藤に向かう。

## 必殺ぶったぎり！

### 必殺技・ぶったぎり！

その一言を発して、ワタルは力強く山なりに弧を描くように飛ぶ。そのスピードは遅い。遅いといっても、並の相手には速く感じる勢いである。だが江藤に限ってはそれにあてはまらない。

江藤の程のプレイヤーからすればワタルのモーションを見ながら、いなすもよし、カウンターをするもよしだ。肩に担いだ愛用の木刀は、空中においても「タメ」の姿勢を崩さない。

「響君。それが必殺技だつて！？ パワーはありそうだが……この勝負、僕たちがいたなくよ！」

やはり江藤には、ワタルのモーションが読めている。事実、ワタルの動きを見ながら捌いてから、カウンターをあびせようとしているのがわかる。

対するワタルは、そんな事も構いもせずに直進する。いや、どっちにしても大きなモーションの空中姿勢では今更やめる事もできない。

時間にすれば二秒もないぐらいの時間だろう。しかし、時間が止まったかのように見えたその読み合いにも終わりが来た。

「おおおおおおお！！」

「っ……………！！」

突然、叫びだしたワタルに呼応するかのように、江藤も構える。

肩に担いだ木刀を両手で持ち、力の限り相手に叩きつける。対する江藤は、今までの剣の捌きのように、ワタルの攻撃を受ける。

そして、ワタルと江藤の木刀が合わさった瞬間だった。

「……………！？」

江藤の木刀を持つ右手に、まるでハンマーで叩かれたような重圧がかかる。咄嗟に、捌ききるのとは不可能と判断し、剣の腹を盾にして両手で防御の姿勢をとる。

「なっ……!!」

両手で受けたにもかかわらず、江藤にその重さを耐える事ができない。

いや、正確には耐えられないのは、その江藤の剣。

「残念だったな江藤。俺の「ぶったぎり！」はヒロキいわく……」

「……武器破壊剣!!」

ワタルの言葉に続くように、ヒロキは言葉が出ていた。勿論、ヒロキは合わせる気も無かったはずだ。

木刀の耐久力を無視するかのように、まるでオモチャの剣が壊れたように、音を立てて江藤の剣が破壊される。

そして、その勢いのままに着地する。着地の衝撃が、遠くにいる見物人にも伝わるかのような迫力。

かなの落星撃が披露された時のように、会場には一時の静寂、次には大歓声が巻き起こる。

「江藤君、君が続けると言うのなら、私は止めはしないがどうするかね？」

黒子が武器を失った江藤に、続行の意志を聞く。

「いえ……剣を失った時点で……僕の、負けです」

「わかった。二対一にてマックスハートの勝利とする!!」

黒子から高らかに、勝利宣言がされる。再び巻き起こる大歓声。

「響君。完敗だよ……まさかあんな大技だとはね」

「当たり前さ、何年も前から天下取るために、暖めておいた技なんだからな」

「そうか、君の意志は固いようだね。……僕たちの分もがんばってくれよ、応援する」

「サンキュな。お前らの魂も、連れて行ってやるからな!」

江藤とガッチリと握手をかわす。改めて手を握ると、江藤というプレイヤーの凄さが伝わってくる。

戦った者同士にしかわかりあえない感覚である。

江藤はそのまま、仲間達の元へと戻っていく。ワタルも後ろに待

仲間達の元へと戻る。見知った顔がそこにはあった。

「兄貴！」

「ワタル君！」

ヒロキとかなが、ワタルの、いや、マックスハートの勝利を祝福してくれる。

「バツカヤロ、これはみんなで取った勝利だぜ！」

「僕は、負けちゃったけどね」

顔を腫らしたヒロキが照れ笑いを浮かべる。そんなやりとりを見る、かなが楽しそうに笑う。

全勝とまではいかなかったが、これはみんなで掴んだ勝利である。

「さって、このまま天下一<sup>てっぺん</sup>まで行こうぜ！　まずはFエンゼルだぜ

！」

「……へっ、あの程度でFエンゼルをやるうとは……笑える話だぜ」  
ワタルの言葉を小馬鹿にするような口調で、その声は聞こえた。

「なんだと、コラ！」

その言葉に黙っているワタルではない。声がした方を向き、相手に睨みを利かせる。

そこには髪の毛を逆立たせた、非常に目つきの悪い男がいる。身長はワタルよりほんの少し高い。恐らくは175cm前後、体つきはやせ型だが、見るからに柔らかいしなやかな筋肉を身に纏っている。

木刀を持っている所を見ると、プレイヤーなのだろうがワタル達はその木刀を見て、驚愕する。その木刀は、男の身長と同じかあるいは長いぐらいの長刀である。

「あの程度の雑魚を倒したぐらいで、図に乗られても頭にきちまうからなあ」

「つだと、コノヤロー」

「何度でも言ってる。雑魚を倒したぐらいで調子こくなコラ」

一触即発の雰囲気、ヒロキとかな、いや、その近場にいた全員が動けないでいる。

ワタルの怒気に触れただけでも動けなくなるぐらいだが、目の前の男はそんな事も気にもとめない様子でワタルを睨み付ける。

むしろワタルの怒気よりも、この眼光の方が動きを止めさせる。まさに蛇に睨まれた蛙の状態そのままである。

「なんならここで殺ってやっても良いんだぜ？ 変な言い訳しねえならな」

「てめえ……！」

安い挑発だが、今のワタルには火に油。怒気から殺気へと変わったのが嫌でもわかる。

「どうしたよ、ビビってんのか？ 小魚が」

「上等だよ、殺ってやんよ、コノヤロー……！」

怒りの声と同時に、ワタルはその男に向かっていく。一試合終えたばかりにも関わらず、その速度は一番速い。右手に持った木刀で男を思いきりぶったぎる。

男は木刀を盾にしてワタルの攻撃を受ける。が、その受けた腕は衝撃によって大きく激しく、ブレる。

お構いなしに、手加減無し of 全力攻撃を浴びせ続けるワタル。男の腕はその攻撃を受けるたびに、吹き飛んでしまうのではないかという程、弾かれる。

「おかしい……」

「えっ!？」

「あの人の受け方受け切れてなくて、あんなに激しくブレてるんじゃないような気がするの」

かなは男の受け方に、違和感を感じている。いつものワタルならば、そんな事にも気がついていて良いはずなのである。

実際、男の腕の弾けようは異常である。普通ならばどんなに強い攻撃でも、こんなにもブレたりはしないはずである。

「おいおい、いつになったら俺を殺ってくれんだ、ええ!？」

「こっ……の!」

挑発により、さらに攻撃の度を増す。しかしその攻撃は全て直撃

には至らない。

むしろ第三者目線から見ると、ワタルの剣が攻めているのではなく、男の剣が遊んでいるように見えてしまう。

「そらよ！」

受けに回っていた男が、初めて攻撃をする。その剣線は一般的な剣のように直線的ではなく、蛇行的。文字通り蛇のような剣線である。

スナップの効いたところの話ではない。効き過ぎたその剣線は下からとも、横からともつかないような位置からワタルを襲う。

「っ……！？」

持ち前の反射神経で、突然の攻撃を間一髪で避けるワタル。

そのスナップスナッピングサウンドの効いた剣線は、ついさっきまで戦っていた江藤の比ではない。

「ほお、避けたか。頭はクズでも、運動神経だけはまあまあだな」

「……………」

その一撃で怒りが支配していた頭は吹き飛んでいた。ワタルは一瞬で目の前の蛇が、ただの蛇ではない事に気がつかされる。

「ま。俺も暇人だからな、少しは遊んでやるぜ？」

男は中腰になり、手をブラブラと揺らし始める。まるで間接でも外れているのではないかと、錯覚させるぐらいに柔らかい腕の動きである。

蛇の目が　ワタルを捉える。

## 天使と蛇と悪童と！

「まあ、死なねえ程度に遊んでやるよ」

男の腕が揺れる。その柔らかな筋肉を纏う腕は、腕というよりも二匹の蛇がそのまま体についたようにも見える。この男は筋肉だけではなく、関節そのものも柔らかい。

さらに、男の持つ長刀すらまるで蛇のようにうねっている。勿論だが錯覚だ。しかし男の剣捌きはそれ程に柔らかい。無駄が一つもない動きである。

「シャアアアアー!!」

「……!?!」

奇声をあげながら、男は斬撃を繰り出す。その斬撃速度は速く、さらに蛇のようにうねる剣線が先読みすら不可能にさせる。

運動神経と反射神経に優れるワタルが、このスナッパスナッピングソードのきく剣線を避けられず、いや、反応できずに胸部に直撃をもらう。

「おいおい、この程度も避けてくれねえとな……。まあ、もう寝ろ」  
「ぐっ……!!」

蛇がワタルに襲いかかる。柔らかな筋肉と関節、そして長刀。一度受けに回ってしまえば、蛇の毒により相手は終わる。

まるでボクシングのフリッカー・ジャブのような変則的な軌道を描き、襲いかかるその剣線にワタルはなす術もない。防御も回避も許されず、ただ直撃のみを受け続ける。

江藤との一戦で消耗しているとはいえ、何もできないワタルに対して、ヒロキは信じられないといった瞳で、その光景を見つめている。何よりワタルの凄さを知っているからこそその反応である。

「あ、兄貴……、兄貴っ、何やってるんだ、攻めるんだよ、兄貴！」

心の底から出た言葉。憧れであり慕っている人間が、なす術もなく目の前でやられない放題になっているのは、その人間にとっては



苦痛そのものでしかない。

誰だって、慕う人間には輝いていてほしい。そんな心から出てきてしまった言葉が、ヒロキの口から発せられている。

「ハッハッハ、無駄だ、小僧オ!!」

「ぎっ……!!」

ヒロキの声に突き動かされてか、ワタルはスナッピングソードを奇跡的にかいくぐり、男に対してこの戦い初の反撃を試みる。

「な……めんな……よっ!!」

体も心もボロボロの状態で放つ渾身の一撃。フォームもクソもない、ただのがむしゃらな力任せの一撃。

しかし、反撃は無いとふんでいた男には、それで十分。ただの力任せの一撃は男を捉える。

「チッ!」

リーチ的にも避けるのは不可能と悟ってか、男はバックステップをしながらワタルの攻撃を、左腕でガードする。その一撃で男の体は、宙へと飛ばされる。

「馬鹿力がっ!!」

男はワタルの力加減に悪態をつく。死に体だった男のどこにそんな力があるのだろうか。

ワタルは相手が空中で停滞するわずか一瞬を、逃さないように合わせ、再び渾身の一撃を与えるべく飛び上がる。

どんな人間でも空中にあれば、動く事はできない。ワタルの攻撃はクリーンヒットする。

「あああ……あああああ!!」

残った力の全てをはき出すように、声を出す。いや、そうでもないと自分がダメージに押し潰されてしまうからだ。最後に残るものは、体力でも、理屈でもなく、ほんの一握りの根性。マックスハート

残る力を男に浴びせる。それがワタルにできる最後の攻撃。

「クッククク……、それが小魚だったんだ。甘エ!!」

ワタルの攻撃に、合わせ男は飛び上がる。

「なっ……！！？」

ワタルの木刀は空を切る。そこに男の姿はない。当然である、男はワタルの一つ上にいる。いや、飛んでいる。

上空から男のスナッピングソードが展開される。フリーカー効果の軌道の見えない弾幕が、ワタルを捉える。第三者から見れば、それは蛇の雨。スネーク・レイン

ワタルの考えは逆手に取られる。空中にあれば動く事は不可能。ただ一人をのぞいて。

「……ぐはっ！」

受け身をとる事もできずに、弾幕の直撃を受け、地面に叩きつけられるように落ちる。

地上戦も空中戦も、全てにおいて男はワタルの一つ上をいく。

「ぬっ……っぎ。まだまだア！」

ワタルは諦めない。男が空中で二段ジャンプするのなら、着地を狙う。着地の硬直ならばどんな相手にでも例外はない。重力がある限り、この法則からは逃れる事はできない。

「一本足……」

ワタルは野球のバッターフォームのような格好をする。狙い打つは、落ちてくる男の着地際である。

「打法……」

一本足打法。ホームランでも打つかのような豪快なスイングで落ちてきた男を狙う。

二度のジャンプができて、三度のジャンプはない。ワタルは、いや、誰もが思う事である。

「もう一度言ってやろうか」

「……？」

「だからっ、小魚だってんだろ、クソが！」

男は空中で、ワタルのモーションに合わせながら身をよじる。爆音をたて、爆風を巻き起こさんばかりの、スイングを前に男は空中で一瞬、止まった。

「なっ……!!」

ワタルの攻撃は豪快に空振りする。そして無防備になったワタルに、男の長刀が確実に噛みつく。

攻撃の威力を耐える事もできず、そのまま後方へと転がるように倒れ込む。

空中における二段ジャンプ。そして空中停止。ワタルを越える運動神経と反射神経。人間技を超えたその動きに、ヒロキもかなも、戦っているワタルすらも言葉を失うしかなかった。

「フッフ、クツクク……ハハハ、ハーハッハッハ!!」

着地した男は、ただ笑っている。その場に男の高笑いだけが響いた。まるで世界には「それ」しか音が無いのではないかと錯覚する程。

「ま……だ、だア!!」

その音の世界を、砕く一声。ワタルの声が、男の高笑いをかき消す。

「チツ、まだ、くたばらねえ気……ん？」

男は、今までと違うワタルの雰囲気気に気を払う。

全体重を地面に寄せ、木刀を力一杯担いでいる。そう、ついさっき江藤を倒した大技「ぶったぎり!」である。

「へっ、ちったあ楽しめそうな技があるじゃねえか」

男は再び中腰になり、蛇の構え（スネーク・スタイル）になる。

（へへへ……、いよいよもって、これが最後の技だな。……これが通用しねえと……）

そこまで考えてワタルはやめた。悪い方に考えるのは簡単で、それをやっても勝てない。重要なのはどんな時でも上を見る威風堂々《ポジティブ・シンキング》である。

「すううう……。行くぞ、コノヤロー!!」

本当に持てる全ての力を出し切る。江藤に放ったものよりも、威力も体捌きも上回っている。

逆境に追いつめられたからこそできる、最大の大技。当たれば勝

利、外れれば敗北である。

「うああああああ！！！」

正に全力。全てをその木刀に、その攻撃に乗せて男を斬る。

江藤でも捌けなかった武器破壊剣<sup>ソードブレイカー</sup>、それに加え全てがその時の「ぶつたぎり！」を超えた技は確実に男の長刀を粉碎するはずである。

「シャアアアア！！！」

剣と剣が触れる。男は江藤と同じく、その長刀を盾にしてワタルの攻撃を防ぐ。ワタルは男の長刀を粉碎するべく、ただ渾身の力を込める。

「うぐつ！？」

江藤と同じく、そのあまりの威力と重さに、完全防御態勢へと移行する。こうなれば、江藤と同じく武器破壊が成立する。まして男の剣は長刀であり、たたき割るという点に置いては弱点と言っても過言ではない。

「クツ……クツクツク。なるほどなあ、こいつは大した技だぜ……。でもなあ、シャアアア！」

再び放たれる男の奇声と同時に、二つの剣は交差する。ワタルの剣と、男の剣が離れる。

その威力そのままに、地面に激突するワタル。江藤の技で捌けなかった大技を、この男は持ち前の筋肉のバネと関節の柔らかさを使い、大技ぶつたぎりを見事に捌ききった。

「……………！！！」

ワタルは、誰にも聞こえない小さな声を発した。その声を聞いたのは、会場中探しても誰もいなかっただろう。

「ま、小魚にしてはがんばった方だよ、クソ野郎」

最後の蛇が放たれる。何もできないワタルは、その攻撃をただ受けるしかできなかった。糸が切れた人形のように、ワタルは前のめり倒れる。

「兄貴！！！」

「ワタル君！！！」

どう見ても危ない倒れ方をした。ヒロキもかなも、何も考えないでワタルに向かっていた。

そのワタルの状態は、江藤と戦った時の傷がわからない程にやられている。スナッピングソードによる剣撃により、ミミズ腫れのよ  
うな痕が体中に見られる。まるで、剣ではなく鞭で叩かれたような痕である。

「よお、野郎に伝えておけ、まだ殺る気があるんなら上まで来い  
てよ、ハッハッハ！」

「待って！」

去っていく男を、ヒロキは無意識に呼び止めていた。

「貴方は、一体……？」

「……ふん。仁だ。俺の名前は速水<sup>はやみじ</sup>仁。Fエンゼルの仁だ」

ヒロキは去りゆく仁の背中を見続けていた。ただ固く握られた拳  
と、噛みしめた唇から流れる血が、今のヒロキを物語っていた。

## 夢の中の少女・前編！

予選トーナメント第一回戦が行われてから二日後。七月二十日。

速水仁との戦いに敗れたワタルは、ヒロキ達の手により病院へと運ばれる。持ち前の回復力で体力の面では「ほぼ完治」したものの、問題は精神の回復である。

ワタル達が不在の中、在校する学校は夏休みを向かえていた。学校には、部活をする者、補習を受ける者、ただの暇人の集いなど、生徒は思い思いの事をしている。

今では恒例の「屋上」にて、昼の支度をしている。

さんさんと照りつける太陽を避けるように、日陰を陣取り、そこにシートを引く。その上にこれも恒例となった、かなの手料理ひるめしを囲うように座る。

ただ一人を除いて

「ワタル君……今日も来ないのかな？」

「うん。僕も兄貴がどこにいるのかわからないんだ」

二人で昼食を口に運ぶ。どこか素っ気ない。

「悔しかったんだと、思う」

食べるのをやめて、ヒロキは話し始める。かなも黙って、その話に耳を傾ける。

「正直、僕だって悔しいし……何よりもずるいつて思った。安っぽい言い方だけど、あれは才能なんだって」

「うん、そうだね……」

一回戦を突破した矢先に、どん底へと突き落とされた気分を味わう。

その「絶対的な才能」を前にする。これを越えなければいけない、最大の才能である。

「ヒロキ君。でも、越えなきゃいけないんだよ。かな達ができるのは、ワタル君が復活した時に向かえてあげる事じゃないかな」

「うん。一番ショックを受けているのは兄貴のはずだからね……」

夏の太陽の下、二人はワタルの復活を待つ。それができる最大の事であると信じて。

ワタルは病院から出てから、自分の部屋のベッドに寝ていた。前向きが取り柄のワタルだが、内心のショックは大きい。今まで、どうしようもなく強い敵と戦った事は幾度となくある。

しかし、それはただ「強かった」それだけの事である。絶対的な才能を見せつけられ、自分の考えていた事の愚かさを知る。

「……………」

ただ沈黙。何も話したくなかったからだ。

悔しい感情も、悲しい感情も何も出てこない。何もできなかった敗北という真実が、ワタルの頭の中を真っ白に染めている。

考えれば考えるほど、頭の中の白は深く、そして大きく広がっていく。

その一面の真っ白が嫌になり、わざと大きな溜息をついて頭の白を消し去る。だが一瞬の事で、すぐに頭の中には白が充滿していく。今はその白をどんな方法でも良いから、消し去りたいという願望だけがあつた。

目を瞑ると、その白は消える。今度は一面の黒がワタルを覆った。まだ黒の方が良いと考え、ワタルはひたすら目を瞑り続ける。

そして気がつかない間に、ワタルの意識は混沌の中へと墜ちていった。

見覚えのある景色が広がっていく。

この景色は一体なんだっただろうか。ワタルは頭を働かせ、なんとかその景色を思い出そうとする。

思い出そうとすると、辺り一面に聞こえてくる怒号の大歓声が、頭に響く。

（うるさい！ 思い出せねえじゃないかよ！）

その正体不明の歓声に、一人で悪態をつく。そんな一瞬、脳裏にそれがかすめる。

（あ、思い出した。これは俺が見てきた過去のリトルウォーズだ）そう、そこには決勝戦を戦う参加者と、それを応援する観客の姿がある。まるでお祭り騒ぎのような、大熱狂が見える。

まだ小さいワタルは、いち早く良い場所を陣取り、特等席でその戦いを見ている。

「いけーっ、そこだ、ぶつとばせー！！」

剣術や格闘術のいろはもわかっていない。わかっているわけがない。

ワタルにとって、決勝戦ニコは夢の舞台。自分が何回も見てきて、自分もこの舞台に立ちたいと、そんな色あせない夢を大きくしている。

しばらくすると、その決勝戦も終わりを向かえる。どっちが勝っても良かった。

幼い頃のワタルは、特別応援をしているチームがあつたわけでもない。ただリトルウォーズ（ちゃんばら）が好きだった。だから木刀のような木の棒を探し回った事もある。

いつも戦いを見ては、真似をするように棒を振るつた。勿論、それで満足するはずも無かったが、そうする事で参加できない鬱憤を、晴らした。

そして、一年が経ち再び夏。リトルウォーズの季節がやってきた。

毎年恒例の当たり前の事。日常的に会場に足を運んで、一試合目



から試合を見る。会場が二つあるなら、全速力でダッシュして会場を目指した。

一試合目から決勝戦まで、全ての戦いがワタルにとって光輝いていたのだ。

そんな、とある日の事。いつものように会場に足を運び、走り回っている。

「きゃっー!」

「あつ、ごめん、大丈夫?」

他の会場に行くのに夢中だったワタルは、人にぶつかってしまう。当然の話だが、リトルウォーズは「教育上宜しくない」として、小さい子供を会場に行かせはしない。ワタルも止められていたが、親の目を盗んでは会場に来ていた。

ぶつかった人を見ると、どうやら女の子。ワタルよりも一つか二つ年下の女の子だろうか。長い髪をポニーテールで結んで清楚な感じがする。

急いでいたが、放っておくわけにもいかなないので、ワタルは女の子に手を貸して起こす。

「ごめんな! 怪我は無かったか!」

「……………」

女の子は、転んで泣くわけでもなく、かといって怒っているわけでもなく、無表情にワタルを見ている。その漆黒の瞳は、見つめていると吸い込まれてしまいそうになる。

「あ、あのさ……大丈夫? ……えと、俺急いでるんだけど、さ」

「……好き」

「ええ!」

突然、女の子に「好き」と言われ困惑する。一瞬だが、会場に急がなければいけないという事を忘れる。

「……リトルウォーズ」

「え?」

「リトルウォーズ……好き?」

ワタルはちょっとガツカリする。だが、その女の子の問いに考えもせずに答えた。

「当たり前だろ、俺はリトルウォーズが大好きさ！」

「……そう。良かった……」

わからないぐらいに、女の子は微笑む。その小さな微笑みをワタルは可愛いと思う。どこか神秘的な雰囲気漂わせていたが、ワタルは「良い奴」と判断する。

「お前は？」

「……え？」

「お前は、好きなのか。リトルウォーズがさ？」

「……うん」

少し間をおきながら、遠慮がちに頷く。

ワタルが少し驚いていたのは、女の子でもリトルウォーズが好き  
な奴がいるという事。事実、この当時の大会には女の子の姿はほとんど見られず、男しかないのではないかと思える程だった。

まさしく男の為の、男の戦い。ここ数年で、その傾向は薄れ女性参加者が増えていつてはいる。

「じゃあ、一緒に行こうぜ！」

ワタルは女の子に手を差し出す。

「……でも、ママが知らない人についていっちゃ駄目だって……」

「む……、ふう。俺はワタル、響ワタルだ。いつかリトルウォーズで優勝する男なんだぜ！！」

「響……ワタル君……」

「ああ、ワタルで良いぜ」

「じゃあ……ワタル君。私は、桐華、桜井桐華、さへんとうかです」

女の子の名前は桜井桐華。常に遠慮がちだが、とても礼儀正しいと思える雰囲気を持っている。

改めて手を差し出したワタルの手を、躊躇ためらいながらも握る。

「行こうぜ、『トーコ』……」

「……うん！？」

次の会場へ向けて、二人で走り出す。何故、トーコなのか疑問に思いつながら。

## 夢の中の少女・中編！

幼き日のリトルウォーズ会場で、ワタルは一人の女の子に出会う。女の子の名は桜井桐華さくらいとうかという。この少女もワタルと同じく、リトルウォーズが大好きな女の子であり、今ではワタルと一緒に会場中を走り回っている。

そんな二人の待ち合わせ場所がある。リトルウォーズの開会式や閉会式が行われる広場　その真ん中にある一際大きい大木。

小さな子供でも、間違いないかどうかどり着けるとの理由から、ここが二人の待ち合わせ場所になった。

「ごめん！　遅くなった！」

「……ワタル君。いつも遅刻」

「本当にごめん。昨夜さ、興奮きうつして眠れなくて……そしたら、寝坊しちゃってさ」

「……………」

桐華はひたすら無言で、顔を合わせないように明後日の方を見ている。怒らせてしまったかと思い、ワタルはひたすら謝り続ける。

そんな謝罪の言葉も百回は言っただぐらいの時だった。

「……ふふ」

「ん？」

「……良いよ。実は私も少し寝坊したから」

「あつ、なんだよ、トー」

そんなに深くは怒っていなかった事に安堵する。しかし、百回も言わせる事はないだろうと、少々ふてくされてもいた。

そんなワタルの気持ちも知ってか知らずか、桐華は楽しそうに試合が行われる会場へと駆けていく。

走る桐華を追いかけてワタルも走る。もう、ふてくされは無かった。ただ、この瞬間が楽しかったからだ。

その日も、いつものように試合を見て、お互いに思った事などを

話し合う。基本的に感じる事は似ているのか、あまり言い合いになる事も無かった。

全ての日程が終わると大木の前に集まって、次の約束をする。そこで別れて、またそこで会う。

ある時、桐華がワタルに問いかける。

「……ワタル君は」

「なんだよ？」

「……なんで、私の事を『トーコ』って呼ぶの？」

この呼び方は会った時から、何故かワタルが呼んでいた名前である。

「んー、なんでって言われてもなあ」

ワタルにしては頭を使った方である。それなりの時間悩んでから一つの結論が出てくる。

「言いやすいからかな」

「……言いやすい？」

「うん。トウカっていうよりもトーコの言いやすいから、だと思う。わからないけど」

「……ふーん」

可もなく不可もなくといった反応を見せる桐華。事実、ワタル自身も「何で？」と問われても明確な答えが見つけれないのだ。

しばらく無言が続いたが、ワタルが口を開く。

「嫌か？」

「……え！？」

「いや、トーコって呼ばれるの。嫌ならちゃんと桐華って呼ぶよ」

桐華自身も、別に嫌という気持ちは無い。だから曖昧な返事で返す。

「……嫌ではないと思う、かな」

そんな返答に、ワタルも流すように相づちをうった。桐華と会っ

てから楽しい事は多かったが、こういう変な雰囲気になる事は今まで無かった。

ワタルはこの雰囲気に対して、ちょっとした「くすぐったさ」を感じる。

「だあー、やめやめ!!」

この雰囲気吹き飛ばしたくて、力の限り大きな声で叫ぶ。

そんな大声を気にするように、桐華は周りを気にする。周りを見ると大人はみんなワタル達を見ている。

見られている事に恥ずかしくなり、顔を真っ赤にしつつ桐華は、ワタルの服の袖を引っ張り足早にその場を離れる。桐華本人も驚くぐらいに、速く走った。

そのまま試合会場へと向かい、結局いつも通り二人で試合を見ていた。

「……ワタル君」

「なんだよ、最近は質問が多いなあ」

「……ごめんね。ワタル君は大きくなったらリトルウォーズに参加したいんでしょう？」

「参加したいだけじゃないさ。前にも言ったけど俺は優勝する男なんだぜ！」

気持ちに嘘偽りはない。この大会で優勝するという事は、変わらぬワタルの夢である。

「……何で？」

「なんでって、何がさ？」

「……そこまで優勝したいっていうからには、曲げられない何か理由があるからでしょ」

試合中でいつもは熱狂的に見ているはずの桐華が、真面目に聞いてくる。試合が気にはなったが、ここは真面目に答えるべきだと、ワタルも思う。

「好きだからだ。理由が小さいと言われるかもしれないけど、好きなもので一番を取りたいと思う気持ちは決して軽くはないからだ

と」

「……好きだから、一番を取りたい……優勝したい？」

「うん」

「……じゃあ。私はワタル君を優勝させてあげたいから、ワタル君と優勝を目指してみたい」

一瞬、その言葉の意味がワタルはわかっていなかった。

その日はあまり言葉を交わさずに二人は別れる。それから数日が経ち、その年のリトルウォーズ優勝決定戦の日を向かえる。

毎年の事だが、リトルウォーズは夏休みに行われて、夏休み終了間際に全日程が終了する。

リトルウォーズの終了は、夏休みの終了とほぼ同義である。最も、それはリトルウォーズを熱狂的に見ていた子供に該当する概念かもしれない。

一般的にいう「普通の子供」は友達と遊んだり、宿題したり、家族と過ごしたり、そんな事をいっぱいして夏休みの終わりを向かえるのだろう。

しかしワタルと桐華は、夏休みの時間をほぼ全てリトルウォーズに使っている。

「やっと決勝戦だな、どっちが勝つと思う？」

「……うーん、わからないよ」

そんな会話をしながら優勝決定戦の会場、両国国技場を目指す二人。

決勝戦はすぐに始まり、大熱狂のうちに終了する。二人は相変わらず応援チームなどなく、ただ思い思いの応援をしていた。

決勝戦の熱気は年々増加していく傾向にあり、今年度の決勝大会は終わってから数時間の間も、お祭り騒ぎは続いている。

「……ワタル君」

「なんだよ、トーコ。もっと遊ぼうぜ」

「……ワタル君。前から優勝するって言ってたよね」

「……ああ、俺の夢だからな」

「……今日の試合も凄かったよ、優勝するって事は今日みたいな試合をしなくちゃいけないって事でしょ？」

自信の無いような、不安がつているという表情で真っ直ぐにワタルを見る桐華。その吸い込まれるような漆黒の瞳の少女を見ながらワタルは言う。

「まあ、そうなるよな」

「……………」

不安な表情の次は、いよいよ沈黙してしまう桐華。

そんな桐華を見て、ワタルの口から思いついたように言葉が出る。

「マックスハート」

「……え？」

「マックスハートは全力の心。全力でやればできない事なんてない！」

「……何それ？」

「さあ？ 俺にもわかんねえけど、でも全力で走るんだ。どんな相手が出てきたって、全力で走る。そいつが凄い奴で強い奴で、全力でやって勝てない奴がいても、もっと全力で練習して、もっともっと全力でやって勝つ。そしたら優勝だ」

「……マックスハート」

「ああ！！」

その言葉を聞いた桐華の顔に、不安の表情は少し消えていた。これがワタルの信条であり、たった一つの正義「全力の心。マックスハート」が誕生した瞬間である。

思いつきで突発的に口から出た言葉だが、これはずっと前からワタルの心の中にあつた、心の声なのかもしれない。

「……ワタル君。あのね……………」

「え、何！？」

いつしか、目の前の景色がだんだんと薄れていく。目の前の少女が、視界に入る景色が、体感できていた熱気が、全てが無に還って



いく。

そんな全てが黒になり、そして一面の白が視界に入ってきた。

「……っ!？」

白が終わると、そこには見慣れた天井があつた。

汗をたくさんかいている。まるでタイムスリップでもしたような奇妙な感覚に陥りながら、窓から外の景色を見ている。

夏の太陽はいつの間にかいなくなり、綺麗な月が顔を覗かせている。いつの間にか、寝てしまっていたようだ。相当長い時間眠っていたのか、逆に頭が覚醒しきっていなくて、軽い頭痛もおきている。

「トー……コ?」

薄れゆく夢の記憶の中から、ワタルは一人の女の子の名前を口にしていた。

## 夢の中の少女・後編！

夜が明けて、七月二十一日。

月が姿を隠し、日常を辿るように夏の太陽が現れる。毎日のように気温は三十度を超えて、ただその場にいるだけでも、ほんのりと汗をかいてくる。

しかし、そんな暑さに影を潜めてしまいが、爽やかな一陣の風が吹き抜ける。風と共に草や土の、自然の香りを運んでくれる。

「ヒロキ……オレサマだ。確か今日、試合だったよな？ 先に行ってるから……かなっぺと一緒に会場に向かってほしい、じゃあ頼んだから」

「シチガツニジュウイチニチ。ゴゼンヨジサンジュップン……」

ヒロキの携帯にワタルからの留守電が入っていた。

同日。六時四十三分。

「ハアツ、ハアツ……！」

混濁する意識の中で、ワタルは走っている。寝過ぎた為なのか、まだ頭が覚醒しきっていない奇妙な感覚を持ち続けている。

今まで知らなかった、いや、忘れていた事が何かの「キツカケ」により起こされている。

ただ頭の中の片隅にある、しかし、まるで真ん中にあるような大きな存在。夢の中の少女が頭の中で喋り続けている。なんの確信もないのに、ただその場所へ向けて走っている。

向かった先は両国国技場の中央広場。朝も早い事もあり、人はまばらにいる程度。通勤する会社員や、大会役員の黒子が目につく程度のものだ。

中央広場にある大木。初めて会場を訪れた時から、ずっとこの場所にある大きな木。一体いつからここにがあるのかも、人は知らない

ぐらいの年月を得た老木。その老木の下に、彼女はいた。

「はあ……はあ……」

「……………」

「よお、早いじゃねえか」

ワタルの言葉に、目の前の少女は振り向く。

長く綺麗な黒髪はポニーテールに束ねて、吸い込まれるような漆黒の瞳。やや大きめの制服を纏ってはいるが、スタイルの良さが服の上からでも見てとれる。

相変わらず、ワタルよりも少しだけ小柄な少女。いや、彼女は数年前の面影そのままに存在していた。

「……やつと来た？」

「ああ、やつと来たぜ」

目の前にいる少女は昔の面影そのままだ。だが唯一というべきか、昔と違う点は無愛想になった、というべきか。

「いつからここにいたんだ？」

「……二年ぐらい前から」

問いかけに、少し間を開けてからの返答。二年前、それはワタルが高校へ進学した時期であり、つまりはリトルウォーズ参加の権利を得た年でもある。

「二年って……お前なんでそんなに……」

「約束したから」

ワタルの言葉は、少女の言葉にかき消される。その言葉には、感情がこもっている。

「約束……？」

「……忘れたの？」

「いや、その……」

約束、というワードに何か思い出す。「忘れたのか？」と問われれば「たった今まで忘れてた」といえるぐらいのもの。

ワタルが夢で思い出せたのは、少女との思い出のほんの一片なのかもしれない。

事実、夢の最後の言葉。ワタルはこれから先の記憶が曖昧だった。約束の話をはぐらかす為に、違う話題を提供する。

「そつえば『あの時』さ、何を言ってたんだ？」

「……ふう。やっぱり忘れてる」

無表情だが、明らかに怒っているのがわかる。ワタルの聞きたい内容と約束が関係しているらしいのは、今の会話でわかる。

悪い事をしたという軽い罪悪感と、思い出せない約束との間でワタルの心は揺れ動いていた。

「わかった。オレサマの負けだ。約束ってなんなのか教えてほしい……頼む」

「……私と見たリトルウオーズの年は覚えてる？」

「ああ、何年前だったかまでは忘れたけど、それは覚えてる」  
正確には夢で思い出したのだ。少女と見たあの景色を。

「……私とワタルは、あの年の夏だけしかリトルウオーズを見ていない」

「……だろうな。それ以降でオレサマはトコといった記憶がない」

「……それはあの年で私は遠くへ引越してしまったから」

引越した、その言葉が頭の中を駆けめぐっていた。何かを思い出せそうなの、しかし、それでいて手を伸ばすと遠のいていきそうなの。パズルのピースを一つずつ解いていくように、慎重に記憶の糸をたぐり寄せていく。

（……ワタル君。あのね……私、引越さないといけないんだ……）

ふと一つのピースが音を立ててはまる。そう確かにあの時に桐華はそういう事を言っていたのだ。

（ごめんね。突然……だったよね？ でもね、私達が高校生になっただけなのにね、なんとか戻ってくるからね……私は、ワタル君より一つ下だから、次に会う時は私が高校一年生で、ワタル君が高校二年生だね。……えっ、なんで高校生になったらなのかって？ それは……）

一つの糸をたぐり寄せていくと、一体なぜ今まで思い出せなかった

たのかと、自問自答するほどに記憶が蘇ってくる。

先ほどの混濁した意識が、徐々に鮮明になっていく感覚をワタルは覚えていく。

「お前は……」

「……あのひとの、速水仁さんとの戦いを見てた」  
「っ……!？」

突然、現実に取り戻されたような気分になる。あまり良い気分とはいえない。元を正せば今の自分がこんなにも落ち込んでいるのは、速水仁にボロ負けしたからだという事を思い出す。

「……もうあのひととは戦わないの？」

「いや……戦うさ」

「……嘘つき」

その一言がワタルの心の中をえぐった。当然である。

ワタルは言葉でこそ「戦う」といったが、その言葉の中に「勝つ」という感情がこもっていない事を桐華に見透かされる。それがその一言。

「……ワタル」

「えっ!？」

「……今度は私もいるから。もう一度、戦って……マックスハート全力で」

(……えっ、なんで高校生になっただけなのかって？ それは……そうすれば私もワタル君と一緒に夢を追える(戦える)から……)

今、ワタルの中で最後のピースがはまった。パズルは完成した。

幼き日の夏。少女と出会った夏。それは幼いワタルにとっては何がえのないもの。

しかし、突然訪れた別れは、その時のワタルにショックを与える。人との別れの辛さ、それは万人に与えられる一つの試練であり、いつか訪れる苦痛。

ワタルにとって、こんなにもショックを与えたのは桐華が、かけがえのない人だったからなのかもしれない。

「……トー」

「……全力で走るんだ。どんな相手が出てきたって、全力で走る。そいつが凄い奴で強い奴で、全力でやって勝てない奴がいても、もっと全力で練習して、もっともって全力でやって勝つ。そしたら優勝だ」

「ハハ、よく覚えてたな、それ」

「……うん。次は……もっともって全力、だよ」  
「ああ!!」

戦いの心の空白感が埋まっていく。圧倒的な才能を見せつけられ、一瞬でも戦意を失われてしまった。それなら全力である。今の自分に足りない部分は全力で補い、そして全力で挑戦し、全力で勝つ。もしかしたら、自分よりも自分を見ていた桐華にそれを気づかされる。

いつしか、周りに人も集まり始め、夏の太陽が本格的な活動を始め。

「トーコ!」

「……?」

「遅くなったけど、最後の夏になっちゃったけど、一緒に戦ってくれないか」

「……うん!」

マックスハート  
四人目の全力、桜井桐華がメンバー入りした瞬間である。

試合開始も残り時間迫る中、ヒロキとかながやってくる。

「おい、兄貴!」

「ワタルくん!」

いつものように、ワタルを向かえてくれる二人。それが戻ってきた時にワタルがほしいと、わかっていたからこそその反応。

「トーコ、紹介するぜ。マックスハートに所属する頼れる仲間だぜ!」

ワタルの復活と、新しい仲間を連れて、マックスハートは予選トーナメント二回戦へと挑む。

武器が無いもの……！

桜井桐華。さくらいとうか 幼き日のワタルと共に、リトルウオーズ会場を駆けた人。ある意味ではワタルの最初の同士なかまであり、今はマックスハート四人目の仲間である。

響ワタル、川崎ヒロキ、相沢かな、この三つの輪の中に、桜井桐華という四つ目の輪が加わる。

「こいつは、ガキの頃の知り合いだったんだ。そして我がマックスハートの新たな仲間だ、よろしくしてやってくれ！」  
いつも通り、ワタルの切り出しから話は始まる。

初対面の人に可もなく不可もなくの反応をするヒロキ。まるで新しいオモチャを買ってもらった猫のように、目を輝かせるかな。そして無表情ながらも、どう見ても緊張している桐華。

三者三様の反応を、ワタルは一人で楽しんでいる。

「……えっと」

最初の言葉をどう出すべきか、それに悩む桐華を見て、かなが口を開く。

「相沢かな。ワタル君と同じ学校の高校三年生で、十七歳。よろしくね！」

簡単な自己紹介をする。初対面の人間に会い、これから一緒に戦っていく仲間には、当然の反応である。それに続くように、ヒロキも自己紹介をする。

「えっと、川崎ヒロキです。僕も兄貴達と同じ学校です。高校一年の十六歳です。多分、一番年下です」

いつもの優しい笑顔を振りまきながら、ヒロキも自己紹介を終える。

それでも無言の桐華に、ワタルは肩を叩きアイコンタクトを交わす。そのワタルの仕草に、意を決したのか、桐華の口から言葉が出る。

「……桜井桐華。学校は、多分みんなと違うけど……高校二年生」  
がんばってそれだけの言葉を出したのだろ。ここから後に続く言葉は無かった。

あまり桐華をこのままにしておくのも、可愛そうと判断したワタルは早速リトルウォーズ二回戦の、参加メンバーを決める話に、取りかかる。

「さて、自己紹介はこれぐらいにしようぜ。とりあえず二回戦のメンバー決めをしたいんだが……」

それだけ言うと、早速ワタルは桐華を見る。その視線を感じ取り、見返す。

桐華が見回すと、ワタル他二人も同じ考えなのか、桐華を期待の眼差しで見ている。

「じゃ、メンバー決めだが、桐……！」

「……待つて！」

もう自分に振られるのがわかっていたかのように、ワタルの言葉を遮る。それには一つの理由<sup>わけ</sup>があったからだ。

「なんだよ、トーコ？」

「……私は出られない」

その言葉に、期待に満ちた表情は一瞬で崩れ去る。桐華からすれば予想通りの反応である。

全員が一体なんだ。という表情で見つめる中、桐華は一つの答えを出す。

「……だって、武器が無いもの」

それは出られない、と三人が納得する。結局は桐華はこの試合参戦はできず、一回戦と同じ三人で臨む事になる。

二回戦になると、一回戦よりもギャラリーが少し増えた。勿論、そんな気がするといってしまうえば、それで終わってしまうぐらいの数だが、増えている事は変わらない。

「おいおい、あの一回戦で凄え勝ち方した所あったよな、なんてい



「たつた？」

「ああ、えーと。確かマックスなんたらだっけ？」

「そうそう、俺そのマックスなんたらの一戦の試合見てないんだよね、今回はそこ見にいこうっと」

偶然だが、ワタル達の耳に入った見物客の言葉である。

よく聞き入ると、マックスハートの事を話してるギャラリーも、ちらほらと見受けられる。そんな会話を聞いて、嬉しさから体中にくすぐったさを覚える。

ワタルの策略は見事に、大当たりしたようだ。唯一まだ第三者として見れてる桐華は、みんなに「気を引き締めて」と一応ながら、激励の言葉を贈る。

一戦の時と同じく、ワタル達の前の試合が長引いているようだった。ディーパーディーパーとダンスファイバーズの一戦だ。この試合はディーパーディーパーが勝つと予想されている。このチームは前回、前回とそこそこ良いとこまで行ったチームである。

「さて、長引いてくれるなら順番決めをしておこうか」

「兄貴！」

「どうした？」

さっきまで朗らかだった表情が、今はすっかり戦いの顔になっている。  
「ほが」

「この試合は僕を先鋒にしてほしい。絶対にヘマはしない」

「……………」

ワタルはヒロキの眼を見る。緊張もなく、気迫に満ちた眼をしている。その気迫はワタルが感じてもし凄いものがある。

しばらく無言で、そのヒロキの眼を見続けた。

「……………」

「……………」

「よし、先鋒はヒロキ。中堅はかなつぺ。大将はオレサマでいくぞ！」

「兄貴……………」

気張りすぎていたのか、今度は逆にほっとした顔つきのヒロキ。そんなヒロキの気合が抜けないように、少し強めに背中を叩く。

「任せたぜ、今度はオレサマにまわってこねえようにな？」

「任せられたよ、兄貴！」

二人はお互いに拳を合わせあう。そんな二人を、かなと桐華は見ている。

「あーあ。良いな、男の子は」

茶化してるような口調で、かなは言う。しかし半分は冗談だったが、半分は本気だった。

程なくするとワタル達の前の試合が終わる。予想通りディーパーディーパーが勝利する。メンツを見ると確かに強そうな雰囲気は持っている。

「って事は、次のオレサマ達の相手はあいつらだな！」

「ワタル君、前もそんな事を言ってたよね？」

「まあ、こんぐらいの方が兄貴らしいよね」

「……ワタル。落ち込んでるよりも、元気であってほしい」

今までは三者三様の意見が、今では四者四様の意見が飛び交っている。復活したワタルを筆頭に、新しいマックスハートが動き出している。

ワタル達は、バトルリングへと向かう。一回戦と同じく、細かな内容を黒子に報告する為、リーダーだけが中央に集められる。先ほど決めた順番を、黒子に伝える。

「おうおうおう！！俺様がブルースのリーダー。人呼んで炎の男こと田中太郎だあ！！」

その男、田中太郎は異常なまでの熱血さと、異常なまでに平凡な名前が合わさった男だった。

「オレサマってところが被ってるのが気に入わねえが……マックスハートの響ワタルだ」

「おう、ワタル！俺様の事は太郎って呼べ！」

「こら、田中太郎君。試合前だから少しは口を慎みなさい」

あまりの勢いに、黒子に注意されている。ワタル自身はあまり気にはしていない。

「では、これよりブルース対マックスハートの試合を始める！」

いつも通りの黒子の宣言。この宣言と共に選手は握手をする。最もこの握手をするのは大体リーダー同士がやるだけなのがほとんどである。握手が終わると、お互いのチームへと引き返す。

「向こうのリーダーさん、なんか熱い人みたいかな」

「ああ、あつつあつだぜ」

戻ってきてヒロキを見ると、青いハチマキを巻いて、木刀のチェックを入念に行っている。

試合直前になっても緊張は見られない。気迫もさつきよりも上を行く、体調も見える限り良さそうである。今回はいけるとワタルには確信があった。

「勝つてこい、ヒロキ！」

ヒロキは言葉で返さずに、親指を突き立てて「大丈夫だ」というような雰囲気で返す。メンバーが見送る中、先鋒のヒロキはバトルリング中央へと足を運ぶ。

「これより先鋒戦　室田誠対川崎ヒロキの試合を行います！」  
むろたまこと

相手の室田は武器を持っていない。構えから察するに何かの格闘技。リバティーズの金田と似たようなタイプかもしれない。

「それでは……始め！」

予選トーナメント第二回戦　ブルース対マックスハートが始まる。

そしてその先鋒戦。室田とヒロキの戦いが始まった。

## 室田の世界！

「室田パンチ！」

奇怪な必殺技を叫びながら、試合開始と同時に拳を繰り出す。咄嗟の出来事だったが、この拳を難なくかわすヒロキ。

「ふふん。この室田のパンチを避けるとはな！」

「不意打ちかい？ 戦法といえばそれまでだけど……あまり好きではないね」

言葉のやり取りで、時間を稼ぐ。実際のところ、パンチを避けた拍子に態勢も崩していて、この時間帯は態勢直しの絶好のチャンスだった。そのまま構えをとる。

「不意打ち？ 挨拶代わりだぜ！」

言葉に力を込めながら、またしても不意打ち気味な攻撃をしてくる。さすがに構え直してただけあり、今回は拳を綺麗にかわし反撃をする。

「ぐがぁ！」

「……あれ？」

これこそヒロキにとっては「挨拶代わり」の一撃だった。倒すつもりもなかった攻撃が室谷ヒットする。そのまま倒れ込み、情けなく地面を這いずりまわって距離を離す。

心なしが室田の呼吸が荒い。しかも、変な汗までかいている。

「て、てめえ……この室田に一撃をおお……！」

「あ、いや、ごめん」

何故か誤るヒロキ。試合中の一撃で謝る必要はないのだが、荒い呼吸と変な脂汗をかきながら、そんな事を言われては謝ってしまう。「いや、謝っても許さないぜ……この室谷に一撃を与えたんだからなあぁあー！」

気合を入れたのか室田の顔が真っ赤になり、纏う雰囲気も緊張が走る。咄嗟に気持ちを切り替えて、武器を構え攻撃に備える。

「いくぜ、室田キーイック！」

まるでどこぞの「バイクに乗ったヒーロー」のような跳び蹴りを繰り出す室田。フォームもどことなく変で、まるで酔っぱらいが真似たキックのようなフォームである。

隙だらけで、力一杯飛んでいる為に空中で姿勢制御もできていない。何よりも遅い。

「あ……」

そして着地……もとい落下。ヒロキの目の前で室田は落ちた。

「ぐぬぬ……ぬぬ!!」

「あ、あのー……大丈夫？」

落ち方が危なっかしく、鈍い音と共に落ちた室田を気遣ってしまふ。チラリとワタル達を見ても既に、室田の行動に言葉も無いのか、放心状態で試合を見ている。

いや放心状態ならまだしも、既に試合を見ているのかさえも怪しい。戦っているヒロキ自身が早く試合を終わらせたかった。

「く、くそおおー!!」

突然叫びだして、大粒の涙を流し始める。さすがに心配になったのか黒子が室谷に歩みよる。

「室田君。大丈夫かい、まだやれるかい？」

「うう……足、捻挫したっぽい」

その言葉に目を点にさせるヒロキ。黒子も立場上では心配はしているが、余程まぬけに思ったのか笑いをこらえてる様子が見てとれる。

「でも、まだやれるぜえ！」

捻挫したっぽい足をおして、再び立ち上がる室田。激痛が走るのか、再び大粒の涙を流す。

立ち上がった事により、黒子から続行の合図がされる。「立ち上がってしまった為」一応、武器を構え直す。

「ヒロキとかいったな、てめえ」

「は、はい」

「この室田のスペシャルで葬ってやるぜ？」

怪しい笑みを浮かべる室田。その直後、室田の雰囲気さらに変化する。今までと違う雰囲気はこの試合で何度目かの構え直しをするヒロキ。

まるで筋力とかという単純なパワーではなく、まるで未知の何かを集めるようにパワーを溜める室田。

（ま、まさか、いくらこの人が奇怪な事ばかりするからって、超能力とか使うのか！？）

咄嗟に思った感想。だが、ヒロキの真面目な回答だった。室田を纏う雰囲気は、オーラとなって目に見える形となる。

「はああああああああ……！！」

まるでどこかのバトル漫画にでも入ってしまったような、錯覚がヒロキの頭を駆けめぐる。

この試合を見ている見物人も、ワタル達も、目の前にいるヒロキも、ブルースメンバー以外の全ての人間が室田に引き寄せられている。

「あれ……？」

ふと、ブルースメンバーを見ると次の中堅の人が、戦闘準備をしている。

「室田……スペシャルツツッ！！」

「はっ……！！？」

よそ見をしている間に、室田のパワーチャージは完了したようで、その力を解放している。

が、目の前で室田は腕を十字に組んで何かをやっている。まるで「光の巨人のヒーロー」の必殺技みたいなポーズである。

「ビビビビビビ……！！」

意味不明な疑似音を自分の口から発している。しかし、ヒロキの体には何も異常が見られない。

「え、えと」

「ビビビビビビ……！！」

なおも変な音を真似し続ける室田。どうして良いかわからず、黒子に指示を仰ぐとそれを察したのか、黒子は動いてくれる。

「そこまで。先鋒戦はマックスハートの川崎ヒロキの勝利とする！」  
高らかに黒子からの勝利宣言。やっとこの珍妙な戦いから解放された嬉しさから、ヒロキは安堵の顔を浮かべる。ある意味ではシリアスな試合よりもシリアスである。

室田はどうなったのかと見ると、チームメンバーに止められ怒られているようだった。チームリーダーの田中と目が合うと簡単なお辞儀をしてくれる。

変な人の集まりではないのだ、と、思い改めながらマックスハートへと帰っていく。

「あ、兄貴」

「ああ……お疲れ、大変だったな？」

「うん、色々だね」

同情の視線を三人はヒロキへと送る。ヒロキにとって今は、その同情の視線が心地よかった。

「とりあえず、かなっぺ！ ある意味だが気をつけるよ！」

「うん、わかってるよ。それにサーカスに付き合う気はないから一瞬で終わらせてくるよ」

かなは真剣な表情で言う。表情とは裏腹に何やらスカートの中をゴソゴソといじくっている。そのまま中央のバトルリングへと向かう。

スカートの中をいじるかなを、じっと見つめるワタル。

「……ワタル」

「なんだよ？」

「……やらしい」

冷ややかな視線を送る桐華。すかさずスカートから目線を離す。そして中央ではブルースのメンバーは既にスタンバイしている。かなも準備ができたのか「いつでもOK」な状態を作っている。

「それでは、中堅戦　鈴木次郎対相沢かな、の試合を行います」  
前試合の変な雰囲気は無くなり、緊迫感のある場が作られる。室田とは違い、目の前の鈴木はとも真面目そうな人相をしている。特徴的なのは異様なツンツン頭。どれだけ固めればそうなるのか、というぐらいの髪型である。武器は木刀、名前もそうだが髪型以外は至って平凡である。

「試合始め！」

黒子の合図により、予選第二回戦の中堅戦が始める。開始早々、鈴木は木刀で遅いかかってくる。それに対してかなは、右足をゆっくりと天に突き上げるかのように上げる。

「なっ……！？」

何故か、鈴木の動きが止まる。かなの目の前で中途半端に止まり、それにねらい澄ましたハイキックをくらわす。

ハイキックをまともに顔面に受け、人形のように倒れる鈴木。確認の為に黒子が近寄る。

「これまで。中堅戦はマックスハートの相沢かなの勝利とする。そして二勝した事により、マックスハートの勝利とします！」

わずか三秒足らずの電光石火試合に、室田の試合とは別の沈黙が訪れる。



## カウンターソード！

静寂。

そして、怒濤の歓声が巻き起こる。

まるで、一回戦目の再現。落星撃の時とはまた違ったインパクトを残す。わずか三秒足らずの電撃試合に見ていた人間全てがその偉業に歓声を送る。

ブルースの田中と室田も、まさか鈴木がこんなに呆気なく倒れるとは思ひもしなかったのか、ただ呆然と敗北という事実の前に立っている。

「あれは……凶器だな」

「うん、そうだね」

うつすらと、いや、明確に何が起こったのかわかるワタルとヒロキは、その事実に関手の事を同情していた。

「かなつぺ。あれは……セコいんじゃない？」

戻ってきたかなに、思つた事を口にしていた。

「え、何が？」

「いやだつて……なあ？」

かなの返答に困り、ヒロキに目を合わせる。ヒロキも返答に困り、目を合わせないようにしている。念の為に桐華にも助けを求めるが、相変わらずの無表情で助け船も意味がなかった。

「兄貴、リーダーは中央に集まらないと！」

ヒロキからの助け船があつた。結局はうやむやになったまま、黒子と田中が待つバトルリング中央へと向かう。

「ぬう……」

ブルースのリーダー田中が、納得いかない様子で低いうなり声をあげている。ワタルも気持ちが悪くなくなり、居心地の悪さに早く終わらせたい思ひだつた。

「一体……」

「うん？」

「一体、鈴木はなんでやられたんだ？ 過信しているわけじゃねえが、うちの鈴木があんな簡単にやられるなんて納得がいかねえぞ」  
話すべきか、黙っているべきか、ワタルは一瞬迷ったが結局話す事にする。

「あれはな……男の深層心理をついた巧みすぎるセコ技なんだ」

「セコ技だと？」

「ああ、スカートはいた女の子が、あんなに足を上げたら目の前にいた奴は何が見える？」

「……………むっー！」

「わかったようだな。そういう事だ、あとで色でも聞いてやってくれ」

それだけ言つてワタルは、その場を離れる。呆気ないといえばそれまでだが、とりあえず二回戦を突破できたのだ。次の三回戦はデーパーディーパー戦となる。

一回戦のリバティーズ。二回戦のブルース。この二チームとも予想以上の強さはあったものの、前評判だけをとると、デーパーディーパーの強さは圧倒的に上回るだろう。三回戦にいくまでの期間で、どれだけの戦力アップができるかに勝敗は分かれるといっても過言ではないだろう。

マックスハート陣地へと戻ると、仲間がワタルを迎え入れる。

「ま、何にしても次の相手は強敵で間違い無しだぜ！」

「…………デーパーディーパー。個々の能力は前大会出場時よりも上がってる。今の私達と同じくらいか、あるいは上か、それぐらいの力を持つてる」

現在のマックスハートと、デーパーディーパーの戦力を的確に言い放つ桐華。あまりの分析ぶりに全員が目を点にしている。

「……………と思う」

みんなの視線が痛くなつたのか「と思う」と付け足す。

「と、とりあえずだ。トーコの言う通り相手は強い事は確かだ、きっちり練習して強くならねえとな」

みんなが頷く。三回戦までの宿題は「各々のレベルアップ」であり、今以上に強くならなければならない。ワタルは「打倒速水」に向けて動こうと目標を決めていた。

「んだ。合宿ってわけじゃねえが、マックスハート内で練習試合でもやらねえか？」

「……練習試合？」

桐華が聞いてくる。ヒロキとかなは、既に察しがついているのか、了解したと言わんばかりの表情でワタルを見ている。

「まあ、つまりはチーム内でバトルする。いわゆる組み手とかってやつだな」

「……ふむ」

「僕と兄貴は暇があればやってるね、いつも僕がやられてばかりだけどね……」

「前になんとヒロキ君とでやったよね」

桐華はとりあえず納得した様子である。ヒロキとかなも、それなりに乗り気らしく、ワタルもつられてモチベーションが上がっている。

「よっしゃ！　じゃあ明日なんてどうだ？」

「……明日は無理」

「なんでだ、トーコ？」

「……だから私にはまだ武器が無いもの」

「じゃあいつなら良いんだ？」

ワタルの問いに少し考えた結果、明後日なら大丈夫、という結果になる。よってマックスハート内公認練習試合は七月二十三日に行われる事になった。一日だけの休養、その一日が終わったら熱い夏の日々が再び始まる。

ワタル達は、それぞれの帰路につく。

同日。予選第一会場。

ワタル達の試合が行われた予選第二会場から、場所を移したこの場所でFエンゼルとミラクルハイの試合が行われていた。

試合内容は先鋒の池が、相手の先鋒である火野ひのから貫禄の勝利をあげる。火野の攻撃は、池にガツチリとブロックされ、自分のプレ―をさせてもらえずに火野の完敗。続く中堅戦の速水仁と三坂の試合は、速水のボイコットによりFエンゼルの不戦敗で終わる。

後々に三崎達が問いただしたところ「あの場に殺れる相手がいたのか？」との事。

一対一で向かえた大将戦 天才三崎と花坂と一戦である。試合開始わずか三分の光景で、見物人はその三崎の剣技に酔いしれていた。

「はあはあ……つ、強い。これがあの天才の剣か……」

「ありがとう。しかし君の剣もなかなかのものだよ、是非もう一度でも手合わせ願いたいね」

既に切羽詰まった表情の花坂に比べ、相変わらず冷やかな表情と、爽やかな笑みを浮かべる三崎。炎天下の中にして汗もかかず、息も乱さずにただ試合をたんたんと進めている。

「くそつ、せめて一矢報いてやる！」

気合のかけ声と共に木刀を振りかざす、花坂は三崎に渾身の一撃を与えんと全力の攻撃に打って出る。

三崎は手に持つ木刀を腰に、鞘があるかの如くしまう素振りを見せる。勿論木刀の鞘などはない。まるで抜刀術でもするようなポーズでひたすら花坂の攻撃を待つ。

「うあああああ！！」

花坂は攻撃の間合いに入ると、一撃を三崎に繰り出す。まさに三崎にその攻撃が当たると誰もが思った瞬間、花坂の木刀は一瞬の剣線により弾かれる。その剣速をその会場にいた者が、見切れたかどうかもわからない。それ程の瞬剣。

カウンターソード

なみたながし

「三剣返技の一つ。涙流……超速の抜刀術、残像が出るぐらいの速度で打ち込む剣線なんだけど、ごめん見えなかったかな？」

嫌みとも取れる言葉だが、三崎がその台詞を言い終わると会場に大歓声が上がった。それと同時に試合終了。二対一にて、Fエンゼルが貫禄勝ちをする。

三崎への大歓声が降り注ぐ中、三崎はたった今負けて悔し涙を流す花坂を見る。

「君、二年だっけ？」

「……そうだ……。俺は負けたんだ、勝者が敗者にかける言葉なんてないはずだ！」

「……ふーん。あのさ、嫌みっぽくなっちゃったけど僕に涙流を見せたのにはワケがあるんだぜ？」

「む……？」

「君、良い剣を持ってるよ、だからこれはそのお礼。剣が好きなんだろ、お互いさ」

言うだけ言って、その場を後にする三崎。三崎が去ったその後も、会場には三崎コールが鳴りやまなかったという。

## 天使の輪！

七月二十二日。

前日に試合があつたにも関わらず、Fエンゼルチーム内は練習風景が見てとれる。といっても、主に練習をしているのは、いわゆる補欠組などであつて主力メンバーは姿を見る事ができない。

それというのも、主力メンバーの三人は顧問の石田先生に結果を報告する為に、職員室前に集まっていたからである。そしていつまで経つても職員室に入れないのは、池と仁の二人のせいでもあつた。「仁、昨日はどうして試合を放棄した？ お前はもうただの不良ではないんだぞ」

「良いじゃねえっすか、どうせ勝つたんでしょ？ それにたかだか予選程度で殺られる二人じゃないんだろ？」

真面目で厳格な態度を以て仁に接する池に対して、反省している態度もなくいつものながらの態度で話す仁。相対的な二人の正確がみ合うはずもなく、仁がFエンゼル入りしてから毎日のように喧嘩が絶えなかった。

「そういう事を言っているんじゃない。もっとスポーツマンらしく……」

「スポーツマン？ ハッ、俺は石田に殺人許可をもらったからいるだけだぜ。スポーツなんてちやちな考えでやってるわけじゃねえよ」池の言葉を遮つてまでも、自分の言葉を並べる。いよいよ空気が殺伐としてきた頃合いを見計らい、三崎が二人の間に入る。

「はい、そこまで。二人とも喧嘩するなよな。職員室の前だし……騒ぎを起こすのはまずいだろ？」

「……すまない。熱くなりすぎたようだ」

自分にも非があると考え、素直に三崎の言葉に従う池。やっと収まってくれたかと安堵の顔を見せる三崎を余所に、仁は続ける。

「ハッ、こりゃ傑作だぜ」

仁の言葉に三崎と池は、仁に視線を送る。だが仁は言葉を出すわけでもなく、ただ笑っていた。

このままでは仕方がないと判断し、池に合図をして半ば強引に職員室へと入室する。

「失礼します！」

職員室に入った際の決まり文句を言い、石田先生を探す。言ってしまうはどこにでもいる中年のおじさんなのだが、職員室内で石田先生を発見するのは容易で、見つけるとそそくさと石田先生の元へと向かう。

「石田先生。昨日の試合の報告をしに来ました」

「ん、ああ。ご苦労でしたね、結果はみんなの顔を見ればわかりますが……どうしたんだい？ 三人ともどこか陰しい雰囲気だが……？」

年の功とはよくいったものの、石田先生には今のチーム内の雰囲気や掴めるらしい。現在のチーム内部状況を、報告するべきか三崎は迷っていた。その三崎の仕草を見据えた石田先生は、ある提案を出した。

「ふむ……仁、君はちよつとここに残ってはくれんかな？」

「……構わねえぜ、じじい」

「仁、お前、先生に向かってその口の利き方は……！」

池がほとんど怒ったような口調で仁に注意するのを、石田先生は手で制する。その後、三崎に目配せして合図をすると、三崎は言いたい事がわかったのか池と共に、職員室を後にする。

「さて……仁。私は、別にお前に仲良くしろとは言わんよ」

「ああ、まさかその程度で俺を呼び止めたのか？」

「まさかな……だが、お前を少し押さえつける為にな、一つ約束をしてくれんか？」

「なんだ？ 殺人許可の取りやめなら聞かねえぜ？」

変わらぬ態度を見せる仁に、真剣な目つきでその視線を仁に向ける。その眼光にやられたのか、仁もいつもの軽口を叩かなくなり、

石田先生の目を見る。

「あまり、人に知られたくない事だから小声で一回しか言わない、よく聞いてくれ」

「ああ……」

「私はね………なんだ。だから………を見せてほしいんだ。その為に仲良く協力しろなんて言うつもりもないし、仁も聞くつもりはないだろう？　だが、戦天使の三人が力を合わせれば、それは叶う事なんだと解釈しているよ」

「………じじい！？」

それ以上、石田先生は言葉を出さなかった。その場においても意味はないと考え、無言のまま職員室から退室する仁。そして仁が退室したのを見計らって、三崎が入れ替わりに職員室へ再び入室する。

「先生……」

「うむ。まあ、大丈夫でしょう。君たちは若いんですから、これくらい血の気が多い方が良いもんだよ」

「はあ………？」

いまいち煮え切らない表情の三崎に、石田先生は付け足す。

「それに、まとまりますよ。時が経てば崩壊している天使の輪は、かつての丸の形に戻るでしょう」

そう言って、石田先生は自分の手で輪っかを作る。あまり綺麗な輪ではなく、いびつな輪だったが三崎はあまり気にしていなかった。それどころか笑顔で天使の輪返しをしてみせる。石田先生の輪に比べて、三崎の輪は非常に綺麗な輪である。

「はっはっは………ふう。三崎君、あと一ヶ月です。頼みましたよ」

「………先生。僕は………普段のキャラ上では『やります！』なんて事は言えませんが、『全力を尽くします』と、とりあえず言っておきます」

「それで良いです。最後の一年、全力で、悔いを残さないようにやってください」

その後、ある程度の小言を話して三崎も職員室から退室する。退



室すると相変わらず、池が三崎を待っていた。

「今日は暑すぎるからな……部員には練習を切り上げさせて解散させておいた」

「サンキュ！ 丁度、石田先生にも言われてきたから丁度良かったよ」

「……なんの話を……いや何でもない。すまなかったな、さっきは熱くなりすぎてしまつて」

「いや、構わないさ。石田先生もそう言つてたし、僕もそう思う」

詳しく何を言っているのかわからないという表情の池。しかし長い付き合いから三崎が、何を言いたかつたのかを表情で判断する。チーム内のしこりは消えなかったが、何かが進展したとを感じる。

「そういえば三崎。マックスハートってチームは知っているか？」

どうやら今年はそこも優勝候補に入るみたいだぞ」

「マックスハート……彼のチームか。そうか、やつぱり上がつてくるか」

「なんだ知つていたのか？ 今現在で特筆すべき点はあるの『蹴り技格闘技の天才・相沢かな』が、いる事だな」

「相沢かな……？」

三崎は池の言葉に、違和感を感じる。「相沢かな」その名前が自然と口からこぼれる。

「知らないか？ わずか二、三年で高校蹴り技格闘技界の頂点に君臨したらしい。是非手合わせしたいものだな」

「本当にそれって相沢かなって名前なのか？ 相沢みな、じゃなくて？」

「相沢みな？ いや知らない名前だが、誰なんだ？」

「……いや、良いんだ」

変な違和感は拭えなかったが、今はそんな事で悩んでいる時でもない。今はチーム内をまとめる者として、そして最後の夏を勝ち抜く事に全力を注ぐと、三崎の頭の中に駆けめぐる。

だが、三崎には確信があつた。自分自身も去年に比べレベルアッ

プしている事もあるが、頼れる池の存在に、なによりも切り札ともいえる仁の存在が、三崎の考えを確信させている要素である。今年のリトルウォーズも前年に比べ、強豪が増えているがそれでも優勝はFエンゼルだという、絶対の確信である。

三崎の表情には、自信の二文字だけがあった。

## 二つのマジックガン！

七月二十三日。午前九時。

桐華は基本的に、いつも早起きである。毎朝、五時ぐらいには既に起床し、女の子らしく朝風呂を済ませ、ほとんど自分で用意した朝食を食べる。その後に、父親と母親が起きてきて桐華が作った朝食を食べる。

「ああ……桐華、今日も早起きだね」

これは半ば決まりきった、桜井家の朝の挨拶である。別に見たい番組があるわけでもなく、全員分の朝食を作りたいわけでもない。早寝早起きをしているうちに身に付いた習慣である。それに当然の事だが、桐華の父と母が起きるのが遅いわけではない。この朝の光景が見られるのは早朝六時半の出来事だからだ。つまり普段なら七時には父と桐華は、それぞれ会社と学校へと出て行く為家にいるのは母親だけとなる。しかし今は、学生の特権でもある夏休み中なので、桐華も家で少しの時をくつろいでいた。

「桐華、宅急便が来たわよ。出てちょうだい」

母親に応答するように頼まれる。桐華の母親の名前は桜井華織さくらい かおりという。

宅急便の応答の為に、印鑑など必要な物を持っていく。恐らくは自分の物だと桐華は直感でわかった。今まで散々言ってきた「武器が無い」という事態を解決する為の物である。

「どうも、お届け物です！」

そう言っただけで宅急便のお兄さんは、元気に挨拶をして目的の物を運んでくれてくれている。やや大きめだが、それでも小包といえるぐらいの大きさの箱である。外も朝だというのに相当暑いのか、宅急便の人は今の時点で相当な汗をかいている。汗が小包に落ちないようにしてくれているようだった。

桐華は必要な代金と、領収書へのサインを済ませる。すると宅急

便のお兄さんは笑顔で「ありがとうございます」と言っつて、足早に退却していく。

「……あ」

何かを言おうとした時には既に手遅れで、その人は既にトラックに乗って次の目的地へと向かう。丁寧な気配りをしてくれたお礼として、桐華はせめてお茶でも出そうと思ったが、時は既に遅かった。仕方がないので桐華は自分の部屋へと向かい、肝心の小包を開けてみる。そこには特注品と書かれた、さらに小さな箱が入っている。さらにその箱を開けると中からモデルガンの箱が二つ程出てくる。桐華は商品の箱を開けて、現物のチェックをする。一つ目は「M1911A1 ガバメント」と呼ばれる銃である。二つ目は「デザイ トイーグル」である。ガバメントはいわゆる普通の銃だが、デザイ トイーグルは女性が扱うには大きすぎるぐらいの大口徑ハンドガンである。ふと見ると、桐華宛に一枚の手紙があつた。

「桐華ちゃんの注文通りに仕立ててあるよ。ちよつとした噂で聞いたんだが桐華ちゃん、リトルウォーズに参加するんだつてね。この銃はその為の武器なんだと勝手に解釈させてもらったよ。だからその二丁の銃の調整もかなり念入りにやつておいたから安心してほしい。ちよつと特殊な魔法を組んだ魔法銃だ。<sup>マジックガン</sup>オモチャだが限りなく本物に近い。だが殺傷能力は備えていないので安心してほしい。…では、お得意様の桐華ちゃんが優勝する事を祈つて。マジックアバターより」

これが手紙の内容である。マジックアバターというのは、桐華が注文した店の名前であり、店の主人の名前でもある。実際にマジックアバターなんて名前ではないとは桐華も思つてはいるが、自称「魔法使い」と言っているだけあつて、この世界の住人ではないのかもしれない。桐華もそんな不思議な雰囲気魅入られて、一目でお気に入りになつた。

早速、魔法銃といわれる二丁のチェックをする。いわゆる弾を入れるマガジン部分に特殊な改良が加えられている。弾を入れるので

はなく水を蓄えるタンク。そうつまり水鉄砲である。

「……時間」

時計を見ると、約束の時間である十一時になりかかっている。母親に出かける旨を伝えたと、早速届いた二丁の銃を持って、約束場所の公園と向かう。

今日も相変わらずの晴天である。ここ数日間、ずっと夏の太陽がてりつけていて、朝に流れるニュースなどでも熱中症対策を題材にした、特集が毎日のように組まれている。

「あっちー！　かなつぺとトーコはまだか！？」

「仕方がないよ、女性陣は色々と準備があるだろうし」

「準備って何だよ？」

「男の僕に野暮な事を聞かないでくれよ、兄貴」

練習試合をしようと約束をしている。待ち合わせ時間は午前十一時のはずなのだが、興奮して待ちきれなかったワタルによって、一時間も早く一緒に待たされるヒロキ。待ち合わせ場所にもなっている「いつもの公園」には毎度の事だが何もない為に、日陰も無く、この炎天下の中を直射日光全開で浴び続けている。既に練習試合前から暑さで目が霞んでいるヒロキを尻目に、相変わらずの元気で、この暑さを苦にもしていないワタル。

「……暑い……」

あまり言うものではないのは、ヒロキ自身もわかっていたが、つい口から定番の言葉が出てしまう。しばらくボーっとしていると、あまりに暇だったのかワタルは素振りを始める。その素振りをしている光景を見ているのも嫌なヒロキは、ワタルを視界に入れないようにしている。

「……待った？」

「おわっ！？」

いつの間に来たのか、桐華が立っている。ワタルもヒロキも突然の出来事にパニックになる。と、いっても実際にそうなっているの

はワタルのみで、ヒロキは完全に暑さでダウンしている為に、既に  
つつこみすら億劫おっくうになっている。

「お、それがトーコの武器か？」

「……うん」

「へー、モデルガンか。ガバメントとデザートイーグルですね？」

ヒロキは桐華の銃を言い当てる。お金が無いから買えないという  
だけで、ヒロキは銃好きでもある。実際、このリトルウォーズもあ  
ればエアガンを使おうと思っていた程である。実剣と実銃の使用禁  
止とあるだけで、実際のところガスガンやエアガン、はたまた電動  
ガンなどの使用は、事実上認められている事にヒロキは気づいてい  
る。桐華もその落とし穴を見抜いた故の武器選択なのだと、直感的  
に見極める。

「な、なんだ。そのガバガバってのは？」

「兄貴、それ下手したらセクハラだから気をつけてね。まあ是非と  
もガバメントについて語りたいんだけど……」

自主的にその先の言葉を引っ込める。一度話し始めると延々と話  
が続くという事にヒロキは気がついていてる為だ。助けを求めるよう  
に桐華を見ると、まるで同士を発見したかのような瞳でヒロキを見  
ている。

「……今度、一緒に語りあいましょう」

「喜んで！」

実際に喋ったわけではなく、アイコンタクト上の会話である。

「……相沢さん、遅いね」

とりあえず助け船は出しておく。だが、時計を見ると既に十一時  
十五分であり、約束の時間を少々オーバーしている。しかし一向に  
来る気配が無い事と、この項垂れるような暑さで心配するどころで  
はなかった。それから十五分後の十一時半。

「おっ待たせー！」

「おっせえぞー!!」

待ち合わせ時刻から三十分遅れて、たった今、相沢かな到着。

長い時間、この暑さの中にいたせいで、ヒロキはほとんど死に体になっていく。桐華でさえも既に涼しい顔はできずに、見るからに「暑い」と言っているのが伺える。直前までワタルですら、ぐったりしていた。

「ごめんごめん。代わりに冷たいジュース買ってきたから飲んでよ！」

「ちっ、この暑さで待たせたんだ。ジュースぐらいで収まるかっての！」

かなはコンビニで大量に買ってきたコーラを配る。

「って普通はスポーツ飲料水とかだろ？」

「男なら細かい事、言わないの！」

遅れてきたのを説教していたはずが、いつの間にかに叱られている事に気づく。かなは、ヒロキと桐華にコーラを配っているようなので、仕方が無くワタルはコーラを口に運ぶ。冷たい炭酸が喉を駆けめぐっていく感覚に浸っている。

「ワタル君」

炭酸の余韻を楽しむワタルに、かなから突然話しかけられる。

「なんだよ？」

「今日はかなが戦いたい気分なの。ワタル君、お願いできるかな？」

「……いや、かなっぺの相手は俺じゃねえさ」

その言葉に一同がワタルの方を向く。かなの相手をワタルはしないと言っただ。

「今日の対戦カードは……かなっぺとトーコだ！」

ワタルの思いつきか、考えがあつての事が、今回の練習試合は女性陣二人の試合となった。

## かなと桐華の戦い！

ワタルの提案により、かなと桐華の戦いになった。かなは何故だか妙に好戦的になっていているのに対して、先ほどの暑さの顔は見せずに再び無表情に極めて冷静に、準備を進める桐華。

「兄貴、何か考えがあつての事なの？」

「考え……って程の事じゃねえが、かなっぺは好戦的になっている、だから戦わせて発散させた方が良いだろう。それにトーコに至っては登場したは良いが、ここまで一切の戦闘が無い。そろそろ戦わせておくのがベストタイミングだろう」

あまり大した考えではなかったが、ワタルなりの考えがあつての事だったのは確かだ。どっちにしても止める事はできないし、止める意味もないと判断したヒロキは、目の前で進んでいく光景を静かに見ている。ただ一つ心配なのは、かなの強さに対して桐華は戦えるのかという事だ。もしも、桐華の強さがヒロキ自身と同程度ならば桐華は一発でやられる。それだけならまだ良いが、大怪我をしてしまうかもしれない。女の子だからという理由だが、これはヒロキなりの配慮のつもりだった。

「よっし二人共、準備は良いな！？ 試合時間は予選と同じく十五分な！」

準備が整ったと判断し、ワタルが大きな声を出して仕切り始める。かなは既に説明も不用な、足技である星蹴拳だろう。あるいは足技格闘技に値するどれか。桐華は先ほど見せてもらった通りだが、武器は銃である。エアガンやガスガンに該当するものだがカスタムガンであり、その実体はウォーターガンである。言ってしまうえば水鉄砲だが、この銃の特筆すべき点はマジックアバターという自称魔法使いが作成した魔法銃であるという事だろう。

かなも、桐華も、お互いに準備は万全だという雰囲気を出す。それを感じ取ったワタルは試合開始の合図を出す。



「んじゃ、始め！」

ワタルの声と同時に試合開始。

桐華が銃であるという事は、かなは如何に桐華に接近して懐に入り込むか。それとは逆に桐華は如何にして、かなの接近を許さずに自分の距離を保っていられるかだ。かな自身もそれがわかつているのか、巧みなフットワークを使い、桐華に接近を試みる。桐華もその接近を予測してか、始まった瞬間から既に距離をとり、一丁の銃をかなに向ける。その銃は「M1911A1 ガバメント」である。桐華はガバメントで、かなを狙い打つ。するとガバメントからは本物さながらの爆発した発砲音が響きわたる。まるで漫画に出てくるような気功弾のように、目にも止まらぬ速さで標的に向かっていく。これをかなは、当然の如く足技で対処にかかる。直進してくる水弾を迎撃するように前蹴りを放つ。

「っ……!？」

蹴りと水弾が当たると、かなの体が衝撃でブレた。

かな自身、この弾を避ける事など造作もない事である。しかし確かめたい事があったのだ。それは桐華の持つ銃の「威力」だ。中距離あるいは遠距離主体の相手と戦う際は、十中八九今のかなと桐華の構図になる。接近する際に確かめられる事の一つとして、相手の攻撃力。つまりは相手のストッピングパワーを知る事が必要になる。その結果として導き出された答え。

「受けてたら下手に体力の消耗しちゃうってわけね……」

やはり回避主体。相手はハンドガンであり、事実上の連射能力は無いとみて良い。どうしても避けられない弾だけを迎撃するという答えに至る。

一方の桐華は、弾幕として水弾をばらまく。先の先を読んで弾を回避するかなに、当てるのは非常にきびしいと桐華は思った。事実、かなは紙一重で避けてはいるものの、どこかに余力がある。ここで桐華はこのマジックガンの機能を使った作戦を使う。それは威力を落として弾数を増やすというもの。

「……セツト完了」

恐らくは改良の際に、マジックアバターが取り付けたものだろう。威力調節用のダイヤルを最低にまで落とす。手に響くブローバックの衝撃と水の威力が弱められた事により、トリガーを引く速度が飛躍的に上昇する。だがそうする事で一つだけ問題点があった。威力が弱められた事により手数は上がる。現にかなは避けるのが精一杯になり、いよいよ迎撃にでる。

再び、水弾と蹴りが激突する。が、一回目の衝突とは違い、かなの体がブレる事がない。

「手数が増えたのはそういう理由ね……でも付け入る隙かな！」

威力を落とした桐華のガバメントは、痛くないといえば嘘になる威力である。しかし、かなは判断した。この程度のダメージならガードして一直線に進んだ方が早い、と。かなはめずらしく、手で弾をガードして突き進む。今まで一定の距離を保たれていたが、その間合いは試合開始から初めて大幅に縮まる。

「……くっ……！」

「せいっ！」

そのまま懷に飛び込むと、かなはローキックを繰り出す。逃げる相手にミドルやハイを当てる必要はない。それにこれまで接近を許さなかった桐華が、そんな大振りの隙を見逃すはずがない。機動力のある相手を落とすには「足」を止めさせる。

しかしそのローキックすらも間一髪で避けられる。再び、かなと桐華の差はふりだしに戻る。

桐華は決して、ワタルやかなのように、元々の運動能力で戦っているわけではなかった。全ては予測と頭の中で超回転している思考能力による先読みである。

「あれを避けるなんて桐華ちゃんやるねえ。シチュエーションはちよつと違うけど、ワタル君と戦った時の事を思い出すかな」

「……スー……ハー……スー……ハー……」

身体能力と体力の面では、やはりかなが有利である。桐華は今ま

での攻防で息が上がっている。桐華にとってはこの間は体力の回復と、水切れ寸前のマガジンを代えるには絶好の機会である。新しいマガジンに代えると、ふともう一丁の銃　デザートイーグルが目につく。初弾をガバメントで撃った時の威力から、デザートイーグルだけは仲間に使うべきではないと考えていた桐華だが、かなの戦闘力を前にして、そんな事を言ってもいられない状況になる。

「……五十口径ハンドガン」

ガバメントよりも、正確には通常サイズの全てのハンドガンよりも、一回り以上の大きさを誇る大口径ハンドガン　いやハンドキヤノンといった方が正しいのかもしれない。

通常サイズのハンドガンでさえ、威力はかなの蹴りとほぼ同等である。このハンドキヤノンがもしも、かなに直撃したらと思うと、桐華のデザートイーグルを持つ手は震え出す。

「残り時間五分だぞお！」

ふと、戦いに集中しすぎていたあまり試合時間の事を、かなも桐華もすっかり忘れていた。

「ようし、時間も無い事だしね。桐華ちゃんラストスパート！」

かなは、やはり余裕のある声で、再び前進を開始する。桐華もその前進を妨げるように、ガバメントで弾幕を形成する。だがコツを掴んだのか、あるいは集中力が更に高まったのか、弾幕重視の戦いでさえ、かなの前進を少しでも止められなくなっていた。

桐華は思う、かなの凄い所は蹴り技でも、身体能力でもなく、わずかに短時間の攻防で相手の攻め方を理解してしまう「学習能力の高さ」なのだと。

完全に水弾は当たらなくなる。そして懐を捉えたかなは、桐華の足を狙う。これも先読みでなんとか避けきる。しかし避け方は初撃よりも危うい。恐らくは次の一撃で完全に捉えるだろう。

「……覚悟を決めて、桐華」

自分で自分に言葉をかける。練習試合故にある程度の手抜きは簡単だった。だが、それは桐華自身が許さなかった。何よりもワタル

がそれを許すはずがない。

「……マックスハートは全力の心だ。全力でやれば……」

「……できない事はないっ!」

桐華は距離をとる事を止め、その場に立ち止まる。ガバメントの威力を最大に上げて、かなに対して狙いを定める。かなも、桐華の気迫を感じ取り立ち止まり、そして距離を少しだけ離す。

「……相沢さん、威力を最大まで上げました。避けてください、相沢さんなら避けられるはずです」

「な、何を……?」

桐華は照準を、かなから少し手前の地面へと向ける。

「……トリックワン!」

ガバメントの銃口から、最大威力に調整された水弾が放たれた。

## リフレクターバレット！

放たれた水弾。それは、かなに向かうわけでもなく、地面に向かって真っ直ぐに飛んでいく。

「おいおい、水なんか地面に向けたら染みこんじゃうぞ！」

咄嗟に言ったのは、ワタルだった。その場にいたヒロキも同じ考えをしている。どんなに勢いがあるうとも、威力があるうとも、大概は地面に染みこんでしまう。まして公園の土の地面ではなおさらである。

しかし対峙している本人であるかなは、桐華が何の考えも無しにそんな行動をするはずがない、と、考えている。これはわずか十数分の戦いの事からの推測である。わずか十数分の出来事だが濃密な時間であり、戦う者にとってはこれだけで、お互いの事がある程度だが把握していた。

「っ……！？」

そして放たれた水弾はついに地面へと激突する　そして弾は跳ねた（・・・）。

「……嘘！」

「マジかー！」

「ありえない……」

桐華以外の三人の反応である。三人の反応も当然だろう。水が地面に染みこむ事もなく跳ねる。どう考えてもありえない出来事が三人の前で起きたのだ。

そしてまさかの跳弾を避けきれずに、かなにヒットする。かなは避けきれないと判断し、咄嗟に後方へと飛びながら、持てる力を腕に込めて水弾をガードする。

「かつは……！」

衝撃が体を突き抜ける。ガードした腕は痛さを通り越して麻痺している。何よりも衝撃は腕を通り超えて内蔵にまできていた。まる

でボディーブローでも喰らったかの衝撃。そしてそのダメージはそのまま、かなの足を止めるのに十分すぎる一撃になる。

「……トリックワン。跳弾する弾」  
リフレクターバレット

これがトリックワンの正体。通常ではありえない水弾の跳弾。桐華の銃を扱う技量と、マジックアバターの作ったマジックガンが、融合して初めてできる究極技である。そして通常ではありえないからこそ、デザートイーグルを使わなかった。いざ戦ってみて桐華は、かなの強さを身に染みてわかっている。だからこそ使わなかったのだ。

「……今のがデザートイーグルなら……正直やばかっただろうね」  
「ヒロキ……。そんなに、なのか？」

「うん。ガバメントの威力が、水鉄砲とはいえそっくりそのまま再現されている。だったらデザートイーグルの一撃も再現されていると判断してもいい」

かなは決して体格に優れているわけでもない。防御力という観点で見えてしまえば、一般の女の子と大差はない。だからこそ防御したとはいえ、悶絶するのは当たり前である。その証拠に、かなはまだ動かない。

そんな動かない相手に対しても、桐華は極めて冷静に水弾を撃ち込む。大きなモーションで避けられないと判断したかなは、転がりながらも弾の軌道を読み一つ一つ丁寧に避けていく。ハイパワーに設定したガバメントの弾速では、今のかなですら捉えられないと判断した桐華は威力を落として、再び手数重視で押していく。かなは半死人も同然であり、桐華が勝つにはこのタイミングを逃すわけにはいかない。

しかし、手数重視にしたにも関わらず、かなは全ての水弾を避けきっている。そこに華麗に避けるいつもの姿はなく、砂埃にまみれながら無様に転がり避ける。

（……さすが相沢さん。これだけ撃ち込んでも全部避けてる。でも……何でそこまでボロボロになるのですか？ トリックワンがヒッ

トした時点で降参しても、誰も咎めはしないというのに……何が貴方をそこまで『勝利の執念』を燃え上がらせるんですか？)

埃まみれになり、無様に転がり続けても、桐華はそこに執念を見ていた。

練習試合。仲間同士の試合。敵チームとの戦い。かなには変わらない勝利の執念がある。それは仲間である桐華に対しても同じ事である。

「……でも、私も負けられない。ワタルが見ているから」

桐華は通常の弾の軌道に加え、トリックワンを含めたりフレクタ―バレットを軌道に加えて、かなを仕留めにかかる。

「兄貴……ちよつと止めた方が良いよ。二人ともかなり熱くなってるよ！」

二人のただならぬ雰囲気は危険と悟ったヒロキ、は残り時間に関係なく試合を止める事を提案する。

「いや、あと三十秒だ」

「兄貴っ！」

「三十秒だ！」

たかだか三十秒。しかしかなと桐華の戦いは三十秒あれば、致命傷になり、選手生命を失ってしまうレベルの戦いなのだ。現に二人の雰囲気は既に試合ではなく、ただ自分の勝利の執念のみの戦いになっている。

そしてラスト五秒、最後に試合が動く。ガバメントから水弾が発射されなくなったのだ。

(……弾 (みず) 切れ!?)

わずか五秒。このチャンスをかなは見逃さなかった。今まで攻撃に転ずる事もしないで、ただ転がり回避し続けていた。全ては最後のチャンスを逃さない為に。全ては今できる最大攻撃を当てる為に。

「星蹴拳……！」

「……っ!？」

ただ真っ直ぐに走るかな。その突進力はこの試合中で最速の動き。

桐華は迷っている暇は無かった。いや迷うという事さえもしなかった。ただ反射的にもう一丁の魔法銃のデザートイーグルを向けて発射していた。

「星蹴撃!!」

凄まじい爆音にも似た号砲と共に、デザートイーグルから水弾が発射される。そしてその水弾と、星蹴撃は激突する。再び爆音が響く。デザートイーグルの弾は、かなの星蹴撃によってかき消される。しかし、かな自身も弾の威力により大きく後方へと吹き飛ばされる形になる。

「そこまでだ! 二人とも!」

試合終了。たった十五分の試合だったが、そこで見ていたワタルとヒロキ。いや戦っていた二人こそが最も長い十五分を終えたのだろう。

「この勝負……引き分けだ」

ワタルなりの配慮はしていた。ワタルの正直な感想は、終始桐華が安定したペースで試合をコントロールしていた。時間切れ引き分けであったものの、内容的には完全に桐華が押していたのは変わらない。

「……いいよ、ワタル君」

静かに言い放ったのは、かなである。表情は読み取れないが、声色はどこか震えている。

「かなの負けだよ、桐華ちゃんの勝ちだよ。また修行のやり直しだね!」

服の砂埃を払いながら、明るい声で言葉を発する。だがやはり、その表情はまったく見えなく読めない。

「かな……?」

「ごめんっ。先に帰るね」

「おいっ!」

「ほら、結構汚れちゃったし……シャワー浴びたいから」

有無を言わずに、かなは足早に走っていつてしまう。その背中



をワタルとヒロキは見送っていた。

「……相沢さん。きつと今よりも強くなる」

「トーコ……？ ……っふ。そうだな、でもな」

「……？」

「別に悪いって言うわけじゃねえが、女の子が男を差し置いて熱血バトル漫画の展開にならないでくれ」

白熱しすぎてしまい、後味の悪い練習試合になってしまったが、名目上は引き分け。そして事実上のかなの初敗北という形で練習試合は終わった。よく見ると桐華もかなりの汗をかいている。この暑さでは立っているだけでも汗をかく。あれだけ激しく動けば当然の結果である。

「トーコ。お前も家に帰ってゆっくり休めよ」

「……でも」

「大丈夫。オレサマとヒロキは適当にやってるさ、いつだってそうしてきた」

アイコンタクトでヒロキに合図すると、大きく頷くヒロキ。

「……わかった。試合……というよりも、この暑さには気をつけて。熱中症になったら大変」

「ああ、わかってる」

数分の休憩後、桐華も一足早く家路につく。

「さってヒロキよ。次はオレサマ達の番だ！」

暑い炎天下の中で、熱い赤いハチマキを額に巻き付ける。

## 二人を巡る齒車！

「さあ、オレサマ達もやるか！」

暑さに負けないように、気合を入れて腹から声を出すように言葉を出す。全員集合までの待ち時間。十五分とはいえ、かなと桐華の戦いを見ている。ワタルもヒロキも正直な話、あまり長くはいられない。

「兄貴……本当にやるの？ 熱中症になっちゃうよ……？」

「うむ……確かにやらないというのも考えたけどな。でも男に二言は無え！ やるといつたらやる！」

それはトレードマークの赤いハチマキにも表れていた。これも長い付き合いからか、赤いハチマキをしたワタルは「やる」といつたらやる」男である。ヒロキはそれを手に取るようにわかっていた。

「ふう……」

色々な感情の入り交じった溜息を一つ。用意してあった木刀を構える。勿論の事だが、手抜きや手加減などしようものなら、後々ワタルにどんな罰ゲームを出されるかわからない。故にヒロキはどんなに暑くても、辛くても、全力でこの試合を臨まなければならない。

「よし、良いぞヒロキ」

見せつけたヒロキの気迫が嬉しいのか、あるいは暑さのせいなのか、ワタルの目はやけにギラついている。ただそれに不気味さは無い。むしろ歓喜の不気味といった方が良いのだろう。

「試合時間は同じく十五分。ストップウォッチで時間はわかる予定だ」

「わかった。十五分だね、兄貴。……あ」

ヒロキは何かを思い出したかのように言葉を出す。

「どうした、何か忘れ物か？」

「いや、兄貴さ、僕たちの戦いがこれで通算何戦目になるか覚えてる？」

「なんだそんな事が……九百九十八戦、九百九十八勝の零敗零分だな、これはオレサマの記録だが」

「ははは……僕の負け越しなんだよね。……もうそろそろ僕たちの戦いも千戦目だね」

「ああ、千戦目の勝利もオレサマが頂くぜ」

「そうは、いかないさ！」

二人はお互いの木刀を、相手に向け構える。二人揃って既に見慣れた構え。だから二人に合図は必要なかったのだ。

「よっしゃあ！」

「ふっ……！」

お互いの心のタイミングというのか、それが合図となり、その剣を交差させる。重く強い攻撃をヒロキへ。鋭く切れる剣線をワタルへ。これが二人のいつも通り。

最初の牽制は力で勝るワタルがヒロキを強引に吹き飛ばす。この強引さをわかっているからこそ、ヒロキは吹き飛ばされても難なく着地をする。そしてワタルは、容赦なく力任せの攻撃をヒロキに浴びせる。

「ぐっ……！」

その一撃を剣を盾にする事によって受ける。受けたところでワタルの豪腕を、ヒロキが完全に受けきれぬわけでもなく、衝撃により後ずさる。間髪入れずに再度、ワタルからの追撃を受けきる事ができずに、ヒロキは大きく後方に吹っ飛ばされる。

「イ……テテ。くそう、わかってはいるけど、全く反応できない」

言葉通りの意味である。何戦もこなしているからこそ、二人はお互いの手の内や呼吸がわかっていた。しかし、ヒロキからするとわかっていてという程度のものであり、わかっていても圧倒的な戦闘能力を備えるワタルを相手に、何とか受けきるのがヒロキにできる精一杯である。

「バカ。お前が攻めないただけだぜ。もっと攻めてこいよ」

「わ、わかってるさ。わかってはいるけど……」

わかつてはいるけど、攻撃できない。それはヒロキのできる事なら相手に痛い思いはさせたくない、という考えからくるものである。今までの戦いでも時として攻撃はしていたものの、それでもヒロキは極力攻撃を控えていた。

「わかつてるよ、ヒロキ。お前は優しいからな……でも攻撃しないとお前が攻撃されちまうんだぞ？」

「そう、なんだけど……」

「……ふう。止め止め」

「え、兄貴？ 大丈夫だよ、僕はやれるよ」

「暑いんだよ、これ以上やったら本当に熱中症になっちまう」  
聞く耳持たず。ワタルは突然試合を止めて帰ってしまう。

「お前も早く帰って頭冷やせよな！」

「え？」

「暑いからな！」

それだけ言って本当に帰ってしまった。誰もいない殺風景な公園の真ん中に、ヒロキは一人取り残された。

「兄貴。怒ったんだろうな……そりゃそうか、兄貴、あまり態度に出さないけど本気で優勝目指してるんだから」

一人、真夏の太陽がある空を見上げる。晴天ともいえる天気で、雲もほとんど無い。あるのは眩しいぐらいに照りつける太陽だけだ。その太陽の熱が自分を包んでくれているのが、ヒロキにとって心地よさを感じさせてくれている。

「僕は……強くならなくちゃいけないんだ。肉体的にも、精神的にも」

砂利を踏みしめる音が聞こえる。自分の考えに夢中で、人の接近が全くわからなかったのだ。

「もし。ちよつと良いですか？」

見るとこの暑さなのに、長袖の紳士服を着た老人が立っている。老人と判断したのは髪の毛、そして立派な口髭が白に染まっていた為である。何よりも物腰が非常に落ちついている。

「えっと、貴方は？」

「失礼。私はこういう者です」

老人は胸ポケットから名刺を取り出し、それをヒロキに手渡す。

「……なんですか、これ？」

「一言で言ってしまうえば、貴方を強くしてさしあげようと思ひまして」

「いや、それは名刺を見ればわかるんですけど。これってその……道場みたいな感じの？」

「まあちよつと違います、コンセプトとしては、似たようなものですな。今すぐ返事がほしいわけではない。ゆっくりと考えてくれても良い。但し時間はそう長くは取れない、だからできる限り急いでほしいんだ」

老人は名刺とその言葉だけを残し、その場を立ち去ろうとする。

「あ、あの、なんでこんな事を？」

「なんで……ですか。君には才能があります。一週間……一週間だけでも私の所へ来ていただければ、君を先ほどの少年の強さに匹敵するぐらいの、能力アップをしてさしあげましょう」

「兄貴に、匹敵する……？」

公園の外に待たせていたのか、老人は高級そうな車に乗っていつてしまう。

「一週間で兄貴に匹敵する？ そんな事が、だって兄貴は僕よりも数段強くて、憧れで」

ヒロキは悩んだ。それしか頭の中に無くなる程に。それぐらいに老人の言葉と要求はヒロキを突き動かしていた。何よりも自分自身がワタルと同等近い能力を備えれば、リトルウォーズ優勝に一步近づく事ができるのだから。だが、一週間である。一週間の間には三回戦目にあたるディーパーディーパー戦がある。いや日程の組み合わせによつては、そのまま四回戦も通り返してしまうかもしれない。たつた。

「……大丈夫、きっとみんな勝つさ」

携帯を取り出して、登録されている電話帳からワタルの番号にかける。

突然響いた携帯の着信音。誰かと思い携帯を確認する。

「ん、ヒロキ？　なんだよ一体。もしもし、ヒロキか？」

「あ、うん。兄貴ちよつと話があるんだけどさ」

「なんだよ、別にさっきの事は怒ってないぜ？　次がなければ良いんだからさ」

「いや、うん、それもあるけどね。ちよつと一週間だけチームから離れようと思うんだ」

突然の提案に、ワタルは目を丸くさせる。普段から突拍子もない事を言わないヒロキが、突然こんな提案をしてきた事に心底驚いていた。

「突然、どうしたんだ？」

「いや、本当に一週間だけだから。もっと強くなつて戻ってくるからさ」

「……お前……いや、何でもない。一週間だな、なら三回戦は絶対突破してやる。だからちゃんと戻ってこいよ？」

「うん、絶対に戻ってくる。兄貴、優勝しよう」

「……当たり前だろ」

そのまま携帯の電源を、二人同時に切る。全ては突然の出来事。

これは偶然なのか必然なのか。二人を巡る歯車に歪みが生じ始めた。

カナトミナ？！

携帯の電源を切ったワタルは、同じくして空を見上げている。場所が変わっても全く変わらぬ、真夏の太陽がワタルを照らす。

「ヒロキ……信じてるからな」

三回戦のディーパーディーパー戦へ向けて。その為の戦力強化を図った練習試合だった、だが思っていた方向とは予想もしない事が起きてしまっている。微妙ながらも陰悪な感じになってしまった、かなと桐華の今後。突然のヒロキの申し立て。まとまるはずのチームが少しだけ、バラバラになっていくような錯覚がワタルを襲っている。

「バカ、信じるワタル。仲間を……信じるんだ」

今はそれしかできない。もう戦いは始まっているのだ。何があるかと優勝へ向けてマックスハートは走っている。そして仲間達も思いは違えど、優勝の二文字を共に目指してくれているのだ。リーダーとして今のワタルにできるのは信じて待つ事のみだ。ワタルはおもむろに、携帯を取り出し電話をかける。

「……はい」

「あ、トーコか？」

「……ワタル？」

「ああ、無事に家に着いたか？」

少しの間があったが、桐華はいつもと変わらぬ口調で話す。

「……うん。無事に着いてる。どうしたの？」

「いや、ちよつとな。ほら、今日なんか少しだけ陰悪な雰囲気になっちゃったろ？ それで」

「……相沢さんの事？ 大丈夫、相沢さんと私は別に喧嘩になつてるわけじゃないから。それに相沢さんはそんな人じゃない。見た目通りもつとサッパリした性格の人、ただちよつと感情的になっただけだと思う」

たった今、戦った者が感じ取った事だからか。同じ女だからなのか。いまいち理解できずにワタルは話を進める。

「あ、ああ。まあ。大丈夫なら良いんだけど、さ」

「……何かあったの？　ワタル、何か迷ってる」

「いや、大丈夫。とりあえず今日は休めな、三回戦の日程が決まったら即連絡するからよろしくな！」

電話を切ると、妙な虚しさがワタルの心にあった。「何か迷ってる」そんな桐華の言葉が何故か心を刺している。何が刺しているのか、何故刺されているのか、今のワタルにそれを知る術は無かった。桐華は大丈夫だと言っていたが、ワタルは気になっていた為に、かなにも電話をかけてみる。しかし、数回のコールをしたにも関わらず、かなは電話に出ない。

「……ふう。まあ、トーコの言葉を信じよう。俺ってこういう時に無力だな。こういう時っていつもヒロキが……やめよう。ワタルの馬鹿野郎。一週間じゃないか、テメエはヒロキの兄貴分なんだろう？　しっかりしやがれ！」

自分で自分に喝を入れる。とにかく雲がかかったような、モヤモヤした感情を晴らしたかったからだ。

同日。相沢かな宅。

そこには浴室で頭から冷水を、自ら被るかなの姿がある。その表情は相変わらず見えない。ただ頬をつたうものだけが確認できる。シャワーを止めて、そのまま浴室を出る。バスタオルで全身を拭き、新しいバスタオルで頭を拭きながら、二階へと上がっていく。そして自分の部屋へとたどり着くと、倒れるように自分のベッドに横になる。そして飾ってある妹の相沢みなとの写真を眺める。

それを眺めていると、まるで引つ張られるかのように睡魔が襲い、かなを暗闇へと誘う。

目が覚めた先は、自宅の庭だった。そこには死んだはずの妹、みなとの姿がある。かなは一瞬でこれが夢の世界なんだと認識する。



しかし夢の中とはいえ、目の前にいるみんなの事が気になっている。とても悲しそうな、いや悔しそうな表情を浮かべている。そしてその表情と共に、蹴りの練習をしている。その蹴りは夢の中とはいえ鋭く、当たれば致命傷は免れないだろう。

「もう、お姉ちゃん聞いてる!？」

「……え？」

みなは、かなに話しかけた。かなも夢の中の自分は第三者だとはかり思っていた為、ピンポイントで自分が呼ばれるとは思っていなかったのだ。かなは夢の世界であると考え、適当に話を合わせようとする。

「え？　じゃないよ、全く！　悔しいよ、負けちゃったよ！」

「……どうしたの、みな？」

「また試合に負けちゃったの。あと少しって内容じゃないの、なんか完敗したような感じ！」

「負けたんだ、じゃあ今のかなと一緒にだね」

みなはその言葉に、少し驚いたような表情でかなを見ている。

「お姉ちゃんも、負けたの？」

「うん、完敗ってわけじゃないけど、紙一重な内容でもなかったかなって」

「ふうん。お姉ちゃんが負けたって何、料理とか？」

「違うよ、試合。戦いだよ」

「え……？」

かなの言葉に、再び驚きの表情を見せるみな。夢にしては妙に生々しいと、この時かなは思っていた。まるで夢を見ているというよりも、過去に戻ってきているようなそんな感覚。

「お姉ちゃん、だってお姉ちゃんは格闘技とか、暴力的な事は絶対に嫌いって……」

「え、あ、うん」

「……そっか、お姉ちゃんも格闘技やってたんだ。じゃあさ、みなと組み手やってよ！」

「え……」

「みなが今、試行錯誤して改良中の最強の蹴り技格闘技を見せてあげちゃうよ！」

みなは凄くやる気に満ちている。みな性格上から、このパターンは断れない事をかなは知っている。妙に生々しい夢といえればそれまでだが、所詮は夢である事に違いはない。不謹慎かもしれないが、かな自身も、みなと戦ってみたい気持ちはある。

「わかったよ、みな。但し五分だけだよ」

「やったね！ あ、お姉ちゃん、その前にその長い髪は邪魔にならないようにしないと」

言われて初めて気づく。夢の世界では自分の髪の毛昔に戻っている。長くて綺麗なその髪を後ろで束ねる。思えばこんな風に束ねるのが日常だった事を、かなは思い出す。ショートのみなはゴムや髪留めを持ち歩く事がないので、仕方がなく自分の部屋まで髪留めを取りに行く。今となつては、かな自身もショートの為に現実では髪留めを所持はしていない。しかしこの世界では当時のままに、髪留めを保管していた場所にそれはある。

みなを待たせているので、髪をまとめる作業に時間をかけるわけにはいかない。適当にポニーテールにまとめて、みな元へと向かう。戻ってみると、みなは蹴りのフォームチェックをしている。その当時のかなは、みなが何をしているのが全くわからなかったが、今見てみると、みなはやっている事は後々の星蹴拳そのものだった。

「お待たせ、みな」

「お姉ちゃん、まさかお姉ちゃんと戦えるなんて思ってたから、凄く楽しみだよ！」

「うん、そうだね」

かな自身も少しの楽しみはあった。夢の中とはいえ、今となつては叶わない相手との戦い。

「じゃあ五分間。行くよ、お姉ちゃん！」

みな構えは、やはり星蹴拳。しかし今の完成した星蹴拳とは少

し型が違う。例えるなら堅苦しい。星蹴拳は自由奔放な構えと動きが主体の格闘術である。どうやらこの世界の、この時期のみなは星蹴拳を完成させてはいないらしい。

「お姉ちゃん、ボーっとしない！」

「はっ……！？」

今のかなの実力をもつてしても、みなの特進力は凄まじいものがある。いや、あるいは速度の点で見れば、今のかなよりも早いものかもしれない。その突進力と共に蹴り出されるミドルを丁寧に避ける。改めて見ると、みなの特進力は大振りなものが多い。丁寧に捌いていけば早々当たるものでもない。

「えい！ やあ！」

大振りな特進をしてくる割に、その回転は早い。大振りの中に抜群の小回りを持っている。かなは自分との絶対的な運動性の違いを見せつけられる。何よりも、みなの特進力がより凄く感じるのは、みな独自の単純明快な攻め方にもあるだろう。自分自身とは違う星蹴拳に発見する所は多かったのだ。

「……あれ？」

その世界観に違和感を感じる。今までそこにいたのに、途端にその世界の住人ではない感覚が陥る。目の前のみなは、徐々に消えていく。次に視界が開けた時は別の世界観が構成されていた。

## カナトミナ？！

> i 1 1 5 7 6 — 1 1 9 8 <

夢の中で、夢を見る。かな自身もこれは夢なのか、現実なのか判断がつかなくなってきた。この夢が持つ特有の生々しさすらも、既に慣れていつてしまう。現実の住人と、夢の住人の区別とはどこから始まるのだろうか。

「お母さん、今日も勝ったんだあ！」

「そうなの。みなは本当に強くなったわね」

かなは自分の部屋にいる。そこからでも聞こえるぐらいの元気が良い、大きな声でみなは母親と話をしている。恐らくはその後に、かなの元へと報告に来るだろう。みなは単純明快な性格は非常に読みやすく、その筒抜けの思考にかなは思わず笑みをもらす。

と、予想通りに大きな足音と、かなを呼ぶ大きな声が近づいてくる。その騒音の主は、大まかな合図<sup>ノック</sup>もせずに、かなの部屋を開け放つ。

「お姉ちゃん！」

「勝ったんでしょ？ ふふふ、ちゃんと聞こえてるよ」

「やったんだ、みな星蹴拳は遂に頂点に立ったんだよ！」

かなはその言葉から理解する。意識が飛ぶ前の世界では、まだ星蹴拳は完成していない。それがみなさんの口ぶりから完成したとすると、どうやら時系列は大きく進んだらしい。よく身なりを確認すると、髪の毛が「あの時」よりも若干伸びている事からも予想がついている。

「あとは……リトルウォーズだ！」

「……え？」

夢の世界に来て、ようやく現実に戻されたような言葉を耳にする。「あれ、お姉ちゃん、知らないの？ 今はまだ知名度的というと知られていないのが現状なんですけど、実は全国から隠れた強豪がひし

めく大会なんだ。みんなの星蹴拳は完成した。だからあとこの歳で取れる最後の、そして最大の栄光であるリトルウォーズ。これに優勝して星蹴拳こそが最高の蹴り技格闘技だって事を証明するの！」

まるで生涯の自分の夢を語っているかのような、自信と期待を内に秘めた目をしている。その目を見ていると、かなも心が躍っているのがわかる程だった。

「最後の栄冠って？」

かなはわかつていたが、今の世界観を把握する為にあえて聞いている。

「あれ、お姉ちゃん。何回も見せてあげたじゃない。まあ良いや、お姉ちゃんこっち来て！」

慌ただしく、部屋から出て行くみな。行かないとまた大きな声でワガママを言われてしまうので、仕方が無くかなはみなの後を追う。行き先は恐らくはみんなの部屋であり、仮に違うとしても自宅なのだから迷う事も無い。

かなも部屋を出て、とりあえずみんなの部屋へと向かう。予想は的中して、やはりみんなの部屋である。その部屋には色々なトロフィーが飾られている。よく見てみるとそれら全てが格闘技の大会のものであり、全てが一位のトロフィーばかりではなかった。中には参加賞としての安物のような飾りもあった。

「相変わらず、この飾りの多さは圧巻ね」

「うん、みんなの誇りなんだ」

「誇り……？」

「うん、見ての通りだけど、一位のトロフィーが飾られるようになったのって最近なんだよね。それまではベストスリーにも入れない日々が続いたし、名前も残せないような完敗も続いた……。でもそういった敗北とかの悔しさがバネになったから今のみながいるの。全ての経験は今のみな。負けた経験も勝った経験も全てが大事な欠片なの。だから誇り！」

みなはそれらの経験を、かなに聞かせる。勝った話よりも、負け

た時の話を嬉しそうに話すみなに、かなは不思議な気持ちを抱いていた。

「だから全ての経験をリトルウォーズにぶつけるんだ！　コノヤロ！　って！」

「あとはリトルウォーズだけかあ……がんばれよ、みな！　負けるなよな、みな！」

せめてこの世界のみなには自分の手で栄光を掴んでもらいたい。そう思ったからこそ、かなは心の底から応援する。みな星蹴拳は最強で最高である。そんな夢を追い続けていてほしいから。

それから、みなはフォームチェックをするとの理由で、再び外へと出て行ってしまう。かなも頭の中を改めて整理したいと思い、自分の部屋に戻り横になる。

「忘れてたのかな。あれ程意識していた事なのに、みなと会った事でまた思い出せた……みな、ごめんね。かなの負けは、かなだけの負けじゃないんだよね。……みなはサッパリしてるから許してくれると思うけどさ……でも、かなは悔しいよ」

夢の世界で、睡魔に襲われていく。夢の中で夢を見るという奇妙な感覚が、かなを襲っている。これはこの夢の世界の時代よりも、少しだけ現代に近くなったお話である。

「じゃあ、行ってきます！」

自宅の玄関先で、みなが立っている。真夏の太陽と、蝉の鳴き声が鬱陶しく感じた、中学三年生の夏。みなは相変わらず自信满满とつか、とにかく明るく笑顔でそこに立っている。中学生生活の最後の大会があるらしく、これに優勝して来年のリトルウォーズに弾みをつけたいと、みなは言っていた。

「みな、気をつけるんだよ」

「あなた、みななら大丈夫。きっと余裕で優勝よ！」

「うん、みなは勝っちゃうよ！」

お父さんと、お母さんがそれぞれ言葉をかける。

みなは軽口を叩いているけど、これがみなのパースなのはわかっている。みなはいつだってこんな感じで、いつも自信が無い私とは大違いだった。

「お姉ちゃん！」

「うん！？」

突然、話しかけられてしどろもどろした返事になってしまった。

普通は緊張するのは、みなのお母さんに、何故か私が緊張してしまっている。そんな私の事を察してか、かなは元気いっぱいな笑みを浮かべてくれる。どっちが姉だかわかったものじゃない。

「みなは勝つてきます。勝ってリトルウォーズに出場して、最高の栄光を掴みたいと思います！」

「うん、がんばってね」

「ノンノン」

「え……？」

みなは人差し指を立てて、違うという旨の行動をとる。たまに出てくるみなのお母さん。ちょっとかわいい。

「みなは、お姉ちゃんとその栄光を味わいたい！」

「え、と……」

「……だから、お姉ちゃん。みなのお母さんをうんと応援してね、いや、しなさい！」

その立てていた人差し指を私に威勢良く突き立てる。おでこに突き立てられて、少しだけ痛かった。でも何だか可笑しくて、お父さんとお母さんがいるのも気にせず、二人で大笑いしていた。

「じゃあ、今度こそ行ってきます。帰るのは三日後になるから。あ、お姉ちゃん、帰ってきたらしばらく暇になるし、お料理でも教えてもらおうかな」

「うん、良いよ。みなも女の子なんだから格闘技ばかりじゃなくて料理の嗜みぐらいできないとね！」

「もう、お姉ちゃん、それ言わないで！」

そう言つて、かなは玄関の扉をくぐり、外へと走つていった。夏の日差しに、みなものショートヘアが快活に映つたのを覚えている。それに帰ってきたら、みなと料理を作るのが何よりも楽しみだった。三日間に及ぶ、中学生生活最後の大会。子供から大人まで様々な年齢層の人が集まつて、そこで試合をすると聞いている。

何にしても、今の私ができるのは、みなが無事に優勝できる事を祈るだけ。それとみなが帰ってきた時に備えて、簡単な料理を考えておく事だった。

「ふわあああ……眠いなあ。お母さん、ちょっと二度寝するね」

「かなが二度寝？ めずらしいね、良いわよゆつくり寝なさいね」

みなの見送りが朝早かつた事もあつて、微妙な睡魔と共に瞼の重さを感じる。きつとこのタイミングで二度寝すれば気持ちよく睡眠できるはずだ。それに今は夏休み、みなが帰るのも三日後で結構暇だし、時間をこんな風に使うのも、学生の特権として考えれば良いものだと思つた。

「みなには悪いけど……おやすみなさい」

私は深い心地の良い闇の中へと埋もれていった。



カナトミナ？！

みなが大会へ出発してから一日目。その日は何事もなく過ごした。お父さんがいて、お母さんがいて、でもみながいなくて少し寂しくて、それでも時間は進む。

その日の夜中に、みなからの連絡があった。どうやら会場に到着してから、慌ただしく日程が進んで連絡ができなかったみたいだ。私は何事もなく過ごした事、みなは慌ただしく過ごした事なんかを、長電話で話し合った。そして長電話しすぎてお父さんに怒られた。

「また明日」その言葉をお互いに掛け合って電話を切った。

「かな、気持ちもわかるけど、長電話も程々にな」

「はい！」

お父さんは注意したものの、きびしくは怒っていなかった。お父さんは優しいから滅多に怒らない。

時計を見ると夜の十一時。もしかしたら明日は、みなからの連絡が早いかもしれない。そんな事を思いながら、明日は早く起きていつでも連絡がとれるようにしておこうと思う。

「明日は早く連絡が来ると良いな」

「お父さん……うん、そうだね！」

なんだかんだ言って、気持ちをわかってくれるお父さんがいて嬉しかった。

「お父さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

その日、私は眠りについた。

そして二日目がある。何故か気持ち的にも興奮していたのか、あまり寝付けなかった。何度か水を飲み起きてしまってもいた。最近は一帯夜だった事もあって寝苦しかったのも、理由の一つだと思う。

「かな、寝られなかったの？ 目の下にクマができてるわよ」

「うん……ちよつと寝付けなくて」

「連絡が楽しみなんでしょう。連絡がきたら起こしてあげるから寝れば？」

「うーん……」

正直なところ確かに眠さはあったけれど、二度寝したい気分でも無かった。

「大丈夫、起きてる」

「そう、あまり無理はしちゃ駄目よ」

「わかってるよ」

とは言ったものの、本当に眠い。でも連絡が来るかもしれない。なんだか不思議な気分のまま日中を過ごしていく。しかし睡眠時間が足りていないせいで、変なテンションになってしまっているのか、何故だか変、というか嫌な感覚がつきまとっている。まるで何かがスッポリと、抜け落ちてしまっているような感じが気持ち悪い。

「お母さん、お父さんは？」

「お仕事よ。それがどうしたの？」

「ううん、なんでもない」

当然だ。学生は夏休みでずっと遊んでいる時期だが、社会人のお父さんに基本的なお休みは日曜日だけだ。平日の午前に家にいるわけがない。だから今、家にいるのは私とお母さんだけだ。

「かな、暇ならちよつと手伝ってくれない？」

「あ、はい」

みなな連絡を待つにしても、手が空いてる事に変わりはない。私はお母さんの家事の手伝いをする事にした。ただ手伝っている間も一種の胸騒ぎが消えなかった。爆発するように鼓動を刻む心臓。何故こんな胸騒ぎが起きているのかもわからなかった。

私は手伝いを一時中断して、部屋に置いてある携帯を取りに行った。みなと、お父さんに連絡を試みたいと思ったからだ。

「できたら連絡してほしい」

こんな感じの内容のメールを、二人の携帯に送った。その内、お父さんはタイミングが良かったのか、すぐに連絡が返ってくる。

「どうした？ 何かあったのか？」

「ううん。何か急に心配になっちゃって、忙しいのにごめんなさい」

「いや構わないよ。みなからの連絡はあったのかい？」

「まだだね。一応メールはみなにも送ったんだけど」

「そうか。気持ちはわかるが、信じて待ちなさい。父さんから言えるのはそれだけだ」

お父さんも忙しそうだったので、手短に用件を伝えて電話を切った。「信じて待ちなさい」お父さんのその言葉が何となく嬉しかった。お父さんの言うとおり信じて待とうと思う。そう考えたら何だか、気が楽になってきた。お母さんの手伝いが終わったら、少しだけ寝ようかなと思った。

「こら！ どこ行つてたの、もう全部終わっちゃったわよ！」

戻つてくると、お母さんが全て片づけた後だった。私はその場で怒られた。お母さんは怒ってもあまり恐くはなくて、説教がガラガラと続くタイプ。数分のお説教の後、許されて台所でお茶を飲むことになる。

まだ妙な胸騒ぎは消えなかったが、お茶の温かさからか、包み込まれるように不安は和らいでいった。やっぱり日本人はお茶だなと一人で実感する。ただあまり飲み過ぎるとお茶の利尿作用によってトイレが近くなってしまうから注意しなければいけない。

明日にはみなも帰ってくる。みなとの約束の料理の為の食材でも買っておこうかと思う。料理が苦手なみなのを考慮したメニューにしたい。

「お母さん、ちょっと出かけてくるね！」

「早く帰ってきなさいよ」

私は家を出た。考えていても仕方がないので、とりあえず食品売り場でも適当に歩いてみようと思った。でも一応教える候補はあった。それは「肉じゃが」女の子としては覚えておいて損はないメニ

ユー。作り手によつて全く違う食べ物になるという点で、ある意味では「みそ汁」並に自分が出てしまふ一品かもしれない。それを言つたら料理はほとんどがそうなのかもしれないけど、とりあえずみなで作れるメニューを考えると、やはり「肉じゃが」にしようと考えた。

歩いていると赤いハチマキをした男の子が、元気に遊んでいた。遊んでいた、というのは表現的におかしいのかもしれない。その男の子は木刀を振り回していたからだ。あまり変な人に目をつけられなくても、女の子という立場上で非常に困るので無視して歩く事にする。食品売り場に着くと、早速肉じゃがのメニューをかき集める。はたしてみなは作れるだろうか。それだけが心配だった。運動に関しては何をやらせても凄いの、家事的な事は一切できない子だからだ。いやただ単純に「できない」というよりは「やらない」という方が正しいのかもしれないけど。やればできる子のはずなのだ。家を出てから帰るまでに約一時間。あたりも少しずつ暗くなってきたので、足早に帰る事にした。

「ただいまー！」

「おかえり。意外と早かつたわね」

「何それ。意外って？」

「かなは出かけると必ずフラフラと歩き回るから、もつと遅く帰ると思つていたわ」

実の母親から酷い言われようだ。そんなフラフラ歩き回るなんてそんな事はないはず。

お母さんが既に夕飯の用意をしているようで、家の中はとっても良い匂いがする。日本の食卓の定番のみそ汁だろう。お母さんのみそ汁は「ややしょっぱめ」相沢家の味付けは基本的にややしょっぱめなのだ。

「あ、そうか。みなには味付けもしょっぱめで教えないとね」

みなに料理を教えるのが楽しみで仕方がなかった。

みなが大会に行つてから二日目の夜。私はお父さんとお母さんに

囲まれ、平凡な日常を過ごす。いつものようにみんなで夕飯を済ませ、いつものようにお風呂を済ませた。そして時刻も夜の十時をまわった。

「いよいよ明日か。みな早く帰って来ないかなー」

私はワクワクした気持ちを落ちつかせながら眠りにつく。心臓の音がうるさくて、なかなか眠れなく時間だけが過ぎていく。すると途端に家の電話が鳴ったのが聞こえる。まだ起きているお父さんかお母さんが出るだろう。時計を見ると既に一時間が経過した十一時。いつの間にか忘れていたが、嫌な予感が今更になって走る。家の中が途端に慌ただしくなった気がした。

私の部屋の扉がノックされた。

「かな。起きてくれ、かな」

お父さんの声だ。普段から冷静なお父さんの声が、いつもよりも冷静に聞こえる。いや冷静に努めようとしている。

「何、お父さん？」

お父さんは静かに私の部屋を開けて、明かりをつけた。

「かな……落ちついて聞いてほしいんだ」

「何……？」

嫌な予感が体中を包んでいる。さっきの心音とは違うタイプの心音がうるさい。

「今、病院から電話があつたんだ。その……みなが、みなが……亡くなつたって……」

私の体がフリーフォールのように墜ちていく感覚が包んでいた。今聞いた言葉が信じられなかった。

カナトミナ？！

気づけば私は自分の部屋で、一人何もせずに座っていた。

みなが大会へ出てから今日が三日目。時間は十五時を回ったところだ。本来ならば、みなはこれぐらいの時間に帰ってくるはずだった。今頃、汗を流して、みんなで適当な雑談なんかして、それで私とこの三日間の事を一緒に話すはずだったのに。みな姿はどこにもない。

今から約九時間前。私達はみなが運び込まれた病院にいた。

緊急だった為、みなが向かった大会会場の近くの病院へ緊急搬送されたらしい。早朝だった為か、人気はあまり無かった。

「残念です……我々も全力を尽くしましたが……」

私達家族が着いて第一声がそれだった。お父さんは呆然と立ちつくし、お母さんはその場で泣いていた。私は涙も出なかった。それ以前に目の前で起きている真実が、いまだに理解できていなかったのだ。それ以前に心も体も全く機能していない自分に気づく。

しばらくすると泣き崩れていたお母さんを立ち上げらせ、お父さんが声をかけてくる。

「かな……これから、みな所へ行くよ。一緒に行こう」  
「いい」

椅子に座り、視点の定まらない目でどこかを見ていた。お父さんの言葉をただ遮った。

「かな」

「あなた……」

お母さんがそれを制していた。

「ふう……私達は先に行ってるから、かなも落ちついたら来なさい。良いね？」

お父さんの言葉にとりあえず頷いた。いや頷いたのかもわからない

い。本当は行きたくなかった。

見知らぬ天井を見上げ一人つぶやいていた。

「みな所……それってどこ？」

あまりに実感がわかない。だってほんの二日三日前まで、みんなで笑って過ごしてた。みなが大会で出かけるのだって半ば当たり前の事。出かける度に帰ってきては、離れてた空白の期間と一緒に話し合った。……今回だってそうなるはずだった。

「いきなり亡くなったなんて言われたって……信じられるわけないよ……」

私は人目も気にせずに、涙を流した。ただ嗚咽は出なかった。ただ静かに涙が頬を伝っていく。

「すみません……相沢みなさんのご家族の方ですか？」

突然の声には涙を拭き、声がした方を見ると体つきの良い男の人が立っていた。

「そうですけど……貴方は？」

「私は相沢みなさんを含めた選手管理の責任者をしていた赤羽努と  
あかはねつとむいう者です」

「はい……」

赤羽さんという人は申し訳ないといった顔で私を見ていた。

「何と申し上げたら良いか……私達の管理が甘かったせい……」

赤羽さんは本当に申し訳なさそうにしている。それが何故か私の心を苛つかせた。多分、今は誰に何を言われても苛立つと思う。ただ一つだけ、この人に聞きたい事があった。

「謝らなくても良いです。何回謝られたって……みなは帰っては来ないんだから。それよりも聞きたい事があるんです」

「……なんでしょう？」

「みなはどうして死んだのですか？」

それだけが知れたかった。夜中に突然の知らせを受けただけで、死因が全くわからなかった。誰かのせいならその人を恨みたかった。そうしないと私の心が押し潰されそうだから。

「私も、その場にいて見ていたわけではないので……これは聞いた話なんですが」

「……どうぞ」

「昨夜ほぼ全ての日程が終了し、ほとんどの選手が帰り支度を済ませていた時の事です。……修学旅行のような気分もあったのでしようね。小さな子供達が数人、階段の近くで遊んでいたらしいのです。その時に通りがかった相沢みなさんが階段から落ちそうになった子を助けたらしいのです。そして……」

「もういいです！」

もう聞きたくなかった。子供を助けて自分が落ちた。みならしいといえば、みならしい。

「それで……その子供はどうなったんですか？」

「……怪我もなく……無事でした」

「……そう、ですか」

遊んでいた子供は無事だった。みなは死んだ。どうしてみなが死ななければならなかったの。みなに対する自問自答だけが頭の中を走っていた。いつの間にか、赤羽さんはいなくなっていた。

気がつけば、私はみながいる部屋へ来ていた。お父さんですら頂垂れている。お母さんのすすり泣く声だけが響いていた。私は扉を開けて、みなに……いや、みなだったものに近づく。

顔にかけられている白い布を取る。そこには確かに十年以上も見てきた顔があった。格闘技の大会だったというのに一撃も受けていないみたいだった。それに階段から落ちたと聞いていたけど、顔は綺麗だ。むしろ白くなった顔は、どこかこの世の美とは違う美しさがあった。きつと頭を強く打ったのだと思う。

「みな……あんたバカだよ。気持ちはわかるけどさ……死んじやつたらなんの意味もないじゃない。……みな……。ねえ、目を開けてよ……あと少しで夢が叶うんじゃないの？ あと少しで願ったリトルウォーズに参加して、優勝して……みなが作った格闘技



が最高だつて、証明するんじゃないの……？」

「みなは何も答えてくれなかった。少しすら動いてくれなかった。手を握ったみなの手は温かさがなかった。」

「……子供は無事だったんだつて。良かったよね、みなはきつと喜んでるよね？ ……かなは……かなは、正直嬉しくないよ……。…」

「……みなと一緒に料理するの、凄く楽しみにしてた。ねえ、みな……最後のお願い、ううん、ワガママ。一度だけで良いから、一緒に料理しようよ。かなの……最後のワガママだから、もうワガママ言わないから……！」

「……わかってる。わかってるよっ！ ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……ちくしょう……ちくしょう……！」

私は感情を抑えきれず、その勢いのままに、みなが寝かされているベッドを力一杯に叩いた。握った手から血が滲み、白い布を染めた。そして、感情のままに泣いた。

私は、みなに比べるとあまり良い所がないお姉ちゃんだった。きつとこうして泣いていても、慰めてくれるのはいつもみなだった。そのみなは温もりが好きだった。でもその温もりはもうなくて、代わりに伝わってくる冷たさが私の悲しさをさらに大きくしていった。

一体どれぐらいの時間が経ったのだろうか。わからなくなる程、私は泣いていた。もうどんなに泣こうとしても涙は出なかった。もう心を縛る悲しみという鎖は無かった。流すだけの涙を流し終えた私の頭はスッキリとしていて、ある考えだけが私の頭の中を支配していた。

「みな……『みな』に比べれば何もできない『かな』だけど、できるかな？ ……こんなかなだけど、途中からならゴールできるかな？」

みな……行こうよ、ゴールまで。みなが示してくれた道は、かなが歩くよ。……かなとみな、で……一緒にゴールしよう！」

唐突な考えかもしれない。でも、やろうと決めた。みなは技術は、

かなの体で実践する。心は一緒。二人でやればゴールできる。

高校生限定の大会、リトルウォーズ。残りの猶予は約三年、いや  
ほぼ二年と考えて良い。

「二年……でもやるよ。みな……行くよ！」

みなが残した星蹴拳。やってみせる<sup>マックス</sup>全力で。

## みな星蹴拳！

「　　っは！？」

目を覚ましたかなは、ベッドに寝ていた。時差が生じているような感覚に襲われ、一体これは夢なのか、あるいは現実なのか、それすらもはつきりしない。ただ一つの声でそれは確信へと変わる。

「お姉ちゃん、起きた！？」

自分の部屋の前で大声を上げている少女の声に目を覚ます。この大きな声はみなだと直感的にわかった。と、いう事はこの世界は夢なのだ。先ほどまで見ていたのは現実の過去であり、夢の夢。これは夢の世界のほずなのだ。本当の相沢みなはもうこの世にはいないのだから。

「みな……？」

「うん、入るよ」

みなはかなの部屋に入ってくる。思い出も夢も、見知ったみながそこにいる事に、かなは涙が出そうになる。そんな感情を抑えながらも、しっかりとみなを見る。

「どうしたの、みな？」

「……………うん。もうそろそろさ、お別れの時だから最後にお問い合わせがあるの」

「えっ！？」

みなが放った言葉の意味がわからなかった。かなの夢の中のみなは、夢とは思えないぐらいに感情のこもった言葉を、かなに向けて言い放ったのだ。限りなく現実に近い夢の世界という考えが、かなの頭で真っ先にひらめいた言葉だった。

「ちよつと、お別れの時って………どういう？」

「ごめん。お姉ちゃん、この世界は自分の夢だと思ってるよね、きつと？」

「違っ………の？」

「うん、夢に近い世界ってのは間違っではないね。ただこの世界は限りなく死後の世界に近いの。今のみなが、お姉ちゃんに会う為にはこうするしかなかったから」

今まで自分の夢だと思っていたものは、みなに連れてこられた限りなく死後の世界に近い世界。いきなりそんな事を言われて困惑すると思っていた頭は、思いの外透き通ったようにその事実を受け入れていた。まるでみなのお考えが、直接かなの頭にリンクしているような感覚さえ覚えていた。

「みな……」

「実はっ、実はね、お姉ちゃんが戦いの世界に来るのは反対だったんだよ。お姉ちゃんにはそういう事をしてほしくなかったから……ずっと優しいままのお姉ちゃんであってほしかったから……。でもお姉ちゃん、悔しかったんでしょ？ 悔しくてしょうがなかったんでしょ？ だから……」

「……みな。それで天国から降りて来ちゃったっていうのかな？  
みならしいけど、かなは大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないよっ！」

いつもとは違うみなの大声。元気の良い声ではなく怒っている。姉妹として一緒に暮らしてきたかなだったが、みながかなに対して怒りの声を放ったのは初めての事だった。かなはその声に驚く。

「お姉ちゃん、今のままじゃ絶対にまた負けるよ。お姉ちゃんは星蹴拳を覚えたみたいだけど、みなから言わせればまだまだだよ！」

「みな……。でも……。どうしろって言うの!？」

「……ふっふーん。お姉ちゃん、みなが何の為にこの世界に引っ張ってきたと思う？」

「えっ……!？」

みなは相変わらずの悪戯な笑みを浮かべる。かなはそれに困惑の表情を浮かべる。

みなが残した星蹴拳。これをマスターする為に残された資料や、それに通じる格闘技を血の滲む努力で覚えてきた。自信過剰かもし

れないが、当時のみな星蹴拳を更にアレンジして改善し、オリジナルを超えた星蹴拳にしたつもりだった。

しかし悪戯なその表情とは裏腹に、みなには何かの秘策があるのだろうか。その口調は自信に満ちている。かなは自分には無い、この絶対的な自信の正体がわからないでいた。

「みな星蹴拳！ お姉ちゃんには体で覚えてもらうよ！」

みなは星蹴拳の構えをとる。冗談ではない顔つきが言葉を真実のものにしている。

「……お姉ちゃんには戦わないでほしかった……けど、今こうやってお姉ちゃんの意識に触れて、みなのお考えも大きく変わったの。お姉ちゃんは言った『一緒にゴールしよう』って。……今度はみなから言わせてほしいの……お姉ちゃん、一緒にゴールしよう！」

みな一人の戦いだった。志半ばでこの世を去ったみなに継いで、実姉のかなが歩き始めた。そして二人はついに二人でゴールを目指し始めた。この戦いは一人でやっているものではない。二つの星蹴拳は今、一つになる。

「みな……手加減はしない、っていうよりもできないからね？」

「遠慮しなくて良いよーだ。みなはお姉ちゃんに負けないもん！」

「言ってくれちゃって！」

かなも星蹴拳の構えをとる。まるで鏡に合わせたような二つの構えがそこにあった。だがよく見ると二つの構えは少しだけ違う。かなの構えはやや上半身をやや後ろに傾けている。みなは構えは完全に前傾姿勢。言うなれば守護姿勢のかなと、攻撃姿勢のみなは構図だ。

「行くよ、お姉ちゃん」

「どこからでも良いよ」

そのやり取りを合図にみなは飛び出す。かなも同じく飛び出す、元の姿勢が前傾姿勢のみなは動きが勝る。

「はっ……！」

かけ声と共に、走った勢いのままに強烈な後ろ回し蹴りを繰り出

すみな。その後の事など全く考えていないような豪快な大振りを繰り出す。だがこの大振りはただの大振りじゃない。速度、キレが半端ではなく大振りで隙だらけの技なはずなのに、まるで小技のようなモーシヨンである。

「……！？」

その回し蹴りをかわすが、あまりの技としての性能に息を呑む。大振りの隙を恐れるかなにとっては、全くやらない動きである。

「せいっ、やつ！」

その圧倒的なみなとの技に見とれているわけにもいかず、かなも応戦していく。ロー、ミドル、とキックを小刻みに繰り出していく。その鋭くコンパクトな攻撃に、みなもただ避けるしかない。避ける、といっても文字通りただ避けているわけではない。攻撃する機会を、勝つ為の手段を伺っているのだ。その勝利の執着心というオーラが、みなの中から湧いて出る。そのオーラに気圧されてか、かなの動きが一瞬止まってしまう。

「隙有り！！」

そのわずか一瞬の間を見逃さずに、再び豪快な蹴り技が空を切る。かなのコンパクトな蹴りとは対照的な蹴り。その迫力だけで人が倒せてしまいそうな勢いである。

かなはその蹴りを避けている内に、徐々に恐怖心を抱いていく。ここに自分自身の技と、みなとの技に差があるのだと少しずつ実感してくる。あまりに丁寧にまとまりすぎているからこそ、そこに意外性というプレッシャーが無いのだ。

「……………」

「……ふふふ、どうやらお姉ちゃんも少しわかってきたみたいだね」  
「かなは……星蹴拳をただ改悪しただけなの……？」

「違うよ。改悪なんてなっていないよ。これも星蹴拳だからね」

「これも、星蹴拳？」

「そう、星蹴拳は型に囚われない自由な戦術。みなとの星蹴拳みたいに攻撃的な戦い方もあれば、お姉ちゃんのように小さく戦う方法も

ある。それら全てをひつくるめて星蹴拳なの。……但し、お姉ちゃん  
の星蹴拳じゃあ最後の技は体得できないの」

かなは呆氣にとられる。みなが残した資料の技に関しては全て目  
を通し、全てを体得したつもりだった。しかしみなという言葉で全てを  
体得していないという事実が露呈した。

「最後の、技……？」

「うん、最後の技。それが星蹴拳奥義の流星」

みなはかなに最後の星蹴拳を伝える。

### 三回戦の舞台へ！

「良い、お姉ちゃん。星蹴拳の奥義はね」

これが星蹴拳の全て。星蹴拳は文字通り「星を蹴る技」であり、そしてその奥義は「星を落とす技」である。みなから伝えられる星蹴拳の奥義。

「……すう……、……はっ……！」

突然の意識の目覚め。明らかに夢とは違う感覚に、これが現実の目覚めなのだと悟った。

随分と長い時間の間、夢の中にいたような感覚が襲う。実際に時計を見ると眠りについたと予想される時間から五時間近くも経っている。時刻も十九時を過ぎている。窓から見える景色も暗くなり始めている。

「……みな」

部屋に飾ってある写真を見つめる。その当時の元気いっぱいみななの写真。

「……よし！ もう一回やり直し。そうでしょ、みな？」

二人の世界で教わった「みな星蹴拳」とその「奥義」。今だからこそもう一度、一からの出直しである。

七月二十四日。長かった昨日が終わり、今日が始まる。

「さって朝だぜ！」

毎度の事ながらの夏の暑さ。ただ立っているだけでも汗をかいてくる。だがそんな事も気にもしない様子でワタルは気合の大声をあげる。なんだかんだで大変な一日だった昨日だが、一日眠ればすっかりどうでもよくなっていた。

昨日、つまりは二十三日はマックスハート内で試合を行い、やや険悪なムードのまま、かなと桐華の試合が終了。その後、かなとの連絡もとれず、代わりにきた連絡はヒロキの三回戦の不参加という



知らせのみ。リーダーとして悶々とした夜を過ごしたワタルだった。顔を洗いに部屋を出て、洗面台の前まで移動する。そこで軽く身支度を調べると自宅前のポストを見に行く。三回戦の日程が書かれた郵便物が来ていないかの確認である。

「お、あつたあつた！」

早速、封筒の中身を確認する。

「なにになに……三回戦の日程は七月二十五日、か。って、明日かよ！」

早朝の住宅街にワタルの声が響く。

通知が来てから、次の日に試合をやるという日程組みに、目を丸くする。とりあえず携帯を取り出し、全員に連絡をしようとする。

しかし時刻がまだ六時である事を考慮し、後で連絡をしようと決める。とりあえず時間潰しの意味も込めて、朝食の用意にとりかかる。

「やつぱ日本男児なら朝は米のご飯食わないとな！ 朝食抜きとかパンだけとか信じられねえぜ」

独り言を発しながら米を洗う。洗い終わるとそのまま電子ジャーの中に、釜を入れて電源を入れる。しかし米を炊こうにも、おかずが無い事に気がつく。米だけを食べるのも味気ない為、ワタルは早朝マラソンついでに、コンビ二へおかず探しに向かう。時刻は六時半を指していた。

「コンビ二行つて戻つて飯を食う。適当に落ちついたぐらいに、時間も良い頃合いになるだろうな」

ワタルはトレーニングウェアに着替えて、颯爽と家を飛び出した。向かうコンビ二はワタルの家から最も近いコンビ二である「セブンハンドレッツイレブン」というコンビ二である。ワタルいわく「食品はここが一番美味い」との事。

しばらく走ると見知った顔がそこにあった。

「あつ……！？」

二人して同じ反応をする。

「かなつぺ、朝早いな、どうしたんだ？」

「え、ちよつとね」

昨日の事もあつて、お互いに気まずさが漂う。朝の爽やかな空気が、一変して重い空気に変わっていく気がする。

「……聞いて良いもんかちよつと悩んだんだけどよ、昨日の事は、大丈夫なのか？」

「……うん。ごめんね、なんか険悪なムード作っちゃつて。ちよつと思ふところがあつて、頭に血が上っちゃつたみたいでさ」

「そうか。トーコとの事も大丈夫なのか？ 喧嘩にはなつてないか？」

「喧嘩？ それは無い、誓つてないよ。……むしろあの子にちよつと救われた気もする」

かなの表情はやや曇りもあつたが、晴れやかだった。何か少しだけ吹っ切れた感じを、ワタルは受ける。

「それにしてもメンバーの関係チェックとは、なかなかリーダーしてるじゃない？ ワタル君」

「バカ。こう見えて面倒見は良い方なんだよ！」

「普通は自分で言わないよ、そういうの」

かなにツツコミを受けるも、本題を思い出し真面目な会話をする。

「そういや、ちよつと真面目な話、てか、三回戦の話があるんだけど良いか？」

「あ、うん」

「三回戦の日程は突然だけど明日、時間は午前十一時……まあほぼいつも通りの時間とみていいな。これは良いんだが、その……三回戦にはヒロキは出場しないんだ」

かなは突然の知らせに驚く。

「え、なんで？ どこか具合でも悪くなつたのかな？」

「いや、ちよつとヒロキも、思ふところがあるみたいだ。一週間は戻つてこないつて」

「そつ……つか。まさかこのままいなくなつたりはしないよね？」

「そんな事をオレサマが知るか。それにそんな事はありえねえさ。」

オレサマとヒロキはずっと一緒だったんだ。これからだってそうさ、オレサマ達は二人で優勝目指してんだぜ？ いや今は二人だけじゃない。かなっぺに、トーコもいてくれるんだ！」

まるで自分達みたいだと、かなは二人に投影していた。そしてそのワタルの言葉はそっくりそのまま、かなの心に響く。そう、「二人でゴールしよう」と言ったが、今はこんなにも頼りになる仲間達がいる事を、かなは大きな実感を得た。

「ま、そういうわけだから、三回戦はオレサマにトーコ、そしてかなっぺ。この三人で挑んで勝つぜ！ ヒロキが戻ってきた時に、負けました、なんて格好悪い事はできないぜ」

「それは当たり前！ 頼りにしてるよ、リーダー？」

「おう、頼れ頼れ！ オレサマも同じくらい、いやそれ以上に頼ってやらあ！」

いつしか笑顔で話をしていた。先ほどの重苦しい空気は、ワタルの勘違いだった。

その後は適当な雑談をしながら、二人でランニングをした。お互いに体力面に抜かりはない為、結構なハイペースでの移動をして、コンビニにはすぐに到着した。

かなは家に戻るという事で、コンビニにて別れる。適当なおかずを購入し、ワタルも自分の家へと戻る。思いの外、かなとの会話が長かったようで時刻は七時半を回っていた。

「トーコの事だから多分起きてそうな気がするが、でも寝てたら悪いからやつぱりもう少しだけ待つか」

電話をするよりも朝食を優先する。買ってきたのは主に総菜で、それを白いご飯と共に食べる。これだけでも少し味気ないと思ったのか、冷蔵庫から生卵を取り出し、いわゆる「卵かけご飯」にして食べる。おかわりを三回ほどして、ようやくワタルの朝食は終わる。食器を片づけて、時計を見ると八時を回っていた。

「よし、電話してみるか」

携帯で桐華の番号を検索する。サ行の知り合いがあまりいないワ

タルの携帯は「桜井桐華」の名前を探すのは一発で見つけられる。数回の呼び出しコール音の後に、桐華の電話に繋がる。

「……はい」

「お、トーコか。ワタルだけど」

「……おはよう。三回戦の事？」

「さすがに察しが良いな、ご名答だ。それと他にも一つ……」

ワタルは先ほど、かなにした会話とほぼ同じ内容の事を、桐華に伝える。

「……そう、川崎君が」

「ああ、ま、心配はいらないぜ。きつと自信をつけて戻ってくるって」

「………そうだといいいけど」

いつも以上の長い沈黙の後に、桐華はそう告げた。何の変哲もない一言だったが、何故かワタルはその一言がいやに引つかかった。た。

「とりあえず明日は頼むぜ！」

「………うん。がんばる」

桐華との電話を切る。一体あと何回の予選をこなせば良いのかは、全くわからない状態だが、今は一つ一つを大事に勝っていく事が、優勝への最大の近道だった。明日は予選第三回戦、微妙な曲者と評価されるディーパーディーパー戦である。

## キャラ紹介：全力編（前書き）

本編のネタばれ有り。

ご覧になる際は、その辺りにご注意を。

全力編とは、チーム：マックスハートのメンバー紹介になります。  
戦闘能力などにある数字の横の括弧書きは話数になります。

## キャラ紹介：全力編

> i 1 1 4 1 6 — 1 1 9 8 <

名前：響ワタル

生年月日：7月23日

年齢学年：高校三年生、18歳（物語開始当初は17歳）

血液型：O型

身長：172cm

体重：65kg

武器：木刀（我流一刀）

利き腕：右利きの両利き

戦闘能力：110（133）、120（35）

必殺技：ぶったぎり！・掴んでぶったぎり！

初登場：第一話「赤いハチマキの男！」

解説：この物語の主人公。基本的には前向きなキャラクターであり、最近ではあまりウケがよろしくない熱血型の主人公。持ち前の身体能力で敵を圧倒する力を持つ。だが意外にも精神的にやや打たれ弱い一面もある。

トレードマークはサブタイにもなっている赤いハチマキ。

生年月日は占いによる作者の運命の人の誕生日（だが適当な占いの為、アテにならない）

身長体重は数年前の作者に近いものを設定。

> i 1 1 5 4 6 — 1 1 9 8 <

名前：川崎ヒロキ

生年月日：11月3日

年齢学年：高校一年生、16歳

血液型：AB型

身長：162cm

体重：51kg

武器：木刀（一刀）

利き腕：右利き

戦闘能力：85（140）、130（41）

必殺技：みだれうち！・ヒロキ式ぶったぎり！

初登場：第一話「赤いハチマキの男！」

解説：主人公ワタルの弟分であり、ワタルを兄貴と慕う少年。ワタルと違い、基本的には温厚で冷静。頭を使うのが苦手なワタルの代わりに頭を使う。懂れているワタルの戦い方を真似て、パワーファイトもするがスタイルが合わないらしく、このパターンになると良い成績が残らない。

トレードマークは青いハチマキ。

生年月日は「良いさ」で「11月3日」である。

実は余談だが、ヒロキの父親は「川崎真治」で、母親は「川崎八代」である。つまり作者の他小説の「時をこえて」の主人公とヒロインの息子である。

名前：相沢かな

生年月日：3月8日

年齢学年：高校三年生、17歳

血液型：B型

身長：163cm

体重：秘密かな（ありきたり！）

武器：星蹴拳（かな式、みな式、かなみな式）

利き腕：左利き

戦闘能力：110（132）、135（33）

必殺技：星蹴撃、連星撃、落星撃、真・星蹴撃

初登場：第二話「天才蹴撃少女！」

解説：物語序盤から現在にかけて、多大の戦禍を上げてくれているマックスハートの切り込み隊長。

物語当初は圧倒的なまでの性能を見せてくれたが、最近では敵が強くなった事と、とある悩み……というかジンクスみたいなものと戦っている為、その傾向は薄れている。

死別した双子の妹「相沢みな」の意志を継いで、リトルウォーズ優勝を目指す。

元来は家庭的で、おしとやかな女の子である。その為、家事全般は基本的に得意分野。

小柄で妹みたいな存在でもある結衣とは、その後姉妹のように仲が良くなる。

名前：桜井桐華

生年月日：4月1日

年齢学年：高校二年生、17歳

血液型：A型

身長：168cm

体重……秘密（秘密は良い女の（ry）

武器：魔法銃（コルトガバメント&amp;デザートイーグル）

利き腕：右利き

戦闘能力：80（1926）、85（2736）、90（37

51）、95（52）

必殺技：跳弾する弾、水壁、跳弾する弾達  
リフレクターバレット ウォーターウォールキャラクターバレット

初登場：第一七話「夢の中の少女・前編！」

解説：マックスメンバーの中では、ヒロキよりも前に、ワタルとの接点のあったキャラクター。

基本的には冷静沈着、表情は常に無表情という、明るめなキャラ多



めなマックスハート内では、かなりの冷静担当キャラ。

実はワタル達とは唯一一人だけ違う学校に通っており、本人は語らないが結構な名門校に通っている。

さりげなく、運動も勉強もソツなくこなせてしまう才色兼備な人である。

ワタルに対して遠い過去から、恋愛に似た感情を持っているかもしれないが、はたしてどうなる？

名前：織部結衣

生年月日：1月12日

年齢学年：高校一年生、16歳

血液型：A型

身長：155cm

体重：秘密にしろって言われました（いわずもがな）

武器：具現化能力

利き腕：右利き

戦闘能力：40

必殺技：特になし

初登場：第四十話「不思議絵師 一筆！」

解説：不思議絵師、織部結衣ちゃん！

本当ならメインヒロインだったキャラクター（プロット練り初期当時）

MAXはバトルものではなく、ハーレムものの予定だったのだ。（タイトルはMAXではないけども）

その名残あつてか、あまり恋愛というジャンルを表に出さないMAXだが、織部ちゃんに至ってはモロ恋愛傾向になる。

ちなみに織部ちゃんは一切、本編中で戦わないのでよろしく！

具現化能力の元は、タイムプーンの「月姫」などにある「空想具現化」になります。

他には「ケロロ軍曹」の睦実（美？）の描いたら実体になるペンなど。

## 最凶の悪寒！

七月二十五日。十時五十分。予選三回戦ディーパーディーパー戦である。

今日の試合日程は、第一試合からマックスハート対ディーパーディーパーにあたる。待ち合わせ場所にて、ワタル、かな、桐華の三人は集合し、試合が行われるバトルリング付近にて待機する。

「さすがに三回戦ともあれば、ギャラリーも凄えな」

これを言ったのはワタルである。確かにワタルの言うとおり、朝早くから色々な地方の人間が、この試合を、大会の行方を見に来ている。予選一回戦とは、うってかわった雰囲気漂っている。

「……なるほど」

「ん、どうした？」

桐華の視線の先に彼らはいた。あの天才三崎や速水仁ほどではないにしろ、纏うオーラは確かに強者の感覚を持っている。一筋縄ではいかない事は確かである。だがどこか微妙な雰囲気もある。

「なるほど！」

ワタルは一人で納得した。いや正確にはその場にいた、かなと桐華も納得していた。

試合時間が近くなり、黒子から各チームリーダーの招集令が出された。ワタルは二人を残して、バトルリング中央へと向かう。

「君が、マックスハートのリーダーの響ワタル？」

「ああ、そうだけど」

「ふーん。君が、ね」

目の前の男。ディーパーディーパーのリーダーは嫌らしい目つきで、まるで品定めでもするようにワタルを見る。寒気のような視線に、警戒の色を示す。

「おいこら、いきなり人を呼び捨てにしておいて、テメエは挨拶も無しか？」

「いや、ははは。どうせ、負けるようなチーム相手に名乗る必要があるのかなってね」

「バカか、そういう台詞は負けフラグってんだぜ？」

「負けフラグ、か。思えば私達もここまで長かったわ……」

何かを語り始める目の前の男。別に興味も無いし、時間の無駄だと判断したワタルは、黒子に目配せし、止めさせるように訴える。そして男の口調が嫌だった為、止めさせる意味も含まれている。

「こら、せりかわかすみ芹川香澄。無駄口を叩くな。まずは試合ルールを決めて！」

どうやら目の前の男の名は、芹川香澄というらしい。男なのに一人称が「私」であり、どこことなくそっち系な趣味でもあるのではないかとも思える。仕草の一つ一つがやけに色っぽい。帽子を被っている為に、髪が長いのか短いのかさえもわからない。つまり総合して、いまいわからない人間であるという事。

「やれやれ……せつかく私の苦労話を聞かせてあげようと思ったのに、OK！ さっさとルール決めちゃいましょう」

「まあ、やっぱ基本的な1on1で良いか？ ルールのにもわかりやすいし、お互いメンツも三人できっちり終われるだろ？」

「良いわよ、それで」

三回戦、対ディーパーディーパー戦はいつも通りの1on1戦で行われる事になった。リーダー集合時の細かな事が終わった為、ワタルはマックスハートの控え場所へと移動する。戻る途中、芹川に声をかけられる。

「ねえ、響ワタル」

「なんだよ、オレサマはお前と話す事なんてねえぞ！」

「響ワタルが無くて、私にあるのよ。……響ワタル、貴方……私の好みだわ。試合の結果と関係なく、貴方を食べちゃいたいわ」

「……うう……！」

今まで感じた事のない寒気がワタルを襲う。この悪寒は、あの三崎と出会った時なみ、いやそれ以上であると後のワタルは豪語する。前言撤回、微妙どころではない。

「あれ、どうしたのワタル君？」

「いや、オレサマは今最凶の悪寒と戦っている……」

心配するかなと桐華を余所に、一人で震え出すワタル。

「うーん。ちょっとしつかりしてよね、誰が先鋒戦やるとか決めてないんだよ！」

「……私が行く」

仕方がない、といった表情で桐華が名乗り出る。

「って、桐華ちゃん、良いの!？」

「……はい、一応考えがあつての行動です。任せてください」

桐華は愛銃である魔法銃、ガバメントとデザートイーグルを装備する。そのまま中央のバトルリングへ向かう。

向かった先には相手チームの先鋒がいる。髪型もいわゆるロン毛であり、服装など見た目もチャラい。とてもじゃないがスポーツや格闘技をやるようには見えない。仮にやっていたとしても、桐華の苦手な、いや、最も嫌いなタイプである。

「へえ、何。相手チームに可愛い女の子が多いと思ったら、僕の所に来てくれちゃうってわけ？」

「……桜井桐華です。よろしくお願いします」

「僕の名前は純<sup>じゅん</sup>。ま、漆黒の純<sup>じゅん</sup>って読んでくれよ。かつこいいだろ？」

別にどこにも漆黒というワードが当てはまるものがない。単純明快にかっこいいからだろうか。意味もなくかつこいい名前を付けたがる人間が多くて鬱陶しい、と桐華は思う。

「こら、無駄口を叩くな！　ったく、ディーパーディーパーの連中は無駄口が多くて困る！」

「あら、これはすいまつせーん」

黒子の注意に、反省した素振りを見せない純。その姿を見て、明らかに不快な表情をする桐華。やはりこの手の人間は嫌いだと、再認識する。

「それでは予選第三回戦、マックスハート対ディーパーディーパー

の試合を行う。先鋒戦　始め！」

半ば無理矢理だったが、黒子により始まりの合図が出される。

桐華は手始めにガバメントを構えるが、純は何も構えていない。いやむしろ武器と呼べる代物が見あたらない。

「さつて、あまり女の子を虐めたくはないけど……始まつちゃったとあれば、やつちゃうよ？」

虐めたくはない、と言ったあたりに、純の性格の悪さが見える。

純は表情を一変させ、恐らくは背中に隠していたであろう武器を構える。その武器というのは、桐華と同じく銃である。最も桐華の魔法銃とは違い、通常のエアガンであると予想される。

そのコンパクトなハンドガンのような、形状から推測できる純の武器は、恐らく「MP7A1」である。簡単な話、電動コンパクトマシンガンと呼ばれるものであり、ハンドガンとそう変わらぬサイズながら、アサルトライフルなどと変わらぬ連射性能を持つ。

桐華の持つ銃はガバメントとデザートイーグル。そして銃ではないが、水が入った小型のボトルケースである。いくらコンパクトマシンガンといってもハンドガンと比べれば、攻撃力は雲泥の差がある。つまりは手数ではどうあっても勝てない。

「踊りなよつ、子猫ちゃん！」

純はそのマシンガンを躊躇いなく、桐華に向けて放つ。魔法銃の水弾と違い、BB弾という非常に小さな弾を使って撃つ為に、軌道が非常に見えにくい。仮に見えたとしても、弾自体は非常に軽い為、風によって更に軌道が変わる可能性も高い。つまり避けようと思つて避けるのは、ほぼ不可能に近い。

それでも、避ける為には動くしかない為、桐華は体を動かしのを絞らせないようにする。小気味良い空砲の音が会場に響く。相手も狙いをつけて撃っている為、ある程度の弾は桐華に命中する。弾は当たるたびに一瞬、針が刺さったような痛みを桐華に与える。

「はっはっは、気分良いよねえ、女の子をいたぶるのってさあ！」

調子に乗り、更に鋭く桐華に弾の雨を浴びせる。

「……なるほど。黒い、漆黒ね。腹黒さが……」

「腹黒いか……最高の誉め言葉さ」

そのまま撃ち続けていると、純のマシンガンは弾切れを起こす。

「チッ……！」

「……銃には弾があるんだから、弾数管理はガンナーの基本」

弾切れになり、手数が無くなった事を見極めて、桐華は反撃の一撃を与えようとする。

「……最も私の銃に関しては、弾切れって呼ぶのかはわからないけど」

ガバメントのメモリは最大出力。その強力な水弾が、純に向かって放たれた。

## ウォーターウォール！

「ちよっ、まっ……！」

弾切れを起こし、そのリロード最中の純。勿論、リロード中は攻撃する手だてが無い。桐華はそんな純に対して、全くといって良い程、無感情、いやあるいは気持ちのこもりすぎたショットを放つ。

「うわっっ……！！」

最大出力のガバメントのショットは、純の頬をかすめるようにして、通り過ぎていく。

「……次は、外さない。痛い目にあいたくなければ、ここで降参。どう？」

無表情な桐華が、めずらしく不敵な笑みを浮かべながら言う。その表情は正に不敵。今まで攻められながらも、余裕というのが目に見えてわかる。

予選三回戦にして、圧倒的な力の差を見せつける桐華に、会場の熱気も一気にヒートアップする。熱気の最大の原因とも思える、大歓声が会場を包み、その大音響が心地よく体を支配する。

「トッ、ウツ、カツ、L・O・V・E トッ、ウツ、カツ！」

そんな心地よい大歓声の中で、異質な応援が聞こえてくる。桐華を含め、マックスハートのメンバーは全員がその方向を見る。すると明らかにスポーツマン、という雰囲気ではない方々がいた。その歓声は明らかに、どうみても桐華一人に向けられている。

「……うげ……！」

桐華らしくない声が漏れる。それ程、桐華にとっては悪い意味で衝撃だったのだ。

「ハッハッハッハ！ トーコ、良かったじゃないか、ファンクラブなんて簡単にできるもんじゃねえぞ！」

ワタルはさも他人事、といった感じで、桐華をおちよくる。かなも笑いはしているものの、後が恐いと判断してか、目立たないよう



に徹している。

「……ワタル」

「ははは……ん？」

「……後で覚悟」

冷静に淡々と発したその言葉に、異常なまでの殺気がこもっていた。ワタルの笑いは一瞬で止まる。

そうこうしている内に、純のリロードも終わり、試合の中には再び緊迫感が生まれていた。

「むかつくなあ。人がやられている間に、アンタは大歓声かよ、気に入らねえ！」

「……ふう、最も貴方みたいなスタイルでは、どんなに凄いプレイをしても歓声を受ける事は無いと思うけど」

「ああ、そうだろうよ。でも俺は自分の快樂に対して素直でね、やっぱり女をいたぶるのは最高だよっ！」

再び桐華に向けられるBB弾の雨。全く容赦なく、桐華に攻撃の全てを注ぐ。再び、攻撃する純。避ける桐華の構図になる。やはり一発の攻撃力に優れてはいるものの、圧倒的な手数を誇る純との戦いは、相手のガス欠を待つしか無くなってくる。

「……そう。性格さえどうにかすれば、貴方、結構かっこいいのね」

「……えっ!？」

この言葉のやり取りで、純の攻撃の手が一瞬だけだが止む。

その隙を桐華は見逃す事なく、反撃を試みる。狙いは純ではなく、その手に持つMP7A4である。ただ桐華には、この口撃により純が隙を見せるという確信があったのだ。

「チイツ!？」

ガバメントから放たれた水弾は見事に、純の持つマシンガンを狙い撃つ。大きく後方に吹き飛ばされた銃を拾いに、純は走るしかない。

「……計画通り」

相変わらず無表情に言い放つ。言い換えるなら相変わらず極めて冷静。

「……この技はトリックワンみたいに、手軽じゃないから少しだけ困る。……第二の技、トリックツ―」

出た言葉は、第二の技と呼ばれたトリックツ―。メンバーであるワタルとかなでさえ、知らない隠された芸術技。シークレットアート本人しか知らぬ、その技の存在を全員が固唾を呑んで見守る。純はいまだに、飛ばされた銃を取る為に走っている。その視線に桐華の姿はない。桐華はどこからか、ボトルケースらしき物を取り出す。そしてそれを空高く放り投げた。

「くそつ、よくも！」

飛ばされた銃を取る事に成功した純は、そのまま桐華を狙い再び弾丸の雨を当てようと試みる。

「……残念だけど遅い。トリックツ―、跳弾する水壁！」  
ウォーターウォール

自身が投げたボトルを撃つ桐華。耐久性は脆いのか、そのボトルはあっさりと壊れ、ボトルの中に入っていた水が、一気に外へと弾けるように飛び出す。純の撃ち込んだBB弾は、その水の壁が威力を吸収する。

「……威力は抑えておく。でも当たると痛いから」

威力調節でやや弱めに設定したガバメントで、自らが展開した水壁を撃つ。威力を弱めた事により、ハンドガンでできる限りの連射をする。それら全ての弾は純のBB弾と同じく、水壁に飲み込まれた。

「偉そうな事を言っておきながら、全然攻撃になってないじゃないか！」

「……貴方には見えないの？ 水壁を跳弾する水弾の姿が」  
「水壁を跳弾する水弾……だって！」

この間わずか数秒の出来事。ほんの一瞬の出来事なのだ。水の壁から放たれた水弾は、桐華が放った軌道とは、明らかに違う軌道で放たれていく。右に左に、上に下に、全ての弾が予想もつ

かない方角へと飛んでいく。

「う、う、うわああああ！」

その内の何発かが純に命中し、その場に悶絶したかのように倒れ込む。

「……ごめんね。水壁の中で跳弾する水弾は見えるんだけど、その後どこに飛んでいくのかは、私でもわからないの」

水壁となった全ての水が、地面に落ちる頃。それが先鋒戦の終わりを告げる合図になった。そして再び巻き起こる大歓声と、桐華フアンクラブの声援。特筆すべきは観客の歓声の色合いが、まるで戦いを見たというよりも、手品を見たかのような反応だった事だろう。「うつ……ごほっ……、なんて事だよ、そんなあり得ない超常現象が存在するなんてよ……」

「……信じられないのも無理はない。でも、世の中には知られていないだけで沢山の、ありえない、が出回っているの」

「今のトリックもその中の一つだって？」

「……うん」

「そうか、なるほどな……。いや、そんな事はどうでもいい。ってか惚れたぜ……」

純は走る激痛をこらえながら、出来る限りの笑顔を見せる。桐華もそれに呼応するように優しく微笑む。

「……ごめん。無理」

糸切れた人形のように倒れ込んだ純を放っておき、桐華はマックスハートのメンバーの元へと戻る。

「やったな、トーコ！」

「さすがだね、桐華ちゃん！」

勝利を祝福してくれる二人を見ながら、桐華は一人誰にも聞こえない声で叫ぶ。

「……本命は裏切れない」

三回戦先鋒戦は桐華が第二の技、跳弾する水壁　ウォーターウォールで勝利をあげる。

そして中堅戦、相沢かな対三木亮輔みきりょうすけの戦いが幕を開ける。

## 少女の幻影！

予選第三回戦、先鋒戦は見事に桐華が勝利を収め、そのバトンの中堅のかなへと託す。二回戦と同じく、ここでかなが勝利する事ができれば、ワタルの出番は再び無くなり、マックスハートは次の戦いへと駒を進める事ができる。

「かなっぺ、ここで勝ってさっさと次へ進もうぜ！」

「うん、そうだね」

「どうした、なんか元気がないじゃないか？」

「そんな事ないよ。ただちよっと考え事……ワタル君、もしかしたら出番が回ってくるかもしれないけど、その時はよろしく！」

「……はあ！？」

当然の如く、かなは勝つて戻ってくるという前提で話をしていたワタルは、かなの意外な言葉に目を丸くする。かなの顔つきは決して自信が無いというわけでもない。むしろ自信ややる気は目に見えてあるのがわかる。ワタルには何故なのかはわからない。

「わかるか、トーコ？」

「……さあ」

桐華はわかつていいるような、わかっていないような、つまりは無表情で答えた。

「相変わらずのポーカーフェイスだな。まあ、試合が終われば全てがわかるってやつだ」

ワタルと桐華は、バトルリングへ向かうかなを案じた。

そしてリング中央には、中堅戦、かなの対戦相手である三木亮輔の姿がある。見た感じは相手チームの前二人、つまりは芹川と純ほど際だった特徴も無いように見える。いや見た目の特徴点だけならば、純に限り普通だっただけに、見た目で判断は良くはないのかもしれない。見た目で判断するな、という言葉があるように、最終的な結論は拳を合わせるまでわからない。

「宜しく。三木です。リーダーと純にはキャラが濃いという理由で、迷惑をかけたと思うが……」

「あ、いや、そんな事はないかな。かなに限り……」

戦いをする者としては、少しお洒落が過ぎるとは思えるが、残り二人よりも幾分地味であり、むしろ軟派なイメージよりも硬派なイメージが漂う好青年な第一印象だった。肌もやや褐色であり、良い意味では最近のスポーツマンといったところか。体つきもよく、何かハードなスポーツあるいは格闘技をやっている事が伺える。

「それでは中堅戦　始め！」

半ば強引に試合が始められる。どうやらこの黒子は、選手こぎの事情は気にしないらしい。

「さてさて……行こうか、ねえ？」

かなは誰かに問いかけるように呟き、いつも通りの星蹴拳の構えをとる。しかしいつもと違うところは、実妹みなのように前傾姿勢の構えであるという事。それでも、みな星蹴拳ほどの前傾ではない。

三木の構えはキックボクシングだろうかムエタイだろうか、各二つの中間のような構え。星蹴拳のようにオリジナルに昇華させた技であろう。そうなると速度という事に関しては、ほぼ互角と考えても良いだろう。

「女性とはいえ容赦はしない……行くぞ！」

ボクサーとして鍛えたフットワークだろうか。屈強な見た目とは裏腹に、一瞬にして間合いを詰めてくる三木。かなもそれに呼応するように、前へ飛ぶように走る。

（……前傾姿勢な分、加速力は早い。この勢いのまま攻撃すれば威力は高くなる感じかな）

かなは勢いのままに左ミドルキックを繰り出す。文字通りランニングミドル。三木もその蹴りを見て反応し、同じく左ミドルキックを繰り出す。二足の蹴り足がその場で交錯する。

「つう……！」

「むっ!？」

二人は蹴りの威力のままに、後方へと下がる。お互いに想像以上の重さが、足に残る形となる。

「痛い……さすが男の子って感じかな。威力や重さに関しては向こうの方が上だね」

「大したものだ。よもやこれ程の打撃力を有するとは……」

今のたった一撃の攻防で、両者が持つ武器の性質がわかる。かなは繰り出した左足に激痛と重さが残ったのに対し、三木はどこか余裕すら伺える。むしろこのぐらいは当然、といった顔つきでもある。「今の攻防で足を痛めたようだ。ならばこれは俺の勝機だっ!」

三木の速度に衰えはない。かなの蹴りは、三木にほとんど聞いていないのだ。一気に接近され鋭い拳の弾幕を降り注がれる。かつての相手　リバイザーの西岡住吉の拳を超えるキレの良さである。更に拳すらも重そうに感じさせる攻撃に、めずらしくかなが畏縮していく。唯一、今のところ全ての拳を避けられているのは、三木の攻撃が全て頭だけの攻撃しか来ていない為だろう。  
ヘッドハンティング

「せいっ!」

「……っ!？」

そう思ったのも矢先、ヘッドハンティングしか来なかった攻撃が突如、足への攻撃へと変わる。いわゆる足払いをされた格好で、かなはその場に倒れる。

（……やられた。頭狙いは凶だ……）

「おとなしくしていれば、痛みはないぞ」

全く容赦なく、倒れたかなの顔面に向けて拳を振り下ろす三木。

（避ける、かな!　避ける避ける避けるお!）

真横に転がるようにして、振り下ろされた拳を間一髪でかわす。空振りに終わったが、殴られた地面には鈍い音と共に、拳が下ろされていた。かなはその拳が直撃していたらと思うと、体に緊張が走っている。

「なるほど。反応速度はズバ抜けて良いようだ。まるで数年前に戦

った、相沢みなを思い出すな……」

三木から出たその名前に、かなは敏感に反応する。

「ちよつと……みなを、知っているの？」

「む？ ああ、あれは中学三年の頃だったか、ある大会で俺は相沢みなと戦った事がある」

「……中学三年の頃、みなと……」

「……！？ そつか、相沢……君はもしかして相沢みな姉妹なのか？」

「……うん」

「やはりか、試合中に何だが、相沢みなは元気なのか？ あれ以来全く姿を見る事が無くなった……、俺はあれ程の強さと才能を持った選手を他に知らない」

かなは少し黙った後、不意を付くように一気に責め立てる。

「今は試合中！ 無駄なお喋りはいらんじやないか……つな！」

語尾に力を込めながら、かなは星蹴撃を繰り出す。それを十字防クロスア御でガツチリとガードする三木。

「そつだ、思い越せばその奇妙な構えも、相沢みなが当時やっていた構えにそっくりだな」

「星蹴拳 連星撃！」

一撃で駄目ならば、連続で攻撃をする。しかし放たれた連星撃はかつての連打が見る影もなかった。無論、ボクサーとしてもムエタイ格闘家としても、鍛えられた三木に勢いの無い連星撃は、回避する事に造作もない。

「だが一つ一つの技のキレはそっくりとはお世辞にも言えんな。なんだこの出来損ないの技は？」

「くうっ……！」

三木の言葉に悔しさからか、唇を噛みしめるかな。その言葉の呪縛から逃れるように、かなは大空を舞う。

「喰らええ、落星撃！」

空から落とす無数の蹴り。真っ直ぐに三木を狙って落ちていく。



だが、余裕の笑みすらも浮かべずに、それをただ作業のように避ける。星蹴撃、連星撃、落星撃といった技を全て攻略された。かなは地面に着地し、一人息が上がっている自分に気が付く。

「ふむ、再び相沢みなと戦えるかと思いい、勝手ながら期待をしたが……お前は相沢みなとの劣化コピーに過ぎん」

一度決めかかっていた心が、再び揺らいでいる事に気が付く。この世でたった一人だけ、いつまで経っても相沢みなとの幻影というプレッシャーを受けているのだ。

「コラア、かなっぺ！」

いつの間にか塞ぎ込んでいた心に、バカみたいな大きな声が響く。「……み……な……！？」

かなが声をする方を向くと、そこにいたのは相沢みなではなかった。そこに見えたのは赤いハチマキ、響ワタルの姿だった。

「デメエ、かなっぺ！ 何を中途半端な事してんだっ、お前に何があつたのか、何を考えているのかとか、オレサマはそんな事は知らねえ！ だけど、何があるうとお前はお前だ、相沢かな！」

会場中に響く声で、ワタルは叫んだ。

「……あと五分。がんばって」

桐華も応援した。気づけば体を支配する緊張は、全てでないにしろ無くなっていた。

（……ワタル君の言う通りだ。今は中途半端な事は駄目。できない事はできない、やれる事をやるの。良いね、かな！？）

再び構えなおした星蹴拳の構えは、いつもの構えだった。

残り時間あと四分四十秒。

それは全力オーラ！

「かなっぺ！ あと四分ちよつとだ、行けえ！」

周りの大歓声に負けない、大きなワタルの声が響く。その声と共に、かなは三木に向かって飛び出す。

（わかっていても……他人<sup>ひと</sup>が作り出すみな<sup>みな</sup>の幻影が、私を縛る……）  
「先ほどと比べ速度が少々落ちたな……相沢<sup>あいざわ</sup>みなはもつと速かったぞ！」

三木は高速の左拳を、かなに向けて放つ。いつもの構えに戻った為か、引き気味に構えている影響なのか、その高速の拳を完全に見切る。

（二人でゴールしよう。そう誓った……かなの星蹴拳、みな<sup>みな</sup>の星蹴拳と……どっちだけをやってても駄目だし、どっちが消えても駄目なんだよね……）

左拳を避けて、その交差法でカウンターの一撃を見舞う。しかし三木もこれを見切っていたのか、咄嗟の動きなのか、このカウンター<sup>カウンター</sup>の左足での蹴りはきつちりと防御されてしまう。

「ふん、威力においても先ほどの方が……ん!?」

「うああ……あああああ！」

（かなとみなの星蹴拳を合わせた新しい星蹴拳……それを、創る！）  
気合一閃。カウンター<sup>カウンター</sup>の左蹴りをジャブにして、軸足に使った右足から空中での星蹴撃を見舞った。

「ぐ、っは……！」

その一撃は三木の土手っ腹に深々と突き刺さり、大きく後退する。空中で放った為、攻撃したかなも地面へと叩きつけられるように落ちる。

「……凄い」

「ああ、やべえな……！」

その攻防を見て最も驚いているのは、かなの技を知っているワタ

ルと桐華の二人だった。いや知っているからこそ余計に驚いたのだ。  
「……本来、星蹴撃のような技は、蹴り足よりも軸足が要となる技。その技の性質上から考えても、星蹴撃を空中で放つのは良い方法とは言えない」

「それを最初の蹴り足である左足をジャブのように使い距離を計り、そしてその蹴り足を軸足へとシフトさせる。……つまりは地面は相手、軸足に使った右足も蹴り足にシフトさせたってか。ったく、オレサマとした事がアイツ（かなっぺ）の呼び名を忘れてたぜ……」

「……呼び名？」

「ああ、あいつは紛れもなく、天才蹴撃少女だよ！」

三木は相当応えたのか、その場にもんどりうって苦しんでいる。かなも何かを感じたのか、倒れたまま全く動かないでいる。いつの間にか、歓声も二人を応援する声から、かなを応援する声に変わっていた。巻き起こる「かなコール」に、かなは何かが開いていく感覚を得ていた。

「残り時間三十秒！」

黒子によって知らされる残り時間。予選は十五分の時間制限がある。

「あと……三十秒……！」

震える体に鞭を打ち、かなは三木に向かって走る。時間を聞き、三木もダメージが残る体を押して立ち上がる。

「勝つんだっ！」

ロー、ミドル、ハイ。回し蹴りに踵落としなど、思いつくままに蹴り技の集中砲火を浴びせる。

余程のダメージが三木の体を支配しているのか、先ほどの余裕の表情とは一変、防戦一方になる。

「3、2、1……！」

会場が一体となつてのカウントダウン。そして。  
「そこまで！ 時間切れ引き分け終了！」

わずか十五分だったかもしれない。しかしここにいた人にとって

は長い十五分間が終わる。中堅戦の結果は時間切れ引き分けに終わる。

たった今戦っていた二人は、お互いに息を荒げていた。攻めも攻め疲れ、守りも守り疲れ。お互いにたったわずかの攻防だったが、肉体的にもそうだが、精神的な疲労困憊が目に見えていた。

「……はあ……はあ……！」

「……どういう事だ。最後の最後で放ったあの技は、相沢みなものなのか？ 相沢みなは俺の知らない間に、新しい技の開発に成功したのか」

「新しい技の開発なんてしてない。……みなは、もういない」

冷静な表情を崩さなかった三木は、驚きの顔を見せて言う。

「もういないだと！？ ……ま、まさか、いや……すまなかったな。一番辛いのは君だ」

「いえ、強いみなを知っていてくれる人がいて、微妙に辛いけど、嬉しかった」

「……俺の敗因は、相沢みなとの幻影に縛られ、それを克服できなかった事。そして、相沢かなに負けた事、か」

三木は静かにディーパーディーパーの控えベンチがある場所へと下がっていく。

「強かったぞ、相沢かな！ 君の次の試合に期待する」

それだけを言い残し、三木は振り返る事もなく歩いていった。

かなは、自分でも気が付かない間に、三木に頭を下げていた。そして、かなもマックスハートのベンチへと戻っていく。

「お疲れ、かなっぺ！」

「……お疲れ様です」

「……ふう。あとがとう！ ごめん、何となく予感してたんだけど、勝てなかった……」

複雑な表情をしながら、俯き気味に話すかなに、ワタルは努めて明るい表情で接する。

「バカ、でも負けてもいないだろ？ かなっぺのミスは次のオレサ

マが補う。でもこつから先でオレサマがミスしたものは、かなつペが補ってくれる。オレサマ達は仲間だ、チームだ。そんなんで……良いんじゃないか？」

ワタルの言葉に同意を示すように、桐華も小さく頷いている。

「……うん。ありがとう……」

流れる程でもないが、自然とかなの目につつすらと涙が出ていた。「ま、それに仮にも無い話だが、例えばオレサマが大将戦で負けたら、こつちも向こうも、完全に一勝一敗一分けになる。そうなたらサドンドスって形で、最後に時間無制限の一本をやるからな。そうなたらトーコがかなつペ、どつちにラストマッチのご指名が飛んでくるかもしれないぞ？」

「……プレイヤーは任意で選べないの？」

問いかけたのは桐華だ。

「ああ、サドンドス戦は大会本部……てか黒子が独自で決めるらしいからな。例えば大将戦を戦ったプレイヤーと、先鋒戦を戦ったプレイヤーとでは、前者の方が体力面で不安が残るしな」

「運が悪くても良くてもやるっきゃないって事かな。全力で！」

かなの言葉に、ワタルは大きく頷き応える。

「へっ……わかってきたじゃねえか。そういう事だ、状況も糞もへつたくれもねえ、やるっきゃないのさ全力でな！」

そうこうしている内に、中央にいる黒子から呼び出しがかかる。大将戦が始まるのだ。

「さつて、とつとオカマ野郎を倒して次へ行こうぜ！」

「ファイト、ワタル君！」

「……がんばれ」

見ると既にディーパーディーパーの大将の芹川はいる。優雅に派手な扇子を仰いでいる。更に手には、まるで蛇の柄にも似た鞭を持っている。恐らくはそれが、芹川の武器であろう。

ワタルも愛用の赤いハチマキを一発巻いて気合を入れる。そして木刀一本を片手に、バトルリングへと向かう。

「よお、待たせたな。二回戦では出番が無かったからな、暴れさせてもらうぜ?」

「あら、響ワタル。貴方、普段はおちゃらけて軽い印象があるけど……今の貴方、素敵よ」

「お前に好かれたって嬉しくないぞ」

「オホホ……そう。でも、本当に今の響ワタルは素敵よ。全身からオーラがビンビン出てるもの。あの王者や天才とは違う毛並みよね」  
扇子で顔半分を隠しながら、品定めでもするような嫌らしい目つきで言い放つ。

「へっ、王者オーラに天才オーラか。なら覚えておけよ、このオーラはその王者や天才を超えていく……さしずめ全力オーラだ!」

ワタルは力一杯の握り拳を作りながら、その言葉を高々と言う。  
「全力オーラ……覚えておくわ。でもそのオーラもここで私に食べられたらそれでお終い……蛇は案外と丸飲みしちゃうものよ?」

「丸飲みはできねえ。こんなでつけえオーラを飲んだら、テメエの腹を突き破るぜ!」

二人の気合を見切ったか、黒子が高らかに右手を挙げて宣言した。  
「それでは、予選第三回戦。マックスハート対ディーパーディーパーの大将戦　始め!」

前二試合の激闘を終えて、遂に大将戦が始まる。

## 舞う木の葉。舞うオカマ！

始まりの合図。それは第三回戦、マックスハートとディーパーデーパーの、大将戦が始まった合図。

その合図と同時に、一瞬にして芹川の懐へと踏み入る。その目にも止まらぬ高速ダッシュは、全試合の三木を遙かに超えたダッシュ力である。

「あら……これは驚き。響ワタル、貴方うちの三木ちゃんより全然強いよね」

「つたりめえだ！ オレサマは……」

懐に飛び込み、左腰周辺に木刀を置き、まるで抜刀術のような構えをとる。

「優勝する男だぜっ！」

そしてワタルらしい力任せの攻撃を繰り出す。繰り出す攻撃は、左から右へ薙ぎ払うように走らせる。

「さすが響ワタル。そう言ってくれなくっちゃね」

芹川はワタルの攻撃を、扇子を用いてまるで風を切るように、右から左へ仰ぐ。

ワタルの木刀は、まるで芹川を通り抜けたかのように、空振りしてしまう。

「なっ……！？」

「オホホ、言ってなかったけど……私、強いわよ？」

まるで木の葉が風に飛ぶように、優雅に後方へ飛び、右手に持った鞭を展開させる。蛇の柄のような鞭は、展開させると正に蛇そのものにも見える。そして芹川はその鞭をワタルへ向かって放つ。風を切りながら、飛ぶその鞭の音が、まるで蛇の鳴き声のようにも聞こえる。

「っあっ！」

鞭による攻撃は、ワタルの左腕から背中にかけて、巻き付くよう

に命中する。

「オホホ、皮膚の表面が焼けるように痛いでしょ？ そうやってジワジワと蛇の毒にやられちゃいなさい。そして、弱ったところで美味しく食べてあげるわ」

「……蛇の毒、か。へへへ、ははは、はっはっは、はーっはっはっはっ！」

ワタルは一人、大爆笑をしている。会場中が何事かと、ワタルに視線を集中している。

「……何を笑っているの、響ワタル。全力になりすぎて頭でもおかしくなったの？」

「いやいや、オレサマの頭は正常だぜ。ただな……もっと強く、そして毒のある蛇に遭遇してつと、な」

「気に入らないわね、響ワタル。仮にそうだったとしても、貴方はここで私に食べられるの」

言葉通り、やや口調に苛立ちを含めながら、ワタルに向かって鞭を振るう。その木刀とは全く違った軌道で飛んでくる鞭だが、この芹川の攻撃を難なくはじき飛ばす。

「だから言ってるだろ？ お前の蛇はきかない、その鞭で俺を倒したかったら速水<sup>あいつ</sup>仁以上の蛇を用意してくるんだな！」

「……なるほど。響ワタル、貴方は私と遭遇する前に、良い経験をしたようね。でも逆を言わせてもらえれば、それは私とて同じ事よ。勢いは確かに侮りがたいけど……響ワタルのように大振りな戦い方をする人間なんて、いくらでも見てきたわ」

苛立つていた口調は、会話と共に冷静になっていく。恐らくはこれまでの戦いの経験を、思い出している事だろう。予選といえども、仮にも三回戦のチーム。かつての最高戦績はベスト8に入った事もある。そうは見えないが、芹川という人間は、戦いにおける感情の制御を心得ている。

「……堅つくるしい奴だな。そんな事はどうでも良い話さ。戦場<sup>いくさ</sup>では、理屈うんぬんよりも、強かった奴が勝つ……違うか？」



「ウフフ……いえ、全くその通り。だからこそ貴方は私には勝てないの。この大将戦を勝ち、サドンドスをいただき、次に進むのは私達よ！」

再び鋭く鞭を、ワタルに向けて振るう。ワタルも負けじと鞭を木刀ではじいて、それと共に一気に接近する。

「でもそれも違う。ここで勝って次に進むのは、オレサマ達だ。お前らも踏み台にして、もっと前に行くぜ！」

再び懐に入り込んだワタルは、先ほどの攻撃と違い、今度は斜め右上から左下にかけての袈裟切りを繰り返す。が、その袈裟切りも空を切るように、空振りしてしまう。そしてワタルが芹川を見る頃には、木の葉のように舞い後方へ飛び、鞭の適正距離から攻撃を仕掛けてくる。今度ははじかずに、ワタルも後方へ大きく飛び、鞭も届かない位置まで下がった。

「あら、怖じ気づいたの？ そんな所じゃ鞭はおろか、剣なんて届くわけがないわよ」

「わぁーってらあ、そんな事っ！」

距離を大きく離れたのは、一度間を置いて考えたかったからである。

（本当に木の葉みたいな奴だ……あいつのオカマキャラからは想像し難いけど、良い言い方をするなら、舞子のように舞って戦う華麗なタイプだ。戦い方自体は江藤に似ているな……江藤は必殺のぶつたぎりで倒せたが、あのオカマは……はてさて）

「考えているのね、無理もないわ。正直私も考えているもの。お互いに攻めては捌かれの攻防……決め手が無いものね」

ワタルは今の言葉から、あらかたの戦略をたてた。お互いに決め手がない、という言葉。嘘か誠かは定かではないが、仮にこれが本当だとしたら、不意打ち効果でぶつたぎりは効果があるといえよう。いずれにしてもパワーの面では圧倒的にワタル有利。技術の面では圧倒的に芹川が有利。ワタルは当たれば一撃だが当たらない。芹川は当たっても必殺の一撃が無い。戦局は互角のように見えるが、

倒すか倒されるかという観点で見れば、倒せる技がある分だけワタル有利と見るべきであろう。

「よっしゃっ、やらないで後悔するよりは、やって後悔しようじゃねえか！」

ワタルは自分の両頬を両手で強く叩き、ワタルなりの気合入れをする。

「それに……ヒロキも待ってやがる事だしなっ！」

「ヒロキ……？ まあ、どうでもいいわ。覚悟は決まったようね、響ワタル」

「おうよ！ 馬鹿と言われようと、オレサマの戦い方はこうだぜ！ 木刀に持てる力を注ぎ込みながら肩に担ぎ、腰を深く落とし重心を低く、そして全体重を地面に乗せる。」

「……す、凄いわ、響ワタル。今の貴方のオーラは特大級よ！ ……でも技はどうかしらね」

「へっ、技も特大級だぜ！」

ワタルは大きく飛翔した。下半身に溜めた力で一気に飛び上がる。上半身では文字通りぶったぎる為の力をまだ蓄積している。

「なっ、なんて体のバネしてるのよ、人間技じゃないわ！」

あまりの飛翔距離に、冷静な表情が一変、一気に驚き慌てふためく。芹川は右手に持つ鞭を、がむしゃらに振りまくった。しかしただ飛んでいるだけではない、その必殺のぶったぎりは、移動中はその体勢のまま体当たりでもしているかのように、体に当たる鞭をはじき飛ばしていく。

「いつてえ……けど。当たれよ、必殺のお、ぶったぎりいい！」

前に進む事により生まれる突進力。山なりに飛ぶ事により生まれる落下の慣性。そして持ち前のバネと鍛え抜いた肉体から繰り出されるパワー。これら三拍子が揃ったの必殺のぶったぎりである。

「……なるほど、攻撃に特化した技ね。しかも当てる事を念頭に置いてないで、当たった時の事を考えた一種の博打技ね……。さしずめ大振り台風つてところよっ！」

芹川はぶつたぎりの軌道に合わせ、左手の扇子を舞わせる。これ以上ない程の轟音と共に、空振りさせられる必殺のぶつたぎり。一人豪快空振り劇を、華麗に捌く舞子。見ていた客は誰もがそう思った。

そして相手が押した分だけ、舞うように引く。台風の強力な風により、吹っ飛ばされる木の葉だが、結局はのらりくらりと威力を回避したのだ。

「なあっ、避けやがったな、ド畜生！」

「響ワタル、貴方は馬鹿ね。これ以上ない程の馬鹿だわ。そんな馬鹿な所がちよつと好きだけれど……舞い落ちる葉に、力任せに棒を振ったって当たらないわよ」

「……力任せに棒を振っても当たらない!？」

「ええ、そうよ。そりやまぐれ当たりはあるかもしれないけども、そんなまぐれ当たりなんて期待するのは、三流のやる事よ」

ワタルの脳裏に何かが走った。それは、ひらめきの閃光。

「よっしゃ！」

「ん……？ 今度は何をやる気かしら？」

「へっへっへ。ぶつたぎり」

ワタルは再度、ぶつたぎりの構えで立つ。ただ一つ違う所があるとすれば、木刀を担ぐ手が、従来の両手で構えるのではなく、片手で構えている事だった。

## 勝利を掴め！

「また、ぶったぎり？ 響ワタル、貴方は進歩って言葉は無いのかしら…… さすがに馬鹿すぎると私も貴方の事を、見放してしまうかもしれないわよ」

扇子で口元を隠し、顔は上半分しか見えないが、その口調と表情は呆れ顔である。

「うるせえってんだよ！ それに馬鹿は馬鹿でも、オレサマは大馬鹿だ。大馬鹿はただの馬鹿と違って、何をするかわかんねえぞ？」

「…… 良いわ、そんなに言うのなら信じてみても良い。大馬鹿の足掻きってやつを見せてみなさい」

芹川は右手の鞭を展開し、左手の扇子はいつでも捌けるように、優雅に舞わせている。ワタルも右手で木刀を担ぐように構えるのは変わらず、通常のぶったぎりとは違い、左手は使わずにその左手をパーにして、照準でも合わせるかのように、その中心点に芹川を置く。その姿は若干形こそ違うが、テニスプレイヤーがテニスボールを打つ際の、左手の構え方に似ている。

現在の適正距離は、鞭を扱う芹川が有利である。ワタルが攻撃を当てる為には、再び芹川が繰り出す鞭の雨をかくぐらなくてはならない。攻撃を当てるといった話は、そこからなのである。

「行くぜ？ …… アンタのキャラは好きではないけど、アンタとの戦いは面白かったぜ」

「もう試合は終わるって言いたげな言葉ね。あまり調子に乗るんじゃないかってよ？」

二人の時間が一瞬の停止をする。次に動き出したのは、数秒にも満たない程の突風が吹いた瞬間だ。

弾けるように動き出した時間。距離適正が出ている為、芹川はその場から鞭による攻撃を開始する。ワタルは通常のぶったぎりと同じく、その場から山なりに飛び出す。

「本当にぶったぎりなのね……。なら貴方はここで終わりよ。決め手が無いと言ったのはフェイク、本当の狙いはコレ」

芹川は放った鞭に手首のスナップをきかせ、鞭全体に捻りを加える。捻りが加わった鞭本体部分から、真っ直ぐに伸びていく。その捻りの波が、鞭の先端まで伸びた時、その姿は見る者に鞭と、認識させない姿へと変貌する。

「終わりよ、響ワタル。これが奥の手……蛇槍！」

ランスロットスネイク

捻りが加わり針のようにピンと伸びた、その芹川の鞭の姿は、長さも相まってまさしく槍に変貌する。

「アンタの事を誤解していたようだ。オレサマはアンタの蛇を速水仁以下だと言ってしまった。だけどそれは違った、何故ならアンタの蛇はあいつとは全く違う性質だからだ」

「……響ワタル？」

「アンタはあいつと違い、その技の通り真っ直ぐな奴だっと思った。だから……オレサマの勝ちだ」

ワタルに向かっていた蛇槍は、途端にその軌道が逸れてしまう。

決して逸らしたのは、芹川ではない。逸らしたのは、ワタル本人である。

「響ワタルっ、貴方！」

空いている左手で、自らが額に巻いていたハチマキ。これを蛇槍に巻き付け、軌道を逸らす。

「そ、そんな馬鹿な事……あ、まさか!？」

「そう、そのまさかだ! ただのハチマキなら、簡単に巻き付いたりはしない。けど汗を吸ってビショ濡れになった生地は、案外と張りつくもんだぜ?」

蛇槍に巻き付いたハチマキを、力一杯に引っ張る。力の勝負では、ワタルに分がある。芹川は取り上げられたように、その蛇槍を手放してしまう。

「左手はこうする為のものだったのね!? でもまだ私には扇子こねがあるわ。両手だろうと片手だろうと、ただ大きく振り回す攻撃なん

て捌いてみせるわ」

「……へへへ。半分正解、でも半分ははずれだ」

山なりに飛んでいたワタルは、芹川の目の前に着地する。

「残った左手は……勝利を掴む為のものだ！」

「あつ……！」

ワタルは左手で、芹川の胸元を掴んだ。こうする事により、芹川が後方へと逃げる事を防ぐ。元よりパワーに関してはワタルの方に圧倒的な分がある為、一度捕らえてしまえば、逃がす事はほぼ無いと言って良い。

「行くぜ！ 必殺のぶった………つて、うおおおおおおおおおお！」

ワタルは芹川を狙っていたぶったぎりの軌道を、手に持つ扇子に変えてはたき落とす。そして掴んだ胸ぐらを突き飛ばすように離す。

「痛っ……」

「て、て、ててて、てめえ、オカマじゃなくて女だったのかあ！？」

突き放されるように、後ろへと倒れた芹川はまるで、か弱い少女、といった雰囲気立ちこめている。サラシを巻いている為か、特に目立たなかったが、胸ぐらを掴んだ際にワタルが触った物体の感触が、左の手の平に色濃く残っている。

「あら、オカマですって？ 私がいつどこで自分の事をオカマって言っただかしら？」

「だったらそのオカマ口調は一体なんだ！？ 超典型的なオカマ口調しくさってからに！」

「そういうオカマが大好きな女の子もいるって事よ、人の趣味に他人が口出しする事ではないわ」

「いや、そりゃそうだけど……」

「名前だって芹川香澄っていう女の子の名前でしょ？ ……それよりも、こんな事はどうでもいいわ。さっきの胸ぐらを掴んで荒々しく私の事を突き飛ばした貴方……肉食の獣って感じで素敵だったわ」

うつとりと恍惚の表情を浮かべている芹川。

「それに、戦っている最中に貴方の汗が私の肌を打つの……ああ素敵」

「ヒイヒイ……お前は変態かつ！」

その場の雰囲気の流れに、ワタルは芹川にツッコミを入れる。

「あ……痛い……」

「あ、悪い」

「うつん。良いのよ。今の貴方の私を物みたいにひっぱたくその攻撃性……もっと私をひっぱたいても良いのよ？」

「いや、ひっぱたくって……あれはツッコミだ。それにオレサマはそんな趣味はねえ！」

「そのオレサマ主義。ああ良いわ……やっぱり男は女をひっぱたいてでも言う事を聞かせる強引さが無いと……」

もう収集がつかなくなっている芹川から離れる為に、ワタルは黒子を捜す。

「おい、黒子！ こいつは武器を持ってねえし、戦う意志も無いだろ！？」

「う、うむ。戦意喪失と見なし、大将戦は響ワタルの勝ちとする！ ようやく出された勝利宣告。会場からは歓声もあるが、笑い声が多かった。

止まらない芹川を止めに、三木と純が来てくれる。純になだめられるように、控えベンチへと戻っていく。

「大したチームだな。マックスハートは……」

その場に残った三木が、ワタルに話しかけてくる。

「先鋒戦を戦ったあのガンナー。それに相沢みな意志を継ぐ相沢かな。そしてそれを束ねるリーダーの響ワタル、か」

「何、お前らもなかなか曲者揃いだっただ。良い経験をさせてもらった、ありがとう」

「ああ、次の試合もがんばってくれ。微力ながら応援させてもらおうワタルと三木はガッチリと握手をかわし、お互いにその場を離れ

た。

控えベンチに戻ると、かなと桐華が向かえてくれる。

「お、ラッキースケベのご帰還だね!」

「ラッキースケベ言うな!」

「……ワタルのスケベ……」

「いや、トーコ、むしろオレサマは被害者だぞ!？」

二人に茶化されながら、帰り支度を済ませる。ディーパーディーパーのメンバーは既に姿は無く、中央のリングでは、今日の二回戦目が始まるうとしていた。

「……よっしゃ、帰るか!」

「うん、帰ろう!」

「……うん」

予選第三回戦。対ディーパーディーパー戦は三戦二勝一分けにて、マックスハートが突破する。

そして帰りの電車の中で、ワタルはこう言葉をもらった。

「………やべ、次の対戦相手の事を調べるの忘れてた……」

電車はそんなワタルの意志とは関係なく、ただ走る。線路が続く限り。



## 本当の意志は！

人里離れた豪華な彩りの、館内にそれはあつた。豪華な外装とは裏腹に、まるで剣道の道場のような内装、所々がよく使い込まれておりお世辞にも、綺麗だとはいえない作りである。

「ふむ……想像以上だな、君の実力は……。どれ、ヒロキ君。今度はこちらだけの数のターゲットを見事かいくぐる事ができるかな？」  
その道場にいたのは、ヒロキと謎の老紳士だ。老紳士はリモコンで操作し、数十個にもなるターゲットとなるであろう筒状の物を、ヒロキに放つ。まるでバッキングマシーンのような形状の機械から放たれる、無数の筒の速度はかろうじて目で追うのがやっとの速さである。

「さあ、ヒロキ君。この弾幕をかいくぐり、ワシが持つこのリモコンを見事、はたき落としてみせてくれ！」

ヒロキは手に持つ木刀を構え、低い姿勢で老紳士を目指す。この時に特筆すべき事は、ヒロキの動きとその速度である。かつての面影がない程の身のこなしと速度で、筒状の物を避け、あるいは木刀で迎撃していく。それでいて前進していくスピードは全く変わる事がなく、余裕の表情で全てを捌いていく。

そしてあつという間に、老紳士の持つリモコンをはたき落とす事に成功する。

「なんと……！？ 最大レベルの魔力式強化マシーンを難なくクリアするとは……」

「はあ……、でも本当に強くなったんですか、これで？」

「馬鹿を言っではいけないよ、ヒロキ君。今の君のレベルはあの少年と互角か、あるいはそれ以上のものになっているのじゃぞ。当初の予定はきつちり一週間で強化するつもりじゃったが、今日は七月二十七日で五日間の強化で全ての修行を終えている、まだ二日残してこれは凄い事じゃよ、ヒロキ君」

「そうなんですか、今の状態で兄貴と互角か、それ以上？　とても実感が湧かないんですけど……それにここに来てからの五日間、基礎的な体力測定や、今みたいなバツティングマシンのような物を使った修行しかやっていませんでしたよ？」

老紳士は滑稽だというように、一人で笑っている。

「魔法を使つたからな。通常のトレーニングで同じ事をして、実力が上がる事はせんよ。それにワシは魔法を使つたが、キツカケを与えたにすぎん。そこから強くなるのには一種の才能が必要なのじゃ。才能の無い者はいつまで経つても弱い。クズ同然じゃよ……それに引き替え君は、才能の塊じゃよ、君は……ワシの最高傑作じゃ！」

「……僕にはその魔法っていうのがわかりません。この現代において魔法とかつて架空の設定で……」

老紳士はヒロキの言葉を遮るように、自分の言葉を言う。

「魔法はっ、庶民共が知り得ないだけで、この世界は魔法で満ちあふれておる。魔法が架空の設定？　いやいやそれは違う、魔法は、実在するのじゃよ」

不思議な目つきでヒロキを見る老紳士。何かに誘われるような錯覚を覚え、それを振り払うように視線を離す。

「ふむ、信じられないか。では身近な所でいくつか教えておいてやろう。まずは君のチームメイトの一人が魔法を使っているな」

ヒロキは自身の記憶を遡り、思い当たるフシがある事に気が付く。「そしてヒロキ君のご両親、君がどうしてそこまでの潜在能力を持っていたのが、わかるな」

「父さんと母さんが！？　……一体貴方は何なんです？」

「又フフフ……ワシはアバター。但し言えるのはこれだけじゃ。この世には数人のアバターがある、そしてワシはその数人の中の一人じゃよ。但しワシはその中でも嫌われ者のアバターじゃがな」

「……アバター……。わかりましたアバターさん。修行をしていただいた事には素直に礼を言わせていただきます。ですが僕とアバタ

「さんはこれ以上関わる事はありません。身勝手かもしれないですけど……」

老紳士から感じ取れる不思議な雰囲気。その雰囲気の正体はわからないが、嫌な感覚がヒロキを支配している。その感覚にめずらしくヒロキが他人に対して、敵意の目を向けている。

「構わんよ。君がそうしたいのならワシは構わん。だが君の感覚はワシを求める。下界に下りて戦い続ければ、嫌でも思い出す。君は一体何の為に強くなりたかったのだ!? ……ワシは君の為にあと数日は待つ事にしよう。だがこの機会を逃せば次にワシがここへ来るのは何年か先じゃ。わかっておるな、ヒロキ君?」

「……ありがとうございます」

軽く一礼をして、ヒロキはその部屋から、その館から出て行く。目指すはヒロキを待つマックスハートメンバーの元だ。

「来るよ、君は。君の本当の願いはあの少年と優勝を目指す事だったのかね? それは違う。君にとってあの少年は『超えるべき壁』だったはずじゃ。その感情はいつしか少年への『憧れ』へと変わっていった。わずか五日間の付き合いじゃったが、ワシにはわかるのじゃよ。君はワシと似ている……君は……再び明確な意志を持つてワシの前に現れるじやろう。絶対にな」

七月二十七日。ディーパーディーパー戦から二日後。

ワタル達、マックスハートメンバーは、大会本部からの連絡がいまだに無いという事で、息抜きにピクニックをしていた。場所は相変わらず、学校の屋上である。

「さあ、どんどん食べてほしいかな!」

シートの上に、かなの作った色とりどりの弁当が並ぶ。

「……相沢さん、凄い」

「おお、さすがだな、かなっぺ! これなら良い嫁さんになるぞ!」

「良い嫁さん? もらってくれるかな、ワタル君?」

「いや、それはない。浮気したらその蹴りで殺されそうだから」

他愛の無い話と、笑い声がその場に響く。天気もおおむね良好である。

すると、誰かが急ぎ足で階段を上ってくる音がする。その場にいた三人は一体誰が来るのだろうと、出入り口を見ている。そして見知った顔が姿を現した。

「やっぱりここにいた」

「ヒロキ!？」

そうそこにいたのは、ヒロキだった。食事を中断して、三人はヒロキの元へと集まる。

「帰ってきたよ、兄貴!」

「一週間って聞いてたけど、早かったんじゃないか? それにしてもどことなく変わったな。五日間で一体何をしたんだ?」

「うんうん、見るからに強くなったって感じかな」

「……ん?」

思うままに言葉を投げかけるワタルとかなに対して、桐華はヒロキに何かを感じ取っていた。

「とりあえず三回戦は突破したぜ。次からはパワーアップしたニューヒロキを見せてくれよな!」

「ニューヒロキだなんて、それに僕自身も本当に強くなったのか実感わかないんだよ……」

「でもどこかが変わったぜ? どこがとは明確に言い難いけど、強くなった感じがする。……強いて言うなら感覚が」

「……感覚……。そうだ、試合に備えて色々と準備しないと、僕はこれで帰るよ」

思い出したかのように、足早に帰っていくヒロキ。

「あ、おい、弁当は食べていけないのか? めちゃくちゃウマイぞ!」

「ごめんね!」

来た時と同じような、階段の音をたてながら、ヒロキは下りていく。

「……ワタル。ちょっと待ってて」

「ん、どうしたんだよ、トーコ!？」

桐華はヒロキの後を追うように、階段を下りていく。

「一体なんだってんだ？」

「さあ？」

途中から走るのをやめたのか、桐華はヒロキにすぐ追いついた。

「……川崎君！」

「ん、桜井さん。どうしたんですか？」

「……川崎君。一体誰に教わったの？ 貴方に残る微かな力が見える」

「やっぱり、桜井さんにはわかったんですね？ 僕を覚えてくれた人は魔法を使ってたって言ってました。それって桜井さんの魔法銃と同じですよ？ そしてその人はアバターって言ってました」

「……アバター。何のアバターかは言ってなかったの？」

「何のアバター？ いえ、ただアバターとしか言ってなかったです」

「……川崎君。私の魔法銃もアバターが作ってくれた。名前はマジックアバター。……そしてその人から聞いた事があるの、アバターは常に人間に味方をするけど、中には魔法を悪い事に悪用するアバターもいるって。そしてそういうアバターの大半は自分の名を名乗らないって……」

「……!？」

「……川崎君。精神を強く保って、それがアバターの魔法に対抗する手段だから」

「ありがとう……」

ヒロキは残る階段を下りる。桐華はヒロキをただ見ている事しかできなかったのだ。

不思議絵師 一筆！

「よお、トーコ。かなっぺの弁当無くなっちゃうぞ！」

「……うん」

戻ってきた桐華は、何かに考えふけるように座り込む。何があったのかわからないといった様子で、お互いに顔を見せ合うワタルとかな。

「なんだ、何かあったのか？」

「かなが知るわけないでしょ！」

「そりゃそうだ」

桐華は突然立ち上がり、鋭い目つきでワタルとかなを見る。

「ど、どうした、トーコ？」

「……ごめん。先に帰る」

返事を待たずに、桐華は走り去っていつてしまう。二人は桐華をただ見送った。

賑やかだった空気は一変し、静寂に包まれる。二人とも無言だったが、ワタルは何事も無かったかのように、弁当の残りに手を付ける。

「ちょっと、ワタル君」

「何だ、どうした？」

「今、シリアスな雰囲気。お弁当をバクバク食べてる感じじゃないでしょうに！」

「ああ、そりゃわかってるけど、シリアスな雰囲気って苦手でな……」

「それに……ん？」

ふと、目の端に何かが入る。そこをよく見ると、遠目だが小柄だとわかる女子生徒が視界に入る。だがそこに映ったのは女子生徒だけではなかった。

「女の子……それに……ぞうさん!？」

「はあ!？」

ワタルの突然のその言葉に、素っ頓狂な声をあげてしまうかな。

「いや、あそこにさ、いるだろ？　おい、お前！」

屋上の人目に付かない端の端。文字通りの端っこに大声で呼びかけるワタル。

「っ……！？」

呼びかけられた女子生徒は、余程びっくりしたのか、大きく体を硬直させる。そしてその生徒の目の前にあった白い紙らしきものを、乱暴に丸めてしまう。

「あれ、消えた……？」

女子生徒が紙を丸めた瞬間、その場にいた小さな像らしきものは煙の如く消えてしまう。そしてワタル達に目を合わせないように、まるで小動物が逃げるかの如く出入り口に走り込む。小動物という例えがふさわしい程の小柄な少女。やや茶髪がかった髪の毛を髪留めで留めている。ふわふわした印象のかわいらしい少女だと、ワタルは一目みて思う。

「あ、おいっ！」

「ごめんなさいっ、勝手に入って、もうしませんからっ！」

ワタルは少女の手を、極力優しく掴む。たったこれだけの事に、少女の表情は脅えている。

「別に何もしねえよ。オレサマ達だって勝手にここ使ってるんだから」

「うっ……！」

それでも少女は脅えた表情を変えずに、やはり小動物のように体を小刻みに震わせている。

「ほら、ワタル君ってやつぱりおっかないからねえ」

「なんだと、かなっぺ！」

「ほらほら、そういう所とかね」

いつまでも脅えられているワタルに、心底面白いと思ったのか、かなは腹を抱えて笑っている。

「えっ……響、ワタル……さん？」

「ん……？」

少女の震えは止まっていた。ワタルはかなに気を取られて、少女の腕を放してしまった。

「ごめんなさい！」

勢い良く、少女は階段を下りていく。

「……今日はなんとも、慌ただしいな」

「そうだね。なんか階段の使用頻度がやけに高い感じかな」

この日の慌ただしさも相まり、弁当の残りを処理した後、お開きになる。

私の名前は織部結衣<sup>おりへゆい</sup>。何の変哲も無い、東京の高等学校に通う高校一年生です。

何の変哲も無い、といっても、それはあくまで外見上の事。私にはある時から、その世界に無かったものを存在させる力、正しくは具現化させる力を持ちました。

この力を手に入れた時期、覚えがあるのは小学生低学年の時です。この時期には既に具現化させる力はあったのです。しかし明確にいつ、どこで、どういうふうに、手に入れたのかは全く思い出せない状態です。

私は小さな頃から、絵を描くのが好きでした。この絵を描く事も、『力』と同じでいつからなのかは、わかりません。ただ一つ言える事は、絵を描いてる時が私の全てであった事。私の頭の中の空想を絵にする事。それが大好きだったのは覚えています。いつからか手に入れた具現化する能力を、私は自分の絵に使ってみる事にしました。小さな私にとっては一つの大きな大冒険でした。

「ぞうさん、ぞうさん」

初めてそれを試した時は、少しの怖さがあっただけど、鼻歌交じりで楽しかった。

そして私は自分で描いた絵を、具現化させる事に成功したのです。それから私は、両親に買ってもらった、ぬいぐるみなどよりも、自



分で描いた絵を具現化させた友達と遊ぶ事が多くなりました。

私は小さな頃から極度の人見知りで、当時から友達と呼べる女の子の友達はいなかったし、男の子の友達なんて手の届かない夢物語でした。でも私の描いた絵は、私を裏切らない。いつまでも、これから私と一緒にいてくれるのだと。

時が経ち、私も小学生中学年へと上がりました。この時期になると私の人見知りもそれなりに影を潜め、数人の友達ができました。ある時、教科書に落書きをする遊びが流行った時に、ある一人の女の子が言いました。

「私の教科書にみんなの絵を描いてみて！」

私を含めた数人の友人は、上手になり下手なり笑い合いながら、教科書に落書きをしていったのです。

勿論、その落書きをしてしまう事によって、私の能力が知られてしまう事も考えていました。しかし、具現化能力は、私が「望む事」によってその力が作用されると、推測しています。つまり、私が望みさえしなければ、絵が具現化する事はない。幼いながらに、私が推理した事でした。

しかし、そんな私の考えは容易く崩れ去る事になりました。

「えっ……ちよつと何これ？」

「織部ちゃんの描いた、絵から、え、何で？」

そう私の考えは甘く、私の描いた絵は教科書の上で具現化してしまったのです。その場にいた友達達は突然出てきた、私の絵の具現化したモノにびっくりしていました。一瞬で終わったと脳裏によぎりました。こんな光景を見て、私を友達のように扱ってくれるとは思わなかったからです。ですが、私のそんな考えは再び良い方に裏切られたのでした。

「やだっ、これ、かわいいよ！」

「絵なのに触れるの？」

小学生の中学年。そんな年頃であった事も手伝ってか、私の能力は受け入れられました。そこが賑やかになり出すと、クラスメイト

達は、ほんの一瞬で集まりだして、私は瞬く間にクラスの人気者になりました。

この集まりを見て、先生が何事かと確認をしに来ました。さすがに、これはいけないと思いました。時は既に遅し。先生はすぐそこまで来てしまいました。

「先生見て見てっ、絵が本物になるんだよ！」

「絵が本物！？　おいおい、先生に嘘はついてはいけないよ。それに教科書に落書き、あとで職員室に來なさい」

「どうして、本当にここにいるのに……」

友達がっかりした顔で、私が描いたモノを触っていました。確かに具現化されている、それなのに先生には見えなかった。つまりは大人には見えないという一つの結論が出ました。

「まあいいや。先生には見えるけど、私達には見える。私達だけの秘密だよな！」

「私達だけの……秘密……。うんっ！」

私達だけの秘密。その言葉が友達の少ない私には、くすぐったくなるような嬉しさを感じました。

しかし、そんな楽しい一時は、長くは続かなかったのです。

不思議絵師 二筆！（前書き）

注意：この話の内容は、貴方にとって嫌な事を思い出すかもしれない要素で満ちています。閲覧の際は、ご注意ください。閲覧してください。

## 不思議絵師 二筆！

時が経ち、小学生高学年になった時の事です。

私の具現化する絵は、少しずつですが良いように見られなくなってきたのです。中には私の力だけではなく、私の事を影で悪く言う人も出てきたのです。その時期の私は、それに耐えられずに、泣き続けていた思い出があります。

「結衣ちゃん、みんな羨ましいから、文句言ってるだけだよ」

泣いてばかりの私に、友達の女の子はいつも励ましてくれていました。

しかし、悪い噂は一度流されると、一瞬で広まり続け、いつの間にか私の周りには人がいなくなっていました。また数人の友達との学校生活が始まりました。私達はいつも、私が具現化した絵と遊びました。

ただ一つ心を痛めた事があります。それは私の周りにいた事で、数人の友達もグループから疎外された事です。

「ごめんね……私のせいで、みんなまで仲間はずれにされちゃって……」

「そんな事は気にしないで良いよ。私達、結衣ちゃんと遊ぶの好きだもん！」

その言葉がとても嬉しかったです。やっぱり私のせいで、という気もありましたが、それよりも友達のその言葉の嬉しさが勝っていました。私の具現化する絵を喜んでくれる子は、今では少なくなりましたが、私にはまだこんなにも素敵な友達がいるのだと、改めて知りました。

それは私が小学生五年生だった時の事でした。

そして時の流れは早いもので、私は小学生六年生になりました。この時期になるとクラスメイトの仲間はずれは明確な虐めへと変わ

つていきました。私達は休み時間になると、教室から追い出されるような陰湿な虐めをされるようになりました。

「ねえ、結衣ちゃん。図書室に行こう。あそこなら図書室の先生もいるし、大丈夫だよ、きっと」

「……うん……」

私達は逃げるように、図書室へと移動しました。そこにいる人達は、とても虐めをする事とは無縁そうな人達で、その雰囲気はとても落ちついていました。図書室の先生も、とても優しく、私達は休み時間になればすぐに図書室へと移動をするほどになったのです。

図書室へ移動をするようになってから、約半年が過ぎた日の事です。

「……あれ、他のみんなは？」

「あ、うん……なんか用事があるからって、来ないんだって……」

三、四人はいた友達は、いつの頃からか、図書室に現れなくなりました。私の友達は、いつの間にかに一人だけになっていました。

「大丈夫だよ、結衣ちゃん。みんなが来なくなっても、私はちゃんとここにいますよ！」

「……っ、うん、ありがとう！」

本当に嬉しかった。その言葉を聞いた時に、図書室で、私は人の目も気にせずに泣いていました。周りの子も私を見ていたし、先生も心配して様子を見に来ました。でもこれは、悲しい涙ではありません。嬉しい涙です。

それ以来、小学校を卒業するまでの残りの半年間を、私達は親友のように過ごしていました。

ただ、卒業も間近だったある時の事。私にとっては不可解な事がありました。いつものように図書室で絵を描いていた時の事です。

「あ、遅かったね。委員会の仕事でもあったの？」

「あ、うん、ちよつとね……」

「今日はね、こんな絵を描いたんだ。どうかな？」

私は絵を描いたものを、具現化して目の前に出したのです。

「へえ、結衣ちゃん、今日はどんな絵を描いたの？」

「え……あの、ほら目の前に……あるよ？」

「えっ、あ、本当だ。やだっ、私ったら目の前にあるのに気が付かないなんてね」

これが小学生生活の最後に起きた不可解な出来事です。改めて思い直してみれば、不可解な事はまだありました。それは図書室内のみんなの反応です。私は絵を具現化していました。先生は大人だから見えないにしても、図書室内にいた他の子達が、具現化した絵に気が付かないはずは無いです。気が付かなかったにしても、半年間ずっと見なかったはずは無いです。

そして、この不可解な出来事の正体を、もっと早くに気づくべきだったのかもしれませんが。

この出来事の正体に全く気が付かないままに、私は中学へと進学したので。

そして私にとっては、地獄を見るような日々が始まったのでした。それは小学生の時の虐めとは比べ物にならない程の事です。小学生の時は、具体的には仲間はずれが虐めの主流でしたが、中学生になると、反抗期の鬱憤も相まって、その苛立ちの、はけ口に私が使われたのです。

「織部エ、アンタ放課後にちょっと来なよ。来なかったらわかってんだろうねえ！」

「……は、はい……」

何をされるのかは、わかっていました。でも行かないといけなかったんです。行かないともっと酷い事をされてしまうから。彼女達は決まって放課後の女子トイレを指定します。

「アンタ見てると、ム力つくんだよっ！」

「てか、チョーキモくない？ いつも一人で絵なんて描いちゃって

さ！」

五、六人ぐらいで私を囲んでの暴力行為です。手の空いている人は口で、思い思いの言葉を乱暴に言い放ち、そしてその内の二人ほどは私の事を殴ったり、蹴ったりは日常茶飯事、いえ空気を吸うのと当たり前の事ではなかったのかとも思えます。

「……うっ、ゴホッ……ゴホッ……」

ひとしきりの暴力で鬱憤を晴らし終われば、彼女達は満足げに帰っていくのです。少しの時間が経って、動けるようになってから、私も帰宅を開始するのでした。そして校舎を出て、校門に近づいた時です。

「結衣ちゃん……」

「あ……」

そこには小学生の時から、親友の女の子がいました。

「結衣ちゃん……大丈夫？」

「……うん、大丈夫だよ、平気だよ」

私は不安にさせないように、笑顔を作りました。本当は笑顔になつていなかったけど、私の中では、満面の笑みを浮かべたつもりです。

「……結衣ちゃん」

「本当に大丈夫だから、本当だよ？ 今日帰るね、ばいばい」

私は精一杯に手を振り、別れ、帰宅しました。いつからか、私はその子とあまり会わなくなりました。一つの答えとしては、私が逃げていたのです。こんな虐められた姿を見たくなかったから。それに私と一緒にいる所を見られて、その子にも虐めの手が回ってほしくはなかったからです。

しかし私のそんな考えは、無惨に裏切られました。それは虐めグループに再び呼び出された時の事です。

「相変わらずム力つくよ、織部は、さっ！」

言葉に力を込めながら、私のお腹や背中を蹴り飛ばしてきました。痛がる素振りを見せると、喜んでエスカレートし、反対に我慢する

と、反応が無い事が苛立つのか、結局暴力はエスカレートするので  
す。

「このペンがあるからさあ、こいつがキモチワルく一人で絵を描く  
んだよ」

「良いよ良いよ、壊しちゃいないよ、キャハハハ！」

暴力を振るわれ、動けない私は簡単に、愛用のペンを取られてしま  
いました。そしてそのペンは無惨にも、蹂躪されるように踏みつ  
ぶされ、壊されてしまいました。私は悲しんでる暇ありませんで  
した。その日の暴力は、いつもよりも激しく、私は私の意識を保っ  
ている事で精一杯だったからです。

「ちよつとヤバくない？ 織部の奴、もう意識が無いんじゃないの  
……これ以上やったら死んじゃうんじゃない」

「良いんじゃない、死んじゃっても？ こいつが死んだって悲しむ  
奴は『もういない』んだからさ！」

薄れゆく意識の中で、彼女の言葉はしっかりと耳に入りました。  
私が死んでも、悲しむ人、はいない。そんなはずはない、こんな私  
でもきつと悲しんでくれる人はいるはずだ。

「おつと、織部。意識が無くなっちゃう前に紹介しておくよ、私達  
の仲間の……だよ」

彼女が指差す方を、がんばって見てみました。もう視界はぼやけ  
ていて、一体誰なのかは確信を持って言えませんでした。それは  
私の知った顔であり、最も信頼していた顔でした。

「ちよつと……何も、ここまで……結衣ちゃんが死んじゃったらど  
うするの!？」

「ああん？ テメエせつかく仲間に入れてやったんだぞ、約束通り  
テメエが織部にトドメさせよ！」

「……結衣ちゃん……」

聞こえてくるのは、彼女達の下品な雄叫びでした。何を叫んでい  
るのかは全くわかりません。

「早くヤレって言ってたろっ！」



「っ……！！」

大きな罵倒するような声が聞こえたと同時に、私の体に最後の激痛が走り、そして私のかろうじて保たれていた意識は、闇の中へと墜ちていきました。

そして本当に最後の最後。私の意識は一瞬ながら、泣き声と謝罪の声で目覚めたのです。

「……ごめん……ごめんね、本当にごめんなさい。……何回謝っても許してはもらえないかもしれないけど……ごめんなさい。結衣ちゃんとの仲を切らないと、酷い事をするって……脅されて、恐くて……だから私、こんな事……」

言葉は一部始終は聞き取れなかったのです。最も、その時の私の頭に浮かんだのは、裏切られた、という言葉だけでした。こうして私はまた本当に一人になってしまったのです。

ある人を見るまでは。

## 不思議絵師 三筆！

意識不明になる程の重体となる虐めの結果、私は親の意向もあり転校という事になりました。虐めグループと「あの子」のその後はわかりません。そもそも意識が無くなった私を、誰が病院に運んだのかもわからないのです。いずれにしても転校してしまえば、その学校の事は私とは一切の関係が無くなります。

転校した先の学校でも、私に友達ができる事はありませんでした。その代わりというべきなのか、虐められる事ありません。残りの中学生生活である二年間、人との付き合いも無いままに過ぎていき、そして私は中学を卒業しました。卒業式の日、卒業生のほとんどが友達と記念撮影をする中で、私だけがたった一人の卒業式でした。

ただ一つ。転校してからの中学生活の中で、わかった事がありました。それは具現化した絵の事。小学生、中学一年と通して、具現化させた絵が見えないのは、大人であるからだと判断していました。しかしそれは違ったのです。正確には純粹で信じる心が無ければ、具現化させたモノは見えないのです。中学生生活の中で具現化させたモノを見れたのは、たった一人だけです。学年が上がるにつれて、私の具現化させたモノを見れる人は少なくなりました。恐らくはもう一緒に見れる人は、滅多な事では現れないのでしょうか。

そして高等学校への進学。父と母は、とても心配していましたが、将来的にも安心させる為には、高校、そして大学へと出ておきたかったのです。

それに高校になると、人間的にも落ち着きが出た為か、あるいは偶然的にもそういう事をしない人が集まった為か、虐めをする人はいなかったのです。虐めは無くなったものの、小さな頃からの一つのトラウマでもあった人見知りが、ここに来て最大の敵となりました。高校生活を送って半年が過ぎても、私には友達と呼べる人間は

いませんでしたし、クラスメイトの人達とも喋る機会はありませんでした。

私は既に当たり前となっていた、逃げるように教室を出て、一人太陽の照りつける裏庭に立っていました。時期も六月の中旬を過ぎ、そろそろ夏の太陽が顔を出す季節。暑さにやられないように、日陰へと移動し、誰にも目のつかないように、小さくその場で絵を描いていました。最近ではあまりやらなかった、具現化をして自分の描いた絵と遊んでいました。私は何故か小さな頃から、像が好きだった事もあり、下手な像の絵を描いては、その像と遊んでいました。

「君は可愛いよね。私とは大違い……」

何も喋らない像に話しかけるのが、いつしか癖になっていました。むしろ何も喋らないからこそ、何でも話せたのかもしれない。

「……………!!」

すると、突然遠くの方から大きな声がしました。しばらく聞き耳を立てていると、その声の主はほとんどこっちへ近づいているようでした。声だけではなく、足音も聞こえ、足音から来るのは二人だとわかりました。近づくにつれ、声の内容も掴めてきました。

「オイコラ、待てえ!」

「やだよ、だつて……僕が……!」

どうやら大きな声の人が追いかけているみたいです。二人の声から察するに男の人でした。少しずつ近づいてくる二人に、私は見つからないように身を潜めていました。

すると追いかけられている人が、そこを通過しました。見た目は非常に優しそうな人です。そして、それを追いかける大きな声の人が通る瞬間でした。

「あつ、ぞうさん、だめ……!」

私の描いた像は、勝手に歩き出し、今そこを通ろうとしている人の前に出てしまったのです。

「うわっ、なんだコイツ!」

像を避ける為に、急ブレーキする音が聞こえ、その瞬間に大量の

砂埃が舞っていました。

「ケホッ、ケホッ」

「ん……？」

「……あ……！」

咳き込んだ為に、その人に見つかってしまったのです。幼い頃からの人見知りと、中学の頃からの虐めにより、私は人と接するのが恐くなっていました。できれば今も見つからずに過ぎてほしいと、切に願っていました。

砂埃が晴れてくると、その人の姿が確認できるようになりました。とても元気そうな印象で、特徴的なのは額に赤いハチマキを巻いていた事です。そして手には木刀を持っていました。私は過去の体験から、その木刀で暴力を振るわれるのではないかと、心臓が爆発するのではないかと思うほど、脈打っているのがわかりました。

「……ふむ。これ、お前のか？」

赤いハチマキの人は、私の描いた像を軽く持ち上げました。

「……はっ……はい……」

私の声はひどく上擦っていました。それ程の緊張が体に走っていたのです。

「ふうん……可愛いゾウだな。でもちゃんと管理しとけよな。危うく踏んじゃうとこだったぜ？」

「は、はい……すみませんでした……」

「おう！……さてヒロキの奴を追わないとな。今日はヒロキが弁当当番なのに逃げやがって。……それじゃあな！」

「は、はい！」

赤いハチマキの人は、ヒロキという人を追って凄い速さで走っていきました。私はしばらく立ちつくしていましたが、体に走る緊張が取れませんでした。いえ、それどころか、ハチマキの人を見てから私の心臓は、うるさいぐらいに鼓動を刻んでいました。

「……響、ワタルさん、か」

私はめずらしくクラスメイトに話しかけ、ハチマキの人の事を聞

いた結果、その人の名前を知りました。

「織部さん、響先輩の事を狙ってるの？」

「えっ……そ、そんな事はない、です」

「うそうそ。織部さん、響先輩の名前を出してから顔が赤いよ？

でも残念だよねえ、無理だと思うよ。響先輩ってあんな性格してるから誤解されやすいけど、結構、学校人気ある方だからねえ」

その人の言葉に、少しの焦りの気持ちと、響ワタルさんが誉められて嬉しい感情があった。

そして七月二十七日の事です。

響ワタルさんは、学校の屋上でよく昼食を取るという事で、私は響ワタルさんを待っていました。像を避けてくれた事のお礼も言いたかったし、やっぱりもう一度会いたかったからです。それに夏休みが始まって、響ワタルさんも屋上へ来るのが不定期になっているらしいので、正直なところは会えるとは思っていませんでした。

何もない屋上で待つのは退屈で、私はいつの間にかに眠りに落ちてしまっていました。次に目を覚ましたのは何分後かはわかりません。でもそう長くない時間だと思います。私は半ば日常になりつつある、像の絵を描き、それを具現化させて話し相手になってもらっていました。ある程度の話が終わっても来なかったら、帰ろうと思っていたからです。

すると遙か後ろの方から、よく通った大きな声がしました。

「おーい、お前！」

「っ……！？」

私は急に呼ばれた為、身を固くしました。本来は入ってはいけない屋上に、入ったのが先生に見つかってしまったのだと思いました。とりあえず逃げよう、と判断し、像の絵が描かれた紙を乱暴に掴み、出入り口に向かってできるだけ速く走りました。

「あ、おいっ！」

「ごめんなさいっ、勝手に入って、もうしませんからっ！」

あと少しで出入り口に差し掛かるとい所で、私は腕を捕まれてしまいました。

「別に何もしねえよ。オレサマ達だって勝手にここ使ってるんだから」

「うう……！」

腕を掴んだその人は、何かを言っていました。既にパニックになっっている私には全く聞こえていませんでした。

「ほら、ワタル君ってやつぱりおっかないからねえ」

「なんだと、かなっぺ！」

「ほらほら、そういう所とかね」

男の人の声の他に聞こえた、女の人の声で、私は我にかえりました。何よりもその女の人が言った名前に反応したのでした。勇気を出して、私の腕を掴む人の顔を見ました。

「えっ……響、ワタル……さん？」

「ん……？」

私の腕を掴んでいたのは、響ワタルさんだったのです。私の中でそれまで体を支配していた恐怖が、消えていくのがわかりました。

「ごめんなさい！」

気が付けば、腕が放されていて、私は流れ作業のように謝り、そして出入り口から階段を下りていました。ある程度下りた所で、私は息を切らせながら止まり、捕まれた腕を見ました。腕にはまだ響ワタルさんの暖かさが残っているような気がして、何故だか私の心まで、温かくなっていくような気さえたのです。

## ワタルと結衣と……！

慌ただしく時間が流れ、結局お開きになってから一日が過ぎ、日は変わり七月二十八日。

ワタルは昨日の少女の事が気にかかっていた。特別な感情は特に無かったが、何故か気になっている。

「うーん……どこかで会ったと思うんだけどなあ……」

布団の上でゴロ寝しながら、無い頭を振り絞って思い出そうとする。一番近い感覚といえば、桐華の時のパターンに近い。そうつまりは過去に会っているような感覚である。しかし何度考えても、全く思い出せない上に、キツカケも見当たらなかった。

「ええい、ヤメヤメ！ こういう時は外でもブラつけば何か閃くだろうよ！」

布団から飛び起き、勢い良く部屋を飛び出す。そのままの勢いで外に出ると、真っ先に自宅ポストを確認する。

「ふうむ、大会関連の連絡はまだ無いのか……この辺のズボラな所はいけないよなあ、本当に」

ポストを確認し終わると、宛ても無く思いつくままに歩き出す。

夏休みで近所の子供は市民プールか、海にでも行っているのか、思いの外、静かなものである。時間は十時半過ぎ、この時間では人の出歩きは、それ程無いものだった。ワタルの学校の生徒も、学校に用のある者は、もっと前の時間に学校に到着している。ワタルはひたすら一人で歩く。

そのまま歩き続けると、見慣れぬ制服を着た、女子高生らしきグループ、二、三人ほどが歩いていていた。

「でさー、アタシらがやつちやまずいワケじゃない、だからソイツにやらせるってわけよ」

「チョーウケる。でもさあ、その子逃げやがったんでしょ？ 今さから言う事聞くワケ？」

「バーカ。言う事聞かせるんだよ、無理矢理にでもさ。大丈夫、そこまで逆らってくるんだったら、またボコして半殺しにしちゃえば良いんだからさ！」

「アンタすっごいオニー！ キャハハ！」

聞く気が無くても、聞こえてしまうぐらいの大きな声で、その女子グループはワタルの横を素通りする。

「……いまだに、あんなのがいるんだな。それにしても女らしくない下品な、っていうか危ない会話してやがんな、こんな朝のうちから半殺しなんてデカイ声で言いやがって」

そうは言うものの、その女子グループとは関係無いと判断し、ワタルも気にせずに歩き始める。結局、歩き続けるといつも通りに、学校に着いてしまう。

「って、おいおい……結局は学校かよ、響ワタル。お前はいつからそんなに学校が、好きになっただってよ！」

しかし、元より宛ての無い散歩だったので、ワタルはとりあえず校門を過ぎる。校舎内はありきたりだと判断し、せめて外を歩こうという結論に達して、校舎周りを一周しようと考え。校舎周りの花壇には、夏の時期にピッタリな印象の向日葵が咲いている。事務員のオジサンが、花壇に水をやる為に、ホースから勢い良く水を出している。その光景がなんと清々しい。

向日葵に見とれて歩いてしていると、ワタルの足に何かを踏んだような感触が残る。

「ん……？ 何か踏んだかな？」

足下を見ると、上手いとも下手とも言えない、絵に描いたような姿をした像がいる。

「何だコイツ？」

ワタルはその像を拾い上げる。何の抵抗もしないどころか、ワタルに好意を寄せるように懐いている。

「……あ、ぞうさん」

「ん……誰かいんのか？」



声のした方を見ると、そこには像の持ち主がいた。相変わらず物陰に隠れるように、小さくなっている。

「……あ、お前は昨日の!？」

大きな声で言うと、持ち主の少女、織部結衣はびっくりしたように、体を硬直させる。

「そんなにビビんなくて。別に何にもしねえって！ 丁度良いから何か話でもしようぜ？」

立ち話もなんなので、ワタルは結衣の隣に、腰を落ちつかせる。隣に人がいるからか、それともワタルがいるからなのか、結衣はいつも以上に体を硬直させ、緊張していた。

「……………」

「……………」

長い沈黙だった。恐らくは五分程、何も喋らずに座っている。ワタルは空を見て、結衣はずっと地面を見ている。

「そっぴゃさ……………」

「はっ、はいっ!！」

突然のワタルの話しかけに、気が動転して声が入擦った返事をしてしまう結衣。

「ははは、ちよつと落ち着けよ。んでさ、何で昨日は屋上にいたんだ？」

ワタルにとっては何気ない、結衣にとっては、確信をつかれたも同然な質問である。

「……本当にごめんなさい」

「いや、本当に怒ってないんだって、別に来たかったら来れば良いさ」

「……はい。……………」  
「ごめんなさい。それは、言えない、です……………」  
「ふうん。まあ、良いよ、言いたくないんだったら、無理には聞かねえさ」

話はそこで止まる。変わらずにワタルは空を、結衣は地面を見続けている。二人の間に再び沈黙が訪れる。今度は長く、十分間はお

互いに何も喋らない。

「そういやさ、お前の持つてるそのゾウって何だ？」

「えっ、あつ、見えるんですか……？」

「いや、見えるから聞いているんだけどさ」

「そ、そうですよね、ごめんなさい……これ、私の描いた絵なんです」

結衣は白い紙に、像を描いてワタルの前で具現化してみせた。

「へえ、凄いな、まるで魔法みたいだな！」

「え、魔法……？」

「ああ、魔法。だって絵を描いたらそれが実体化するなんて魔法じゃねえか？ オレサマの仲間にも魔法使う奴がいるけど、これもこれで凄えな！」

「あ、はい……ありがとうございます」

結衣はワタルの言葉が、心の底から嬉しかった。顔も少し紅潮しているのが、自分でもわかり、何よりもしばらく出てこなかった笑みが、自然と外へと出ていた。

「なんだ、お前笑うと可愛いじゃん！」

「えっ……！？」

「なんか会う度……って言ってもそんなに会ってないけど、いつも暗い顔してるからさ。ひよっとしたら笑わないのかも、とか思ってたけど……笑えよ、お前。笑ってる方がめっちゃ可愛いぜ？」

「え……え……あのっ」

結衣はこれ以上無いぐらいに、体が小刻みに震え、顔が燃えるような熱さを感じていた。体の中から、外に向かって、何かが爆発しそうな感覚が結衣の体を支配している。

「それに何でお前、いつも一人なんだ？ 教室に友達ぐらいいるだろ？」

結衣の表情は一瞬で暗くなってしまう。

「友達は、いません。私……人見知りだから、友達できないんです。それに……それに、中学の頃に虐められて、人と付き合う事が怖く

て……」

「……オレサマが言えた口ではないのかもしれないけどさ」

「……はい？」

「お前、戦ったのか？ 人見知りだと、虐められたと言ってるけど、お前は戦ったのか？」

「……あの、その……」

「ただ待っただけじゃ、ただ逃げるだけじゃ、道は開けない。辛いかもしれないけど、戦って、戦い抜いて、勝たないと、道は開けねえぞ」

「………！」

うつむいてしまっている結衣の表情は、ワタルからは一切見えな  
い。

「……オレサマ達は定期的、でもないけど、基本的に屋上でダベ  
てる。仲間も他に三人いるけど、みんな心の底から良い奴だと言え  
るぐらいに良い奴だ。オレサマはお前にも来てほしい」

「えっ……？」

「だって、お前の可愛い笑顔ってずっと見ててえもんな！」

無邪気な笑顔を浮かべながら言う。そして勢い良く立ち上がる。

「悪いな、辛いのはお前なのに、何か説教みたくなっちゃって」

「あ、いえ……」

「オレサマは響ワタル。今年のリトルウォーズで優勝する男だ！」

「私は……織部結衣です」

「そうか、じゃあオレサマはそろそろ行くわ。じゃあな、織部！」

ワタルは颯爽と走り去っていく。結衣にとっては、約二ヶ月前の  
光景だった。そしてワタルに誉められた事と、名前を覚えてもらっ  
た事で、結衣の心は満たされている。

ワタルの通った後を、なぞるように結衣も校門の方へと歩く。  
そして校門を過ぎた所で、結衣を呼び止める声がある。

「やっと見つけたよ、織部。久しぶりじゃない？」

「え、この子を探してた子なの？　キャハハ、ウケル！」

「……………あ……………！」

そこにはかつて、結衣に暴力を振るった虐めグループのリーダー格の女がいた。

「ちよつち顔かして、ってかアタシの言う事聞けるよね？　中学の時にアタシ自らがボコしてあげたんだから、さあ？」

偶然なのか、必然なのか、この出来事を見てる人間は、一人もいなかった。

声にならない叫び！

誰か助けてください。

それは少女の誰にも届かない叫び。

誰でも良いから助けてください。

少女の叫びは深い闇の中へと。

誰か私を……助けてっ！

届かぬ叫びの代わりを残す。

結衣は人気のない廃工場へと連れてこられる。そこには数人の男子と女子がいて、連れてこられた結衣を品定めするように見ている。全員が明らかに不良とわかる顔つきである。中には薬物でもやっているのではないかと思える程に、危ない人間もいる。

異様なその場の雰囲気<sup>すく</sup>に、結衣は自分が何をされるのかわからない恐怖に、身を竦<sup>すく</sup>ませている。何よりも自分自身の過去の体験が、頭の中でフラッシュバックしている。今、自分をここに連れてきた人間は、人間を半殺しにしても何とも思わない人間なのだ、と。結衣はこの連中に殺される事を覚悟する。いや、そう考えた方が、これから起きるであろう恐怖より楽だったのだ。

「早く来いよ、このクズッ！」

「……ハッ……ハッ……！」

あまりの恐怖に、呼吸をしなくても思うように呼吸ができない。何よりも体が金縛りにあつたように動いてくれない。半ば強引に、引っ張られるというよりも、投げ飛ばされるように、不良グループのいる場所へと連れてこられる。

「おい、そのガキがテメエの言つてた奴なのか、コラ？」

「そつだよ、コイツはアタシの言つ事を何でも聞いてくれるさ。なあ、織部？」

「……………」

「……なんとか応えろよ、このクズ野郎があ！」

恐怖に体の自由を奪われている結衣に、容赦の無い張り手を顔面に浴びせる。結衣は抵抗もできずに、その場に吹き飛ばされるように倒れる。

「クズで絵しかお友達のいないアンタを、わざわざアタシ達の仲間にしてやるうつて言ってんのさ。返事ぐらいしろってんだよっ！」

「……うぐっ……！」

倒れた結衣に、更に腹部に蹴りを見舞う。鈍い音と結衣のうめき声だけが、廃工場に響く。

「ケケケケ、おい、飼い主が犬の躰もできねえのかよ。こりゃ傑作だぜ？」

「なんだと、コラア！」

激しく言い合う、男と女。苦しむ結衣の事などお構い無しに、自分の感情だけをぶつけ合っている。

「ケケケケ、もう良いよ。おい、お嬢ちゃん。こんな女アマの事は放っておいて、俺の犬になれよ、可愛がってやるぜ？ ケケケケケ！」

「うつ……うつ……」

涙を必至にこらえ、終わらぬ恐怖に耐える。そんな結衣の表情を見て、男は卑しい表情をする。

「良いよ、じつとしてなよ。すぐに終わらせてやるぜ？ ケケケケケ！」

「やめろ……」

奥の方から聞こえる威圧感のある声に、卑しい男は脅えた表情で後退していく。

「あまり調子に乗るな。大切なお客さんだ」

恐らくはこのグループのリーダー格であろう。本当に人を殺しかねない顔つきをしている。身長も180cmはあるであろう体格で、結衣を見下すように見ている。

「このガキか？ テメエの飼い犬は？」

「そうだよ、コイツなら何でも言う事聞かし、何よりもアイツを騙

すには打って付けだからね」

「ふんっ、そういうわけだ女。テメエにはちよつと騙しをやってもらうぜ？」

どうやらここに結衣が連れてこられたのは、とある人間を騙す為らしい。

そして目の前の男は、胸ポケットから一枚の写真を取り出し、結衣に見せつける。

「この写真のクソ野郎は、最近俺らの事を裏切って逃げやがった。コイツには見つけ出して制裁を加えないといけねえんだよ」

「織部え、少しは覚えてるだろ？ 中学の頃、アンタを裏切ってアタシらの仲間になったあの子だよ」

少しどころの話ではない。結衣にとっては恐らく、生涯で忘れられない人間であろう。

「自分を裏切った人間を、今度は捜せって、キャハハ、マジウケるんですけどー」

中学時代に自分を見捨てた人間。その人間が不良グループから逃げ、捜し出して制裁を加える為だけに、今更のタイミングで結衣が呼びだれた。結衣にとっては、こんな馬鹿な話はない。

「あの野郎も織部なら、気を許すはず……そこで捕まえて制裁開始ってわけよ。織部も裏切られたんだから、あの子に一発と言わず気が済むまで殴れば？」

「……わ、私は、そんな事……」

結衣が全てを言い終わる前に、見えない所から拳が飛んでくる。

その威力のある拳に、結衣は人形のように吹っ飛ばされる。

「そんな事……何だ？ 嫌とは言わせねえ、テメエみたいなクソガキでも今は立派な計画の一部、逃げ出すならテメエも処刑だぜ。俺も暇じゃねえんだ、あまり手を煩わ<sup>わづ</sup>せないでくれねえか？」

一般人の結衣にすら、容赦なく拳を入れる男。殴られた結衣は顔面が歪むような錯覚に囚われる。事実、たった一発の顔面への拳は、それまでにやられた暴力が霞む程の威力である。あまりの激痛に、

意識を失うどころか、更に意識が覚醒していく。泣きたくても泣いているのかわからず、声を出したくても出ているのかもわからない。「……っ……っ……！！！」

普通に暮らしていれば、あまり見る事のない大量の出血。口の中が切れ、そこから出血したものが、自分の手を伝って地面に落ちる。「おっと、悪いな。何分話し合いは得意な方じゃなくなてな。ついクソガキ相手でも拳が出ちまう。……ま、ここから抜け出そうって言うなら、更に痛い目を見るって良い教訓になってくれれば良いか、ハッハッハッハ！」

言うだけ言って、男は奥の方に置いてあるソファに腰掛ける。恐らくはどこから盗んできた物であろう。そして結衣を連れてきた虐めグループの女が、結衣に近づいてくる。

「アンタも本当にクズだよね、織部。素直にハイって言うておけば、痛い目みないで済むってのにさ。ま、運が悪かったと思いなよ、これでクズみたいなアンタにも仲間ができたんだからさ！」

「……うっ……すんっ……うう……！！！」

ようやく涙が出てくる。顔にも痛みと激しい熱を持っている。何よりも殴られた右半分が腫れてしまい、痛々しくなっている。

「チッ、さつさとそのガキ連れていけ！　こんな所で泣かれちゃ、イライラしちまって一人ぐらい殺しちまいそうだぜ！」

ソファに座った男の声が、恐ろしいまでに響く。不良グループも男が恐ろしいのか、何も手が出せない。

「早く立てよ、コラ。早くしないとアタシまでとばっちり受けちまうだろ！」

「……うっ……うっ……！！！」

恐怖と、殴られた事により、完全に足が動かない結衣。

「このっ……早く立てって言うてんだよ、グズ！」

女は焦りと苛立ちから、結衣を蹴り飛ばしてでも移動させようとする。



その時。廃工場の扉が荒々しく開かれる。全ての視線が、そこに集中した。

「ここにいたのか、織部。探しちゃったぜ」

「誰だデメエは！？」

近くにいたグループの男が、入ってきた人間に罵声を浴びせる。

「オレサマか？ 大丈夫だ、安心しろよ。オレサマは別に正義の英雄<sup>ヒーロー</sup>でも、かといって悪の手先でもねえ！」

「つだと、コノヤローがあ！」

「オレサマはオレサマ、響<sup>ヒビ</sup>ワタルサマだ！ よおく、覚えておきやがれよ！」

そこには赤いハチマキに、木刀一本を握りしめたワタルが立っていた。

お前の声で俺を呼べ！

数時間前の事。ワタルは自宅に帰り、ポストの中をしてみる。  
「おお、来てるぜ、リトルウォーズ！ 嫌な予感しかないけどな  
！」

内容は予選第四回戦の事である。

「ふむ、対戦相手はフォースアライト。そして日時は……明日だとお！ フザけんな、明日試合になるなら、もっと早く連絡よこせてんだ！」

ワタルは大会本部から送られてきた封筒を、地面に叩きつけるように投げる。が、冷静になって再び自ら取る。

「はぁ……まあ、事実が事実。ちゃんと受け止めないといけないなやれやれ……」

ワタルは携帯を取り出し、メンバー全員にこの事を伝える。全員が驚きの表情と、適度な文句を言っている。桐華に至っては呆れ口調でもある。

「そついうわけだから。うん、明日は頼んだぜ！」

全員に連絡を回すと、ワタルは最後に大きく溜息をついた。

「本当に、いつまで続くんだろうなあ、この予選は……ん？」

何かがワタルの足に触れる。まだ少し明るいこんな時間から幽霊か、と思いつつも、恐る恐る足下を見る。するとそこには見た事のあるものがある。

「お前……確か、織部の描いてたゾウじゃねえか、どうしたんだ？」  
物言わぬ像は、ただ事ではない様子でワタルに訴えかける。ワタルは像の伝えたい事の真意はわからなかったが、その様子を感じ取る。

「ちょっと待つてろ、すぐに戻るから」

像に連れられ、ワタルが来たのは一つの廃工場だったのだ。

「とりあえず織部を返してもらいに來たぜ、そいつはお前達のような奴等と一緒にいる子じゃねえんだ！」

ワタルの通った大きな声は、廃工場中に響きわたる。

「……響、さん……？」

「おう、待たせたな！」

結衣は涙を流し、痛みに堪えながら大きく頷く。

すると、ソファに座ったリーダー格の男は、明らかな殺気を含みながら言う。

「もういい……ガキも、今入ってきたクソ野郎も、殺れ」

その場に緊張が走る。不良グループは怒りの矛先が自分に向かないように、ただ従うだけの姿勢だ。

「おい、ボス猿！」

「……アア！？」

「今言った事、後悔すんなよ。織部もこんなにしやがって、テメエだけはオレサマの全霊にかけてぶちのめす。二度と悪さできねえようにな！」

ワタルは持っていた木刀を、突き刺すように男に突きつける。

「テメエは誰に向かって口をきいてんだ！」

近くにいた男が殴りかかってくる。それを難なくかわし、鋭い木刀の一撃を振り下ろす。鈍い音と共に、男は倒れそのまま動かなくなる。そのあまりの一瞬の出来事に、不良グループは静まりかえる。

「テメエ……一体何者だよっ！？」

「オレサマか、さっきも言っただけど正義の英雄でもなければ、悪の手先でもねえ。……強いてあげるなら、チームマックスハートを率いる完全無欠のリーダーにして、今年のリトルウオーズを制覇する男……響ワタルだ、よく覚えておきやがれ！」

ワタルの声につられるように、男の笑い声が響く。

「なるほどな、リトルウオーズの参加者か、どおりで少しは強えわけだぜ。それで、テメエはこのガキを取り戻しに來たってわけか？ チームメンバーだから仲間に手を出したら許せねえって、ハッハ

ツハ、ガキくせえ理屈だぜ」

「ボス猿だから少しは頭が回ると思ってたら、馬鹿のボスはやつぱり馬鹿だったな。オレサマはただお前らのような馬鹿と織部じゃ釣り合わねえって言うてんだ！」

怒りに満ちた二人の男の声が、その場の緊張の糸を、更に張りつめさせる。

「……ちよつと待ちなよ、織部はアタシ達の仲間なんだ。変な理屈でアタシらと織部の関係を壊すんじゃねえよ！　なあ、織部？」

女は結衣を、威圧するように睨み付ける。既に拒否はできない、といった形相の女。

「……そうなのか、織部？　お前がこいつらが仲間だって言うなら、オレサマは引く」

「……えつ、あの……その……」

結衣の頭の中は完全に真っ白だった。今まで全ての選択から逃げてきていた。その全てのツケが、ここに終結したような状況に、結衣が応えられるはずもなかった。

「本当にクズだねえ、アンタは！　さっさとハイって言えってんだろ！」

我慢しきれずに、女は結衣の空いた頬を張り飛ばす。

「……うう……うう……」

その光景を静かに見ていたワタルは、ゆっくりと口を開いた。

「……織部。オレサマを呼べ、逃げるな。お前にしかできない、今のお前がするべき戦いをしろ！　逃げて……掴める未来は無えんだぞ！」

（ただ待っただけじゃ、ただ逃げるだけじゃ、道は開けない。辛いかもしれないけど、戦って、戦い抜いて、勝たないと、道は開けねえぞ）

かつて聞いた言葉と、今のワタルの言葉が、結衣の中でよぎっている。ただ泣く事しかできない結衣の心は、恐怖と、小さな希望の火との間で戦っていた。不良達の言葉を拒否すれば、間違いなく酷

い事をされるのは目に見えている。だが、結衣は本当の心の奥底で叫んだのだ。いや叫び続けていたのだ。

「……響、さん……私を助けてください……」

「なんだと、テメエ、織部エ！」

「私を……助けてください！！」

女の威圧的な声に負けないように、結衣は自分が持てる最大の感情を、声に出して叫んだ。叫んだ声を無理矢理にでも消そうとするかのように、女は再び結衣に張り手を見舞う。しかしその女の手は、咄嗟にワタルの手に止められる。

「ふぐつ……！？」

途端に女の腹部に衝撃が走り、女はそのまま意識を失う。

「ア、アナタ、女に手をあげるなんてサイテーよ！」

「……女に手をあげるのがサイテーなあ？ フザけんな、悪い事したら老若男女関係なくブツとばすのがオレサマの流儀だ。何でもかんでも女だからってよ、調子ブツこいてんじゃねえぞ、コノヤロー」  
鋭い眼光を光らせるワタルに、近くにいた不良達は完全に畏縮してしまう。

「めんどくせえから、全員かかってこい。テメエら全員、オレサマ自らによるオシオキタイムだぜ？」

ワタルのその言葉を口火に、不良グループは全員でワタルに襲いかかる。ワタルと同じく木刀を持つ者や、拳で仕掛けてくる者、中にはビール瓶まで持ち出す者もある。殴って殴られの攻防戦は、ものの数分で全てが片づく。文字通り男も女も容赦なく、オシオキされて倒れている。

「さて……あとはお前だけだぜ、大将？」

体中に傷を作り、至る所から血を流している。赤いハチマキは、ワタルの血を浴びて深紅に染まる。

「テメエ……何者なんだ……？」

「だから言っただろ、響ワタルだ。こちらからこれから化け物じみた奴等を、相手に戦ってかなきゃいけないんだ。こんな所で小悪党

が何人いようと負けるわけにはいかねえんだよ！」

言葉の終わりと共に、ぶったぎりの構えで男に突っ込んでいく。そのあまりの突進速度に男は何もできずに、ただ直撃を受ける。結衣が殴られた場所と同じ箇所をぶったぎられる。男の口から数本の歯と共に、血か吹き飛び、そのまま地面に倒れる。

「……………！」

「ふう……………終わったな。大丈夫か？」

ワタルは全ての不良が倒れているのを確認し、結衣に安否の声をかける。

「は、はい……………」

「まったく、凄い腫れてるなあ。立てるか？」

まだ足に軽い震えがあったが、結衣は何とか立ち上がる。そのまゝ二人で廃工場を後にする。

「まあ、あいつらも、もうお前の所に来ないさ、もしも来たらオレサマが返り討ちにしてやる……………ぜ？」

ワタルは途端に膝から崩れ落ちてしまう。結衣に支えられるようにして、ワタルは地面に寝転がる。

「響さん、しつかり！」

「あちゃ……………予想以上に効いてたみたいだぜ……………。さすがにビール瓶で殴られちゃあな。まあ良いや、織部……………ちよっと」

「はい？」

ワタルは結衣の膝に頭を乗せて、そのまま寝そべっている。

「あ、あのっ、響さん、ちよっと……………！」

「良いじゃねえか。あれだけの事やったんだ、少しはサービスしてくれよ、な？ それに響さん、なんて他人行儀に呼ぶんじゃねえ。

もう、お前はオレサマ達の仲間だぜ？」

「え……………あの、では何て呼べば？」

「ワタルで良いよ、代わりにオレサマは結衣って呼ぶから」

結衣は顔を真っ赤にしつつ、かなり困惑した表情を浮かべる。

「ほら早く」

「え……と、わ、ワタ、ル……さん」

「さん、はいらないっての。……でもまあ良いか、ハハハ」

「エヘヘ……ごめんなさい」

混濁する意識の中で、一人の小さな天使を見たような気がする。

「……やっぱ結衣は笑ってる方が可愛い……な」

一夜の惨劇は終わり、日が沈む。再び日が昇る時が新たな戦いの幕開けである。

ワタルの旅は、織部結衣という仲間を入れて、まだ続いているのだ。

## 反撃の鐘を鳴らす者！

「い、一体……どうちまつたんだ、こりゃ？」

朝日が眩しくなってきたる早朝。その廃工場には、数人の不良グループが倒れている。その廃工場にやってきた三人がいる。恐らくは彼らの仲間だろうか、二人の不良は倒れている人間の介抱に回っているが、その内の一人はこの光景を見ても、表情も変わらずに仁王立ちしている。

「に、二之宮……か？」

顎が砕かれ、会話もままならぬ不良グループのリーダーが、その男の名前を呼ぶ。

「……なんだ、このザマは？」

二之宮は凍てついた殺気に満ちた眼光を、半死半生の男に浴びせる。

「へましちゃったぜ……だが、次はこうはいかねえ。あの野郎……絶対にぶっ殺してやる……！」

「……あの野郎？ 誰なんだ、あの野郎ってのは？」

「響ワタル、とかいう野郎だ。……赤いハチマキに木刀持った……そっういや、あの野郎、リトルウォーズ参加者だと言ってた、か……」

「リトルウォーズ、だと？」

二之宮はその言葉に、わずかな反応を見せる。何か怒りとは違う負の感情である。

「クソッ、絶対にぶっ殺してやるぜ！」

「その必要はない」

「えっ！？ ……お、おい、何をするんだ、二之宮よ！」

二之宮は男の砕かれた顎を、左手で軽々と持ち上げる。左手で顎を潰すような勢いである。事実、男の顎からは次々に骨が砕けるような、気持ちが悪くなる音がする。



「ギヤアアアア！ に、二之宮ア、な、何をする気だ！？」

「……前から俺はお前が気に入らなかつたんでな。丁度良いからここで貴様を叩き壊させてもらうぜ？」

「テ、テメエ、俺がこんな状態だからって……ヒデエ小悪党野郎だぜ！ なあ、二之宮よお！」

二之宮の左手に更に力が込められる。二之宮の連れの二人は、その光景を脅えるように見据えている。

「ウツ……ギヤアアアアア！」

「お前がこんな状態だから？ 笑わせるな、お前のような小悪党……いつでもヤレたんだ」

二之宮は空いた右手で、弓を引くように構える。そしてその右手を勢いよく男の顔面に喰らわせる。口と鼻から大量の血をまき散らしながら、男は吹き飛ぶように倒れる。

「行くぞ」

「で、でも、二之宮さん。こいつら放っておいたら……」

「構うなよ。それで終わったらそれが、こいつらの器だ。……それに、こいつらは何の関係も無い、一般人の女の子を使つたんだろ？」

「ええ、そういう計画だつて数日前に聞いてます」

「なら、良いじゃないか。それがこいつらの罪滅ぼしだ」

二之宮は言葉通りに、不良グループに全く構う事無く歩いていく。  
「フツ……響ワタルか。くだらねえぜ」

二人の不良と、二之宮小次郎。朝日を背にして、彼らは響ワタルを目指す。

七月二十九日。ワタルと結衣は、廃工場から全力で走っていた。

「やべえ、これはまずいぜ！ 早くしないとリトルウォーズに遅れちまうぜ！」

「ワ、ワタルさんっ、一体どうしたんですか！？」

「結衣、お前は親が心配してるだろ、それに怪我の手当てした方が

良いぞ！」

結衣は急に立ち止まる。それを見てワタルも走るのをやめる。

「ワタルさん……あの、私……ワタルさんの、仲間……ですか？」

「……ああ。お前はオレサマの仲間だ」

「なら、なら私もワタルさんと一緒に行きます。確かに両親は心配してるかもしれないけど……でも、私はワタルさんと……あの、その、一緒に……いたい……で、す……」

一人、顔を真っ赤にしながら、ありったけの勇気を持ってその言葉を言う。

「……そうか、わかった。その代わりに約束しろ。会場に着いたら、親に連絡する事。あとはちゃんと傷の手当てをする事。腫れたままの顔じゃ、台無しだぜ？」

「あ、は、はい……！」

ワタルは基本的には鈍感なのだ。そして残り少ない時間で、予選会場を目指す。

しかし結果的には、急いだ甲斐もあり、十分前には会場に到着する。あとはマックスハートメンバーを探すだけである。

「ちくしょう、こう人が多くちゃ見つけにくいぜ！」

「……あ、あれじゃないですか？」

ワタルと反対の方角を見ていた結衣が、メンバーらしき人影を見つける。

「わかるのか！？」

「はい、この間屋上でチラッと女の方を見ましたから」

「屋上……かなっぺか。ナイスだ結衣！」

結衣の見ていた方角を調べてみると、確かにメンバー全員がいるのを確認できる。ワタルは結衣の手を引き、そこまで走っていく。小柄な結衣一人では、いつまで経ってもそこまでたどり着ける事はできないであろう。

「おう、みんな来たな！」

突然後ろから、大きな声で呼びかけるワタル。

「兄貴！？」

「ワタル君？」

「……ワタル」

三人が三様の反応の仕方をするのを、楽しんでいるワタル。

「全く、どうしようかと思ったよワタル君！ 全然来ないから心配したんだからね！」

一人やけに怒っているかな。ヒロキと桐華はそう見ると冷静なものだ。

「悪い悪い、ちょっと色々とおつてな」

「兄貴……その顔は、それにその子も、一体何があったのさ？」

「とりあえず今は時間が無い。オレサマの怪我の事は放っておいてくれ。それよりも、かなっぺに頼みがあるんだ」

「んっ……！？ 何かな？」

「この子の名前は織部結衣。自己紹介はまた後ほどつてやつだ。かなっぺは今回の出場は無し、この子の顔の手当てをしてやってくれないか？」

勢いのままに喋るワタル。かなは結衣の顔の腫れを見ると、冷静に怪我の具合を見る。

「……顔の他にも打撲があるね。わかった、私はこの子の手当てに今回は回るよ！」

「悪いな、かなっぺ！ ……そういうわけだ結衣。かなっぺは何だかんだで優しいから安心してくれ」

「誰が、何だかんだで優しい、って、ワタル君？」

顔は優しい表情を浮かべているが、どう見ても怒っている。

「………！」

結衣は突然のメンバー顔合わせに、軽い緊張が体に走っている。何よりも結衣の体に染みついているトラウマが、結衣の体に緊張を走らせるのだ。それを見かねてか、かなは結衣に近づいていく。

「……織部、結衣ちゃんだっけ？ 大丈夫、かなに任せて。何があったかわからないけど……ここには結衣ちゃんをこんな目にあわせ

る人は誰もいないよ」

結衣は何かを吹っ切るように、頭の中の葛藤と戦っている。そして静かに口を開く。

「……うん。よろしくお願いします、えと……」

「相沢かな。かなで良いよ！」

「では……かなさん、よろしくお願いします」

「了解！　じゃあワタル君、手当てが済んだらベンチに向かうから。みんな、負けちゃ駄目だよ！」

軽い激励をして、かなは結衣を連れて、手当てのできる場所へと移動する。その二人を出場メンバー全員で見送る。

「おっしや、というわけでヒロキと桐華。四回戦の試合をよろしく頼むぜ！」

「……うん」

「わかつているよ、兄貴」

「それで順番だが、先鋒戦は安定感が高い桐華。そして中堅戦にオレサマ。大将にヒロキだ！」

ワタルの言葉に一瞬間が空いたが、その言葉にヒロキが反応する。

「僕が大将戦！？　兄貴、正気で言ってるの？」

「本気も本気、おおマジ大本気だ。オレサマは見ての通りボコボコで、大将戦で勝てる程の体調が整っていない。それに、お前には修行の成果を見せてもらいたい。やれるか、ヒロキ？」

「……わかったよ、兄貴。修行の成果を見せて、大将戦を勝ってみせる」

ヒロキ自身も試してみたかったのだ。アバターとの修行が、一体どれ程の力を備えさせたのか。失礼だと思いつつも、ヒロキにとって今の自分の実力を確認する良い一戦である。

「……続いて、予選第四回戦。マックスハート対フォースアラートの一戦を行います」

アナウンスにて、両チームに招集の連絡が流れる。いよいよ予選第四回戦の始まりである。

「うしっ、気合い入れて行くぜ！」  
ワタル、ヒロキ、桐華の三人は、試合の行われるバトルリングへ  
向かう。

負けられない想い！

予選も既に四回戦。ここまで上がってくるチームとなれば、皆強豪チームであり、素人の観客でさえ、その雰囲気圧倒されてしまう。その中には長年の間、大会を見てきた玄人もいれば、トーナメント敗退チームもいるのである。様々な思惑が交差する中、ワタル達マックスハートは四回戦の舞台へと上がる。

「響ワタル」

バトルリングへ向かう途中、何者かがワタルを制止する。

「ん……？ あ、お前はディーパーディーパーの芹川。一体こんな所へなんの用だよ？」

「ウフフ……愛する響ワタルを応援しに来たの。愛する人には勝つてほしいと願うのは当然でしょ？ 顔のボコボコ具合が気になるけど置いとくわ」

芹川はワタルにウィンクする。オカマの印象が強い為か、ワタルはその行為に悪寒を走らせる。

「うつ……いやまあ、そうかも、しれないけどよ」

「それにね。ちよつと貴方にアドバイスがしたいのよ、今回の相手は今までに比べて一筋縄ではいかないわよ」

「アドバイス？ そんなもん必要ないぜ。最終的に勝つのはオレサマ達だぜ！」

軽い微笑と共に、その言葉を受け止めている芹川だが、明らかにその表情の奥に隠されたものは、一つの心配事である。

「……その言葉を信じてあげたいのも山々なのよ。でもね、今回の相手はそうはいかないわ……実は表だつての知名度こそ低いもの、知っている人間は知っているというプレイヤーが今回の相手、なのよ」

「知っている人間は知っている？ ……誰なんだ、オレサマすら知らない奴なのか？」

「ええ、多分知らないわ。実はそのプレイヤーは今まで外国にいて、つい最近、日本へ帰ってきたみたいね。自称天才プレイヤーらしいけど、でも実力は文字通り天才の名をあげても良いぐらいの、モノを持っているみたいね」

「……ふーん。天才が相手だか知らねえけど、倒さなきゃ優勝はできないぜ。とりあえずサンキュな」

「ウフフ……応援してるわ。願わくば私の響ワタルに勝ってもらいたいものね」

芹川は優雅に手を振り、マックスハートメンバーを見送る。

バトルリングに先にたどり着いたのはマックスハートの方である。フォースアラートは少し離れている場所で、話しているようにも見える。

「ええか、マックスハートは今大会から出場してるからって、甘く見たらいけへんよ？ あそこのリーダーの響ワタルちゅうんわ、なかなか良い筋してはるからね！」

「エエ、ワカッテイマスヨ。ゴアンシンシテクダサイ」

「僕たちは、貴方の為に、貴方に恩返ししたくて、ここまで来たのですから」

「……………」

フォースアラートのメンバーらしき数人が、輪になって集まっている。しかしその集団は、色々な意味で目を引く。その理由はすぐにわかる。車椅子や松葉杖などを持つ、障害者の人達が集まっているからだ。リトルウォーズの場に違う色を持つ集団は、明らかに注目の的になっている。

「みんな……もう、めっちゃ泣かせるで、ホンマに！……でも、ここまで来たらみんなで優勝やで。みんなで勝利の達成感を味わうんや！」

その集団の中に一人の少女がいる。身長は150cmもあるのか怪しいぐらいに小さい。夏の風になびくツインテールが活発なイメ

ージを漂わせる。少女の激励に、その場にいた全員が呼応する。

「よっしゃっ！ みんな勝ちに行こ！」

その少女について選手と思わしき二人がついてくる。その後ろには十人は超える数の人がいる。恐らくはこれら全てが応援団のようなものなのだろう。

少女がリング中央に向かう事に合わせて、ワタルも中央へと向かう。遠目からでも小さな女の子だと感じていたが、近づいてくるにつれ、少女の小ささは更に際だってくる。そして二人は中央でいよいよ向かい合う。少女の身長はワタルの半分しか無いのでは、と思えてしまう程の小ささである。

「確認してえんだが……お前がリーダーなのか？」

「なんやあ、もしかしてウチの身長が小さいからって舐めてるんじゃないか？」

目の前の少女は小柄な体の割に、似合わない覇気を以てワタルにくっつかかる。

「いやそれは無え、オレサマは老若男女問わず、目の前にいる戦うべき相手とは、全力で戦ってみせるぜ！」

「むふう。それでええんや、ウチも手加減なんてされたらかなわんわ。……あつ、ウチの名前は梓あずさ「クウ」コードベルや。宜しくしたつてえな！」

「何か難しい名前してるな……アレか、日本人と外国人との間に生まれるっていう？」

「そうやで、せやから目だってオッドアイやろ？ 名前はいわゆる仮名や、ウチは家の都合上で本名は出せへんからな！」

目の前に少女、梓に言われた通り、よく見ると梓の目の色は左右で違う。茶系の色と青い目をしている。しかし見た目は言われなければ、純血の日本人だと思ってしまう程である。

「そんな事よりも、名前は何ちゅうんや？」

「ああ、オレサマは響ワタルだ。ワタルって呼んでくれて構わない



ぜ」

「ワタルかあ、良<sup>え</sup>え名前やないの、覚えとくわあ！」

「……君達、自己紹介はそれぐらいにして、そろそろ試合ルールな  
どを決めてくれんかね？」

これからの進行時間も見かねて、黒子が二人を急かす。黒い布き  
れを被っている為、表情は伺えないが、声色からして時間が押して  
いるのが見える。

「まあ、何の変哲もないけど1on1で良いよな？」

「構へんよ、ここまでずっと1on1やさかい。ほとんどのチーム  
が1on1しかしてへんのちゃうの？」

「では予選四回戦。マックスハート対フォースアラートは1on1  
の試合形式で開始します！」

自己紹介に、試合形式も済んだので、二人はお互いにチームベン  
チへと戻っていく。しかしワタルは黒子に聞きたい事もあり、再び  
中央に戻ってくる。

「黒子さん、聞きたい事があるんだけどよ？」

「ん、何だね？ できれば早く戻って先鋒戦の準備をしてほしいん  
だが……」

「まあちよつとだけさ。あの対戦相手の梓<sup>つ</sup>つて子、本当に高校生か  
？ 見たところ小学生に近くねえか？」

「ああ、彼女はいわゆる飛び級なのだよ。歳は確か今年で十二歳だ  
ったか十三歳だったか……定かではないがね」

「そ、そんな子がリトルウォーズ！？ おいおい、時代は変わった  
なあ」

「うむ。そんな事よりも早く戻りたまへ！」

納得しながらも、焦りから苛立ちをこめてワタルを急かす。これ  
以上の行為は最悪、何かしらのペナルティを受ける可能性があるの  
で、おとなしく黒子の言う通りにするしかなかった。

急いでベンチに戻ると、桐華は既にスタンバイはできているよう  
である。相変わらず二丁の魔法銃である「ガバメント」と「デザイ

トイグル」の装備だ。

「……何を話してたの、兄貴？」

「いやあ、どうやら相手さんのリーダーは飛び級で、天才児。そして歳は十二、三歳らしい」

「そんな女の子が、リトルウォーズの参加チームのリーダー！？

……凄いな、僕にもできるかな……」

「何言ってるんだ、ヒロキ。お前はマックスハートのメンバーだぜ、そんな事を心配しなくても良いだろうに！」

ワタルとヒロキの会話を無視するように、準備を整え終わる桐華。  
「……行ってくる」

桐華は緊張の色も見せずに、リング中央へと向かう。フォースア  
ラートからも人が一人向かってくる。身長が高く、やせ形のスラッ  
とした風貌の男である。持っている武器は、持ち主に非常に似た細  
長い長刀の木刀である。何よりもその男は、目を開けていない。そ  
れが唯一、不気味な所である。

「……目が見えないの？」

「エエ、ジブンハオサナイコロカラ、モウモクデス」

「……」

「ダイジョウブデスヨ、ジブンハソレデ、ジュウブンニタタカエマ  
ス」

「……！？……私の心を読んだの？」

そう目の前の男は、桐華が思った事を口にしたのだ。

「メガミエナイ。ソノカワリニ、ジブンハミミガイイ。コノグライ  
ノ、キヨリナラバ、シンオンヲキクノハタヤスイデス」

「……そうですか。よろしくお願いします。私は桜井桐華です」

「ジブンハ、フジサワシンジ、デス」

軽い挨拶を済ませ、それ以上話す事はない、といったように桐華  
は距離を離す。

「……アナタハ、マケラレナイオモイ、ガ、アルヨウデスネ。シカ  
シ、ソレハ、ジブンモイツシヨデス。ワガリーダーデアル、アズサ

サンノタメニモ、マケラレマセン」

「……そう。……でも負けられない想いは、それだけは私は絶対に負けるつもりはない」

「ソウデスカ。イイシアイヲ、シマシヨウ」

黒子の旗が高く掲げられ、そして大きな声で始まりの合図が宣言される。

「それでは予選四回戦の先鋒戦　始め！」

旗が降ろされると同時に、四回戦の試合が切って落とされる。

## トリックハキカナイ！

盲目の男。藤沢信二ふじさわしんじが、予選四回戦での桐華の対戦相手である。藤沢の身の丈とそう変わらぬ長い木刀を持ち、盲目の為に目線による攻撃の先読みができない。

（……あの人も誰かの為に負けられない戦い。でも私も……私も約束した、あの日あの場所で）

桐華は容赦なく、目の前の対戦相手であり盲目の男、藤沢に対し愛銃ガバメントを向ける。藤沢も剣道の中段の構えを維持する。音だけで桐華のいる方角を向き、そして長い木刀を構える。

「ソレデイイノデス。ジブンモ、ホンキノアイテタタカイ、ソシテカチタイ」

「……っ！……行きます」

桐華はガバメントから水弾を射出させる。牽制程度に三発の弾を藤沢に放った。通常の相手ならば余裕で避けられる攻撃であるが、藤沢は違う。桐華は最後に確かめておきたかったのだ。本当に音により、相手の攻撃がわかるのかを。仮にも目も見えず、聞こえもしていなかったら、大怪我では済まない事になる。

当然のように、藤沢はこの水弾を回避する。避け方も最小限の動きで避けている。

「サキホドモイイマシタガ、ジブンハ、メガミエナイカワリニ、ミミガイイ。コノテイドノコウゲキデハ、ジブンヲオスコトハデキマセンヨ？」

「……………」

そんな藤沢の指摘も気にも止めず、桐華の表情は極めて冷静沈着である。そして桐華は藤沢を中心点として、時計回りに走り始め、動きながらの水弾連射を始める。

（……音で判断するなら、立ち止まっただけは駄目だ。……自分の音を消せば弾の音だけに、神経を集中させられて避ける事を容易に

されてしまうから。……自分の足音と射撃音、そして弾の音とこれだけの音で、かく乱すれば耳が良いといっても避けにくくなるはず！）

無数に放った水弾が、藤沢を襲う。藤沢も長い長刀を利して、水弾を受け流すように捌いていく。

「オトヲナガセバ、オトハヌケテイキマス。ジブンニ、ナミノコウゲキハ、キキマセンヨ」

その流麗な動きからなる受け流しは、そこで見ている者に目を奪う。まるで激流に逆らう事無く、身を任せ同化しているようにも見える。流す、というよりもすり抜けている、といった表現の方が正しいのかもしれない。

（……これで良いの。彼はその性質上、自分から攻撃を仕掛けてくる事は無い。……後の先を取る事ができても、先の先や、先の後を取る事はできない。……音で判断するという事は、逆に言えば、音がしなければ攻撃も防御もできないのだから。……そしてそれは彼と同じ接近戦をする人ならの話、遠距離主体で戦う私と彼は絶対的に相性が良いのだから）

桐華はどんなに受け流されようと、水弾を藤沢に射出し続ける。変わらぬペースで、藤沢も桐華の弾を受け流し続ける。

「フッフ、オソラクハ、アナタノカンガエドオリ、ジブンハコチラカラ、セメルコトハデキマセン。コノショウブ、ハジマッタシユンカンカラ、ゼツタイテキアイショウニヨリ、アナタノカチハメニミエテイマス……ソウ、コノコウボウハ、ジブンノタダノアガキデス。シカシ、ジブンニモ、カツホウホウハアリマス」

「……時間切れ引き分け」

「ソウデス。アナタハセツキンセンガデキナイ。ワタシハ、ジブンカラセツキンセンガデキナイ。シカシ、ゼツタイテキアイショウノナカデ、アナタハ、ジブンヲ、タオスケツテイリヨクガナイ。ヒキワケニモチコムコト。ソレハ、ケツカテキニハ、ジブンノカチライミシマス」

最初から相性的に勝てないのなら、時間切れ引き分けを狙い、勝ちも負けも無かった事にする。それが藤沢のとった作戦である。そして藤沢の言う通り、桐華は接近戦ができない分、敵を倒す決定力に欠けてしまうのだ。

（……彼の狙いは時間切れ引き分け。……確かにこのままでは時間切れに持ち込まれてしまう……）

桐華はわずかな一瞬で、時計を見て、試合開始時刻と現在の時刻を計算する。

（……始まりから六分経過、一試合十五分だから残りは九分。……万が一に備えて勝負をかけないと）

通常の藤沢に合わせた軌道の他に、桐華は照準を地面に向け始める。

「ム、ナニカスルツモリデスカ!？」

「……トリックワン。リフレクターバレット」

通常の軌道の他に、トリックワンによる跳弾させた軌道を混ぜて、藤沢に攻撃を仕掛ける。

「ミズガジメンニアタルオト!？ シカシ、ソナコトヲシテモ、ムダナコトデス。ドンナキドウヲエガコウガ、サイシュウテキニ、ジブンニムカツテクルノナラ、ヨケルノハタヤスイコト」

最低でも二通りの軌道を描き、襲いかかる水弾。そんな攻撃でさえ何の変哲もない攻撃だと、容易く避けてみせる藤沢。そんな最中、桐華のガバメントも水切れを起こしてしまう。

「ウチオワリデスカ？ コンナゼツタイテキ、コウゲキチャンスデサエ、ジブンカラコウゲキデキナイノハ、クチオシイデス」

「……貴方にどんなハンデがあるうと、私は私の想いの為に負けるわけにはいかない。残り時間をフルに使って貴方を倒します」

「エエ、ジブンモ、アズササンノタメニ、ナントシテモ、コノイツセンヲ、シシュシテミセマス」

ガバメントのリロードが完了すると、桐華は水の入ったボトルを取り出す。これは三回戦時に、水壁を出した時と同じ物である。そ

してそのボトルを空高く投げる。

（……通常の軌道と跳弾の軌道だけでは駄目ならば、水壁を使った三つ目の軌道を使う。……いくら受け流しが上手くても、これだけの弾幕を回避するのは、容易ではないはず！）

通常の射撃、跳弾する射撃、水壁を使う射撃、の三種類の攻撃をかける。ガバメント一丁ではどうあっても足りないので、桐華は今まで使わなかったデザートイーグルを装備する。威力調整は最低にまで落としてあるが、それでも致命打を与えかねない銃である事に変わりはない。

利き腕である右手にデザートイーグルを、左手にガバメントを装備し、弾幕形成を開始する。右手のイーグルで通常の軌道と、トリックワン。左手のガバメントも通常の軌道と、トリックツーで射撃する。上と下と、真ん中から藤沢めがけて襲いかかる水弾。

「……アナタハ、トンデモナイヒトデス。イママデノタイセンアイテダッテ、コンナコトヲヤツテノケルテキハ、イマセンデシタ」

桐華を認める発言をしながらも、聴覚と長刀により、その弾幕を受け流していく藤沢。

「アナタノワザハ、オソラクハシカクニ、ウツタエルワザデス。メノミエナイワタシニハ、アナタノワザノコウカハ、ハンブンノコウリヨクニシカナラナイ」

藤沢の指摘も最もな話である。トリックワンもトリックツーも跳弾、あるいは水壁による視覚的奇襲効果が高い。通常ならあり得ない軌道で襲ってくる弾を、視覚で判断してしまう事によって、回避を困難にさせるというものが大きいのだ。視覚で判断せずに、聴覚で弾の軌道を読む藤沢にとっては、直進軌道でも跳弾軌道でも一つの攻撃の軌道にして変わらないのだ。

「……真っ直ぐいつても、跳弾させても、貴方に当たる瞬間の弾は真っ直ぐに変わらない。……恐れ入りました」

「アキラメルノデスカ？ ソレデモ、コレホドノダンマクヲケイセイデキル、アナタハ、トテモスバラシイプレイヤーデス」

「……ありがとうございます。……でも諦めてはいません」

「ナニカ、ヒサクデモアルノデスカ？」

「……秘策……私はあの人を優勝にまでのし上げる為になら、どんな秘策でも卑怯な手でも考えてみせる」

先ほどまで形成された弾幕は無い。水壁も完全に下に落ちている。嵐が過ぎ去ったような静けさだけが、リング中央に訪れている。二丁の銃のリロードを完了し、桐華は再び藤沢に銃口を向ける。

「……行きます 第三のトリック」

「ダイサンノ、トリック!？」

残り時間は一分を切る。デザートイーグルとガバメントから再び水弾が発射される。



## リフレクターバレッツ！

ガバメントとデザートイーグル、二丁の銃から放たれる水弾。二丁合わせた水弾の弾幕が、再び藤沢を襲う。

「コレガ、ダイサンノトリックデスカ？ コレガ、トリックナラバ、ヒョウシヌケデス」

「……………」

弾幕の中には、トリックワンの跳弾も含まれている。しかしこの軌道の過程では、二番煎じにすぎない。聴覚で判断し、受け流しに關して最高の技量を誇る藤沢の前には、例え上下左右、仮にも軌道が跳弾しようと円を描こうと、關係がないのである。

「……第三のトリック。……トリックスリーはもう始まつてる」

「ハジマツテイル？ ……ムッ！？」

一瞬飛んできた一発の水弾に藤沢は、間一髪でかわす。たった一発の弾に、初めて藤沢がよろめく。今までの攻防から、桐華の持つ軌道バリエーションの中に、藤沢の体勢を崩す一撃は無かったはずなのだ。

「ナ、ナンダ、イマノハ！？ オトガ……オトガ、カワツタ！？」

「……トリックスリー。……跳弾する弾達」  
リフレクターバレッツ

残り時間も一分が過ぎ、藤沢に引き分け決着させるわけにはいかない桐華は、第三のトリック リフレクターバレッツで攻勢に出る。全ての攻撃を余裕で避け続けていた藤沢の顔から、余裕の表情は既に無くなっている。むしろ正体不明のこの攻撃に、苦悶の表情さえ浮かべるくらいである。

その正体不明の軌道は、遠目で見ているワタル達にははっきりと見える。

「リフレクターバレッツ。跳弾する弾達……ねえ。あの藤沢って奴には天敵な技だな、こりゃあ……………」

「うん、トリックワンとツーは視覚奇襲効果技。そしてこのトリックスリーは視覚にも聴覚にも有効。その技の性質は、名前の通り跳弾する弾達。跳弾する弾であるリフレクターバレットとの明確な違いは……例えば障害物に当てて、弾を跳弾させ軌道を変えるトリックワン。その性質上と使用場所から跳弾回数は一回。故に藤沢さんのように音で攻撃を、判断するタイプには弾の来る方向が違っただけで、通常の軌道のそれと何ら変わりはない。でもトリックスリーは違っ、あれは……その名前の通り、地面に当たった跳弾を更に弾によつて跳弾させている。跳弾した弾を跳弾させた弾で、更に跳弾させているから、視覚でも聴覚でも判断するのは極めて困難だよ」

「凄え長い説明だな……しかも難しい」

「最近はお番が少なかったんだ。ちよつとぐらいお番をくれよ、兄貴」

「クウツ、コウゲキガ、ヨメナイ……」

かろうじて攻撃を捌ききれていた藤沢だが、ついには直撃を許してしまう。水弾の威力は落としても、それなりの威力がある为一撃くらっただけでも足を止めるには十分すぎるダメージを与えられる。

「ガハッ……！ マ、マルデ、オトガシホウハッポウカラ、オソツテクルヨウダ、ウグツ！」

一撃の威力が高かった為か、その一発で冷静さを欠いてしまう。最も、音で戦う藤沢の聴覚を狂わせ、視覚で判断できない為、水弾の襲ってくる恐怖からパニックに陥っても仕方のない事である。ただ小さくなり、急所への直撃を避けるように、防御して時間を稼ぐ。「アト、スウジユウビヨウモタエレバ、ジブンノカチダ。ソレマデ、ナニガアツテモ、タエテミセル！」

意気込んで防御に専念した藤沢の耳に、一つの足音が後ろから聞こえる。

「マサカ……ソナコトマデ、シテクルトハ……」

「……これで終わりです。ギブアップしてください」

桐華のガバメントが、藤沢の頭に突き立てられる。防御の為に体を強張らせている藤沢には、咄嗟に攻撃に転じる事はできなかった。何よりも、そんな事をして対戦相手となった桐華は、そんな隙すらも見逃さないプレイヤーだという事は、戦った藤沢本人が痛い程に痛感している。

「ダイサンノトリックデ、チョウカクヲミダシ、チョウダンノオトデ、ジブンノアシオトヲケシタ……イヤ、チュウイヲカンゼンニ、ソラサセタ、トイウワケデスカ。……フウ、ワカリマシタ。ギブアップシマス」

藤沢自らのギブアップにより、予選四回戦、先鋒戦の一戦は残り時間一秒を残して、桐華が勝利を納めた。

「サクライトウカ」

「……はい？」

「アナタホドノプレイヤーニ、ソコマデノオモイヲ、イダカセルヒトトハ、イッタイナニモノナノデスカ？」

「……さあ？ 実のところ私にもよくわかりません。……ただ、その人と一緒に夢を見たいし、追っていききたい。そう思ったから私はここにいます」

「ソウデスカ。ジブンのオモイハ、ハタスコトガデキマセンデシタガ、アトノフタリガ、カナラズハタシテクレマシヨウ。……サクライトウカ」

「……まだ何か？」

「イエ、ジブンハ、コノグライチカケレバ、シンオンガキコエルグライノ、チョウカクヲモツテイマス。ソコデヒトツオセツカイナガラ、アドバイスヲ」

「……アドバイス？」

「ジブンノココロニスナオニナリナサイ。イマデハナクテモイイ、シカシ、オモイハツタエナケレバ、ツタワラナイノデスカラ」

藤沢はその言葉を残し、静かにリングを後にする。桐華はその後

る姿を、静かに見送り、そしてマックスハートのベンチへ戻っていく。

戻るとヒロキと、ボコボコの顔をしたワタルが待っている。かなと結衣は、まだ戻ってきてはいない様子である。

「お疲れ様です、桜井さん！」

「トーコ、ナイス！」

ワタルは、その言葉と共に、桐華に向けて親指を上突き上げる。ボロボロな体で、精一杯な笑顔を自分に向けているのを見て、桐華は二人にわからないような、小さな笑みを浮かべていた。

「……ワタル、当たり前。……私は、私の仕事をしただけ」

それだけ言っていると、桐華は汗を拭う為に近場の水道へ向かっていく。相変わらずクールだね、桜井さんは」

「ああ、だけどトーコはあんなので良いんだよ。オレサマはチームで一番トーコを信頼してるさ！」

「……一番の信頼……それは強さっていう意味で？」

「強さ……っていう面でもそうだが……まあ、色々とな」

ヒロキはワタルとの会話に、何かの引っかかりを感じていた。その正体がわからないヒロキには、静かな苛立ちが満ちている。行き場がわからない感情が、ヒロキの中で渦巻いている。

「……っ！」

その小さな苛立ちを、舌打ちにして外にはき出す。

「どうしたんだ、ヒロキ？ お前が舌打ちするなんてめずらしいな」

「……いや、何も。……ねえ、兄貴？」

「どうした？」

一呼吸置いて、ヒロキは口を開く。

「今のマックスハートって、何て言うか賑やかになったよね」

「ああ、リトルウォーズ開幕前の状態が嘘のようだぜ。オレサマとお前しかいなくて、マサとケン誘ったけどオレサマが怒って却下しちゃってさ」

「あははは……あったあった」

「それで、かなっぺ誘って、トーコが来て、気がついたら結衣まで入って……いつの間にか五人！」

「うん……」

「だから行こうな、優勝決定戦の舞台へ。そして優勝の栄光へさ！」  
ヒロキはワタルを見ると、まるで光を見ているような錯覚がする。ワタルの良さは常に前向きに物事を捉え、且つ目標がはつきりとして純粹にそれに向けて走れる事なのだ。だからこそ今のヒロキには、ワタルの光は眩しすぎたのだ。

「兄貴、もしも……もしも、だけどさ」

躊躇いながらも、心にうつすらと浮かび上がっている正体を、口に出してみようとヒロキは思う。理性では、言うべきかは迷っていたが、理性よりも感情が勝っているのかもしれない。

「もしも、僕が兄貴の敵だったら……いや、敵じゃなくても、僕が兄貴の対戦相手なら、僕がマックスハートを抜けて、僕のチームで優勝を目指したい……って言ったらどうする？」

そのヒロキの言葉に、何かを感じたのか、ワタルは真っ直ぐにヒロキの眼を見た。

「ヒロキ……？ ……もしも、お前がそういう事を言ったなら、リーダーとして、お前の兄貴分として、応援してやるさ！」

「ありがとう……兄貴」

ワタルとヒロキの会話はそこで終わる。数分の沈黙の後、リング整備が終わわり、黒子から中堅戦の合図がされる。

「ふう……かなっぺに結衣、それにトーコも戻ってこねえか。……」

ヒロキ！

「えっ……！？」

「お前が何を考え、どうしたいのかはわからない。でも男なら自分の信じた道を進めば良い。その答えが正解なのか間違いないのかは問題じゃねえ、本当の問題は全力でやってその答えに満足できたのかだ」

「兄貴……」

「オレサマは進むぜ、何があるとな。それがオレサマ響ワタル様だ！」

中堅戦始まりの為、いつもの赤いハチマキに木刀を持って、リング中央へ向かっていく。

その背中には何が映っていたのだろうか。

私の声で貴方を呼ぶ！

予選四回戦。対フォースアラート戦。先鋒戦は、ほぼ十五分フルタイムを使つての戦いで、桐華が藤沢信二から第三のトリック、跳弾する弾達　リフレクターバレッツにより勝利を収める。

その戦いの激しさからか、バトルリングの簡単な整備の為に時間を費やされる事になったが、その整備も数分で終わり、いよいよ中堅戦の始まりである。マックスハートの中堅戦のメンバーは、チームの大将でもあるワタルである。ワタルは愛用の赤いハチマキと木刀を持って、リング中央へと向かう。

「っ……！？　とと……」

歩いている最中、急にフラついてしまう。今までは、おとなしくしていたからか、体に残ったダメージが気にならない程度のもものだったが、いざ歩き出してみると自分自身のダメージがどれ程のものか、否応なしに実感してしまう。

「チッ……、さすがにあれだけ殴られたりすりゃ、オレサマでもこなるか……まあ、言い訳にするつもりも無いけどな」

対戦相手にも、黒子にも、今の自分の状態を悟られないように、努めて普通を装い歩く。顔色もできる限り見られないように、前が見えるぐらいに下を向く。うつすら見るその視界から、既に対戦相手は準備できているようである。

「よし、それでは中堅戦。響ワタルと梓「クウ」コードベルの戦いを始めます！」

さすがに四回戦というべきか、今のワタルには耳が痛くなるほどに響く、客席からの大歓声。何よりも、黒子の言葉に何かの違和感を感じて、顔を上げて対戦相手の顔を見る。ところが、目の前には対戦相手はいない。それよりも少し下に視界をずらすと、あの少女がいる。

「ん……何でお前がここにいるんだ？」

ワタルは自分の心に素直になり、あるがままの感想を述べる。

「アホッ、ウチが中堅戦を戦うからやで！」

「お前はフォースアラートの大将だろ。大将が中堅戦なわけねえだろ！」

「ドアホッ、アンタかてマックスハートの大将なのに、中堅戦やってるやん！」

「ああ、そっぴやそっぴや……」

意識が飛びかけているせいなのか、あるいは目の前の少女のせいなのか、ワタルの頭の思考回路は若干ながら、おかしくなりかけているようである。

改めて向かい合つと、やはり小さいと感じる少女。作戦か、偶然か、本来ならば大将戦を戦うべき二人は、中堅戦の舞台で戦う事になる。少女、梓は自身の体格に比例した、小型の短剣にした木刀を持っている。身長もさる事ながら、武器のリーチ自体も半分か、あるいはそれ以下ぐらいの差がある。つまりリーチの上では、ワタルが梓よりも圧倒的有利という立場である。

「ウチを可愛い女の子思うて、あまり手加減したらアカンよ？」

「だからどんな時でも、どんな相手でも全力なのが響ワタル様だ。」

……それに今は手加減できる程の余裕もねえ」

梓は手に持つ小刀を逆手に持ち、構えをとる事で小さな身長が、更に小さくなる。ワタルもそれに呼応するように、構えるがどこか辿々しい構えになりつつある。

「それでは中堅戦　始め！」

黒子の合図と同時に、梓が向かってくる。その突進力は、今まで会ったプレイヤーの誰よりも速い。いや、速く感じるのだ。低い身長に低い構えを利して、圧倒的なすばしっこさを感じさせる。事実上トップクラス並に早いが、視覚効果で更に速くワタルは感じている。

「そんなフラフラした構えで、ウチは倒せへんよ！」

「ぐっ……!!」



まるで絵に描いた盗賊のような動きで、ワタルに斬りつけ、そして離脱していく。元々のパワーはそれ程でもないが、加速力をつけてその勢いのままに攻撃をしてくる為、それなりの威力になっている。何よりも受けたワタルの手には、やや大きめの衝撃が残っている。

「どうしたんや、響ワタルっちゅうのは、もつと凄い奴やつて聞いてるよ！」

「へっ、ガキンちよのくせに調子乗んなって！ こっから行くぜ！」  
今の自分では長期戦は無理と判断し、ワタルは一気に短期決戦を仕掛ける事にする。長期戦といっても、十五分間、だが十五分間も梓の速さについていくのは、今の体調ではきついと素直に判断する。ヒット&アウェイの戦法で、ワタルから距離を離れた梓を、追いかかるワタル。今の状態でも十分に、梓の速度についていける。

「なっ……！？ なんちゅう速さや、ウチの逃げ足と同等やて！？」「オレサマは優勝する男。ガキなんかに負けるかってんだ！」

追い足の勢いのままに、今度はワタルの一撃。高く掲げた右手から、袈裟切りのように木刀を振るう。

（こいつは逃げ足の、着地硬直……とった！ ガキ相手には手痛いかもしれないが、我慢しろよ！」

「……にひひ。甘いで、ワタルさん」

着地硬直を狙い突進してくるワタルに対し、余裕の笑みを浮かべた梓。そしてそのまま、ワタルを馬跳びのようにして、攻撃を避けながらすり抜ける。おまけに飛ぶと同時に、小刀でワタルの背中を突き刺した。

「うぐっ……！？」

突然、背中に走る激痛に、ワタルは体勢を崩し悶絶する。対して梓は軽やかなステップで、ワタルとの距離を再び離しにかかる。

「ウチの逃げ足より速いスピードで追ってきた時は、正直ヒヤッとしたわ。でも残念やな、いまいちキレのない斬撃やったで、ホンマ

に」

速度はトップクラス。しかしその点で言うのなら、ワタルもそれぐらいに速さはあるのだ。梓の優れている点は、小柄な体格を利した小回りの良さなのだ。

（ちい……あのガキ、みぞおちの部分を攻撃しやがった……。ただでさえフラつくつてのに、息がっ……）

「なんやワタルさん。まさか今のでへバったんちゃうか？」

普段のワタルなら問題なく耐えられる攻撃である。しかし、今のワタルにはほとんどの攻撃が致命打になりうる。そして梓の言葉も満更ではなかったのだ。

「ああ、正直言つとへバった……」

「なんやて！？ まさかアンタ、調子悪いんか？ ……思えば顔もやけにボコボコやで」

「へバったけどよ……何でもねえよ。ガキンちょに心配される程、オレサマは墜ちてねえ！」

ワタルの言葉に、今まで明るい表情を浮かべていた梓の顔つきが変わる。少し怒りを露わにしている。

「ウチはガキやない！ 梓っちゅう名前があるねん、ガキ扱いは許さへんよ！」

「へへへ、ガキ扱いされてムキになるところがガキだったの。……まあ、ちよつとは可愛い一面もあるんじゃないか？」

「ムキー！ もう許さへん、絶対にアンタに勝つて、鼻を明かしたるわ！」

梓はもの凄い速さで、ワタルに向かっていく。一撃目は様子見とというのがよくわかるぐらいである。トップクラスの速度と、事実上トップの小回り、旋回性能をフルに活動させている。

ナイフのような小刀で、まるでパンチを打つように振るってくる。逆手に持った小刀はいつもとは違ったりズムで襲ってくる為に避けるににくい。それでも避ける、あるいは木刀で盾にしなければ、こんな小柄な少女の攻撃でさえ致命打になりかねない。何よりも、梓は可

愛らしい見た目と裏腹に、牽制以外の攻撃は、全て急所を狙っている。

「くそっ……！」

「ウチの事をガキ扱いする割には、大した事ないでえ、響ワタルさん！」

なんとか引き離したくても、小回りにおいて梓が絶対的有利の為、旋回性能で引き離せない。かといって、迂闊に攻める事もできなければ、後方へ飛んでも下手な隙を見せてしまう。

気力、体力面において、今のワタルが梓を引き離す要素が無いのである。

「何、ちょっとワタル君……もしかして押されてるのかな!？」  
その第一声を発したのはかなである。その後ろには治療を終えた結衣、それに桐華の姿もある。

「かなさん？ はい、何かいつものキレも気迫もどこか無いんです……」

「対戦相手の、あの女の子も凄いののはわかるけど、ワタル君の動きが悪いのは明確かな」

「……ワタル」

いつも見ているヒロキ、かな、桐華の三人が見ても、明らかに動きが悪いと判断する。

「わ、私のせいです……」

「結衣ちゃん、どうしたの？」

そんなワタルを見て、涙を浮かべる結衣に、かなは優しく話しかける。

「私を助けようとして……ワタルさん、悪い人達に殴られたりしたから……」

「そうか、兄貴がボロボロなのはそういう事なのか」

結衣の言葉を聞いて、ワタルの理由を知る三人。そんな中、桐華は無表情の中にも僅かな怒りを見せていた。

「あんな状態で戦ったら危険です、止めないとワタルさんは……！」

そこまで結衣が言うと、桐華はそれを制止する。

「……今、ワタルを止める事は私が許さない。……それに今、止めたらワタルもきつと貴方を許さない」

普段見せない桐華の怒りの表情に、結衣は勿論、ヒロキもかなも恐さを感じ取る。

「ふう……はいはい、桐華ちゃんも、結衣ちゃんもそれでお終い。

今辛いのはワタル君だし、それにワタル君なら、確かに今、止めたら女の子でもぶっ飛ばされちゃうよ？」

「でも……それではどうしたら……」

「こういう時こそ応援！ 結衣ちゃんみたいな可愛い女の子に、本気出せない男なんて男じゃないよ！」

シリ阿斯になりかけた雰囲気を払拭するように、かなは満面の笑みで、結衣にアドバイスし励ます。

「確かに、兄貴ならこういうシチュエーションで女の子の声援があったら燃えるね！」

ヒロキもかなに合わせて、明るく同意する。結衣は桐華の方を見ると、目線を合わせ静かに頷いた。

「で、では……がんばります！ ……すう、ふう……」

爆発しそうな程、脈打つ心臓を静めるように、大きく深呼吸をする結衣。

「……………っ……………ワタルさああああん、がんばれええーっ！」

恐らくは一生の内で一回しか出していないというぐらいの、大声でワタルの名を呼ぶ。大歓声にかき消されるように飛ぶ、結衣の声は真っ直ぐにワタルに向かっていく。

## 数秒間の攻防戦！

（ 自称天才プレイヤーらしいけど、でも実力は文字通り天才の名をあげても良いぐらいの、モノを持っているみたいね ）

その言葉は一体誰の言葉だったのだろうか。防戦一方になるワタルの頭の中に、その言葉が確かな実感となって襲いかかっている。そう対戦相手の少女、梓「クウ」コードベルの事である。

ワタル自身の体調不良は、言い訳にならない。それは今現在、戦っているワタルが正直に感じた事である。梓は間違いなく天才、あるいはそれに匹敵する実力を確かに持っている。弱冠十三歳の少女が、これ程の能力を持っているのだ。仮に万全の状態で、能力的にワタルが勝っていたとしても、近い将来、自分を超える実力を以て立ちはだかるであろう少女。

「ワタルさん、もうここいらでギブアップとちゃう!?」

「……………」

たった今まで梓の攻撃に耐えてきた理由。それはこの小さな攻撃故の攻撃力の低さ、確かに小柄な割に攻撃力はある方なのかもしれないが、ワタルはもっと強い攻撃を何回も受けて耐えてきた。

そしてもう一つは、自身の夢の為。優勝する男は小さな石にもつまずかない、というプライドの為である。しかしそのプライドも、一人の男に託す事により、今まさに折れんとしていた。

（へへへ……なるほど、こいつは天才級だ。仮にオレサマの体調が万全だったら……いや、そんな事を考えるのは、この目の前の凄い相手に失礼だ。……でもどっちにしても、今の状態でこいつに勝つのは不可能だ、大丈夫……次はヒロキだ……オレサマは知ってる、ヒロキなら必ずフォローしてくれる、と）

梓自身の圧倒的な旋回性能、小刀独自の手数と小回り、これらの要素から遂にワタルの口から一つの言葉が出る。

「悪いな、ヒロキ……後は任せる。……ギブアップ」

その時、周りの大歓声に今まさにかき消されんばかりの小さな、それでいて感情の集約された声が、ワタルの耳に微かに届く。

「黒子さん、ワタルさんはギブアップしたんちゃうか!？」

「むっ……!？」

攻撃を仕掛けながらも、ワタルのそんな小さな言葉を聞き取る余裕が、梓にはある。そんな梓の言葉通りのものなのか、黒子も注意深くワタルの様子を見る。最も、このまま防戦一方が続いてしまうと、黒子からのTKOもあり得てしまう。  
テクニカルノックアウト

（なんだ、何が聞こえた……？ もう一度、言ってくれ……）

「……さん、がん……!」

（もう一回……もう一回だけで良い……、もう一回だけ言ってくれ!）

その願いは届いたのか、かき消えそうなその叫びは、確かにワタルの耳に届いた。

「ワタルさああああん、がんばれええーっ!」

（ 結衣!？ ）

一瞬だが、ワタルは声が聞こえた方向を見る。そこにはいたのだ、ヒロキが、かなが、桐華が、そして結衣が、全員がワタルを応援しているのが見える。

「チッ……何を他力本願になってやがんだ、オレサマはよ」

「ワタルさん?」

「うっ……おおおおおりゃああっ!」

「きやあっ!？」

被弾を覚悟で、全力で木刀を薙ぎ払う。その攻撃は防御されてしまったが、小柄な梓には防御を貫通してダメージを与える。何よりも、ワタルのパワーを抑えきれず、この試合中初めて大きく後退させる。

「オレサマとした事が……うっかり自分の信念を忘れてやがったぜ」  
「うう、この力……ほとんど死に体だった人が、そない馬鹿な事があるんか……?」

「よお、ガキンちよ。覚えておけよ……オレサマ達はマックスハート、マックスハートは全力の心！ 全力でやればできねえもんなんてねえ……そして、体力がやばいなら気力で補え、言い訳はしねえ。常に全力、それがマックスハートだ！」

薄れゆく意識に勝つ為に、声と共に気合いをはき出す。その気合いに梓は一気に、自分が精神的に飲み込まれていく感覚を感じる。

「こ、これが、噂に聞くマックスハートのリーダー……響ワタル……す、凄い気迫や」

この年齢にして、この強さと技量を兼ね備えた少女ではあるが、ある意味ではこの精神力が梓に足りないものなのかもしれない。

「残り時間も無い事だしな、一気に行くぜ……コノヤロー！」

「ひつ……！！」

ワタルの気合一閃。その一撃で梓は精神的に追いつめられてしまう。

（と、いつでもまいったな……結衣の一言で、切れそうだった精神はつなぎ止めたが、残念ながら体のダメージはそうはいかねえときたもんだ！）

ワタルは再び木刀を構える。いや正確には構える事しかできないのだ。自分から攻撃をする事は勿論、まして大技ぶったぎりなどは使う事はできない。同じくして梓も萎縮してしまっているのか、変に身構えてしまい、攻めてくる事がない。

「どうした、さっきみたいに攻めてこないのか？」

「……うう……！」

「残り時間はあとわずか……先鋒戦はオレサマ達が取ってる、そして仮にこの中堅戦を引き分けたとしたら、お前達のチームはかなりの手痛手になるぜ？」

「そ、そないな事はわかつとるわ！」

これはワタルなりの駆け引きである。気力は充実しても、体力的に動けないワタルが狙うのは、梓の動きに合わせたカウンターである。そして仮にカウンターのチャンスが来ても、結局は大振りには禁

物。梓は確かに精神的には年相応な部分はあるが、タイプの的には速水仁タイプであり、確実に仕留めなければならないのだ。

（さあ来い！ 引き分けても別にオレサマは痛手にはならないぜ、何よりもお前みたいな凄惨な奴とは、お互いの持てる力をぶつけて終わらせたい……早くしろよ、オレサマの意識もいつまで保ってられるかわからねえからな）

（ど、どないする！？ アカンわ、怖くて足が竦む……こないな恐怖を埋め込んできたプレイヤーは初めてや……いや、アイツ（……に似とるわ。あの王者……松原要につ）

試合はそのままお互いに見合ったまま膠着状態となってしまう。ワタルと梓にはその時間が何分経過した出来事なのかはわからない。それでも時間は気にしてられない。お互いに気を抜いたら、ワタルは精神を保っていられない、梓はいつ攻められるかという疑心暗鬼にかかってしまっているからである。

「どうした二人とも、残り時間はあと二分を切ったぞ！？」  
時間の感覚が無くなっていた二人は、黒子の言葉でその概念が戻ってくる。

（あと二分、か。……二分……長い、さっきから意識が飛んでんだぜ、早く来い！ 何もしないで二分は耐えられねえぞ……）

（そ、そうや、残り二分しかないんやで！？ 梓、今動かんていつ動くんや、行くんや、ビビるな梓！）

長いワタルの呪縛を克服したのか、梓はようやく構えが前傾気味になり、攻撃のタイミングを伺い始める。だがワタルは勝利を確信している。梓本人は全く気がついていないようだが、恐怖は払拭仕切れていない、それ故の固さが構えから見て取れる。

「行くで、響ワタルッ！ 最後の勝負やで！」

最後の勝負、その言葉通り、小柄な体格に似合わないステップを踏み、一気にワタルとの間合いを詰めてくる。その速度は、この試合でみた梓の最高速に、勝るとも劣らないぐらいの速さである。

「クッ……！？」



これはワタルの誤算である。何故なら梓はこの試合終了まで、多少の畏縮が残るものと予想していたからだ。その畏縮により、梓の速度は飛躍的に落ちる予定だった。その誤算というのは、梓は動き出せば吹っ切れてしまうという点である。恐らく、梓の頭の中にはワタルへの畏怖の念が、今だけとはいえ克服されている事だろう。

「そうや、何をしてたんや、ウチは！ 相手はほとんど死に体や、気合いだけで肉体のダメージはとうにかなるもんちゃうで！」

「……気合いだけで肉体ダメージは、か。……いや全くその通り、だから来てもらうぜ、勝利にな！」

最後の攻防戦。<sup>ラストスパート</sup>残り時間数秒の、ワタルと梓の戦いは終局を迎える。

## 再戦の約束！

わずか数秒の攻防戦。ワタルの気合いの喝により、恐怖に支配された体を押す梓。満身創痍ながら、精神でそれを補い、勝利に奔走するワタル。互いの持てる力を全てぶつける試合となる。

今だけといえども、畏怖の念を振り払った梓の動きは衰える事なく速い。それどころか、ある意味では吹っ切れていて単純な速度の点では、この試合中で最速のスピードかもしれない。この動きに、意識もとぎれかけているワタルは、攻撃を普通に当てる事は至難の業を判断し、急所を狙わせないように防御態勢をとる。

「ウチが勝つんや！」

必至の形相で小刀を振るう。やはり少女の腕力である点が、ワタルを倒しきれない大きな理由である。しかし、この攻防は今のワタルを倒すには十分すぎる意味がある。

（耐えろ……耐えろよ、体！ もっと引き寄せろ、勝利を引き寄せろ！）

表情、攻撃の仕方を見る限り、梓の心の焦りはやはり消えてはいない。むしろ、時間と共に蘇ってきているのだろ。少しずつだが、梓の攻撃は大ざっぱになりつつある。ここが一つ目の勝機である。（だけど、それだけじゃ勝てねえ……オレサマはこの試合でこいつに一撃も致命打を当ててない。つまり精神的にはビビらせたが、肉体的には何も追いつめられてないんだ）

だからこそワタルは耐える。絶対的に当てられる距離に梓が入るまで待つ。ただでさえ機動力と小回りに優れる梓に、肉体的には何のダメージも無い。下手に攻撃を仕掛ければ、逆に梓の調子を元に戻しかねない。それ故に、梓に攻撃を仕掛ける際は、まず一撃必倒でなければならないのだ。

そしてワタルにも、それを行う上での課題があるのだ。まずは時間との戦い。このまま防戦で終了しても、引き分け決着であり、実

質そこまでの痛手にはならない。勿論、この戦法でいく事が安全に事を終える方法の一つでもあるだろう。

しかしこの戦法をとる上でも、やはり課題が残る。それはワタルの残り体力と精神力。残り時間数秒といったところだが、既にそこまで耐えられるかも自身でわからない程に消耗している。気を失ってしまつては敗北である。それだけは何としても防がなければならぬ最悪の事態。だからこそワタルは決断したのだ。意識がある内に、梓を確実に仕留める事、と。

「ワタルさん……やっぱりアンタは凄いわ。何で最初からボロボロやったんかは知らんけど、それでもそんな状態でよう戦うわ！」

梓はワタルに賞賛の声を向けると同時に、今にも襲ってくる恐怖を払拭し続ける為に、言葉を発する。一瞬でもワタルの気合いによる精神攻撃を思い出せば、間違いなくつけ込まれるからである。

「でもワタルさん……覚悟してもらうで！」

残り時間による焦りか、勝利を確信したのか、梓もワタルを確実に仕留めようと、一気に踏み込んでくる。手を伸ばせば当たる距離の戦いは、全ての攻撃が一撃必殺の威力を持ち合わせる。しかし、ここでリーチの差が出てくる。リーチに勝ってしまうワタルは、超接近戦になるこの場で、最大の威力を発揮できないのだ。むしろ超接近戦になったこの状態こそ、梓の小柄な体格を活かす最大の位置取り（ポジション）である。梓もそれがわかつている為、踏み込んだのだ。ワタルの懐へ、確実に仕留められる一撃を与える為に。しかしそれがワタルの狙いである。

「へへへ……来たぜ、勝利！」

「な、なんやて!？」

ワタルは木刀を持つ右手を、防御という名目の目隠し（ブラインド）を作り、残る左手を死角から一気に梓に伸ばす。どんなに機動力が優秀な梓でさえ、突然の反撃に加え、自身は一直線に攻撃を仕掛けてきている、かわす事は間違いなく不可能なはずなのだ。

「くうっ……!」

突然、死角から伸びてくる左手に、咄嗟に反応し急停止しようとするが、ワタルの手は一瞬の間に、梓の胸ぐらを掴む。

「……掴んだぜ、勝利……」

「うう……!?」

「掴んで……ぶったぎるっ！」

「……キャアッ！」

一度掴まれてしまったては、梓にこの攻撃を避ける手段は無い。仮に力業で強引に抜け出そうと考えても、力で勝るワタルの呪縛から抜け出すのは困難。まして抜け出そうと暴れている内に、ワタルの攻撃は梓に届く。

梓はワタルの馬鹿力を受け止める覚悟は無かった。それ故に、防御姿勢にもならない、ただ手で壁を作るように、攻撃が来るのをただ待つ。その時の恐怖心からか、目は開けている事ができずに、ただひたすら強く目を瞑っている。

そして残された力をその一撃に込めた攻撃を、ワタルは捉えた梓に一気に振り下ろす。

「……そこまでっ！」

突然の停止の叫びと同時に、いやその少し前にワタルの攻撃は止まる。そしてその声を発したのは審判である黒子だ。

「十五分経過した。この勝負は引き分けとする！」

黒子の宣言の終了と同時に、客席からはお互いを称えるように祝福の歓声が響く。しかし、それとは裏腹に、戦っていた二人の時間はまだ止まっている。梓の掴まれた胸ぐらは、服が伸びてしまっている。そしてワタルの木刀は攻撃が当たる前に、梓の真横に落ちている。そして、そつとワタルは掴んだその手を離す。

「終わっちゃったな……不本意な結果だが、結果は結果だ。仕方がねえ……」

ワタルは落ちた木刀を拾う。しかし握力も入らない程に疲労していたのか、ワタルは木刀を掴む事ができず、さらにはその場に座り込んでしまう。

「あららら……こりやもう駄目だな、ここまでやられたのは生まれて初めてだぜ」

「な、なんでや……？」

「どうした、何か不満か？」

「あるに決まってるやろ！ 最後の一撃、何で当てへんかったんや、当てればアンタの勝ちやったんやで！」

梓は納得できない苛立ちと、先ほどまでの軽い恐怖心から、声が少し震えているようにも聞こえる。

「見ての通りだ、最後の一撃はあと一步の所でオレサマの体が力尽きた。当てなかったんじゃない、当てたくても当てられなかったんだ」

「う、嘘や、ウチがまだ子供だからとか、そんな理由で攻撃せんかったんちゃうか！」

「……バカヤロー。そんな事あるかよ、オレサマは老若男女関係なくぶったぎる天下のワタル様だぞ？ ガキの女が相手だろうが、容赦なくやる……」

「でも、でも……！」

「だあああ、ウザってえぞ！ だったらこうしよう、リトルウォーズが終わったら……お互いに体力も回復したらよ、再戦しようぜ。正直言うとお前みたいに強い奴とはあまり二回も戦いたくねえが、挑んでくるなら何度でも戦ってやる。それまでに、そのガキンちゃん並の精神の脆さを何とかしとけよ！」

「ガキみたいな、は余計や、うつさいわアホ！ ……でもその時はワタルさんも、本気の戦いをしてな、約束やで？」

「ああ、約束だ……」

いまだ少し納得できない表情を浮かべていた梓だが、ワタルとの約束の指切りをかわす。

こうしてお互いのチームの大将同士による、中堅戦は幕を閉じる。結果は時間切れ引き分け。この結果により、マックスハートは次の試合に勝てば四回戦突破。仮に負けてもサドundesマッチ。流れは

多少ながらマックスハート有利に傾いている。

## 最速の男！

十五分フルタイムを使つての、大将同士による中堅戦。結果は引き分けとなつたが、判定決着ならば、ワタルが確実に負けていただろう。だが状態は良くなかつたが、スポーツマンシップに乗っ取り、全力で戦い負けた為、悔しい感情よりも、楽しい感情が上回っていた。

自力での歩行も困難な程、消耗していたワタルは黒子の手も借り、何とかマックスハートのベンチに戻ってくる。戻ってくると、かな達が水を用意してくれていて、それをワタルは適度に飲んでいく。「さてヒロキ、後は頼んだぜ！ もしもお前が負けてサドンデスになつて、オレサマに回つてきたら負けちゃうぜ！」

ワタルは冗談交じりで言う。そんな事を冗談とわかつているから、かな達も笑っている。みんなヒロキなら大丈夫だ、と信じていた結果だった。

「……兄貴、僕はそんなに弱く見えるのかい？ 僕は……負けるつもりは、ない！」

そんなワタルの言葉を、ヒロキは力強く否定する。

「ヒロキ……一体どうした、緊張でもしてるのか？」

「いや、ごめん。ちよつと緊張してたみたいだ……。行ってくるよ、みんな」

ヒロキは自分の木刀を持ち、軽い準備運動をしながら、リング中央へ向かつていく。そのリングへ向かうヒロキの表情は、誰にもわかる事はなかつた。

「……あれ。ヒロキ君、このハチマキ忘れていつてるよ」

かなは青いハチマキを見つける。青いハチマキは確かにヒロキのものだ。

（体調不良があつたとはいえ、兄貴は負けた。……兄貴ほどの実力

がありながら、ここから先の戦いは負ける可能性が否応なしにつきまとうんだ。やはり僕は……このままで良いのかな？」

ヒロキはそう考えている。つい最近になって、ヒロキの頭の中には、不思議な感情が出てくるようになっていた。その正体が依然としてわからないまま、その葛藤と今も戦っている。

（ 精神を強く保って ）

そうヒロキに言葉を投げかけたのは、同じチームの桐華である。最初はその言葉に救われていたのだ。精神を強く保ち、自分のすべき事を強く全面に押し出す。しかし今はそれをする、ある一つの感情が湧き出てくる。

「……落ち着けよ、ヒロキ。今は勝つ事を考えるんだ。それ以外は何も考えないで良い……」

ヒロキがバトルリング中央へ着くと、同じくしてフォースアラートからも対戦相手が来る。

「……！？」

ヒロキはその相手を見て驚く。その相手は、左腕が無かったのだ。

「……その表情だ」

「えっ……？」

「俺を見る時の対戦相手の顔だ。皆、すべからくその表情をする。中には、楽勝だ、と俺の目の前と言う輩もいたがな」

相手側のそういう態度に慣れているのか、無表情に、淡々とした口調で話す。

「……驚きはしましたが、生憎と僕も手加減はしてられないんです」

「そうするべきだ。相手がどのような状態であれ、手を抜く事は対戦者への最大の侮辱行為だ」

「はい、僕は川崎ヒロキです。よろしくお願いします」

「俺は真田浩介だ」  
さなだこうすけ

二人は、お互いに手に持つ木刀を、力強く握りしめた。そのタイミングを見計らい、黒子は大將戦の始まりの合図をする。いよいよ



予選四回戦、最後の戦いの始まりである。

試合開始と同時に、隻腕の剣士、真田はヒロキに向かっていく。

（隻腕の剣士……左手が無いという性質上、僕から見て右方面の攻撃範囲は、極端に悪くなる。セオリー通りに、まずはこの性質を利用させてもらいますよ、真田さん！）

襲いくる真田の攻撃を、ヒロキは逆時計回りに動く事によって、回避していく。

「そうだ、それで良い。左腕が無いからと同情されては、この俺が惨めじゃないか！」

真田も、左腕側に移動していくヒロキを、何とか捉えようと攻撃をしていくが、やはり攻撃範囲の狭さが出て、当てる事ができないでいる。

（この人はやはり左方面に逃げられる事に慣れている。事実、攻撃は少しずつ僕を捉えにきている）

（ちい、事前に調べた情報よりも、遥かに速い！一体、この短期間の間に何があったんだ！？）

試合展開は、始まりから数分、逆時計回りに動くヒロキと、それを追う真田の構図になる。あまりに同じ展開の為、客席からは数力所からブーイングが起こり始めている。そんな客のブーイングも気にする事無く、二人は同じ展開を繰り返す。

「そうだ、それで良い。客程度の野次で俺とお前の戦いは終わらせない！」

「はい、僕も同じ考えですよ、真田さん！」

二人は二人の読み合いと、駆け引きをしていた。それが二人の謎の高揚感を高めている。

（真田さんの回転率は凄まじい……。避けているだけに見られるけど、事実、手を出す暇がないっ）

余裕で避けていたヒロキだったが、その真田の攻撃は、除々にヒロキの体をかすめ始める。

（よし、そろそろだ。お前の速度に俺の体が慣れてくる。捉えて

みせるぞ、川崎ヒロキ！）

少しずつだが、綺麗な逆時計回りの円は崩れていく。上から見ると歪みはじめているようにも見える。円を描くような回避運動は、その内後方へ下がりながらの回避に変わっていく。気が付くと、正面から真田の攻撃を避けるようになっていた。

（……っ！？）

「不思議か？ 俺の死角に回り込み、速度においてもお前が速い。なのに何故追いつかれるか！」

ヒロキは再び、逆時計回りに動く。綺麗な円を描くように移動するヒロキに対し、真田は直角に移動し、その軌道はまるで六角形のように移動している。

「そうか、僕の描く円の中で、最短距離を移動していた！？」

ヒロキがその結論に達する瞬間、真田は完全にヒロキを捉える。

「左死角の読み合いもお終いだ。お前は俺が捉えるまでに、時間がかかった……。なかなかのものだったぜ、川崎ヒロキ！」

「くっ……！」

袈裟の軌道をとる真田の剣線。鈍い音が、リング中央にいる者の耳に届く。

「ぐっ、はっ！？」

しかし真田の剣線は、誰もいない空を切っていた。目でヒロキの後を辿るが、どこにも姿は無い。

（……バ、バカなっ、奴の姿はどこに！？）

腹部に突然の激痛が走る。どうやら攻撃されたのだと、真田は咄嗟に判断する。悶絶し混濁する意識の中で、いまだに見つかからないヒロキの姿を追う。すると真田の後方から、砂利を踏んだような音が聞こえ、真田は急いで振り向く。

（……何だとっ！？ あいつは一体どんなスピードで俺を斬ったというのだ！？）

真田は完全にヒロキを捉え、そして攻撃を加えた。しかし結果としては、攻撃は空振りさせられ、自分が攻撃を加えられる。

（やられると思った……。でも体が咄嗟に反応した、これがアバタ  
ーさんの修行の成果なのか、な？）

あまりの速度で反撃を喰らった真田が最も驚いただろうが、その  
動きを実現させたヒロキ自身も驚いていた。咄嗟の出来事すぎて、  
自分自身でも何が起こったのかわからなかったのだ。

（……でも、これだけの速さで動けるのなら……！）

ヒロキは真田に振り向き直り、その手に持つ木刀を構える。真田  
もヒロキの攻撃姿勢を察知し、いまだに悶絶する痛みを堪え、防衛  
の構えをとる。

（ちいつ、まずい……。奴の異常なパワーアップは認めよう、事実  
は事実だ。しかし、負けるわけにはいかないんだ！）

「真田さん、行きます……！」

ヒロキは見違える速度で、一気に真田との距離を詰める。そして  
その速度を見た、一人の観客は言う。「今大会中、最速」だと。

## 予選トーナメント終了！

バトルリングに一陣に疾風が走る。高速で移動し、圧倒的なハンススピードを以て、敵を斬りつけるその様は正に疾風迅雷。電光石火。

戦っている本人である、真田は素直にこう感じる。戦っているのは人ではなく、風であると。

「……くそっ！」

試合序盤の空振りとは明らかに違う。先ほどは文字通り避けられていたが、今の攻防はそれとは違う。攻撃を仕掛けたそこにヒロキの姿は無いのだ。呆氣にとられる間もなく、前後左右からの攻撃が襲ってくる。

「何だつてんだ、お前はっ！　どんな事をしたらそんなに速くなれる！？」

既に真田の剣は、ヒロキを狙っていない。ただ振り回しているだけの攻撃。しかしそうでもしなければ、風のような男に攻撃を当てられる可能性が皆無である。

（　　まだだ、まだトップスピードを上げられるぞ。まるで、まるで自分が自分じゃないみたいだ……）

現にヒロキは少しずつ、最高速度を上げていつている。当然、真田はそんなヒロキの動きに対応できない。できる事は見てからかうじて防御するのみ。反撃に移った瞬間には、既に姿が無いからだ。（ここだ。真田さんがこの攻撃を空振りさせた時に……一発！）

真田の空振りを見極め、一撃を当て、そして離脱していく。形勢は完全に逆転する。

「お、俺の……俺の攻撃に合わせてカウンターを取れるっていうのかあ！？」

完全に見切られた戦いに、一人憤怒の念を抱く真田。後手に回った戦い方では勝ち目は無いと判断し、自ら先手で攻撃に出る。ただ

ひたすらに、愚直にヒロキを追う。しかし逃げ足のヒロキに、追いつきの真田は全く追いつけない。

「くっ……、ふざけんな、そんなデタラメがあるかあっ！」

右手に持つ木刀を、何も考えずにただ振り回し、ヒロキに接近戦を試みる真田。この真田の行為を、完全に見極め、自分から攻撃を打って出るヒロキ。ダッシュスピードにハンドスピード、ありとあらゆる点でヒロキは真田を凌駕する。先に仕掛けた真田の攻撃は一撃も当たらず、ヒロキだけが攻撃を当てていく。

「お前……化け物か!？」

「実際のところ、僕も驚いています。……僕のどこに、こんな事ができる力があつたのか、と」

「それは俺みたいいな人種から言わせると、ただの嫌みだ」

「……すみません。でも、こう沸き上がってくるんです。僕の中から何かの感情が……」

いつもの冷静な表情で、淡々と言葉を出す。あれ程の動きをして、いまだに疲労の色が見えない。そんなヒロキを真田は冷静に見た結果、ある一つの決断を下す。

「……悪い、俺はここでギブアップだ」

「えっ……!？」

突然の降参宣言に、驚きの表情を浮かべる。しかし真田を見る限り冗談ではなく、諦めた顔つきがありありと見てとれる。

「だってそうだろ？ 他人事として見ても、俺とお前の実力差は明らかだ。俺がどう足掻いたって今のお前には勝てねえよ。……でも解せないな、どんな才能の溢れる奴だって、この短期間でそこまでの実力は身に付かないはずだ。お前、一体何をしたんだ？」

「……ごめんなさい。それはどうしても言えません」

「だろうな。そんな良い方法を知ったら、誰だって強くなれるわな」  
真田は自分チームのベンチへ歩いていく。後ろ手を振り、それがヒロキへの別れとなる。

「ではそこまで。予選四回戦、マックスハートの勝利とし、マ

ツクスハートは予選トーナメントを通過。ベスト8への進出を許可します！」

黒子からの予選終了宣言。いよいよマックスハートはベスト8に進出する。会場からは雨のように降り注ぐ、拍手の雨が飛び交っていた。その拍手の雨は、ヒロキの心の中にある迷いを、一瞬の時だけとはいえ洗い流す。

ベンチに戻るまでの道で、ヒロキは一人の老人の姿を目撃する。

（……あれは、アバターさん！？）

そう見かけた老人は、ヒロキの能力を飛躍的に上昇させる事に成功させた張本人。アバターその人である。

「ヒロキ、やったな！ 凄えじゃないか、一体どんな特訓したんだよ、こいつめ！」

ワタルは歓喜の表情で、軽い拳を作り、それをヒロキにぶつける。ヒロキもワタルの拳を軽く平手で受け止める。

「アハハハ、これで何とか予選通過したみたいだね」

「ああ、みんなでここまで来たんだぜ。このまま行こうぜ、優勝にさ！」

ワタル達は喜びを隠しきれなかった。予選四回戦。たった四回の戦いだったが、色々な人間と出会い、そして戦ってきた。ワタル達は、今まで戦ってきた人達の上に立っているのだと実感する。そしてその人達の為にも、何よりも自分達の為に、これから勝ち続けていこうと決心し、結束力を強めていく。

「さって、じゃあ予選通過祝いとして、女だけのパーティーでも開こうか！」

「パ、パーティーですか、何だかドキドキしますね」

「……わーい」

マックスハートの女性陣は、かなを筆頭として盛り上がりを見せていた。

「何だよ、女だけかよ、かなっぺ！」

「当たり前でしょ、ワタル君。男子は禁制なの！」

「はいはい、わかったよ。……んじゃ、ヒロキ！ オレサマ達は男同士で打ち上げでもしようぜ？」

「あ、うん……。兄貴、ちよつとゴメン、すぐに戻るから！」

「先に帰る準備してるぞ！ 早く、戻ってこいよお！」

ヒロキはワタル達と別れ、先ほど見つけたアバターを探す。アバターはまるでヒロキを最初から待っていたように、すぐにヒロキの前に現れる。

「アバターさん……」

「やあ、ヒロキ君。この試合はお疲れ様だったね」

「いえ……。この試合に勝てたのは、貴方の修行のおかげです」

「ふむ……。それでこの試合を得て、心変わりはないかね？ ワシは今でも君の事を待っている。だが、君を待てるのもあと二日が限度じゃな」

「あと、二日……」

ヒロキは迷っていた。アバターの特訓は確かなものであり、アバターは更に修行を積み、ヒロキの強さは飛躍的に上昇するとさえ言う。しかしその修行を受けるといふ事は、ワタル達とのリトルウォーズを諦めなければならないのだ。逆にいえば、申し出を断れば今まで通りに、ワタル達と共に戦っていけるのだ。

（僕は何を迷っているんだ。このまま兄貴達と、一緒にリトルウォーズ優勝をする、そう兄貴達とも約束したじゃないか。……でも）

「そうだ、ヒロキ君。君の本来の目的を思い出すのだ。君は本当にあの少年達と共に優勝する事が目的だったのかね？」

「僕は……。僕の、夢は……。ごめんなさい、あと一日だけ、一日だけで良いんです。時間をください」

「構わないよ。明後日の朝八時にワシは移動する。それまでに全ての答えの決着をつけてくれ」

そう告げると、アバターは大勢の人の群れに消えていく。ヒロキ

に一つの決断が下されようとしていた。



## もう一つの四回戦！

七月二十九日。この日、ワタル達是对フォースアライト戦を勝利で飾り、予選トーナメントを突破する。その他、数チームが予選突破の名乗りを上げる中で、もう一つの予選第四回戦が行われていた。

「そこまでつ、予選四回戦の先鋒戦はFエンゼルの池勇の勝利とする！」

そうマックスハートとは別会場にて、優勝候補の一角であるFエンゼルが、予選通過を目指し奮戦している。対戦相手はハッピーハピネス。チームレベルとしては、とてもまとまっていて、順当に行けば予選を無事に通過する程の実力を備えたチームである。

「ナイスッ、池！」

「当然だ、俺達はこんな所で止まるわけにはいかないだろう？」

Fエンゼルリーダーの三崎と、先鋒戦を勝利で飾った池は、祝福のハイタッチを交わす。二人の信頼関係が成せる絵である。池はハッピーハピネスの先鋒戦の選手である阿部を、わずか三分で倒すという速く、且つ的確な戦いで盤石の勝利を収めている。

この光景に、顧問としてチームをまとめている石田先生も、にこやかに見守っている。そして石田の目は、Fエンゼルの蛇竜である速水仁に向いている。

「おい仁よ。わかってると思うが、あまり気張らんで良いぞ。自分のペースで試合を構築すれば良いのだよ？」

「……チッ、誰に向かって言ってたんだ、ジジイ！ 仮に何かのハンデがあるうと、俺がこんな雑魚レベル相手にやられるとも思っているのかよ！」

先鋒戦の勢いに乗り、Fエンゼルの中堅戦選手である速水仁が出る。ここまでの戦いの経過から、速水仁の名前は圧倒的に、今年度リトルウォーズに響き渡っており、仁がバトルリングに向かうと、

一種の殺伐とした歓声が起きている。見物客のノリも、良い試合が見たいのではなく、仁が相手選手を容赦なく蹂躪する様が見たいという、ノリが多くなっている。

「それでは中堅戦、速水仁と坂本明の試合を行います！」

仁と戦う相手は、坂本明という。武器は木刀。元々がちゃんばらである事と、リーチの有利な問題で、予選四回戦ともなると、木刀を主流とするプレイヤーが増えてくる。

「速水仁、かなりの実力者らしいが、君にはここで消えてもらうよ？」

「……言葉っていうのは、その野郎の人となりを表すには的確なものだな」

「……何だと!？」

仁の言葉に、坂本は険しい顔つきで、仁を睨み付ける。ここまで来たプレイヤーだ。その眼光で並の相手は、威圧で押されてしまうだろう。しかし仁に限っては例外である。仁はむしろ、そんな相手の狂気の風を受け、逆に心地よく楽しんでいる。口元がうつすらと笑う。

「まあ良い、早く来い。俺はお前みたいな奴と遊んでいる暇は無いんだ。……この後、今日発売の最新作のゲームを買に行かなければならねえからな」

「なっ、貴様……! ならお望み通りにしてやるよ!」

坂本は挑発のままに、仁に向かっていく。四回戦レベルとしては、スピードはそれなりに速い。そして木刀を振るう旋回力も、並以上ではある。しかしその程度では、仁にとって避けるのは容易な作業である。流れるような流麗な動きで、その一つ一つの攻撃を避けていく。その正確に似合わず、しなやかな体軀は、見る者を虜にする美しさがある。

「くそっ、これだけ攻撃して、何故一発も当たらない!？」

「……ふっ、はっはっはっは! おいおい、そんな事もわからねえでここまで来たのかよ!」

「な、何っ！」

仁は鋭い攻撃を避けながら、高笑いする余裕を見せつける。

「一発も当たらない理由は簡単だろ、おい？ 俺が強く、お前が弱すぎる、ただ一つの簡単な理由だろ、馬鹿がっ！」

「こ、この野郎っ、いくら優勝候補のメンバーだからって舐めるのも、いい加減にしろよ！」

仁の安い挑発は、今の坂本に火をつけるのは十分だった。ただでさえ十分すぎる攻撃の弾幕は、怒りと共にその速度を増していく。

（これだよ、これ。この怒りを俺にぶつけてきてくれよ。最っ高の気分だぜ）

「……だがお前の狂気も、飽きるな。俺を楽しませるには、お前の狂気ははした金にならねえ」

ただその場で避けるだけだった仁は、初めて大きく後退する。いや後退して間を離し、自分が攻撃する上での適正距離へ移動したのだ。小回りは利いていたが、やや大振り気味になっていた坂本は、大きくその体制を崩してしまう。

「覚えておけよ、怒りのままに戦うのは所詮、三流のやる事だつてよ。……シャアアアア！」

「は、速水、貴様あ！……っふうぐ……！」

その蛇の鳴き声のようなかけ声と共に、一気に坂本のみぞおちを突き刺す。仁にとっては当然の話だが、みぞおちを突いたのはわざとである。そして、みぞおちを突かれた坂本は、声にならない声を出し、腹部に走る痺れるような激痛と、そこから襲ってくる鈍痛に、ただ悶絶し倒れる事しかできない。

「そこま」

「ちよつと待てよ、審判よお！……この野郎は、まだ降参してないぜ？」

言葉が喋れないほどの、痛みと戦い、ただ悶絶しながら倒れているだけの坂本に、仁はゆっくりと近づいていく。坂本は目の焦点が合っておらず、近づいてくる仁を見る暇もない。

「お楽しみは、これからだろ？」

仁は坂本の顔面を蹴り飛ばした。気持ちの悪くなる鈍い音が、リング中央から響く。加減無しに蹴り飛ばした為、坂本の鼻は陥没し、大量の鼻血が噴き出している。

「やめなさい、仁君。テクニカルノックアウトだ、それ以上攻撃するなら、君だけでなく、チーム全体を失格とするぞ！」

「……わかりましたよ。やめれば良いんでしょ、どっちにしてもやめてましたけど。トドメをさした獲物に用はない」

仁は不敵に笑いながら、リングから離れていく。蹴った右足には、坂本の返り血がべつとりと残っている。

こうして波乱の展開を続出させながらも、優勝候補チームであるFエンゼルも、予選通過の名乗りを受ける。しかし栄光の歴史に彩られた天使チームには、ここまでの仁の戦いによる評価により、戦いに勝利した後は、必ずブーイングが起きるようになっていた。

「俺達は、お前らなんて認めねえぞ！」

「天才の名も、墜ちたもんだなあ、三崎！」

「Fエンゼルじゃ、T・O・テイカーには勝てないぜ！ 今年も天使は墜ちてしまえよ！」

いつからか、このようなブーイングがつきまとっているのだ。酷い時には、物を投げる人間もいる。

「仁、お前は……。あんな戦い方がいい加減にしないか！」

激しい怒りを見せつけ、仁に怒声を浴びせるのは池だ。

「ああ？ 俺は別に不正はしてねえだろ、言いがかりはよせよ、先輩」

「そうじゃない、最後の顔面蹴りは必要無い行動だっただろう！」

「戦いはまだ続いていた。それに戦っている相手にトドメをさすのは、当たり前の話だろ？」

「そうだったとしても、あの行動はやりすぎだ！」

浴びせられるブーイングの中、池と仁はお互いの意見を引かせずに言い合いになる。その勢いは言い合いに止まらず、今すぐにも

殴り合いに発展してしまう勢いである。最も、今ここで試合外の喧嘩になってしまったら、Fエンゼルの大会失格は目に見えている事である。

「おい止めないか、二人とも。今ここで、喧嘩になるのはまずい。頭を冷やすんだ！」

「しかし三崎っ！」

「良いんだぜ、喧嘩になってもよ。この先輩面した野郎に、二度と先輩面させねえようにするからよ」

「……仁もやめろ！ この事は、明日に反省会をする。とにかくここで騒ぎを起こすな！」

栄光の道を歩んでいたFエンゼルだが、予選トーナメントを波乱の展開で終了する。天使は過去最高に荒れているのだ。

## その後の処分！（前書き）

随分と長い時間をかけての久々の投稿！

三ヶ月間の間、更新されていません扱いになってしまったので、これはイカンと。

本格的な再開は夏になってからでしょう。（恐らく五月、六月あたりから本格再始動）

## その後の処分！

七月三十日。Fエンゼルの、予選通過から翌日の事である。

予選通過はしたものの、仁の反則スレスレの戦いは、栄光の道を歩いていた天使達を、どん底に落とすには充分すぎるものであった。結局は、試合が終わった後も、池と仁の口論は終わらずに、次の日に反省会を行うという三崎の判断により、その場は収められた。

そして今、Fエンゼルのレギュラーである、三崎、池、そして仁の三名と、顧問の石田先生が集まり、史上稀に見る、険悪な反省会が行われていた。

「ま、反省会だから、言い争いの続きをしろってわけじゃないからね、一応」

最初に牽制したのは、冷静に状況を見ている三崎である。最も、一日経った事により、二人はかなり落ち着いているようである。それに念の為に、三崎から池に対して、安い挑発に乗らないように、嚴重注意がされていた。

（仁は利かん坊だからアレだけど、池なら止められる……って思いたいけど、池はあれで短気だからなあ……）

顔には出さなかったが、一人、心の中で苦笑いを浮かべる。

「で、先輩よお、わざわざ呼び出したんだ、言う事はあんだろ？」

「えっ、ああ……そうだけど」

「仁、お前は先輩に対する、口の聞き方を考えろ」

やはり予想通りの展開になりつつある。チラリと横目で石田先生を確認すると、これはこれで呑気に茶をすすっている。普通ならば、これだけ言い争いをしている生徒を、目の前にしたならば、止めるのが普通の教師だが、石田先生はどうもそれを楽しんでいるようにも見える。

（ははは……何か最近、こんな役目ばかりだな）

三崎は内心で苦笑いしつつも、状況を高速で整理する。

「えーと、とりあえず二人とも、何があっても喧嘩はやめやめ。まずは昨日の一件、あれに関しては僕もやりすぎだと思っている。仁は今後こういう事がないように……」

と、横目で仁を見ると、全く聞いていないような素振りを見せる。続いて反対方向を見ると、池がそれに対する睨みを利かせている。

「……ごほん。それで大会本部からは次に一度でも、昨日のような事があれば仁の出場停止、二度あればチームとしての出場権利剥奪、って事になった。ようはスポーツマンにあるまじき行為があったら、その時点でアウトという事だ。良いね、二人とも？」

交互に二人を見ると、お互いが沈黙を決め込んでいた。

池は当然という認識の為か、仁は読み切れない。更に石田先生を見ると、こちらはこちらで何を考えているのかわからない。

「まあ、そういう事で。今日はこれで解散ね、次のベスト8戦は石田先生からの連絡網で伝わるはずだから。……では石田先生お疲れ様でした」

一礼をして部屋から出て行く三崎。それに連なって池も一礼してから出る。

やや遅れて椅子から立ち上がった仁だが、

「待ちなさい、仁」

と、石田先生に呼び止められる。

「何だよ、じじい。あんたも説教かよ？」

仁をまあまあと手で制すると、仁もそれに従い椅子に座り直す。

「どうするかね、仁」

「何が？」

「あと一回、昨日のような行動をすれば、出場停止処分だ。そうなったら私との約束を、守れないねえ」

石田先生の言葉に、仁はただ無言で聞いていた。

「仁は私との約束を果たそうと、少しやる気が溢れすぎてしまっただけなんだよね」



「くだらねえ、はったおすぞつ、じじい！」

「そうつ、その気迫だよ！ 若いんだから無駄に冷静じゃイカン。

……まだ気性の荒さは目立つが、仁はそうして暴れ回るくらいのも元気がないよね」

「……気持ち悪い奴だ」

「はっはっは、期待しているよ？」

その言葉に仁は「ケツ！」と悪態をつき、部屋から出て行く。

「困った困った」

一人残された石田先生は、うつすらと、しかし力強く笑っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0113m/>

---

MAX HEART!

2011年4月19日23時40分発行